山元町文化財調査報告書第 15 集

日 向 遺 跡

第２次発掘調査

－土砂採取事業に係る発掘調査報告書－

日向遺跡2次調査（B区）SI15 竪穴住居跡出土遺物

平 成 ２９ 年 ６ 月

宮城県亘理郡山元町教育委員会

田中建材輸送株式会社

序　　文

山元町は古くから身近に豊かな海と山を擁し、人々は恵まれた自然の中で生活を営んできました。その足跡は埋蔵文化財として、町内各地に散在しております。埋蔵文化財は、文献などには記録されていない地域の歴史を解明できる貴重な歴史資料であります。これらの遺跡は、先人が残した生活の証でもあり、かけがえのない文化遺産として将来の人々に継承するとともに、現在の生活の中において積極的に活用していくことが、私たちに課せられた責務であると考えております。

しかし、土地利用と深く結びつきの強い埋蔵文化財は、絶えず開発事業によって破壊・消滅の危機にさらされております。このため、当教育委員会としては、開発関係機関等との協議を通してこのような貴重な文化財を保存し、後世に伝えることに努めているところであります。

今回の日向遺跡の調査は、山元町山寺地区の土砂採取事業に際し、事業主との協議・調整に基づき、平成２８年度に当教育委員会が実施したものであります。今回の発掘によって、古代を中心とする人々の生活の跡が確認され、山元町の歴史を考える上で貴重な発見となりました。

本書は、この調査成果を収録したもので、地域における歴史解明の資料として広く活用され、埋蔵文化財の保護と理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただいた関係機関の方々、また、直接調査にあたられました皆様に心から感謝申し上げます。

平成２９年６月

山元町教育委員会
教育長　菊池　卓郎

例　　言

1．本書は、宮城県亘理郡山元町山寺字日向地内に所在する日向遺跡（２次調査）の発掘調査報告書である。

2．本遺跡の発掘調査は、山寺地区土砂採取工事に伴う本発掘調査として行ったものである。発掘調査・整理作業・報告書作成に係る一連の業務は、平成 28・29 年度に、調査原因となった事業主体者である田中建材輸送株式会社から業務委託を受けた山元町が実施した。

3．本遺跡の発掘調査と整理作業は、山元町教育委員会が主体となり、文化財担当部局のある生涯学習課が担当した。日向遺跡（２次調査）の現地発掘調査・報告書作成業務に携わった平成 28・29 年度の職員の体制は下記のとおりである。

教　育　長　　森　憲一（～ H28.9）/ 菊池 卓郎（H28.10 ～）
課　　長　　齋藤 三郎（H28 年度）/ 佐山 学（H29 年度）
班　　長　　阿部 正憲
主　　査　　山田 隆博
副　参　事　　小淵 忠司（町任期付職員）
副　参　事　　木下 晴一（香川県派遣 / 派遣期間 H27.4 ～ H28.3）
技術副参事　　星野 惠美（福岡県福岡市派遣 / 派遣期間 H28.4 ～ 9）
技 術 主 査　　城門 義廣（福岡県派遣 / 派遣期間 H27.4 ～ H28.9）
主　　事　　清水 勇希（町任期付職員 /H28.4 ～ H29.3）
調査補助員　　佐伯 奈弓（町臨時職員）
調査補助員　　千尋 美紀（町臨時職員 /H27.4 ～ H28.9）
発掘作業員　　阿部 正位、天野 幸枝、飯川 幸男、石井 進、伊藤 清、伊藤 弌之、伊藤 成夫、梅原 政幸、太田 千佳子、太田 敏雄、小野 和喜子、加藤 勇馬、菅野 淳、後藤 征郎、齋藤 健二、齋藤 博、佐藤 明、佐藤 和男、佐藤 弘次、佐藤 光義、四釜 光子、白鳥 浩二、杉平 慶宏、鈴木 節子、関 馥、高橋 美知雄、立谷 重晴、千葉 國雄、千葉 美恵子、南條 義博、西山 ゆり子、飯田 敏行、平田 みよの、福山 すみ子、増川 悠記、松田 正雄、間野目 恵美子、三浦 長、三坂 春雄、三島 常康、森 忠男、門間 眞紀子、門馬 祐作、大和 正子、遊佐 豊美、横山 幸、横山 真
整理作業員　　梅村 眞智子、斉藤 則彦、玉田 眞智子、萩本 厚子、橋元 和子、矢吹 共子、渡邊 洋子

4．発掘調査、報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った。
村田晃一・山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課）、廣谷和也（宮城県多賀城跡調査研究所）、山下中学校、田中建材輸送株式会社、宮城県教育庁文化財保護課（敬称略）

5．中世陶器の産地については、実測者が肉眼観察を行った。

6．本遺跡の航空写真撮影は日本特殊撮影株式会社に委託して行った。

7．現地発掘調査について、指揮･監督を星野が担当し、城門、清水、千尋が補助した。現地作業を発掘作業員、断面図の作成は星野・城門・清水・千尋が行った。

8．本書の整理・作成にあたり、遺物の洗浄・注記・接合・復元・拓本は、佐伯が中心となり整理作業員がこれを助けた。遺物抽出については山田が担当した。

遺物の実測図作成は、宮城県教育庁文化財保護課の支援・協力により実施し、廣谷和也（宮城県多賀城跡調査研究所）、山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課）が担当した。土器実測図のトレースは佐伯、遺物の写真撮影は山田が行った。

遺構整理については、全般を星野が担当し、断面図トレース、データ入力・校正、図面修正・データ照合を佐伯・渡邊が行った。

９．本書で使用した測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第Ｘ系による。調査区の測量原点は以下のとおりである。方位は座標北を表している。なお、今回使用した座標値は、東日本大震災後の値を基本としている。

T22　：　X=-225306.022、Y=2997.380、Z=40.66m

T23　：　X=-225306.904、Y=3025.501、Z=38.85m

10．本書の第２図は、土地分類基本調査における 1/50,000 地形分類図「角田」をもとに作成したものである。

11．本書の第３図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 の地形図を複製して作成したものである。

12．本書で使用した土色の記述にあたっては、「新版標準土色帖 2010 年版」（小山・竹原 1973）を参照した。

13．本書で使用した遺構略号は、「発掘調査の手引き」（文化庁文化財部記念物課 2010）を参考にし、以下の通りとした。

ＳＩ：竪穴住居跡　　ＳＡ：柱穴列跡　　ＳＤ：溝跡　　ＳＫ：土坑・焼成遺構・貯蔵穴・近世墓

Ｐ：柱穴・小穴

14．出土遺物の登録番号は、以下の通りとした。

Ａ：縄文土器　　Ｂ：弥生土器　　Ｃ：土師器・かわらけ　　Ｅ：須恵器　　Ｆ：土製品

Ｉ：陶器　　Ｊ：磁器　　Ｋ：石器　　Ｎ：金属製品　　Ｏ：製鉄関連遺物

15．遺構・遺物実測図の主な縮尺は下記のとおりで、それぞれ図中にスケールを付して示した。

調査区全体図：1/300、調査区部分図：1/200、竪穴住居跡：1/50、柱穴列跡・溝跡 1/100、

土坑：1/40、断面図：1/40・1/50・1/60、遺物実測図：1/3

16．遺物実測図において、土器類の実測図については、須恵器断面を黒塗り、その他の土器を白抜きとした。また、黒色処理が施された土師器については、スクリーントーンにより示した。

17．本書の出土遺物のうち、土師器については、成形にロクロを使用したものをロクロ成形・ロクロ土師器、ロクロを使用していないものを非ロクロ成形と呼ぶことにした。

18．基本層序は、ローマ数字とアルファベット小文字を組み合わせて表記した。

19．標高は、水準点を基にした海抜高度で示した。

20．遺構内の傾斜の部分は「 ⊤⊤⊤ 」、後世の撹乱は「撹」と表記し、その傾斜部は「 ⊤ 」で示した。

21．その他、発掘調査の方法等については、第Ⅲ章第１節にまとめた。

22．本書の執筆・編集については、整理を担当した調査員の協議を経て、星野・山田が執筆した。

図版の版組みは山田・佐伯・渡邊、報告書編集は山田・佐伯が行った。

23．本遺跡の調査成果については、宮城県遺跡調査成果発表会（平成 28 年 12 月 11 日開催／会場：東北歴史博物館／主催：宮城県考古学会）において、その内容の一部を報告しているが、これと本書の記載内容が異なる場合は、本書が優先する。

23．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料については、山元町教育委員会が保管している。

調　査　要　項

遺　　跡　　名：**日向（ひゅうが）遺跡**　（宮城県遺跡地名表登載番号 14068　遺跡記号 HG）

所　　在　　地：宮城県亘理郡山元町山寺字日向

調 査 原 因：山寺地区土砂採取工事に係る本発掘調査

調 査 期 間：確認調査　平成 27(2015)年 11 月 13 日～12 月 10 日

本発掘調査　平成 28(2016)年 4 月 1 日～6 月 30 日

調査対象面積：約 17,710 ㎡

調 査 面 積：約 3,820 ㎡

調 査 主 体：山元町教育委員会

調 査 担 当：山元町教育委員会生涯学習課

【確認調査】

木下　晴一　【山元町教育委員会　生涯学習課　副参事（香川県派遣職員）】

【本発掘調査（現地調査）】

星野　惠美　【山元町教育委員会　生涯学習課　技術副参事（福岡市派遣職員）】

城門　義廣　【山元町教育委員会　生涯学習課　技術主査（福岡県派遣職員）】

清水　勇希　【山元町教育委員会　生涯学習課　主事（任期付職員）】

千尋　美紀　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

【整理・報告書】

山田　隆博　【山元町教育委員会　生涯学習課　主査】

星野　惠美　【山元町教育委員会　生涯学習課　技術副参事（福岡市派遣職員）】

佐伯　奈弓　【山元町教育委員会　生涯学習課　臨時職員（調査補助員）】

調 査 協 力：宮城県教育庁文化財保護課

田中建材輸送株式会社

目　　次

序文
例言・調査要項・目次・挿図目次・表目次
第Ⅰ章　遺跡の概要 …… 1
第１節　遺跡の位置と地理的環境 …… 1
第２節　周辺の遺跡 …… 1
第３節　日向遺跡の概要 …… 9

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過 …… 10
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 10
第２節　日向遺跡(2 次調査)発掘調査の経過 …… 12
１．本発掘調査の経過 …… 12
２．整理・報告書作成作業の経過 …… 13

第Ⅲ章　発掘調査 …… 14
第１節　発掘調査の方法 …… 14
１．現地調査 …… 14
２．室内整理 …… 15
３．東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援 …… 16
第２節　基本層序 …… 18
第３節　発見された遺構と遺物の概要 …… 22
１．　竪穴住居跡 …… 31
２．　柱穴列跡、その他の柱穴・ピット …… 66
（１）柱穴･ピットの調査方法 …… 66
（２）柱穴・ピットの特徴 …… 66
（３）建物の認定 …… 66
（４）柱穴列跡 …… 67
（５）その他の柱穴・ピット …… 68
３．溝跡 …… 72
４．土坑 …… 76
５．基本層Ⅳ・Ⅴ層出土遺物 …… 107
６．遺構外出土遺物 …… 109

第Ⅳ章　自然科学分析 …… 111
第１節　はじめに …… 111
第２節　日向遺跡における放射性炭素年代(AMS 測定) …… 112

第Ⅴ章　総括 …… 116
第１節　出土遺物の特徴と時期 …… 116
１．縄文土器 …… 116
２．弥生土器 …… 116
３．土師器・須恵器 …… 118
４．中世陶器 …… 122
５．その他の遺物 …… 122
第２節　検出遺構の特徴と時期 …… 122
１．今回の調査区(B 区)で検出した各遺構の時期 …… 122
（１）竪穴住居跡 …… 122
（２）柱穴列跡・ピット …… 123
（３）溝跡 …… 123
（４）土坑 …… 123
（５）遺物包含層 …… 124
（６）まとめ …… 124
２．各時代の遺構の特徴と変遷 …… 126
（１）縄文時代の遺構 …… 126
（２）奈良・平安時代の遺構 …… 126
（３）中世の遺構 …… 129
（４）近現代の遺構 …… 130
第３節　まとめ …… 130

註
引用・参考文献
報告書抄録

挿　図　目　次

第　1　図　山元町と日向遺跡の位置 …… 1
第　2　図　日向遺跡及び山元町内の地形分類図 …… 2
第　3　図　日向遺跡の位置と山元町内の遺跡分布 …… 4
第　4　図　日向遺跡２次調査　調査箇所 …… 11
第　5　図　日向遺跡２次調査（B 区）基本層序 …… 19・20
第　6　図　日向遺跡 遠景 …… 23
第　7　図　日向遺跡 B 区(2 次調査)　調査区全景 …… 24
第　8　図　日向遺跡 B 区(2 次調査)
遺構配置図(全体図) …… 25・26
第 9-1 図　日向遺跡 B 区　遺構配置図(1) …… 27
第 9-2 図　日向遺跡 B 区　遺構配置図(2) …… 28
第 9-3 図　日向遺跡 B 区　遺構配置図(3) …… 29
第 9-4 図　日向遺跡 B 区　遺構配置図(4) …… 30
第 10 図　日向遺跡 B 区　竪穴住居跡(SI)　遺構配置図 …… 31
第 11 図　SI9 竪穴住居跡(1) …… 33
第 12 図　SI9 竪穴住居跡(2) …… 34
第 13 図　SI9 竪穴住居跡(3) …… 35
第 14 図　SI10 竪穴住居跡(1) …… 36
第 15 図　SI10 竪穴住居跡(2) …… 37
第 16 図　SI11 竪穴住居跡(1) …… 38
第 17 図　SI11 竪穴住居跡(2) …… 39
第 18 図　SI12 竪穴住居跡(1) …… 40
第 19 図　SI12 竪穴住居跡(2) …… 41
第 20 図　SI13 竪穴住居跡(1) …… 42
第 21 図　SI13 竪穴住居跡(2) －出土遺物１－…… 44
第 22 図　SI13 竪穴住居跡(3) －出土遺物２－…… 45
第 23 図　SI13 竪穴住居跡(4) －出土遺物３－…… 46
第 24 図　SI13 竪穴住居跡(5) －遺構写真図版－…… 46
第 25 図　SI13 竪穴住居跡(6) －出土遺物 写真図版１－…… 47
第 26 図　SI13 竪穴住居跡(7) －出土遺物 写真図版２－…… 48
第 27 図　SI14 竪穴住居跡(1) …… 50
第 28 図　SI14 竪穴住居跡(2) －出土遺物－…… 51
第 29 図　SI14 竪穴住居跡(3) －遺構写真図版－…… 51
第 30 図　SI15 竪穴住居跡(1) …… 54
第 31 図　SI15 竪穴住居跡(2) …… 55
第 32 図　SI15 竪穴住居跡(3) －遺構写真図版－…… 56
第 33 図　SI15 竪穴住居跡(4) －出土遺物１－…… 57
第 34 図　SI15 竪穴住居跡(5) －出土遺物２－…… 58
第 35 図　SI15 竪穴住居跡(6) －出土遺物３－…… 59
第 36 図　SI15 竪穴住居跡(7) －出土遺物 写真図版１－…… 60
第 37 図　SI15 竪穴住居跡(8) －出土遺物 写真図版２－…… 61
第 38 図　SI15 竪穴住居跡(9) －出土遺物４－…… 62
第 39 図　SI15 竪穴住居跡(10) －出土遺物 写真図版３－…… 62
第 40 図　SI16・17 竪穴住居跡(1) …… 64
第 41 図　SI16・17 竪穴住居跡(2) …… 65
第 42 図　SI16 竪穴住居跡 －出土遺物－ …… 65
第 43 図　SA1 柱穴列跡 …… 67
第 44 図　その他の柱穴・ピット出土遺物 …… 68
第 45 図　SA1 柱穴列跡及び西側谷部②柱穴・ピット群 …… 69
第 46 図　SD1～10 溝跡(1) …… 73
第 47 図　SD1～10 溝跡(2) …… 75
第 48 図　日向遺跡B区　土坑（SK）　遺構配置図 …… 76
第 49 図　SK19～24 土坑 …… 79
第 50 図　SK25 土坑 …… 80
第 51 図　SK26・27 土坑 …… 81
第 52 図　SK28～33 土坑 …… 83
第 53 図　SK34～40・81 土坑 …… 85
第 54 図　SK41～47 土坑 …… 87
第 55 図　SK48～52・82・96 土坑 …… 89
第 56 図　SK53～57・83 土坑 …… 91
第 57 図　SK58～62・87・90 土坑 …… 93
第 58 図　SK63～69 土坑 …… 95
第 59 図　SK70・71 土坑 …… 96
第 60 図　SK72～74 土坑 …… 97
第 61 図　SK75～80・84 土坑 …… 99
第 62 図　SK85・86・88・89～93 土坑 …… 101
第 63 図　SK94・95 土坑 …… 102
第 64 図　主要土坑（SK）写真図版(1) …… 103
第 65 図　主要土坑（SK）写真図版(2) …… 104
第 66 図　主要土坑（SK）写真図版(3) …… 105
第 67 図　主要土坑（SK）写真図版(4) …… 106
第 68 図　基本層出土遺物 …… 108
第 69 図　遺構外出土遺物 …… 110
第 70 図　日向遺跡２次調査(B 区)出土
縄文土器・弥生土器 …… 116
第 71 図　日向遺跡２次調査(B 区)
SI15 竪穴住居跡出土遺物 …… 119
第 72 図　日向遺跡２次調査(B 区)
SI13 竪穴住居跡ほか出土遺物 …… 121
第 73 図　日向遺跡２次調査(B 区)出土 中世陶器 …… 122
第 74 図　日向遺跡２次調査(B 区)主要遺構の
所属時期と新旧関係 …… 125
第 75 図　日向遺跡(B 区)奈良時代・平安時代遺構配置図…… 127
第 76 図　日向遺跡・日向北遺跡　古代集落の状況 …… 129

表　目　次

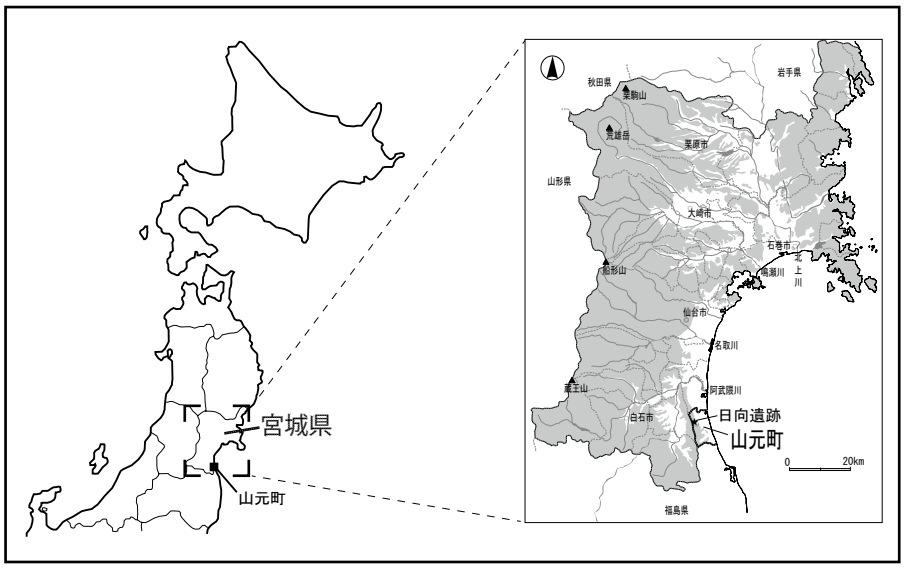
第　1　表　山元町遺跡一覧 …… 5
第　2　表　日向遺跡(2次調査)で使用した遺構番号 …… 14
第　3　表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣） …… 17
第　4　表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県経由・出張扱い） …… 17
第　5　表　その他の柱穴・ピット出土遺物一覧 …… 68
第 6-1 表　日向遺跡2次調査 ピット・柱穴跡属性表（P646～720） …… 70
第 6-2 表　日向遺跡2次調査 ピット・柱穴跡属性表（P721～797） …… 71
第　7　表　日向遺跡2次調査　溝跡一覧(SD1～10) …… 72
第　8　表　日向遺跡2次調査　土坑属性表(SK19～96) …… 77
第　9　表　日向遺跡2次調査　基本層出土遺物一覧 …… 109
第 10 表　日向遺跡2次調査　遺構外出土遺物一覧 …… 109
第 11 表　炭化物試料採取遺構・層位一覧 …… 111
第 12 表　日向遺跡2次調査　出土遺物一覧 …… 117
第 13 表　日向遺跡B区(2次調査)　遺構の所属時期 …… 125
第 14 表　日向遺跡周辺の古代集落　主要遺構の年代 …… 128

第Ⅰ章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と地理的環境

宮城県亘理郡山元町は、仙台市から南南東に約 40km 離れた県南東部に位置し、地理的には仙台平野南端にあたる(第１図)。町の西側は福島県から延びる阿武隈山地の支脈、東側は太平洋で、これらの間には沖積地が広がっている。町内を北上する阿武隈山地は、標高 200～300m の山地・丘陵地で、北端では阿武隈川と接する。丘陵縁辺は、阿武隈山地に源を発する小河川によって開析された櫛状の谷地形となり、谷底には谷中平野が形成されている。丘陵の東側には、沖積地を挟んで海岸線に平行した４列の浜堤（第Ⅱ浜堤列・第Ⅲa～c 浜堤列）が認められる(伊藤 2006、藤本・松本 2012)。

日向遺跡は、平成 19・20 年度に実施された分布調査により発見された遺跡で、亘理郡山元町山寺字日向に所在し、山元町役場の北北西約 1.1km に位置する(第 1～3 図)。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 16～40m の丘陵南緩斜面及び急斜面に立地する（第 2 図)。遺跡発見当初は、東西 80m、南北 110m ほどの範囲を日向遺跡として登録していたが、今回の調査により、その範囲がさらに西側約 120m まで広がることが判明した。現況は、道路、宅地、山林、畑地、荒地である。



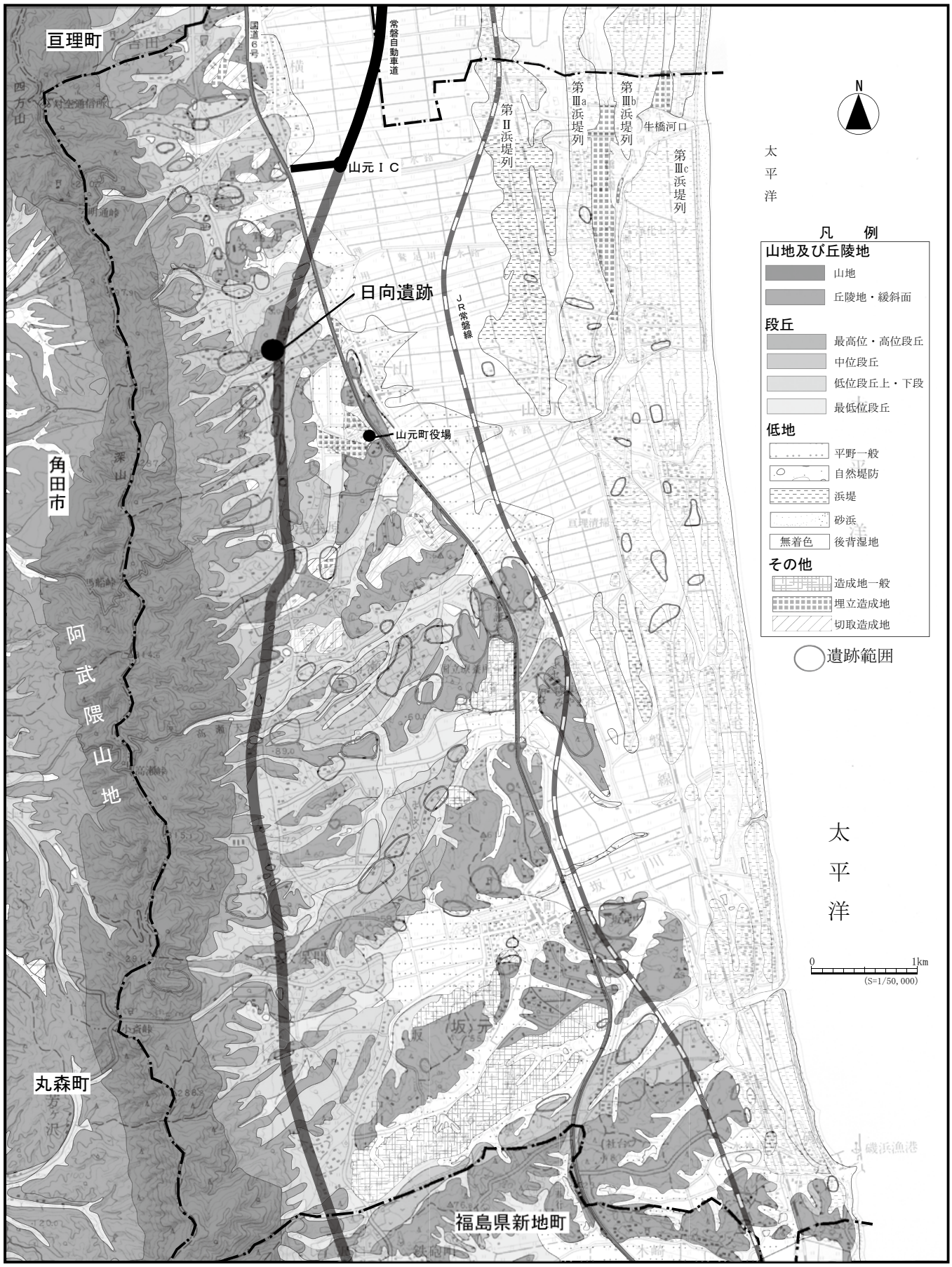
第１図　山元町と日向遺跡の位置

第２節　周辺の遺跡

山元町には、現在まで 100 余りの遺跡が登録されている（第３図、第１表)。その分布は、地形的に阿武隈山地裾部、そこから延びる丘陵縁辺部、浜堤列周辺の大きく３つに分けられる。阿武隈山地裾部には縄文時代から中世に至る各時代の遺跡がある。丘陵縁辺部には縄文時代から近世までの遺跡が分布するが、その主体は古代と中世である。浜堤列周辺は近年の分布調査により発見された遺跡がほとんどで、古代以降の遺跡が分布している。

近年、山元町内では、常磐自動車道山元 IC 開通に伴う周辺地区の開発や、常磐自動車道（県境－山元間）建設工事、平成 23 年３月 11 日に発生した東日本大震災の復興事業などに伴う大規模な発掘調査が継続的に進められており、これまで知られていなかった山元町の歴史が少しずつ明らかになってきている。

以下、これまでに調査された代表的な遺跡について、時代ごとに記述する。



第２図　日向遺跡及び山元町内の地形分類図

【縄文時代の遺跡】

前期の北経塚遺跡（10）、上宮前北遺跡（109）、前期～中期の西石山原遺跡(84)、中期後半の南山神B遺跡（89）、中期末～後期前葉の谷原遺跡(67)、中期～晩期の中島貝塚(4)、後・晩期の涌沢遺跡（107）、晩期の中筋遺跡(80)などがある。

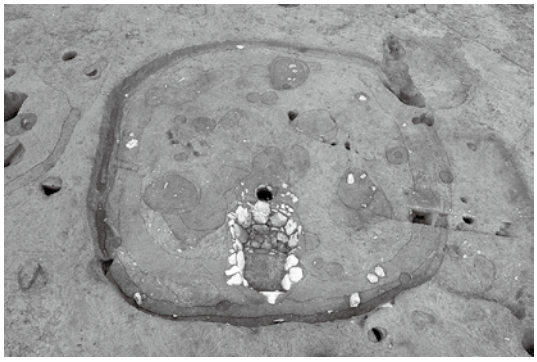
北経塚遺跡では、平成15・21・23年度に調査が行われ、前期初頭の竪穴住居跡、土坑、遺物包含層、ピット群などが検出され、前期初頭の上川名Ⅱ式の古い段階の土器群や石器が出土した（関2004、山田・村上・山口2010、山田・藤田・佐伯2013）。**上宮前北遺跡**では、平成24年度の調査で、早期末～前期初頭の遺物包含層・竪穴状遺構・集石遺構が検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式の土器群が中心に出土した（初鹿野ほか2015）。

西石山原遺跡では、平成22・23年度に調査が行われ、前期の土坑、中期末葉の竪穴住居跡などが検出され、前期前葉の上川名Ⅱ式、後期後葉～末葉の大木10式の土器群が出土している（初鹿野ほか2012）。

南山神B遺跡では、平成23・24年度の調査で、中期後半の遺物包含層・柱穴・土坑が検出され、中期後半の大木9式後半の土器群が出土した（初鹿野ほか2015）。

谷原遺跡では、平成22・24年度の調査で、中期末～後期前葉の掘立柱建物跡のみで構成される南北 40m・東西35mの環状集落、その周囲で同時期の土坑・土器埋設遺構、遺物包含層などが検出され、後期末の大木10式、後期初頭～前葉の綱取Ⅰ・Ⅱ式の土器群が出土した（山田・藤田2016）。

中島貝塚では、昭和53年に調査が行われ、後期～晩期の縄文土器・石器とともに貝殻、魚骨・獣骨が数多く出土した（山元町誌編纂委員会編1986）。**涌沢遺跡**では、平成24年度の調査で、後・晩期の遺物包含層が検出され、後期後半の瘤付土器・晩期前葉の大洞B～BC式の土器群が出土した（初鹿野ほか 2015）。**中筋遺跡**では、平成24年度の調査で、晩期の遺物包含層が検出され、晩期前葉～末の大洞BC式・大洞C2式・大洞A～A´式の土器群が出土したほか、後期前葉～後葉の土器もわずかに出土している（山田・藤田・佐伯2015）。



西石山原遺跡　縄文時代の竪穴住居跡（縄文時代中期末）

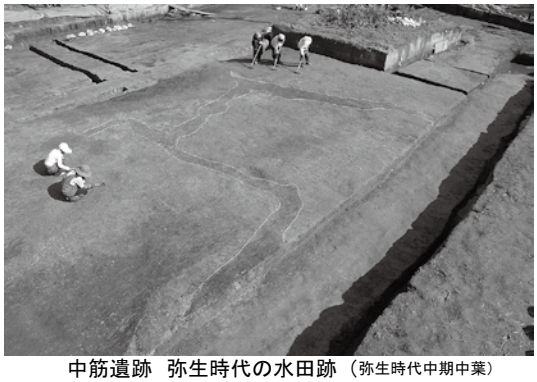
谷原遺跡2次調査で発見された縄文時代の環状集落（北から）

【弥生時代の遺跡】

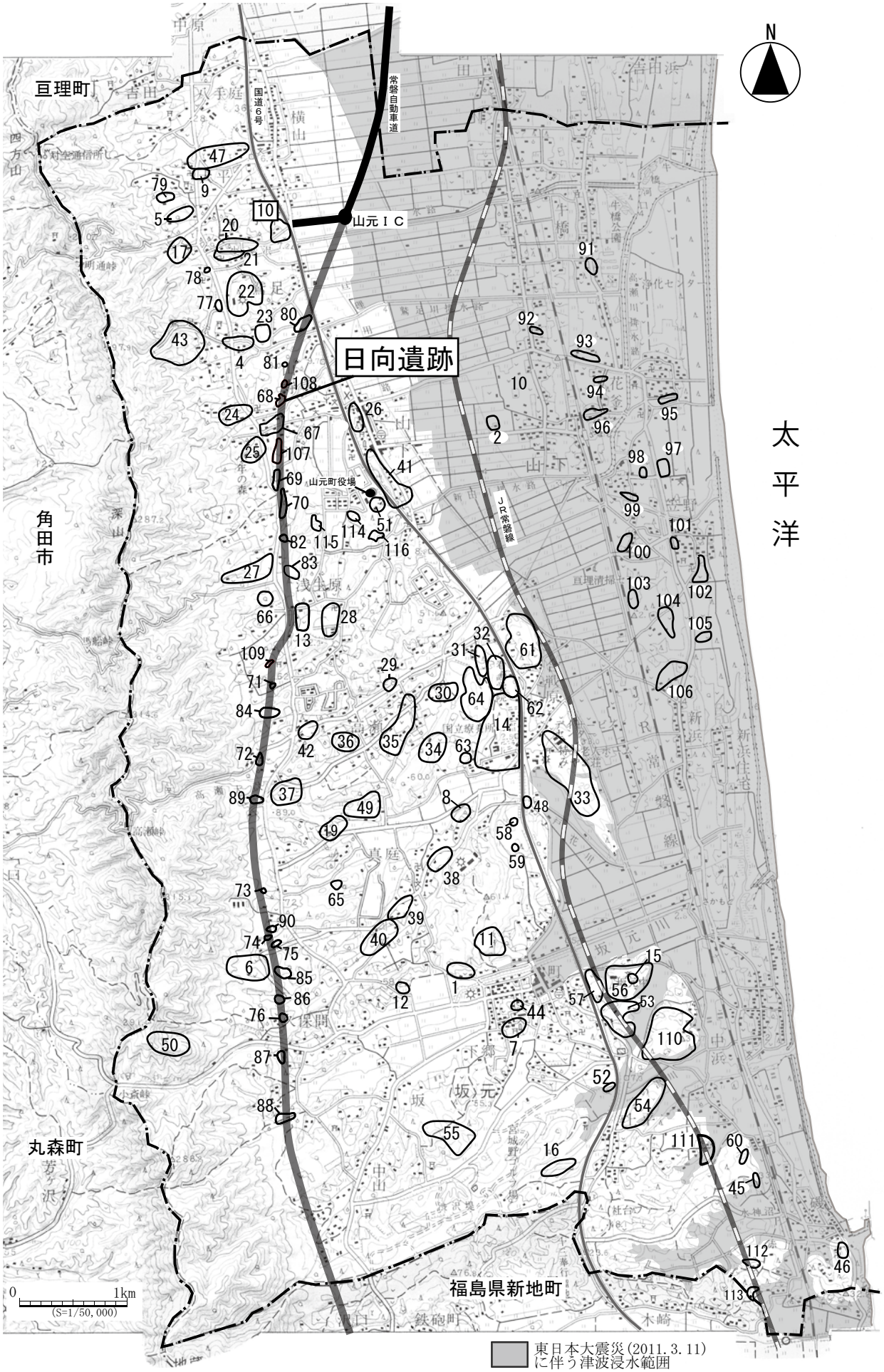
中筋遺跡(80)、狐塚遺跡(56)、館の内遺跡(9)、北経塚遺跡(10)、谷原遺跡(67)、日向遺跡(68)などがある。

中筋遺跡では、平成24年度の調査で、水田跡や遺物包含層などが検出され、中期前葉の鱸沼式～中期中葉の枡形囲式を中心とする土器群や石包丁、板状石器などが出土した。また、同時期の津波痕跡の可能性のある砂層も確認されている（山田・藤田・佐伯2015、山田2015a）。

狐塚遺跡では、平成5年度の調査で、溝跡が確認され、中期後半の十三塚式の土器が出土したほか、平成25年度の調査では遺物包含層から同時期の土器、石包丁などが出土している（窪田1995、初鹿野2016ほか）。



中筋遺跡　弥生時代の水田跡（弥生時代中期中葉）



第３図　日向遺跡の位置と山元町内の遺跡分布

第１表　山元町遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代
1	井戸沢横穴墓群	横穴墓	古墳後
2	新田遺跡	散布地	古墳後・古代
3	欠番	—	—
4	中島貝塚	貝塚	縄文中～晩
5	味曽野横穴墓群	横穴墓	古墳後
6	影倉遺跡	散布地	縄文後・晩
7	蓑首城跡	城館	中世・近世
8	上台遺跡	散布地	弥生・平安
9	館の内遺跡	集落	古代
10	北経塚遺跡	集落・古墳・経塚	縄文前、古墳前・中中世
11	愛宕山館跡	城館	中世
12	日向遺跡	散布地	古墳中・後
13	浅生原遺跡	散布地	縄文中・後、中世
14	合戦原遺跡	集落・横穴墓 須恵器窯跡・製鉄	古墳中・後、古代
15	狐塚古墳群	古墳	古墳後
16	一の沢遺跡	散布地	弥生
17	清水遺跡	散布地	弥生
18	欠番	—	—
19	北鹿野遺跡	散布地	古墳
20	小平館跡	城館・散布地	古墳前・古代・中世
21	舘横穴墓群	横穴墓	古墳後
22	山崎横穴墓群	横穴墓	古墳後
23	中道遺跡	散布地	縄文・古墳後
24	石堂遺跡	散布地	古代
25	山寺館跡	城館	中世
26	作田山館跡	城館	中世
27	入山遺跡	散布地	縄文・古代
28	下大沢遺跡	散布地	縄文前
29	宮後遺跡	散布地	古代
30	大久保遺跡	散布地	縄文・古墳・古代
31	舘下窯跡	須恵器窯	古代
32	中島館跡	城館	中世
33	戸花山遺跡	古墳・須恵器窯・ 製鉄・散布地	縄文・古墳・古代
34	北名生東窯跡	須恵器窯	古代
35	室原遺跡	散布地	古代
36	北の原遺跡	散布地	縄文早・前・後
37	南山神遺跡	散布地	縄文早・前
38	原遺跡	散布地	古墳
39	浅生遺跡	散布地	古代
40	南権現遺跡	散布地	縄文早・前、古墳
41	山下館跡	城館	中世
42	石山原遺跡	散布地	縄文
43	鷲足館跡	城館	中世
44	館下遺跡	散布地	弥生
45	大壇小壇十三壇	塚	近世
46	唐船番所跡	番所	近世
47	大平館跡	集落・城館	平安・中世
48	貝吹城跡	城館	中世
49	真庭館跡	城館	中世
50	新城山古館跡	城館	中世
51	日向窯跡	窯跡	古代
52	作田横穴墓群	横穴墓	古墳後
53	熊の作遺跡	集落	古墳後・古代
54	駒場原遺跡	散布地	古代
55	川内遺跡	製鉄	古代
56	狐塚遺跡	集落･生産	古墳中～古代
57	向山遺跡	集落・生産	古墳・古代
58	卯月崎塚	塚	中世・近世
60	東作経塚	経塚	中世
61	合戦原B遺跡	製鉄	古代
62	合戦原C遺跡	古墳	古墳中
63	北名生東B窯跡	窯跡	古代
64	大久保B遺跡	散布地	古代
65	北権現遺跡	製鉄	古代
66	山王遺跡	製鉄	古代？
67	谷原遺跡	集落	縄文後・弥生～中世
68	**日向遺跡**	集落	縄文後・古墳後～中世
69	石垣遺跡	集落	縄文・古墳前 平安・近世
70	的場遺跡	集落	縄文前・古墳前 平安・近世
71	上宮前遺跡	散布地	平安・中世
72	北山神遺跡	散布地	縄文
73	新田B遺跡	散布地	古代
74	影倉B遺跡	散布地	縄文
75	影倉C遺跡	散布地	古代
76	荷駄場遺跡	散布地	縄文
77	北遺跡	散布地	古代
78	北ノ入遺跡	散布地	古代
79	味噌野遺跡	散布地	古代
80	中筋遺跡	水田・包含層 墓域？	縄文晩・弥生中 古墳前
81	赤坂遺跡	散布地	縄文・弥生
82	山王B遺跡	集落・散布地	縄文・近世
83	内手遺跡	製鉄・生産	平安
84	西石山原遺跡	集落	縄文前・中、平安
85	影倉D遺跡	製鉄	古代
86	荷駄場B遺跡	散布地	古代
87	上小山遺跡	散布地	古代・中世
88	法羅遺跡	散布地	縄文
89	南山神B遺跡	散布地	縄文・古代
90	影倉E遺跡	散布地	縄文・古代・中世
91	北泥沼遺跡	散布地	古代
92	泥沼遺跡	散布地	古代
93	畑合遺跡	散布地	古代
94	北頭無遺跡	散布地	古代
95	浜遺跡	散布地	古代
96	頭無遺跡	散布地	古代
97	花笠遺跡	散布地	古代
98	西北谷地A遺跡	散布地	古代
99	西北谷地B遺跡	散布地	古代
100	西須賀遺跡	散布地	古代
101	笠野A遺跡	散布地	古代
102	笠野B遺跡	散布地	古代
103	北中須賀遺跡	散布地	古代
104	狐須賀遺跡	散布地	古代
105	笠浜遺跡	散布地	古代
106	新浜遺跡	散布地	古代
107	涌沢遺跡	集落	縄文・古代～近世
108	日向北遺跡	集落	古墳後・中世～近世
109	上宮前北遺跡	集落	古代
110	犬塚遺跡	製鉄	古代
111	新中永窪遺跡	集落・須恵器窯 製鉄	古代
112	雷神遺跡	集落・生産	古代
113	山ノ上遺跡	散布地・生産	古代
114	作田山遺跡	製鉄	古代
115	内手B遺跡	製鉄・須恵器窯	古代
116	作田山B遺跡	生産	古代

この他、北経塚遺跡・館の内遺跡・谷原遺跡・日向遺跡などで、弥生時代の遺構は確認されていないが、遺物が出土している。**北経塚遺跡**では、平成 21・23 年度の調査で、中期後半の十三塚式・後期の天王山式の土器のほか、石包丁が出土した（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。**館の内遺跡**では、平成 13 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器が出土した（引地 2002）。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度の調査で、中期前半～中期中葉の土器が出土した（山田・藤田 2016）。**日向遺跡**では平成 23 年度の調査で、中期後半の十三塚式の土器や石包丁が出土した（山田・藤田 2015）。

【古墳時代の遺跡】

前期の中筋遺跡(80)・石垣遺跡(69)・的場遺跡(70)・犬塚遺跡(110)、前期～中期の北経塚遺跡(10)、中期～終末期の合戦原遺跡(14)、後期～終末期の狐塚遺跡(56)・日向北遺跡(108)・日向遺跡(68)・谷原遺跡(67)・熊の作遺跡（53）・井戸沢横穴墓群(1) などがある。

中筋遺跡　古墳時代前期の土坑墓（平成 24 年度調査）

中筋遺跡では、平成 24 年度の調査で、前期の土坑墓群が検出された（山田・藤田・佐伯 2015）。**石垣遺跡**では、平成 23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田 2014）。**的場遺跡**では、平成 23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡・土坑・溝跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。**犬塚遺跡**では、平成 27 年度の調査で、前期の方形周溝を伴う墳丘が確認されている（宮城県考古学会 2015）。**北経塚遺跡**では、平成 21・23 年度の調査で、前期の竪穴住居跡・方形周溝跡、中期の古墳周溝跡が検出された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013）。

北経塚遺跡　古墳時代中期の円墳周溝跡（平成 23 年度調査）

合戦原遺跡では、平成 2 年度に調査が行われ、中期末頃の大型の竪穴住居跡が検出された（岩見・佐藤 1991）ほか、平成 8・9 年に実施された測量調査で、前方後円墳を含む古墳群が確認されている（青山ほか 2000）。また、平成 26～28 年度の調査では、終末期の横穴墓群や竪穴住居跡が確認されており、特に横穴墓群の調査では、玄室奥壁に線刻画が描かれた横穴墓が発見されたほか、副葬品として土師器、須恵器、玉類、直刀・蕨手刀・鉄鏃・馬具などの多くの金属製品が出土しており、大きな成果が得られている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。

合戦原遺跡の横穴墓群（平成 26 ～ 28 年度調査）

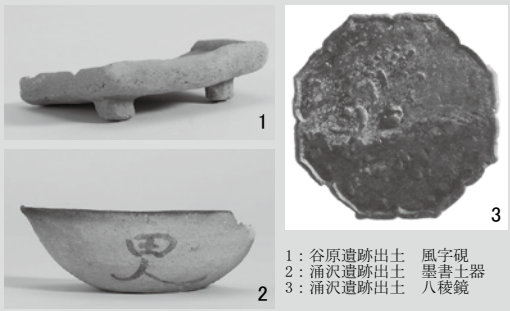
狐塚遺跡では、平成 4・5 年度の調査で、後期の竪穴住居跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡が検出された（千葉 1993、窪田 1995）。**日向北遺跡**では、平成 24 年度の調査で、終末期前後の竪穴住居跡が検出された（山田・丹野 2014）。**日向遺跡**では、平成 23 年度の調査で、後期の竪穴住居跡、終末期の遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015）。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度の調査で、終末期頃の竪穴住居跡が検出された（山田・藤田 2016）。**熊の作遺跡**では、平成 25・26 年度の調査で、後期～終末期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡が検出された（初鹿野ほか 2016）。**井戸沢横穴墓群**は、昭和 44 年に調査が行われ、調査された数基の横穴墓の特徴が福島県浜通り地方に点在する横穴墓群と類似することから、その関連性が指摘されている（佐々・志間・氏家 1971）。

【奈良・平安時代の遺跡】

熊の作遺跡（53）、谷原遺跡(67)、涌沢遺跡(107)、館の内遺跡(9)、日向遺跡(68)、石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、雷神遺跡（112)、山ノ上遺跡（113)、犬塚遺跡（110)、新中永窪遺跡（111)、北名生東窯跡（34)、合戦原遺跡(14)、狐塚遺跡(56)、内手遺跡(83)、上宮前北遺跡(109)、向山遺跡(57)、内手Ｂ遺跡（115)、作田山遺跡（114）などがある。

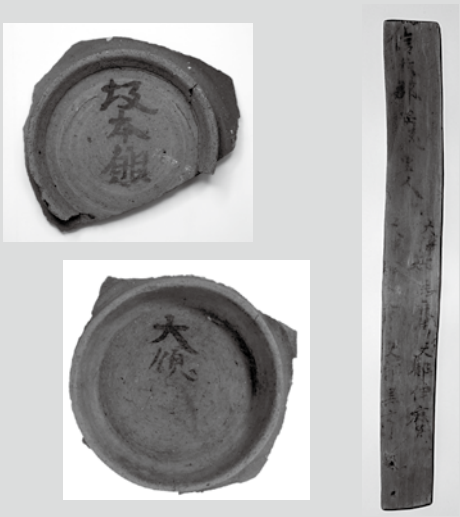
熊の作遺跡では、平成 25・26 年度の調査で、奈良時代～平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、四脚門跡が検出され、「坂本願」・「大領」・「子弟」などの墨書土器や風字硯、石帯、木簡、木製品などが出土するなど大きな成果が得られており、陸奥国亘理郡に関連する役所跡と推定されている(初鹿野ほか 2016)。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度の調査で、7 世紀末～8 世紀前葉、8 世紀後半～9 世紀前葉、9 世紀後半の竪穴住居跡などが検出され、風字硯・円面硯、墨書土器などが出土した（山田・藤田 2016)。**涌沢遺跡**では、平成 24 年度の調査で、8 世紀末～10 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構・土器廃棄土坑や 8 世紀末～9 世紀初頭の鍛冶関連遺構などが検出され、「田人」・「十万」・「千万」の墨書土器や 10 世紀後半の八稜鏡などが出土した(宮城県考古学会 2012、初鹿野ほか 2015)。**館の内遺跡**では、平成 13 年度の調査で、規格的に配置された掘立柱建物跡や竪穴住居跡が検出され、墨書土器や製塩土器などが出土している（引地 2002)。**日向遺跡**では、平成 23 年度の調査で、8 世紀末～9 世紀初頭・9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・遺物包含層が検出された（山田・藤田 2015)。**石垣遺跡**では、平成 23 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・竪穴状遺構、土器廃棄土坑が検出され、土器廃棄土坑からは墨書土器（「田」・「人」）が出土した（山田・藤田 2014)。**的場遺跡**では、平成 23・25 年度の調査で、9 世紀後半の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・焼成遺構が検出された（山田・藤田・佐伯 2014)。**雷神・山ノ上遺跡**では、平成 25 年度の調査で、奈良時代頃の竪穴住居跡などが検出された(初鹿野ほか 2016)。

犬塚遺跡では、平成 25～27 年度の調査で、奈良時代前半を中心とする竪穴住居跡・木炭窯跡・横口式木炭窯跡・製鉄炉跡が検出された(初鹿野 2015a・b、宮城県考古学会 2015)。**新中永窪遺跡**では、平成 25・26 年度の調査で、奈良～平安時代初期の竪穴住居跡・製鉄炉跡・須恵器窯跡・木炭窯跡・横口付木炭窯跡が検出された(初鹿野ほか 2016)。**北名生東窯跡**では、昭和 37・38・52 年



1：谷原遺跡出土　風字硯
2：涌沢遺跡出土　墨書土器
3：涌沢遺跡出土　八稜鏡

谷原遺跡・涌沢遺跡出土遺物



熊の作遺跡出土 墨書土器・木簡

新中永窪遺跡
横口付木炭窯跡
（7 世紀後半～ 8 世紀前葉）

新中永窪遺跡
須恵器窯跡（8 世紀中葉）

度に須恵器窯跡の調査が行われ、8 世紀後半～9 世紀初頭の須恵器が出土した（鍛冶 1971）。**合戦原遺跡**では、平成 2 年度の調査で奈良時代～平安時代の須恵器窯跡（岩見・佐藤 1991）、平成 26・27 年度の調査で製鉄炉跡・木炭窯跡・焼成土坑が確認されている（山田 2015b・宮城県考古学会 2015）。**狐塚遺跡**では、平成 4・5 年度の調査で、平安時代の竪穴住居跡・木炭窯跡など検出された（千葉 1993、窪田 1995）。**内手遺跡**では、平成 23 年度の調査で、9 世紀代の地下式木炭窯跡 7 基・横口付木炭窯跡 1 基が検出されている（初鹿野 2013・初鹿野ほか 2015）。**上宮前北遺跡**では、平成 24 年度の調査で、9 世紀の製鉄炉跡 4 基が検出されている（初鹿野 2013・初鹿野ほか 2015）。**向山遺跡**では、平成 25 年度の調査で、平安時代の竪穴住居跡や鍛冶工房が検出されている（初鹿野ほか 2016）。この他、**内手 B 遺跡**では、平成 26 年度の試掘で、奈良時代の須恵器窯跡、**作田山遺跡**では、平成 25 年度の試掘で、古代の製鉄関連遺構が検出されている。

上宮前遺跡　SW2 製鉄炉跡（平安時代）

【中世の遺跡】

北経塚遺跡(10)、小平館跡(20)、日向遺跡(68)、谷原遺跡(67)、山下館跡 (41)、鷲足館跡(43)などがある。

北経塚遺跡では、平成 21・23・28 年度の調査で、13 世紀後半～14 世紀以降の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑が確認された（山田・村上・山口 2010、山田・藤田・佐伯 2013、山田・川口 2017）。**小平館跡**は、室町時代の天文年間(1532～1555 年)に亘理要害 14 世亘理宗隆が居館したとされている館跡で（紫桃 1974）、平成 24・25・27 年度に調査が行われ、掘立柱建物跡・溝跡が検出された（山田 2015c）。**日向遺跡**では、平成 23 年度の調査で、13 世紀後半～16 世紀の掘立柱建物跡・井戸跡が確認された（山田・藤田 2015）。**谷原遺跡**では、平成 22・24 年度の調査で、掘立柱建物跡多数・井戸跡・土坑・溝跡などが検出され、中世の大規模な屋敷跡の存在が確認された（山田・藤田 2016）。**山下館跡**では、平成 26 年度に調査が行われ、平場・土塁・堀切が良好な状態で確認され、平場では掘立柱建物跡や柱穴列が検出された（宮城県考古学会 2014）。**鷲足館跡**では、平成 24～28 年度に調査が行われ、腰郭と柱穴列で区画された曲輪が確認され、掘立柱建物跡が多数検出された。

山下館跡の平場・土塁・堀切（平成 26 年度調査）

【近世の遺跡】

石垣遺跡(69)、的場遺跡(70)、山王 B 遺跡(82)、蓑首城跡(7)などがある。

石垣遺跡では、平成 23 年度の調査で、近世の掘立柱建物跡・柱穴列跡・土坑・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田 2014）。**的場遺跡**では、平成 23・25 年度の調査で、17～19 世紀の掘立柱建物跡・土坑・溝跡・井戸跡で構成される屋敷跡が検出された（山田・藤田・佐伯 2014）。**山王 B 遺跡**では、平成 22 年度の調査で、掘立柱建物跡・溝跡・土坑が検出された（初鹿野ほか 2012）。**蓑首城跡**は、戦国時代末期に築城され、元和 2（1616）年以降、大條氏が居城した城で、平成 25 年度に二ノ丸跡の調査が行われ、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが検出された（宮城県考古学会 2013）。

蓑首城跡　二ノ丸跡の遺構（平成 25 年度調査）

第３節　日向遺跡の概要

日向遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 16～40m の丘陵南斜面に立地する（第２図）。遺跡の南側には西から東に流れる谷原川があり、遺跡の東側で南東から流れる山寺川と合流する。遺跡が所在する丘陵東側には古墳時代終末期・平安時代・中近世の遺構が確認された日向北遺跡（山田・丹野 2014）、南側の谷原川南岸の平坦面には縄文時代から中世の谷原遺跡（山田・藤田 2016）が所在する。また、丘陵西側の山上院には鎌倉時代後期の正保元年（1312 年）の板碑が１基確認されている（石黒 2005）。

日向遺跡は平成 23 年度、常磐自動車道建設工事に伴い第１次調査（調査面積 1,975 ㎡）が行われ、縄文時代から中世にかけての遺物が出土している。縄文・弥生時代については、遺構は確認できず、出土した縄文土器も器面が磨滅しているため、所属時期は不明である。弥生土器については、中期後半の十三塚式のものであり、他に石包丁１点が出土する。古墳時代については、6 世紀後半頃の竪穴住居跡１軒を検出したのみで、その他、南斜面の遺物包含層で 7 世紀中葉～8 世紀前半期頃の遺物が出土したが、この遺物を供給した遺構は不明であった。続く古代においては、竪穴住居跡７軒、掘立柱建物跡２棟、土坑を検出し、遺構の重複関係や出土遺物から１軒の住居跡が 8 世紀末～9 世紀初頭、それ以外は 9 世紀中葉・9 世紀後半代のものであった。この他、調査区内の遺構や遺物包含層から鉄滓が出土し、住居跡のカマド支脚に鞴の羽口が使用されていることから、古代の日向遺跡の周辺には製鉄に関連する集団が居住し、周辺に製鉄関連遺構が存在する可能性が推定されている。中世については、掘立柱建物跡 40 軒、井戸跡４基、土坑１基、ピット多数を検出した。主体は、13 世紀後半～14 世紀前半（鎌倉時代後半～室町時代前半）であり、16 世紀代まで存続していた可能性が考えられ、その中で７～９時期以上の建て替えが行われたと想定されている。また、屋敷地としては、溝や柱穴列による区画施設が確認されていないことや出土遺物が在地産のみで構成され、漆器・かわらけが数点出土するのみであることから日向遺跡の中世集落は、領主・武士層のさらに下の階層の集落であった可能性が考えられている（山田・藤田 2015）。

日向遺跡１次調査　調査区遠景（南西から）

日向遺跡１次調査　調査区全景（上が北）

日向遺跡１次調査　SI2 竪穴住居カマド支脚に使用された羽口

日向遺跡１次調査　遺物包含層出土土師器（7 世紀中～ 8 世紀前半）

日向遺跡１次調査　遺物包含層出土土師器（古代）

第Ⅱ章　調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

１．事前協議

平成 27 年度下半期に、宮城県亘理郡山元町鷲足字栩田 69 他と埋蔵文化財のかかわりについて、田中建材輸送株式会社（以下、事業主）から山元町教育委員会（以下、町教委）に照会がなされた。町教委では、事業予定箇所の一部が、周知の埋蔵文化財包蔵地である「日向遺跡」に隣接していたことから（第４図）、事業主へ対し、事前の協議を行う旨の回答を行った。

平成 27 年 9 月 25 日、「砂利採取場拡張計画と埋蔵文化財のかかわりについて」の協議書が事業主から町教委に提出され、同日、町教委では意見書を付し、宮城県教育庁文化財保護課（以下、県教委）に協議書を進達した。これを受け、上記三者による現地確認・協議を行った結果、事業の実施により、遺跡へ与える影響が高いと判断されたことから、平成 27 年 10 月 21 日付け文第 1919 号・県教委通知により、事業用地内の遺構の分布状況を把握することを目的とした「確認調査」を実施する対応に決定した。その後、平成 27 年 10 月 26 日付で文化財保護法第 93 条に基づく発掘届出が提出（事業主→町教委→県教委）され、平成 27 年 11 月 13 日から確認調査を実施することとなった。

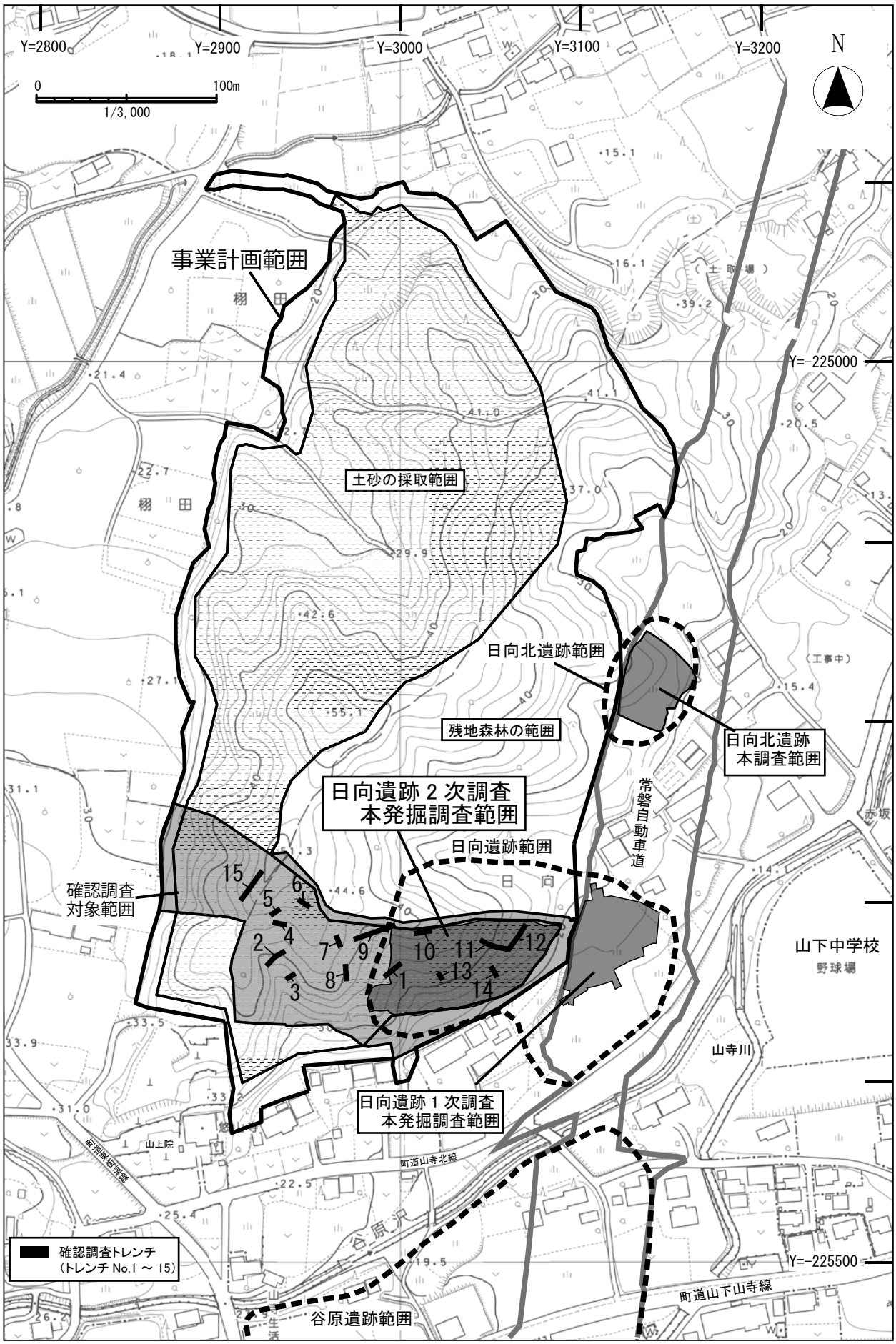
２．確認調査

確認調査は、平成 27 年 11 月 13 日～12 月 10 日の間で 15 日実施した。調査主体は町教委で、その調査は木下晴一（香川県派遣）が担当した。

調査対象地は、南東方向と南方向に延びる３本の尾根とその間に挟まれた２か所の谷部で、面積は約 17,710 ㎡を測る。調査は、事業計画地区内にトレンチを 15 箇所（T-1～15）設定し、遺構の有無を確認した。当初は、重機（バックホウ）による表土掘削を計画していたが、斜面が急で、立木が障害となり、掘削困難な箇所もあったため、トレンチ 1～3、13、14 は人力掘削、4～12・15 は重機掘削により調査を進めた。トレンチ位置の記録は、立木が繁茂し見通しがきかないことから光波測距儀が使用できず、平板を使用した。具体的には対象地内の既知の点を見通すことにより標定し、測距は携帯型レーザー距離計（斜距離補正機能付き、精度 20 ㎝）を用いた。なお、調査にあたっては、事業主から重機の提供を受けた。

南側に延びる２つの尾根の基部にあたる箇所にトレンチ１～４、中央の尾根上にトレンチ７・８を設定し、掘削を行った。表土直下が地山となり、遺構・遺物ともに確認できなかった。その２つの尾根に挟まれた狭い谷部分に設定したトレンチ２・３は、すでに段々畑に造成され、遺構は確認できなかった。ただし、厚さ 0.9～1.0ｍの造成土からは銅銭や土師器の甕破片が出土した。造成の状況等から遺構は削平を受け、現状では残存していないと考えられる。次に、南東方向に延びる尾根上にトレンチ 9～13 を設定した。尾根頂部のトレンチ 9・10、東側斜面のトレンチ 11 では表土直下で、焼成遺構や土坑、ピット等が検出された。その尾根の西側の谷部にあたるトレンチ 14・15 では遺物量は少ないが、包含層を確認した。包含層は 0.6～0.7ｍの厚さがあり、その直下は地山となるが、遺構は確認されなかった。ただし、包含層中に磨滅する土器細片が含まれることから、遺存状態の良好ではない遺構が周辺に散在する可能性が考えられた。

以上のことから、段々畑に造成され、遺構は存在しないと思われる範囲（トレンチ１～８）は本調査の対象からはずし、本来の地形面が残存する箇所（トレンチ 9～15）は本調査必要箇所と判断した。この結果を受け、宮城県発掘調査基準（平成 12 年 4 月 1 日）に基づき、事業主・県教委・町教委の三者で再度協議した結果、遺構が確認された事業計画地区の東側を対象に、本格的な調査を行うこととなった。本調査対象面積は約 3,820 ㎡である。



第４図　日向遺跡２次調査 調査箇所

第２節　日向遺跡（２次調査）発掘調査の経過

１．本発掘調査の経過

日向遺跡（２次調査）の本発掘調査は、町教委が主体となり実施した。

本発掘調査は、平成 28 年 4 月 1 日～平成 28 年 6 月 30 日までの 49 日間実施した。調査面積は、調査対象となった事業拡張計画面積の約 17,710 ㎡のうち、遺構と包含層が確認された約 3,820 ㎡である。

（１）調査体制及び事前準備の経過

日向遺跡の発掘調査体制は、調査員 3 名、調査補助員 1 名、作業員のべ 47 名である。なお、今回の調査は、福岡市派遣の星野惠美 調査員を主担当し、調査を進めた。

調査にあたっては、平成 28 年 4 月 1 日付で現地調査業務に係る委託契約を締結し、各種手続きを進めた。事業主との事前協議の結果、4 月初旬から調査着手することに決定していたことから、平成 28 年 3 月から事前準備（物品手配・作業員雇用・各種契約事務等の準備）を行い、4 月 1 日から調査着手できる体制整備を行った。ただし、作業員の詰所・駐車場等については、調査箇所周辺に敷地を確保できなかったことから、現場事務所は設置せず、調査を進めることとし、現場作業員の駐車場は、近隣の山下中学校の敷地を一部借用し対応した。なお、物品倉庫・仮設トイレ、各種重機（バックホウ・キャリアダンプ）は、事業主から直接提供を受けることができた。

（２）調査の経過

調査は、平成 28 年 4 月 1 日からバックホウとキャリアダンプで表土除去を開始し、土砂運搬と置場の関係上、土層④より東側の表土剥ぎを行った。4 月 11 日より人力による土砂流出防止対策を行いながら、4 月 15 日から遺構の検出・精査に着手した。また、西側の谷部②(土層④)では、遺構面を２面確認したため、まず、1 面目の遺構掘削がほぼ終了した 6 月 8 日に空中写真撮影を業務委託により行った。その後、土層②より西側の第１面目の重機による表土剥ぎ、人力による遺構精査・掘削を行い、写真撮影・遺構実測を行った後、土層④周辺の第２面目の表土剥ぎを行った。表土剥ぎは包含層に遺物密度の多寡があったため、遺物量の多いところは人力掘削、少ないところは重機で除去した。そして、遺構検出・精査・掘削を行い、6 月 16 日に俯瞰システムによる全景撮影を行った。

なお、調査中に調査区の南側平坦面と斜面は土砂採取をせず、現状のままにしておくとのことであったので、調査対象からはずした。ただし、今後変更があった場合も柔軟に対応できるよう、調査対象から外した箇所の遺構の有無と遺構面までの深さを確認するためトレンチ調査(トレンチ 101～103)を行った。トレンチ 101・102 で遺構を確認した。現状ではすでに、発掘調査時の雨水対策のため、溝や土手を築いており、すでに表土は除去されていたが、ピット・土坑を検出した。遺構面はトレンチ 101 が標高 19.6～19.7m、トレンチ 102 が標高 18.7～18.9m を測る。トレンチ 103 は谷部に位置し、ローリングを受けた土師器片は少数出土するが、遺構は確認できなかった。

6 月 30 日、現場の資材等を撤収して、すべての現地作業を終了した。調査現場は埋戻しをせず、現地を事業主に引き渡した。発掘調査完了後、平成 28 年 6 月 30 日に遺失物法に基づく「埋蔵物発見届」を亘理警察署に提出し、その後、出土遺物の文化財認定に係る書類を県教委に提出した。また、今回の調査により、日向遺跡の範囲が従来の範囲よりもさらに西側に広がることが判明したことから、遺跡の範囲拡大の手続きも併せて行った。

２．整理・報告書作成作業の経過

日向遺跡で出土した遺物、現地の記録類の整理・報告書作成作業は、発掘調査終了後、山元町役場敷地内に設置した整理室内で行った。

事業主との事前協議の結果、発掘調査報告書の刊行は、平成 29 年度に行うことに決定していたことから、現地調査を実施した平成 28 年度は、調査記録類の基礎整理のみを行い、本格的な整理作業・発掘調査報告書刊行は平成 29 年度に行った。平成 29 年度の整理・報告書作成に係る業務は、平成 28 年 4 月 1 日付で事業主と委託契約を締結した上で、各種作業を進めた。それぞれの年度で行った具体的な作業内容は以下のとおりである。

なお、調査の主担当であった福岡市派遣の星野惠美 調査員は、その派遣期間が平成 28 年 4 月～9 月末であったため、報告書の刊行まで作業に携わることが物理的に不可能な状況であった。そこで、平成 28 年 6 月末の現地調査完了後、町職員と協議した結果、現場の各種記録類の整理、平面・断面図の照合、遺構事実記載の仮原稿の執筆、個別遺構の平面・断面図の製図及び仮版組、報告書使用写真の抽出までを星野調査員が担当することとし、その後の作業については、町職員が引き継ぐ形とした。

【平成 28 年度の作業内容】

・記録写真類の整理
・平面図、断面図の修正・トレース
・各種遺構の仮原稿の執筆、仮図版の作成
　※福岡市派遣　星野 調査員が派遣期間中（平成 28 年 7 月～9 月）に実施

【平成 29 年度の作業内容】

・出土遺物の整理作業（洗浄・保存処理・接合・注記・復元）
・出土遺物の抽出作業
・出土遺物の実測図、拓本図の作成（宮城県教育庁文化財保護課の支援による）
・出土遺物の実測図のトレース、出土遺物の写真撮影
・平面図・写真類の版組み
・検出遺構・出土遺物の報告書執筆
・出土遺物、記録類の収納

第Ⅲ章　発 掘 調 査

第１節　発掘調査の方法

今回の調査は、山寺地区土砂採取工事に伴う発掘調査であり、本遺跡の現地調査・整理作業は下記の方法により行った。

１．現地調査

【調査区の設定】

日向遺跡の発掘調査は、これまで１度の本発掘調査（1 次調査：平成 23 年度実施）が実施されている（第Ⅰ章第 3 節参照）。1 次調査の際は、調査区が１箇所のみだったこともあり調査区名の設定は行っていなかった。これを受け、2 次調査についても、現地調査段階では、特段、調査区名の設定を行わず、調査を進めた。

現地調査終了後、整理・報告書作成段階に入り、調査員間で協議した結果、本書の中で 1 次調査区と 2 次調査区の位置や発見遺構・遺物等の関連性を説明する上で、それぞれの調査区名が必要であるという結論に至った。そこで、1 次調査箇所を A 区、今回の 2 次調査箇所を B 区とすることとした。

【表土除去・遺構精査】

表土除去作業はバックホー（0.45 ㎥）、遺構検出以降の作業は人力により行った。なお、遺構検出作業については、調査区西側の「谷部②」の周辺は基本層Ⅴa～c、Ⅶd・f 層上面の２面、それ以外はⅦa～e 層の１面で行った。調査工程は排土搬出・置場の関係上、まず、「土層４」より東側の表土剥ぎをし、遺構精査・掘削・測量・写真撮影の後、「土層４」より西側の第１面の表土剥ぎ・精査・掘削に移った。次に、「土層４」の東側と西側の第２面までの包含層の掘削を遺物の出土量を確認しながら、人力と重機で行い、その後、人力で第２面の遺構精査、掘削・測量・写真撮影を行った（「谷部②」・「土層４」の名称・位置については次節参照）。

【遺構番号】

遺構番号は、現地調査の段階で、１から通し番号を振り、各種記録類を作成した。その後、整理作業の段階で、遺構番号を各遺構の性格ごとに再度振り直した。

遺構の性格ごとの略記号については例言に示したとおりである。振り直した遺構番号については、１次調査との混同を避けるため、第２表の通り、１次調査で使用した最終番号の次の番号から使用した。

第 2 表　日向遺跡（2 次調査）で使用した遺構番号

遺構略号	1 次調査	2 次調査（本書）
SI	SI1～8	SI9～17
SB	SB1～42	－
SA	－	SA1
SK	SK1～18	SK19～96
SD	－	SD1～10
SX	SX1～3	－
Pit	P-1～645	P-646～797

【遺構測量】

検出した遺構や調査区の図面作成については、遺構平面図・等高線作成はトータルステーション(SRX5X)及び電子平板システム（遺構くん cubic 2016 12.03)、一部の遺構平面図・遺構断面図は手実測により縮尺 1／20 で実測した。その際、調査対象範囲に設置した国家座標系に基づく基準杭を利用した。測量基準杭の国家座標は例言に示したとおりである。

【遺構の記録作成】

今回の調査で検出した遺構のうち、竪穴住居跡、溝跡、土坑については、原則として、すべての記録作成（平面図・断面図・写真撮影）を行った。柵列跡を構成する柱穴やその他のピットのうち、堆積土が１層のみのピット類は、調査を円滑に進めるため、遺構断面図・写真等の記録作成の一部を省略した。

【遺物の記録・取り上げ】

遺構から出土した遺物のうち、出土状況の平面記録の対象としたものは、遺構に伴う遺物で且つ残存状況の良いもののみとした。遺物の取り上げについては、原則として遺構出土遺物は出土層位ごと、遺構外出土

遺物は検出面等として記録し取り上げた。ただし、遺構出土の遺物のうち、半裁時（分層前）に出土した遺物で出土層位が明確でないものは、「堆積土」として取り上げた。

【写真撮影】

記録写真には、一眼レフデジタルカメラ(NikonD5300/レンズ SIGUMA 18-200mm/画質モード FINE)を使用した。調査区の全景写真については、俯瞰システム（CUBIC）及び業務委託によるドローンによる航空撮影（一眼レフデジタルカメラ）を行った（委託業者：㈱日本特殊撮影）。

２．室内整理

①遺物の整理作業

【遺物洗浄・接合・復元】

遺物の洗浄は、水洗により作業を行い、比較的脆い遺物（縄文土器・弥生土器・土師器）については、土器強化剤（使用薬剤：バインダー17）による処理を施した。遺物の接合は、まず同一遺構内の出土遺物の接合を行い、その後、別々の遺構間、その他（検出面・排土など）から出土した遺物の接合を行った。遺物の復元は、実測図作成が可能なものを対象として作業を行った。

【注記作業】

遺物の注記は、ジェットマーカー（第一合成株式会社）を一定期間リースし、機械による注記を行った。遺物への注記内容は、原則として遺跡名の略号・調査年・出土遺構・出土層位とし、遺物の内面等に注記した。なお、注記した出土遺構名は、現場調査で付した番号とした。

【遺物抽出・実測図・拓本図作成】

遺物の抽出・登録は調査員が行った。遺物抽出に際しては、原則として遺構に伴う遺物を中心に抽出し、遺構に伴わないものや遺構外（基本層出土遺物も含む）出土のものについても図化が可能なものは抽出の対象とした。

土器類については、残存状態のよいものを優先的に抽出した。この他、小破片であっても、文様や器形などが特徴的なものや時期・産地推定が可能なものについても抽出の対象とした。抽出した資料は原則として報告書掲載遺物として扱い、それぞれ種別１点ごとに登録番号を付し、非抽出遺物は種別・出土遺構・層位ごとに分け袋詰めし、袋ごとに非抽出遺物の登録を行った。石器は原則として抽出遺物・非抽出遺物に関わらず、全点を登録の対象とし、登録番号を付した。土器・石器以外の遺物については、その内容に応じ、抽出・非抽出遺物に分類した。

遺物の登録に際しては、過去の番号との混同を避けるため、それぞれの種別ごとに１次調査で使用した最終番号の次の番号から使用し登録を行った。遺物種別の略記号は、例言に示したとおりである。

【遺物の実測図作成】

遺物の実測図は、宮城県の支援【廣谷和也（宮城県多賀城跡調査研究所 技師）・山口貴久（宮城県教育庁文化財保護課 技師)】により作図を行っていただいた。実測図は原則として手実測により作成した。

【拓本図作成】

遺物の拓本図作成は宮城県教育庁文化財保護課雇用の整理作業員、山元町教育委員会雇用の整理作業員が行い、報告書用の拓本図作成は町雇用の調査補助員が担当した。拓本図作成は、墨拓と画仙紙を使用し拓本を作成した後、スキャナーでPCに画像を取り込み、報告書掲載用に加工した。

【実測図トレース、掲載遺物の写真撮影】

遺物の実測図のトレース図は､素図をスキャナーで取り込み､PC上でのデジタルトレースを行い作成した。報告書に掲載する遺物の写真撮影は町調査員、写真加工作業は町調査補助員が行った。

②出土遺物等の自然科学分析

今回の以下の自然科学分析は、次の機関に業務委託により実施した。

○放射性炭素年代測定：㈱加速器分析研究所

③図面の整理・報告書作成

遺構図の整理作業は、平面図修正、断面図修正・トレース、土層注記等のデータ入力を行ったのち、図版作成、図面収納の手順で行った。記録写真の整理作業は、撮影年月日ごとにデータを整理し、それらのデータをコピーしたものに対しリネームを行った。その後、各種遺構ごとに分け収納した。報告書の版組み・執筆は、調査員が担当した。

なお、遺物・断面図のトレース図作成、写真画像処理、遺構図等の図版作成、報告書版組みについては、遺構くん cubic 2016 12.03、Adobe Illustrator CS6、Adobe Photoshop CS6、Adobe InDesign CS6、表データ・報告書原稿の作成については Microsoft Office Word ・Excel のソフトウェアを使用した。

３．東日本大震災に伴う埋蔵文化財専門職員の自治法派遣・短期出張による支援

平成 23 年 3 月 11 日、東日本大震災が発生し、岩手・宮城・福島の三県では甚大な被害を受けた。被災三県では、震災からの復旧・復興事業に関連した工事に伴う発掘調査が急増した。これを受け、震災復興事業に関連した復興調査を迅速に対応するため、文化庁を通じて、埋蔵文化財専門職員の自治法派遣や県内内陸市町村からの短期出張による、被災 3 県の発掘調査体制の強化が図られた（宮城県教育委員会 2014・2015・2016）。

［山元町における復興調査等の現状］

山元町では、平成 22 年度から開始された常磐道関連遺跡の発掘調査を機に、町内での遺跡調査が増加した。そして、東日本大震災後の平成 24 年度以降、公共事業や個人住宅建設などの震災復興事業に関連した発掘調査が町内各所で行われるようになり、町内遺跡の発掘調査件数はここ数年で劇的に増加した。加えて、最近では、土砂採取事業等といった復興事業に関連した民間開発の案件も発生している。

具体的な実績でみてみると、平成 22 年 4 月から平成 29 年 3 月末の段階で、山元町内において発掘調査が実施された遺跡は、61 遺跡 107 地点で、その調査総面積は約 214,000 ㎡にのぼる。

［山元町における発掘調査体制と派遣職員受入状況］

常磐道関連遺跡の調査が開始された平成 22 年度当時、山元町では、発掘調査に対応する専門職員（町職員）が 1 名のみの配置だったため、町単独でその調査に対応することが困難な状況にあった。このことから、常磐道関連遺跡の調査は、県教委の全面的な協力を得て対応していた。こうした状況の中、平成 23 年 3 月 11 日に東日本大震災が発生したことにより、常磐道以外の各種復興関連事業や民間開発に関連した発掘調査がさらに増加し、専門職員の不足はさらに悪化した。

これを受け、町では、平成 25 年度から、前述の手法による専門職員の派遣を本格的に受け、激増する発掘調査に対応することができた。具体的な山元町での専門職員受け入れ状況は第 3・4 表のとおりで、平成 25 年 4 月～平成 29 年 3 月の 4 カ年でのべ 38 名の派遣を受けることができた。また、本書を刊行した平成 29 年度についても、のべ 4 名の派遣をいただいている（平成 29 年 6 月末現在）［町への直接派遣のべ 14 名（平成 25 年度 4 名、平成 26 年度 2 名、平成 27 年度 4 名、平成 28 年度 3 名、平成 29 年度 1 名）/県教委経由による職員派遣のべ 28 名（平成 26 年度 8 名、平成 27 年度 9 名、平成 28 年度 8 名、平成 29 年度 3 名）］。

今回報告する日向遺跡（2 次調査）の本報告書作成業務にあたっては、町担当職員の報告書刊行に係る業

務時間確保のために、派遣職員による様々な支援により、町担当職員の負担軽減につながったことは言うまでもない。町内での発掘調査を含めた文化財関連業務が継続して実施される中、予定どおりに本報告書の刊行を完了することができた背景には、こうした派遣職員の支援・協力があったことは言うまでもない。本書作成を担当した職員として、感謝の意を表したい。

［日向遺跡発掘調査（2 次調査）への支援］

今回報告する日向遺跡の 2 次調査では、平成 27 年度の現地確認調査では**香川県派遣の木下晴一**調査員、平成 28 年度の現地本発掘調査では**福岡市派遣の星野惠美**調査員、**福岡県派遣の城門義廣**調査員の支援を受けた。

また、平成 28 年度に実施した本報告書作成業務にあたっては、遺物実測図作成支援として**宮城県教育庁文化財保護課の山口貴久技師**、**宮城県多賀城跡調査研究所の廣谷和也技師**のご協力もいただいた。

日向遺跡 2 次調査　調査風景（写真中央：福岡市派遣 星野調査員）

第 3 表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（直接派遣）　（H25 年 4 月～H29 年 6 月末現在）

派遣年度	氏名	派遣元	派遣期間	備考
H25 年度	森　秀之	北海道恵庭市	H25.4.1～H26.3.31	文化財業務全般（埋蔵文化財事前協議・確認調査等対応・事務手続き、有形文化財修繕、標柱整備ほか）
	草場　啓一	福岡県筑紫野市	H26.12.1～12.31	合戦原遺跡確認調査
	小鹿野　亮	福岡県筑紫野市	H26.1.1～2.28	合戦原遺跡確認調査
	日下　和寿	宮城県白石市	H25.12.1～H26.3.31	週 1 日程度の支援　中筋・谷原遺跡の弥生土器遺物整理
H26 年度	小南　裕一	福岡県北九州市	H27.1.1～2.28	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	中村　昇平	福岡県春日市	H27.3.1～3.31	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
H27 年度	**木下　晴一**	**香川県**	**H27.4.1～H28.3.31**	各種業務全般支援、復興事業・民間開発の支援 **日向遺跡（民間・土砂採取）確認調査対応**
	城門　義廣	福岡県	H27.4.1～H28.3.31	各種業務全般支援、犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	熊代　昌之	福岡県久留米市	H27.6.1～7.31	犬塚遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
	川口　陽子	福岡県筑紫野市	H27.8.1～10.9	北経塚遺跡（民間・店舗開発）本調査対応
H28 年度	**城門　義廣**	**福岡県**	**H28.4.1～9.30**	合戦原遺跡線刻画移設工事対応 犬塚遺跡（民間・土砂採取）報告書対応 **日向遺跡（民間・土砂採取）本調査対応**
	星野　惠美	**福岡県福岡市**	**H28.4.1～9.30**	**日向遺跡（民間・土砂採取）本調査対応**
	板倉　有大	福岡県福岡市	H28.10.1～H29.3.31	川内遺跡（民間・土砂採取）本調査対応
H29 年度	瀧本　正志	神奈川県	H29.4.1～	文化財全般の支援

※**ゴシック体**表記者：日向遺跡 2 次調査の現地調査及び本書作成に携わった者

第 4 表　山元町への埋蔵文化財専門職員の派遣状況（宮城県経由・出張扱い）　（H25 年 4 月～H29 年 6 月末現在）

派遣年度	人数	派遣職員（派遣元）	備考
H26 年度	8 名	大友 邦彦・佐藤 則之（宮城県）、 長橋 至（山形県）、石川 智紀（新潟県）、小淵 忠司（岐阜県）、東影 悠（奈良県）、 御嶽 貞義（福井県）、守岡 正司（島根県）	復興事業の支援
H27 年度	9 名	高橋 洋彰・下山 貴生・長内 祐輔・佐藤 則之（宮城県）、 長橋 至（山形県）、伊藤 智樹（千葉県）、飯坂 盛泰（新潟県）、小淵 忠司（岐阜県）、 杉山 一雄（岡山県）	復興事業の支援
H28 年度	8 名	高橋 洋彰・下山 貴生・佐藤 則之・熊谷 宏規・白崎恵介・三好 秀樹（宮城県） 長橋 至（山形県）、飯坂 盛泰（新潟県）	復興事業の支援 民間開発の支援
H29 年度	3 名	下山 貴生・**廣谷 和也・山口 貴久**（宮城県）	復興事業の支援 民間開発の支援

第２節　基本層序

今回の調査区は、標高 19～40m の南側斜面に位置する。調査区北西部の標高が最も高く、40.5m を測る。39.8m 付近までは比較的緩やかである（傾斜角度約 12.5°）が、そこから南側、東側にかけて急斜面となる（傾斜角度約 23°以上）。調査区内には２つの浅い谷が入っており（第５図）、遺物は少量であるが、包含層が形成されている。どちらも南東側に開口しており、便宜上、東側の谷部を「谷部①」、西側の谷部を「谷部②」と呼称する。また、調査区内で基本層序を確認した箇所を「土層１～６」と呼称する。

調査区の発掘調査実施前の土地利用状況は、山林である。今回の調査に先立ち実施された立木伐採・土砂運搬等で造成された重機道により、斜面の一部が東西方向に 2 か所（標高 39～40m 付近と標高 22～24m 付近）削平され、住居跡等の遺構の一部が削られてしまった箇所はあるが、遺構確認面である地山や遺構の残存状況から、今回の調査区については、基本的に本来の地形は残していると考えられる。

調査区の基本層序は、北西部の尾根平坦面とそれ以外の斜面で相違はあるが、原則として上から現代の表土（Ⅰ層）、斜面の堆積層（Ⅱ～Ⅵ層）、地山（Ⅶ層）の順で構成される。

尾根頂部の平坦面については、「土層１」のように表土（Ⅰ層）とその下の層厚 10～20cm の堆積土（Ⅱ層）直下に地山が検出され、遺構を確認した。

斜面部については、堆積土（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ層）が厚く、南側の裾部では厚さ 2m を測る。特に「谷部①」のⅤ層及び「谷部②」のⅣ・Ⅴ層から比較的多くの遺物が出土していることから、その分布範囲を遺物包含層として認識し、調査を進めた。遺物包含層出土の遺物は、古代前後の遺物が主体であり、出土した土師器についてみてみると、Ⅴ層は非ロクロ成形の土師器のみで構成され、その上層のⅣ層にはロクロ成形の土師器が含まれる状況であった。また、「谷部②」の「土層４」周辺では、遺構がⅤa～c 層上面とⅦa～d 層（地山）上面から遺構が掘り込まれており、遺構面が２面あったことを確認した。なお、第１面の遺構面と第１面で検出した遺構の覆土が類似しているものもあったため、識別が難しく、第１面で検出しきれなかった遺構を第２面で確認した可能性がある。よって、第２面検出ピットの中には第１面のものも含まれていると考えられるため、全体図は第１・２面同時に作成した。

第２次調査（B 区）の東隣で、第１次調査（A 区）が行われている。両者の基本層序を比較すると、土色の違いは多少あるが、ほぼ同様の堆積状況を示しており、第２次調査のⅠ層は第１次調査のⅠ・Ⅱ層、第２次調査のⅡ層は第１次調査のⅢ層、第２次調査のⅢ層は第１次調査のⅣ層、第２次調査のⅣ層は第１次調査のⅤ層、第２次調査のⅤ層は第１次調査のⅥ層に相当するとみられる。

以下、今回の調査区で確認したそれぞれの層の概要をまとめる（第５図）。

Ⅰ層：現代の表土。Ⅰa 層（表土）とⅠb 層（現代の埋立土）に細別される。

・Ⅰa 層：黒褐色（10YR3/2）シルト土。層厚は 10cm 前後。調査区全体で確認した。

・Ⅰb 層：褐灰色（10YR4/1）粘質土。層厚は 10cm 前後。西側谷部（②）で確認した。

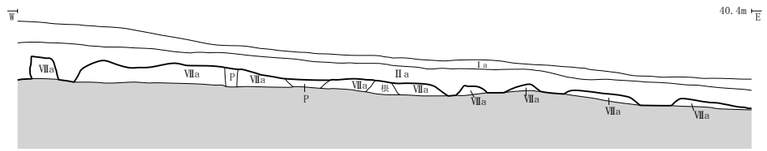
Ⅱ層：遺物をほとんど含まない層で、調査区全体に堆積していた。土質は均一なため自然堆積と考えられる。混入物・色調の差異からⅡa～h 層に細別され、Ⅱh 層→Ⅱf・g 層→Ⅱd・e 層→Ⅱc 層→Ⅱb・a 層の順に堆積している。

・Ⅱa 層：褐色（7.5YR4/3）シルト土。炭化物片を少量含む。層厚は 20cm 前後。調査区北西の平坦面と東側斜面で確認した。

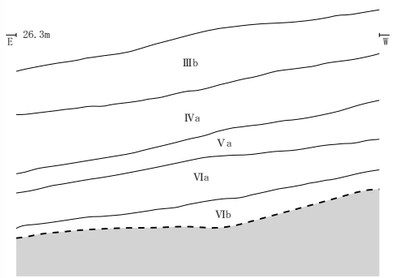
・Ⅱb 層：暗褐色（10YR3/3）シルト土。炭化物片を少量含む。層厚は 20～30cm 前後。西側斜面で確認した。

・Ⅱc 層：黄褐色（2.5Y5/4）シルト土。層厚は 20cm 前後。西側斜面で確認した。

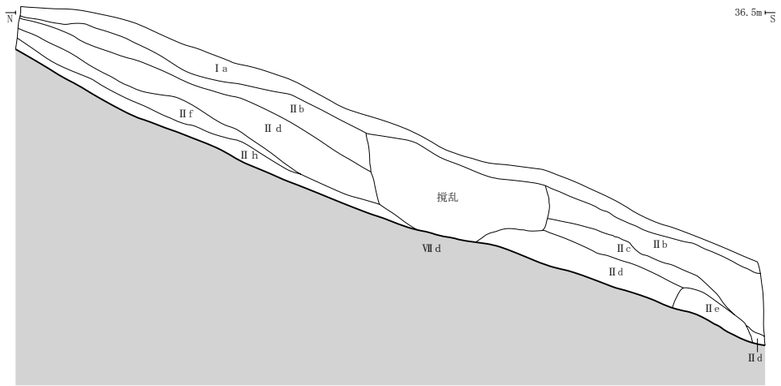
・Ⅱd 層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト土。灰黄褐色シルト粒子と炭化物片を少量含む。層厚は 30cm



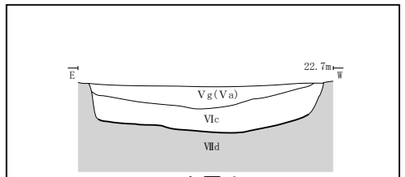
土層１



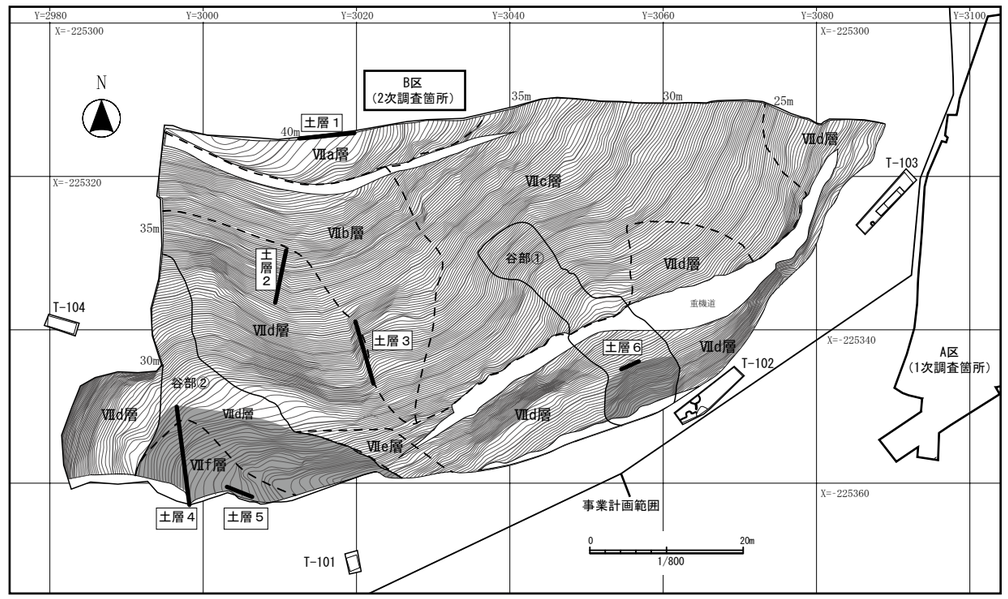
土層５



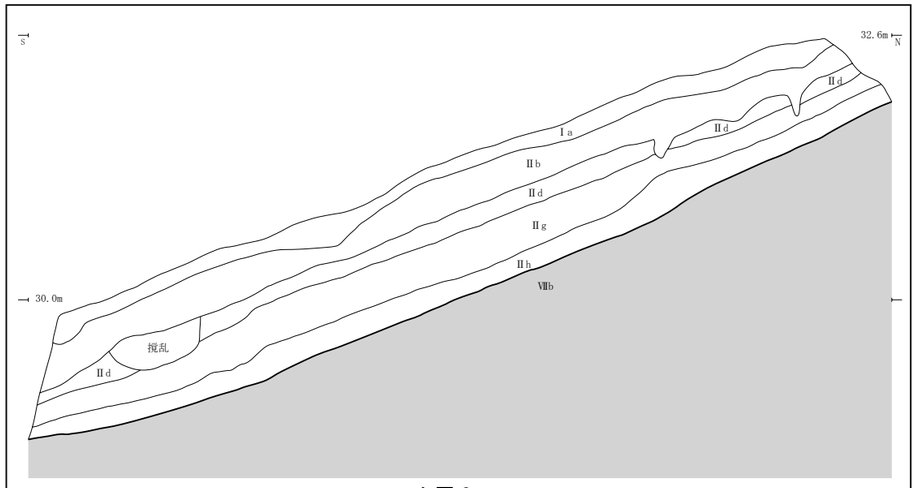
土層２



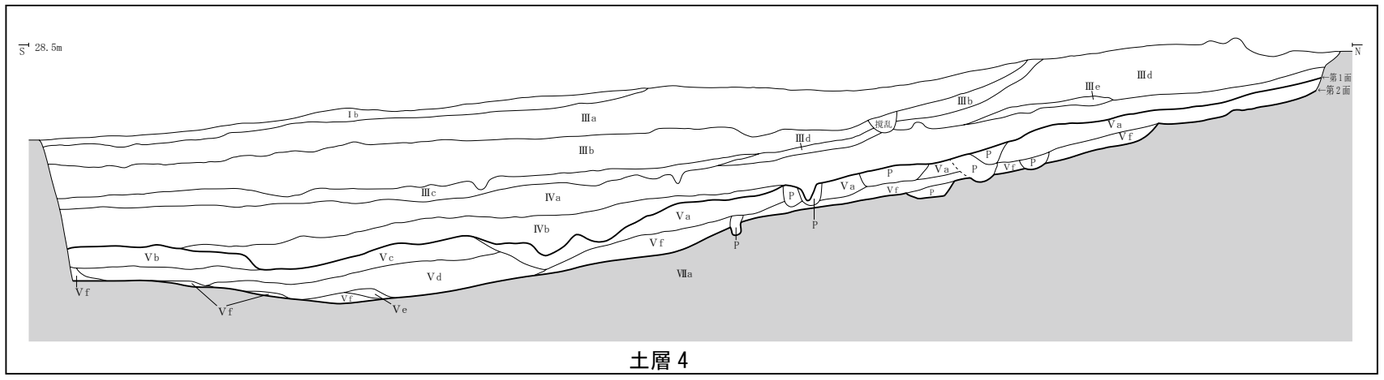
土層６



：遺物包含層（基本層Ⅳ・Ⅴ層）範囲



土層３



土層４

0　1m
1/60

※土色・土質等は本文参照

第５図　日向遺跡 2次調査（B区）　基本層序

前後。西側斜面で確認した。

・Ⅱe 層：明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土。層厚は 20cm 前後のブロック状である。花崗岩が風化したものと考えられる。

・Ⅱf 層：明黄褐色（10YR6/6）シルト土。層厚は 10cm 前後。西側斜面上部で確認した。

・Ⅱg 層：明褐色（7.5YR5/8）シルト土。灰褐色シルト土が斑状に混入する。層厚は 40cm 前後。西側斜面下部で確認した。

・Ⅱh 層：褐色（7.5YR4/6）シルト土。多量の地山起源の粒子と少量の炭化物片を含む。層厚は 10cm 前後。西側斜面で確認した。

Ⅲ層：東側の「谷部①」と西側の「谷部②」に堆積する層で、下層の状況より中世以降に形成されたと考えられる。混入物・色調の差異から、Ⅲa～e 層に細別され、Ⅲe 層→Ⅲd 層→Ⅲc 層→Ⅲb 層→Ⅲa 層の順に堆積していた。他の堆積層と比べ、やや粘質を帯び、固く締まる。

・Ⅲa 層：褐色（10YR4/4）シルト土。層厚は 20～40cm 前後。

・Ⅲb 層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト土。層厚は 40cm 前後。

・Ⅲc 層：黒褐色（7.5YR3/1）シルト土。褐色シルト土、炭化物片を含む。層厚は 10cm 前後。

・Ⅲd 層：にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト土。炭化物が粒状に多く含まれる。層厚は 40cm 前後。

・Ⅲe 層：黒褐色（7.5YR2/2）シルト土。層厚は 10cm 前後。

Ⅳ層：西側の「谷部②」に堆積する包含層で、縄文時代～古代までの遺物を含む。混入物・色調の差異から、Ⅳa・b 層に細別され、Ⅳb 層→Ⅳa 層の順に堆積していた。この上面で遺構精査を行ったが、遺構を検出することはできず、その下層のⅤ層上面で、中世以降とみられる柱穴・小穴が確認されていることから、中世以降の堆積層の可能性がある。

・Ⅳa 層：にぶい黄褐色(10YR5/4)シルト土。炭化物片、焼土を粒状に含む。層厚は 30cm 前後。

・Ⅳb 層：黄褐色（10YR5/6）シルト土。褐灰色シルト土を斑状に含む。層厚は 20～30cm 前後。

Ⅴ層：東側の「谷部①」と西側の「谷部②」に堆積する包含層で、縄文時代～古代までの遺物を含む。混入物・色調の差異から、Ⅴa～g 層に細別され、Ⅴf 層→Ⅴe 層→Ⅴd 層→Ⅴc 層→Ⅴb 層→Ⅴa・Ⅴg 層の順に堆積していた。谷部②においては、この層の上面で遺構が確認でき、多数の柱穴・小穴を検出した。柱穴・小穴の規模・特徴から、これらの遺構は中世以降のものとみられることから、Ⅴ層は、中世以前に堆積した層の可能性がある。

・Ⅴa 層：黒色（7.5YR2/1）シルト土。少量の同色砂質土と褐灰色粘土をブロック状に含む。炭化物片を含む。層厚は 20cm 前後。

・Ⅴb 層：黒褐色（10YR3/1）シルト土。褐灰色シルト土を含む。層厚は 40cm 前後。

・Ⅴc 層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト土。少量の褐灰色シルト土を含む。層厚は 30cm 前後。

・Ⅴd 層：褐灰色（10YR4/1）シルト土。黄褐色シルト土が斑状に含まれる。層厚は 20～60cm。

・Ⅴe 層：灰黄褐色（10YR4/2）シルト土。層厚は 10cm 前後。

・Ⅴf 層：褐色（7.5YR4/4）シルト土。少量の褐灰色粘質土を含む。層厚は 20～40cm 前後。

・Ⅴg 層：黒褐色（7.5YR3/2）シルト土。少量のにぶい黄褐色シルト土を斑状に含む。炭化物片を含む。混入物の違いはあるが、Ⅴa 層に対応すると考えられる。層厚は 20cm 前後。

Ⅵ層：東側「谷部①」の「土層６」付近と、西側「谷部②」の「土層５」付近に堆積する層で、遺物はほとんど含まない。上層の堆積層と比べると、固く締まっており、地山の堆積層と非常に類似している。色調の差異から、Ⅵa～c 層に細別され、Ⅵb・c 層→Ⅵa 層の順に堆積していたと思われる。なお、Ⅵb 層はまだ下に続くが、遺物が出土せず、遺構も確認できなかったため、安全を考慮し、それ以上の掘削を行わなかった。

・Ⅵa 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土。層厚は 40cm 前後。

・Ⅵb 層：にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質土。黄褐色シルト土を含む。層厚は 30cm 以上。

・Ⅵc 層：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト土。層厚は 20cm 前後。

Ⅶ層：地山。各地点で異なる種類の地山が確認されたが、基本的にはⅦf 層→Ⅶe 層・Ⅶd 層→Ⅶc 層・Ⅶb 層→Ⅶa 層の順に堆積していると思われる。なおⅦc・e 層については、基本層確認のための「土層１～６」から漏れてしまったため、第５図にその広がりを掲載した。急斜面で足場が悪く、土砂搬出も困難であったため、トレンチも基本的に地山を確認した段階で、それ以上の掘削を行わなかった。結果、b・c 層や d・e 層の関係を詳細にすることができなかった。Ⅶ層の堆積順位は遺構掘削をした際の地山の堆積状況等から推測したものである。

・Ⅶa 層：明赤褐色（5YR5/6）シルト土。橙色砂質土を含む。調査区北側頂部緩斜面で確認した。

・Ⅶb 層：褐色（7.5YR4/6）シルト土。明黄褐色シルト土をブロック状に含む。調査区西側急斜面で確認した。

・Ⅶc 層：明褐色（7.5YR5/6）シルト。橙色砂質土を含む。調査区東側急斜面で確認した。

・Ⅶd 層：褐色（7.5YR5/8）シルト土。明黄褐色シルト土をブロック状に含む。調査区西側と南側の急斜面に広い範囲で確認した。

・Ⅶe 層：橙色（2.5YR6/6）粘質土・にぶい橙色（2.5YR6/4）粘質土。浅黄橙色粘土や灰白色粘土をブロック状に含む。西側谷部（②）の東裾部にⅦd 層に挟まれた形で堆積する。Ⅶd との前後関係は不明である。

・Ⅶf 層：褐色（7.5YR4/4）シルト土・同色砂質土。明褐色粘土をブロック状に含む。西側谷部（②）に堆積する。

第３節　発見された遺構と遺物の概要

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡９棟、柱穴列跡１条、溝跡 10 条、土坑 78 基、ピット 152 個（柱穴列跡を構成する柱穴を含む）、遺物包含層である（第７～９図）。

これらの遺構から出土した遺物は、遺物収納箱（長 59cm×幅 38cm×深 20cm）で 10 箱出土しており、その内訳は、縄文土器、弥生土器、土師器（非ロクロ・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、陶器、瓦質土器、磁器、金属製品、硝子製品、製鉄関連遺物、石器である。

検出した遺構は、その特徴や出土遺物の年代から、おおむね縄文時代後期、奈良・平安時代前後、中世、近世に分けることができる。各遺構の堆積土の起源となる基本層のおおよその年代は、第２節に示したとおりである。以下、発見された遺構・遺物について時代ごとに記述する。

なお、各遺構の時期推定は、次の方法で行った。

［各遺構の所属時期の検討方法］

今回の調査区では、縄文時代～中・近世の遺構が混在しており、遺構の重複が多く見られた。また、西側の谷部②では２面の調査を行ったが、第２面の遺構は第１面と同時期のものもあり、遺構面で明確な時期を区別できなかった。このことから、検出した遺構の所属時期については、①遺構出土遺物の確認、②遺構の掘り込み面の確認、③遺構堆積土の確認などにより検討を行い、各遺構のおおよその時期を推定する方法をとった。

竪穴住居跡や一部の土坑など、年代の推定できる遺物が確実に伴うと判断された遺構については、出土遺物の年代を遺構の所属時期とした。各時代の基本層がある程度残存している箇所で検出した遺構については、その掘り込み面の確認を行い、所属時期を推定した。

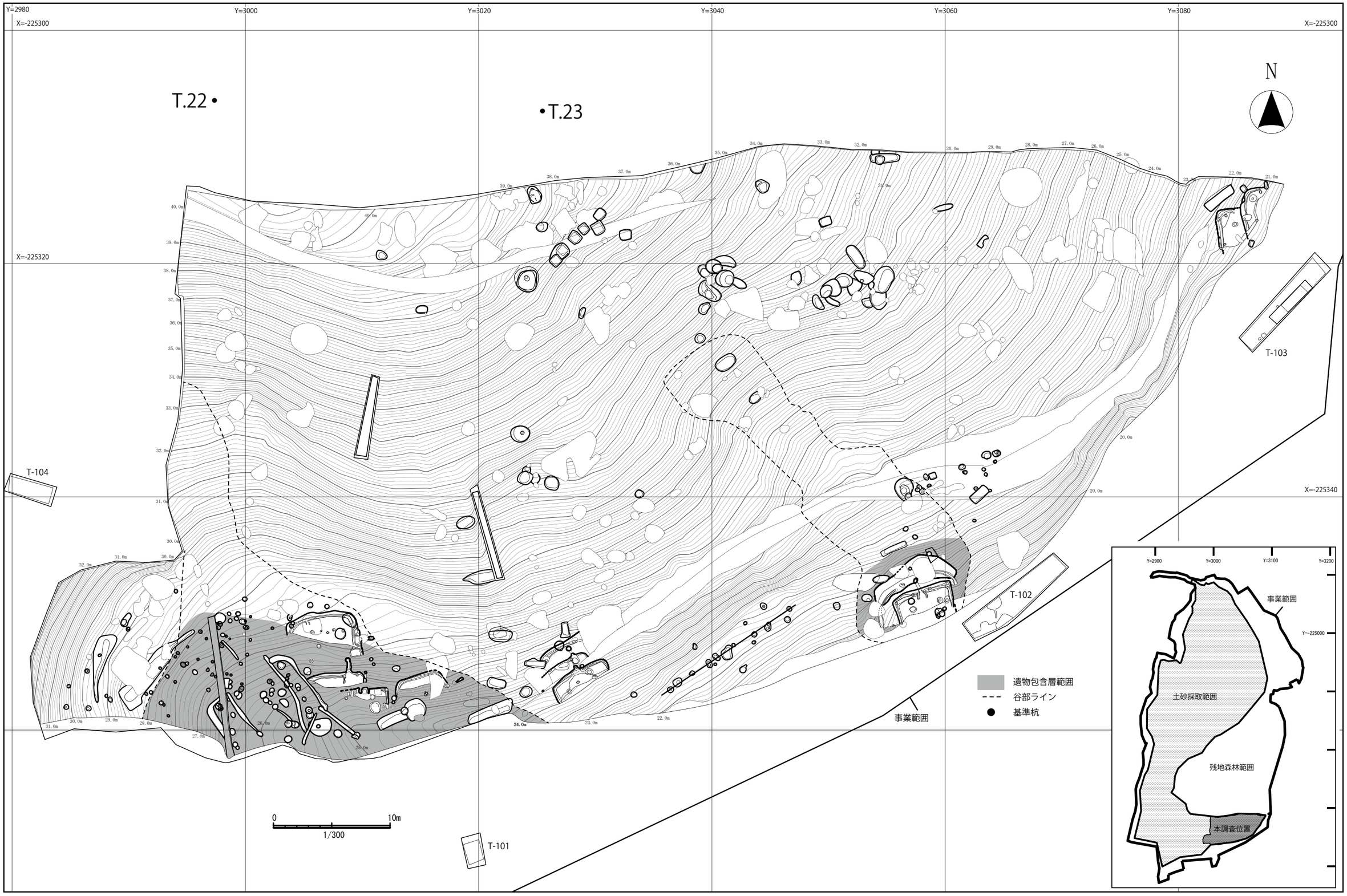
1. 日向遺跡 調査区遠景（南から）

2. 日向遺跡 調査区遠景（南西から）

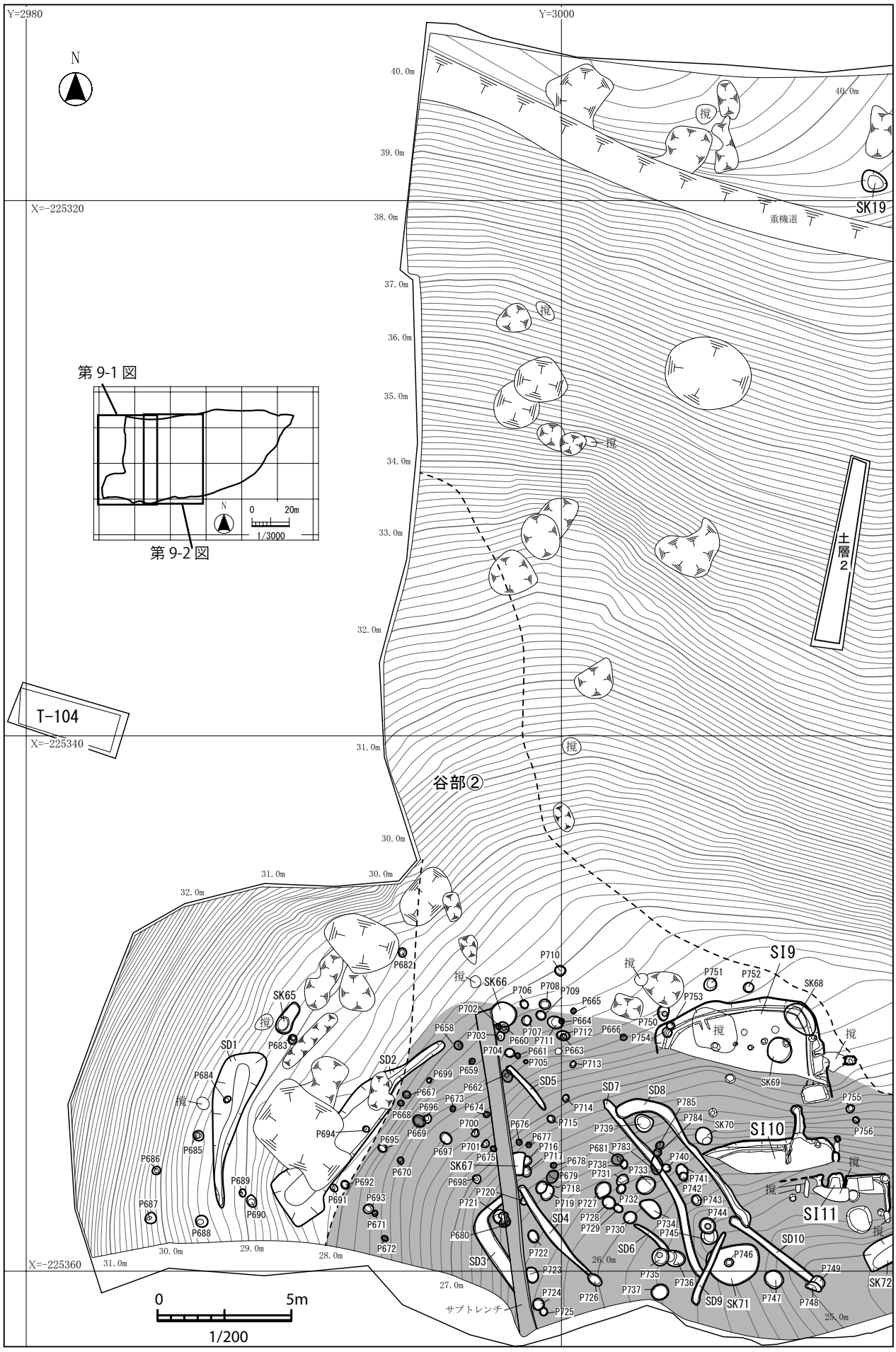
3. 日向遺跡 調査区遠景（東から）

第６図　日向遺跡 遠景

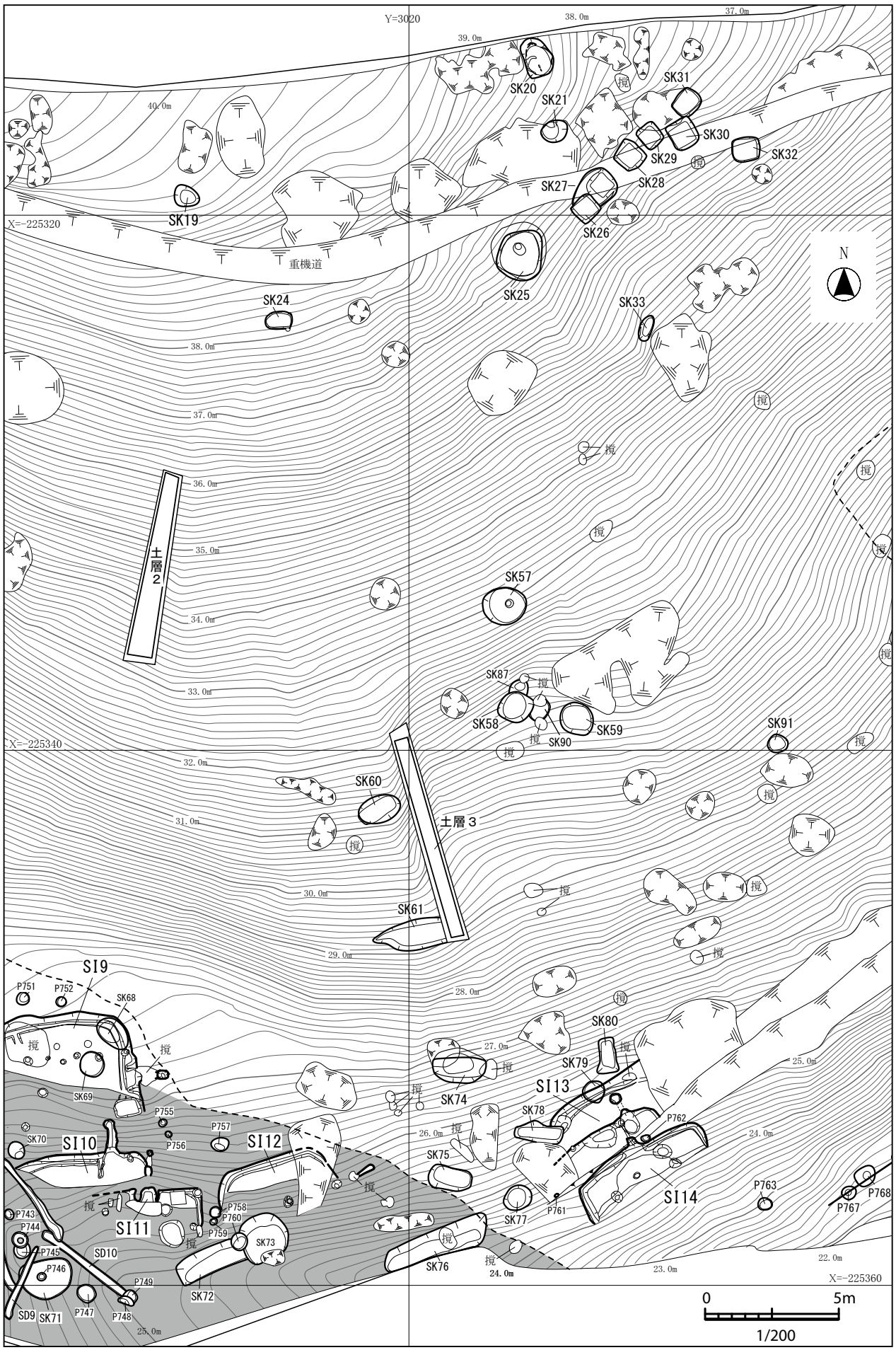
第７図　日向遺跡 B区（2次調査）　調査区全景　（上が東）



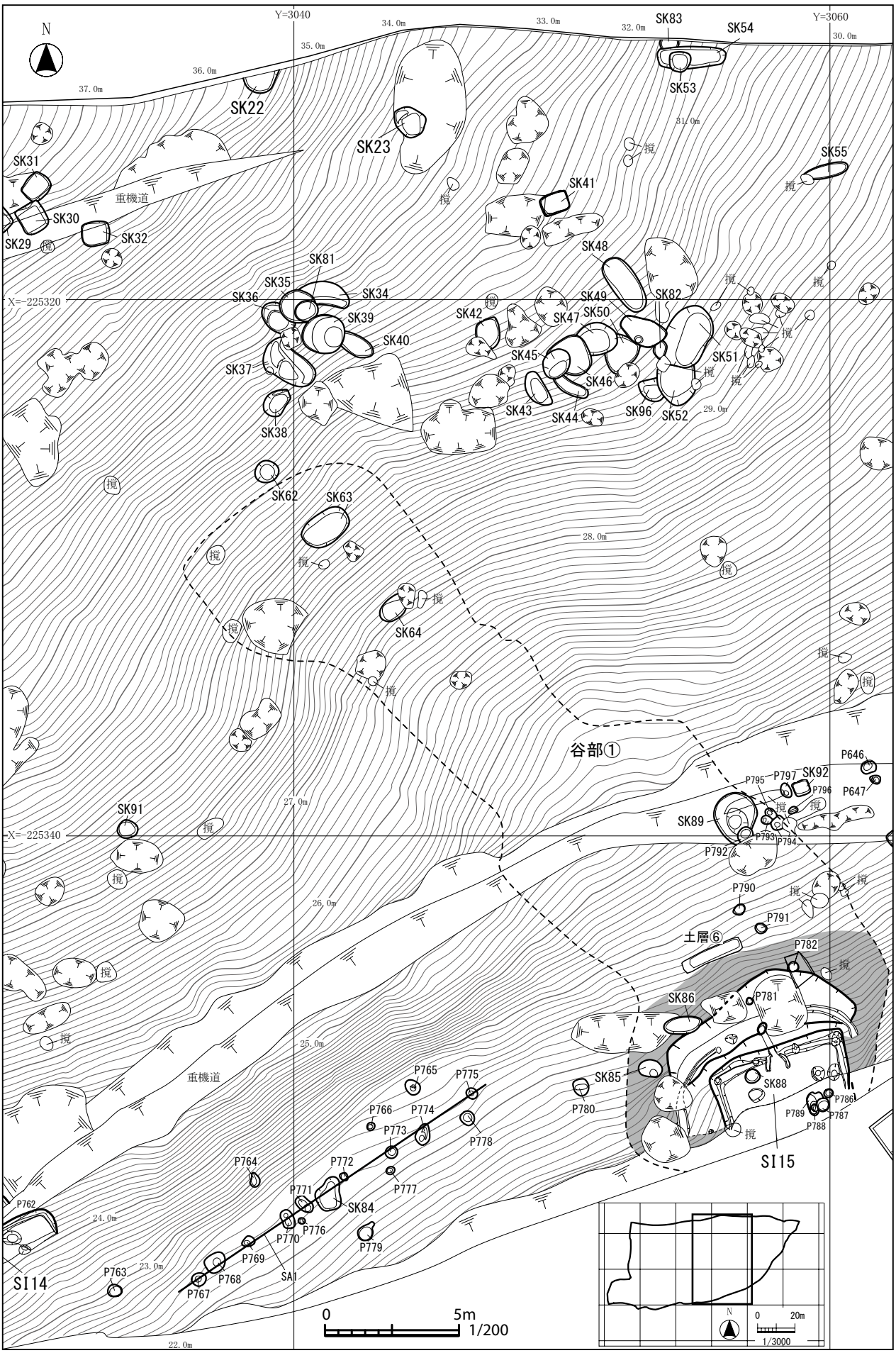
第８図　日向遺跡Ｂ区（２次調査）　遺構配置図（全体図）



第9-1図　日向遺跡B区　遺構配置図（1）



第9-2図　日向遺跡B区　遺構配置図（2）



第9-3図　日向遺跡B区　遺構配置図（3）

第9-4図　日向遺跡B区　遺構配置図（4）

１．　竪穴住居跡

竪穴住居跡は９軒（SI9～17）検出した（第 10 図）。斜面に造られたため、すべての住居跡の標高の低い方が削られ、半分ほどしか残存していない。一方、標高の高い方は比較的残存状況が良く、住居の壁も良好に残っていた。また、大半の住居がカマドを北側または東側に付設しており、煙出・煙道は天井が残るものも見られた。以下、それぞれの遺構の詳細について記載する。

第10図　日向遺跡B区　竪穴住居跡(SI）遺構配置図

【SI9　竪穴住居跡】（第 11～13 図）

〔位置〕南側西寄りの標高 27.1～27.5m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。住居のカマド部分及び北半は残存しているが、南半は削平を受け残存していない。

〔重複〕SK68・69、P753・754 と重複し、これらより古い（SI9→SK68・69、P753・754）。住居南側に位置する SI10 竪穴住居跡との新旧関係については、SI9 南半が削平されているため不明である。

〔規模・平面形〕東－西 6.1m、北－南 3.7m 以上。カマドの位置関係から一辺 6.0m 前後の隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居東辺が真北に対し、西に約 8.2°傾く（N－8.2°－W）。

〔壁〕住居の北側が最も残りがよく、高さ 30cm 程度残存していた。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山を床としている。

〔柱穴・ピット〕床面では P1～7 のピットを検出した。ピットは直径 20～38cm、深さ 8～54cm の円形を呈する。いずれも柱痕跡は確認できなかった。深さは P5 が 54cm（標高 26.47m）、P6 は 48cm（標高 26.37m）、P7 は 16cm（26.37m）を測るが、その他は 8～12cm と浅い。この他、東壁のカマド付近で柱穴 1 個（P8）検出した。直径 30cm、床面からの深さ 30cm で、直径 8cm の柱痕跡を確認した。P8 は位置的にみて壁柱穴とみられる。

〔カマド〕住居東辺中央付近に付設されている。燃焼部・側壁・煙道の一部・煙出が残存していた。カマドの規模は、残存長 158cm、側壁幅 100cm である。現状での燃焼部は、焚口幅 55cm、前面の周溝までの距離が 33cm である。燃焼部の中央左寄りに立った状態で高さ 18cm、幅 5～8cm の花崗岩の礫が遺存していた。位置的に支脚と考えられ、礫の表面は赤変している。土層(A-A’)３・４層は、支脚を支えるため、燃焼部の下部を構築している人為的埋土である。また、その下にある周溝もカマド機能時には埋められている。カマド機能時には燃焼部は床面よりわずかに高くなるとみられる。なお、カマド燃焼部では、被熱等の痕跡は確認できなかった。カマド側壁は、地山ブロックを多く含むにぶい黄橙色シルト土で構築される。側壁幅は基部で 20～25cm、長さ 35cm、高さ 10～15cm が残存する。煙道の長さは住居壁から 100cm、幅は約 20cm である。煙道の大部分は撹乱により削平を受けており、残存深は 4～8cm 程度である。煙出ピットの規模は底面で 20×13cm の楕円形、深さ 14cm である。

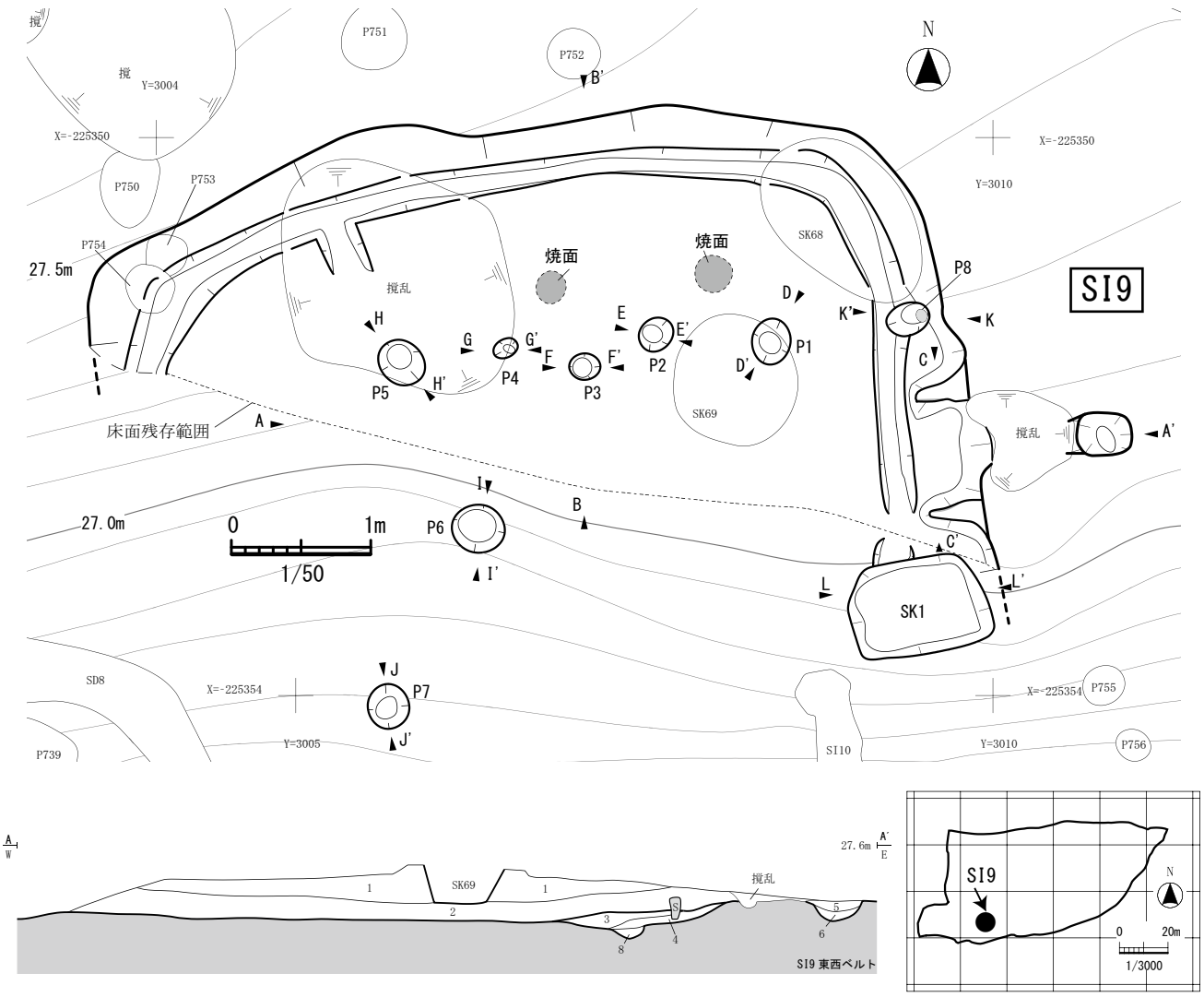
〔周溝〕南側のカマド側壁前面で途切れるが、残存する北側部分は周壁に沿って掘り込まれていた。また、西北壁から 1.8m 付近で周溝は南側へ分岐する。分岐箇所は長さ約 35cm 検出したが、それより南側は、削平を受け残存していない。規模は上幅 18～35cm、下幅 10～20cm、床面からの深さ 8～13cm である。壁材痕跡は認められなかった。

〔その他の施設〕柱穴・ピット、周溝以外では、床面で土坑 1 基(SK1)を検出した。SK1 はカマド側壁の南側に設けられており、96cm×68cm の隅丸長方形を呈し、深さ 28cm である。堆積土は 2 層で、ともに炭化物片、焼土を多量に含む。完形品に近い土師器坏が廃棄されていた。この他、東寄りに 2 か所、直径 20cm 前後の焼け面を確認した。硬化した状況等は確認できず、地山が厚さ 5mm 程赤変していた。

〔堆積土〕堆積土・埋土は 8 層に分かれ、1・2 層は住居堆積土、3・4 層はカマド燃焼部埋土、5・6 層は煙出堆積土、7 層は周溝堆積土、8 層はカマド付近の周溝埋土である。

〔出土遺物〕SI9 では土師器、須恵器、鉄製品が出土した。その内訳は、土師器 124 点（1,345g）【坏 17 点・甕 105 点・ミニチュア土器 2 点】、須恵器 13 点（150g）【坏 6 点・蓋 1 点・壺 1 点・甕 5 点】、鉄製品 2 点（15g）である。このうち、出土した土師器は、非ロクロ成形とロクロ成形のものが混在しているが、その大半は堆積土からの出土であり、周辺から流入したものとみられる。遺構に伴うと判断される遺物は、ロクロ成形の土師器である。

遺物の出土地点・器種別でみると、**堆積土**から土師器坏破片 12 点（90g）甕破片 54 点（675g）・ミニチ



【SI9 東西・南北ベルト土層注記（A-A'・B-B'）】

層位	土色	土性	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒含む。
2	黄褐色(10YR5/6)	粘質	炭化物粒、焼土粒微量含む。
3	黄褐色(10YR5/6) 黒褐色(10YR3/1)	粘質	焼土ブロック含む。 カマド燃焼部埋土。
4	明黄褐色(10YR6/8)	粘質	カマド燃焼部埋土。
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	煙出ピット堆積土。
6	褐色(10YR4/6)	粘質	黒褐色粘質土含む。 煙出ピット堆積土。
7	褐灰色(10YR4/1)	シルト	周溝堆積土。
8	暗灰黄色(2.5Y5/2)	粘質	炭化物粒少量含む。周溝埋土。

【SI9 カマド側壁土層注記　(C-C')】

層位	土色	土性	備考
1	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	シルト	側壁構築土、地山 ブロック多量含む。
2	灰褐色(7.5YR5/2)	シルト	側壁焼面。

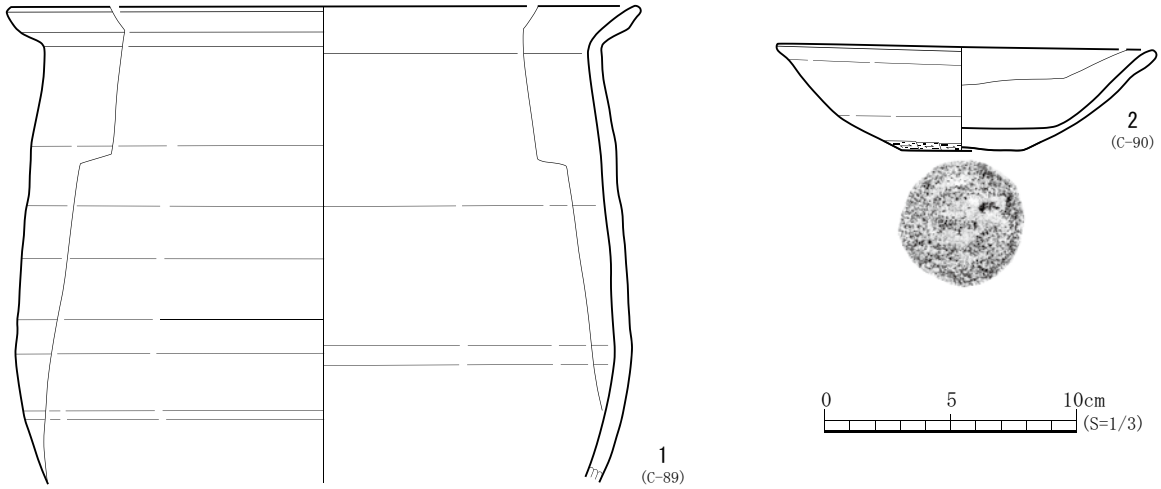
【SI9　P1～8・SK1 土層注記（D-D'～L-L'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI9・P1～6	1	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片微量含む。
SI9・P7	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片少量含む。
SI9・P8	1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	柱痕跡。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	掘方埋土。
SI9・SK1	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片、焼土粒多量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4) 黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片含む。

第11図　SI9 竪穴住居跡(1)

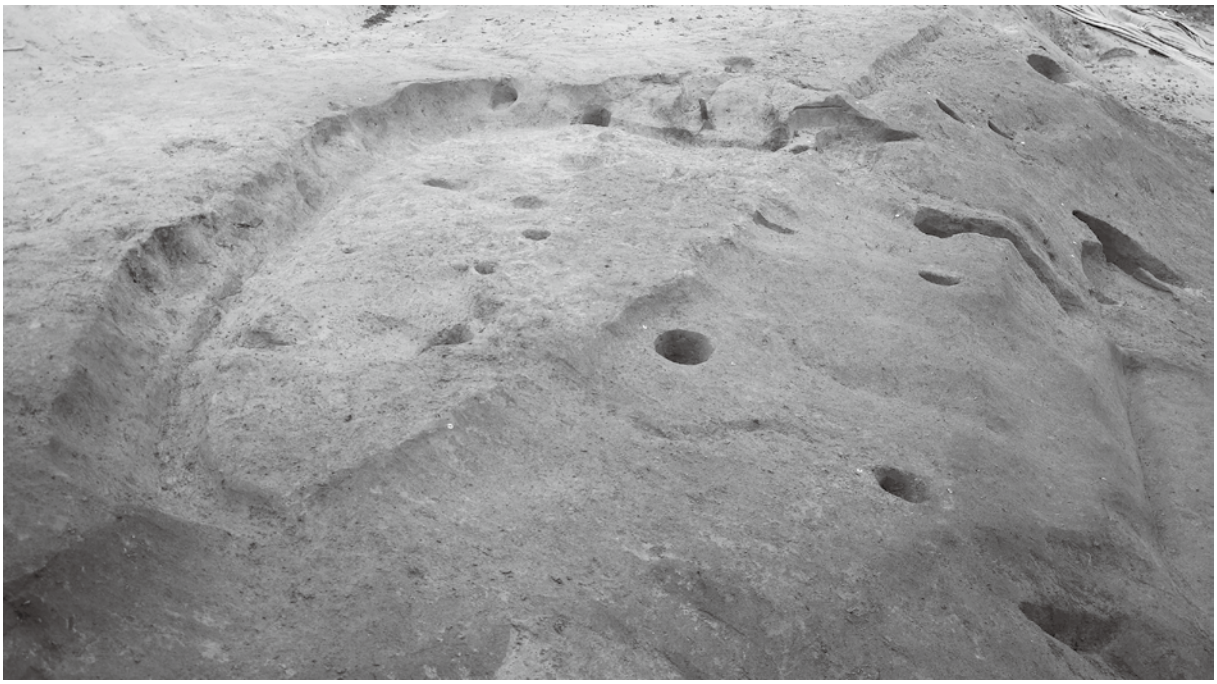
ュア土器破片 2 点(15g)、須恵器坏破片 4 点(20g)・蓋破片 1 点(5g)・壺破片 1 点(15g)・甕破片 5 点(90g)、**カマド煙道**から土師器坏破片 2 点（10g)、**カマド燃焼部**から土師器甕破片 15 点（135g)、須恵器坏破片 1 点（10g)、刀子状の鉄製品破片 2 点（15g)、**カマド煙出**から土師器甕破片 1 点（5g)、**SK1 堆積土**から土師器坏破片 3 点（160g)・甕破片 31 点（125g)、須恵器坏破片 1 点（10g）が出土した。

このうち、住居堆積土 2 層（底面付近）出土の土師器甕（第 12 図 1)、SK1・1 層出土の土師器坏（第 12 図 2）の 2 点を図示した。いずれもロクロ成形の土師器である。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI9 2層	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：口径(25.0)cm・残存高18.9cm・器厚0.6cm	C-89
2	SI9・SK1 1層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端ヘラ削り・磨滅、内面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・橙色(7.5YR6/8)、法量：口径15.0cm・器高4.2cm・底径4.7cm・器厚0.4～0.5cm、赤焼土器	C-90

第12図　SI9 竪穴住居跡(2)



1．SI9 竪穴住居跡　完掘状況（西から）

2．SI9 竪穴住居跡カマド　完掘状況（西から）

3．SI9・SK1 土坑　遺物（C－89・90）出土状況（北から）

第13図　SI9 竪穴住居跡(3)

【SI10　竪穴住居跡】（第 14・15 図）

〔位置〕南側西寄りの標高 25.9～26.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。住居のカマド部分と北側は残存しているが、南半は削平を受け残存していない。

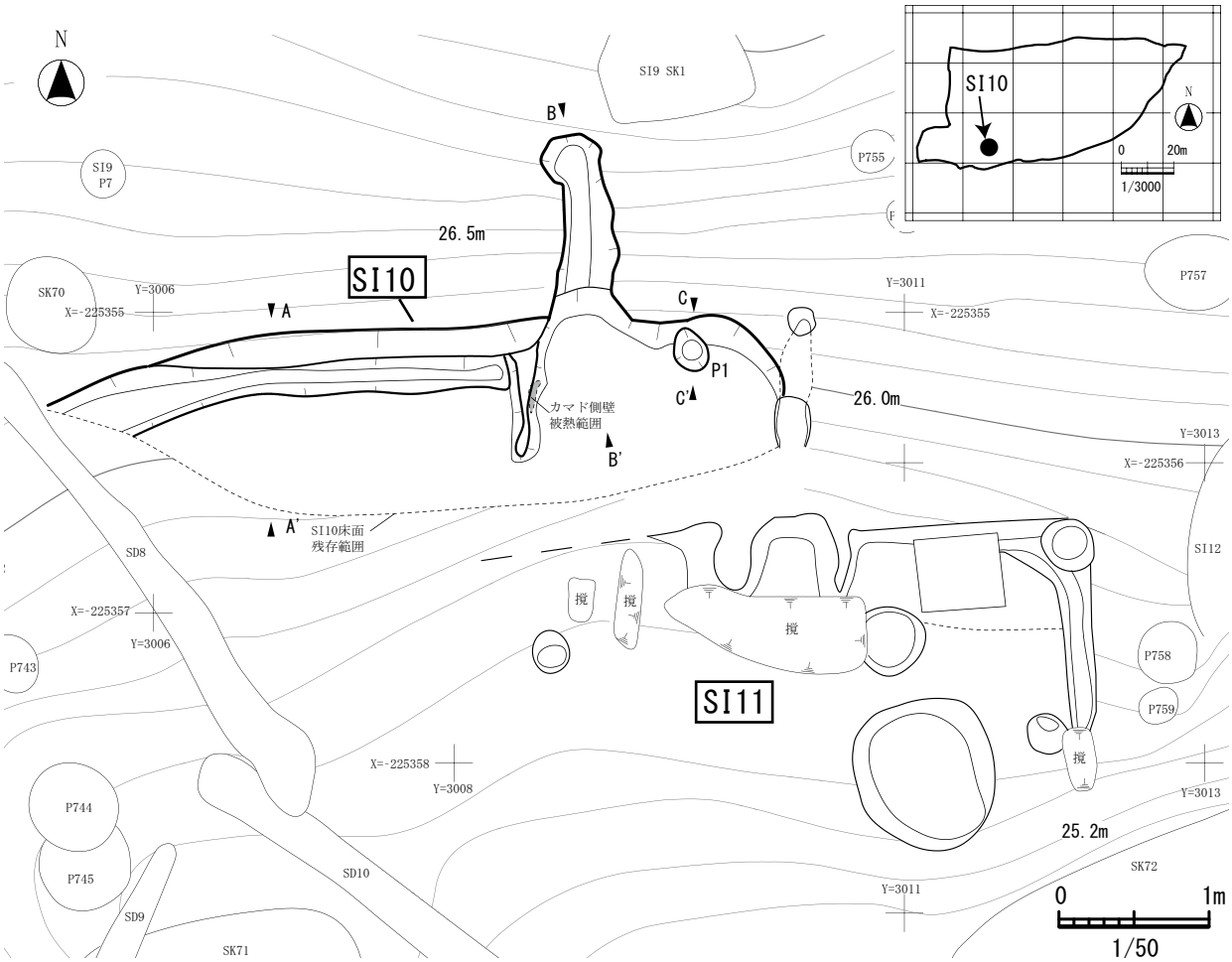
〔重複〕SI10 北側に位置する SI9 との重複関係は、SI9 南側が削平されているため不明である。

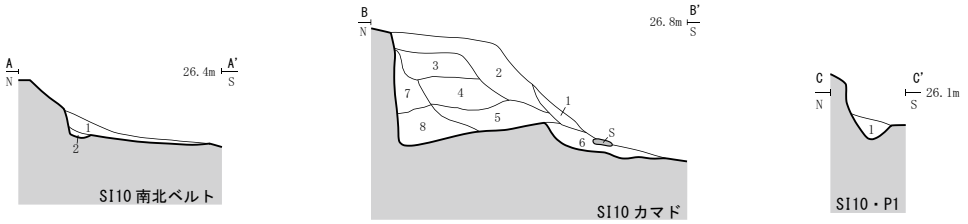
SI10 南側に位置する SI11 との重複関係については、住居堆積土の上に包含層（Ⅴ層）が堆積していたため、調査の段階で、住居の確認が遅れ、住居堆積土の上層を掘削して壊してしまった可能性があり、土層観察による重複関係は把握できなかった。しかし、SI11 のカマド煙道が SI10 東端の壁を壊して構築されていることが確認されたことから、SI10 は、SI11 より古い住居跡と考えられる（SI10→SI11）。

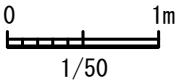
〔規模・平面形〕東－西の残存長は約 5.0m、北－南の残存長は約 1.1m である。隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居東辺が真北に対し、ほぼ真北である（N－0°－E）。

〔壁〕住居の北壁のみ残存していた。残存高は 40cm 程度で、周溝から約 10cm は垂直に立ち上がるが、その後は緩やかに傾斜する。







【SI10 南北ベルト・カマド・P1 土層注記（A-A' ～ C-C'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI10 南北ベルト	1	灰黄褐色(10YR6/2)	シルト	地山ブロック少量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子少量含む。周溝堆積土。
SI10カマド	1	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	焼土ブロック、炭化物片含む。
	2	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	地山粒子少量含む。
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山ブロック少量含む。
	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒子少量含む。
	5	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片少量含む。
	6	黒褐色(10YR3/1)	シルト	焼土ブロック、炭化物片多量含む。
	7	浅黄橙色(10YR8/3)	シルト	灰白色粘土、地山ブロック多量含む。
	8	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SI10・P1	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	混入物なし。

第14図　SI10　竪穴住居跡（1）

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山を床としている。

〔ピット〕カマドの右側、住居北東隅で１個（P1）検出した。P1 は、直径 23×30cm、床面からの深さ 12cm、北側の掘り込み面からは 35cm を測り、柱痕跡は確認できなかった。位置的にみて、壁柱穴の可能性がある。

〔カマド〕住居北東コーナー寄りに付設されている。左側壁の一部・煙道・煙出が残存していたが、燃焼部付近では焼面は確認されなかった。カマドの規模は右側壁が失われているため不明である。残存している左側壁は、地山削り出しで、奥壁からの長さ 73cm、幅 20cm、高さ 5cm が残存しており、燃焼部側の側壁の一部が薄く被熱していた。煙出の規模は上端で径 40cm、底面で 20cm、残存深 70cm である。残存していた煙道の長さは住居壁から煙出まで 145cm、幅 30cm 前後である。

〔周溝〕カマドの左側壁西側で検出し、周壁に沿って掘り込まれていた。周溝は上幅 20～40cm、下幅 8～20cm、床面からの深さ 8～13cm である。壁材痕跡は認められなかった。

〔その他の施設〕住居の大半を削平されているため、残存していない。

〔堆積土〕住居堆積土の上には、包含層（Ｖ層）が堆積していたため、包含層として住居の最上層を掘削してしまったため、１層しか残っていない。残存する堆積土は最大で高さ 10cm ほどである。堆積土は灰黄褐色シルトで地山由来のブロックを少量含む。カマド部分については、4・5・6 層は天井が残存している状況での流入土、1～3 層は天井崩落後の堆積土である。

〔出土遺物〕SI10 では縄文土器・土師器が出土した。その内訳は、縄文土器 1 点（10g）【深鉢 1 点】、土師器 7 点（110g）【甕 7 点】である。このうち、出土した土師器は、すべて非ロクロ成形のものである。

遺物の出土地点・器種別でみると、**住居堆積土**から縄文土器破片 1 点（10g）、土師器甕 4 点（85g）、**カマド煙道及び燃焼部**から土師器甕 3 点（25g）が出土した。いずれも小破片のため図示できたものはない。縄文土器は周辺から流入したものとみられ、住居に伴うと判断された遺物は非ロクロ成形の土師器である。

１．SI10 竪穴住居跡　完掘状況（南から）

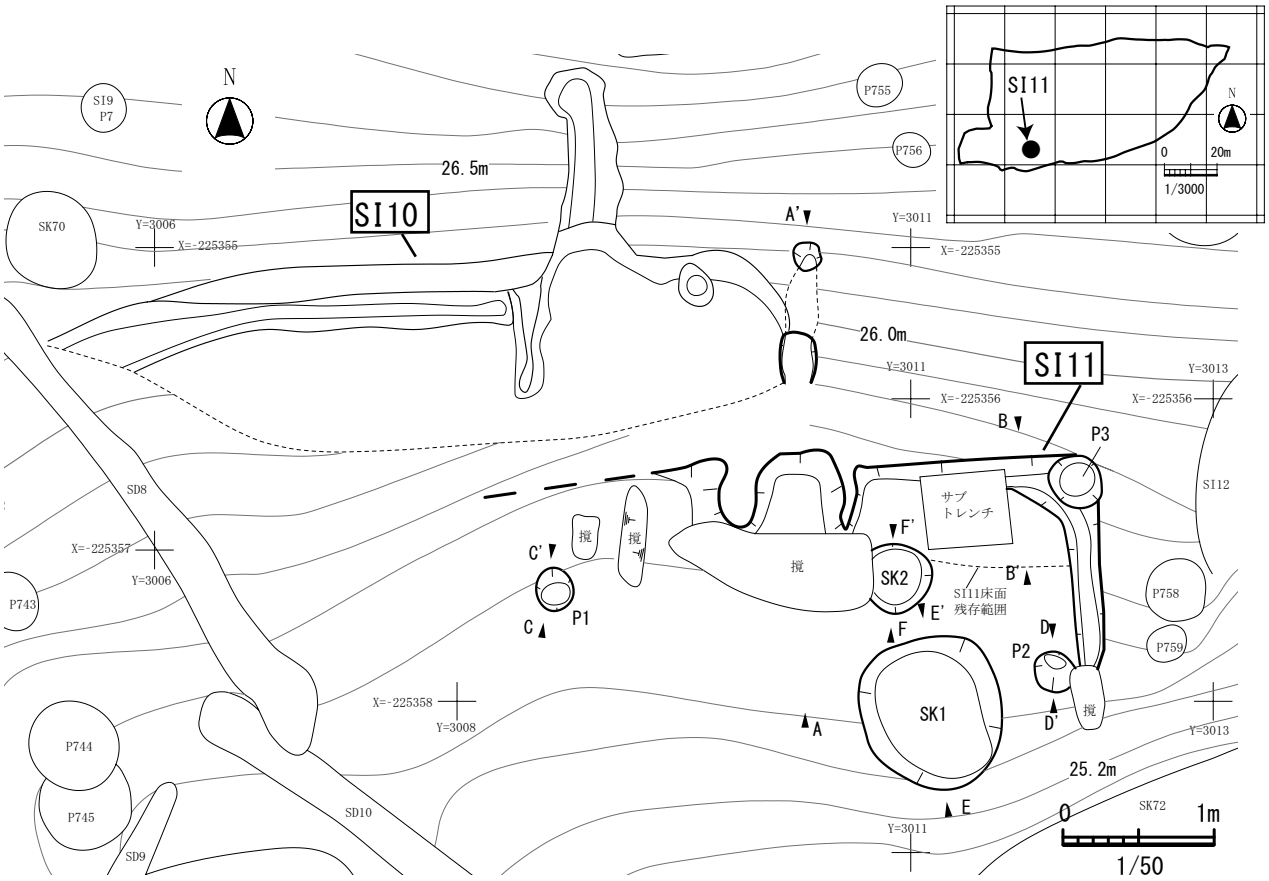
第15図　SI10　竪穴住居跡（2）

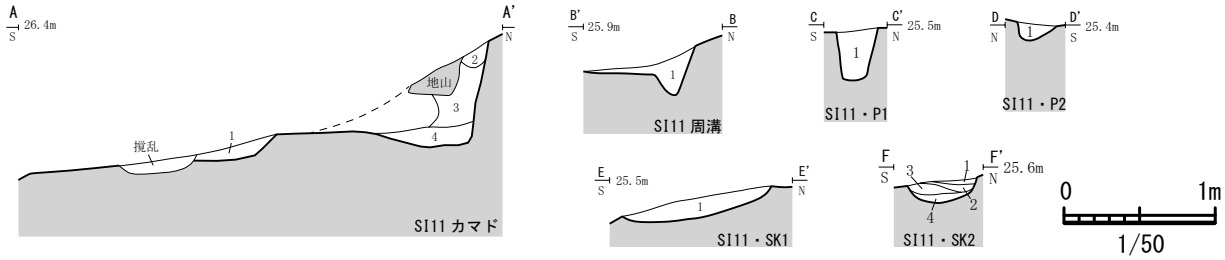
【SI11　竪穴住居跡】（第 16・17 図）

〔位置〕南側西寄りの標高 25.3～25.7m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。住居のカマド部分と北東コーナーが残存する。

〔重複〕SI10 と重複し、これより新しい（SI10→SI11）。

〔規模・平面形〕現存長は東－西約 3.75m、北－南は 2.0m である。住居のカマドが北辺中央に位置していると仮定すると、折り返して東－西 4.2m となるが、SI10 のように東寄りに付設している場合も考えられる。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。





【SI11 カマド・周溝、P1～3、SK1・2 土層注記（A-A'～F-F'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI11 カマド	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土、炭化物ブロック・粒子多量含む。
	2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片多量含む。
	3	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
	4	にぶい黄橙色(10YR7/2)	シルト	地山粒子少量含む。
SI11周溝	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒少量含む。
SI11・P1	1	浅黄橙色(10YR8/3)	シルト	灰黄褐色シルト土少量、地山粒子多量含む。
SI11・P2	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック少量含む。

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI11・P3（断面図なし）	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	黄褐色シルト土斑状、炭化物粒子含む。
	2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	黄褐色シルト土含む。
SI11・SK1	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片、地山ブロック多量含む。
SI11・SK2	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片含む。
	2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片多量含む、
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	黒褐色シルト土含む。
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	混入物なし。

第16図　SI11　竪穴住居跡（1）

〔主軸方向〕住居は真北に対し、西に約 3.2°傾く（N－3.2°－W）。SI10 とほぼ同じである。

〔壁〕住居北側で約 18cm、東側で最大 20cm 残存していた。周溝からほぼ垂直に立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山を床としている。

〔ピット〕ピットは 3 個（P1～3）検出したが、住居の全容が不明なため、位置等からピットの機能を判断することはできなかった。P1 は直径 28cm・深さ 25cm、P2 は直径 25cm・深さ 10cm、P3 は直径 36cm・深さ 30cm で、いずれも円形を呈する。このうち、P3 は位置的にみて、壁柱穴の可能性がある。いずれも柱痕跡は確認できず、住居の主柱穴も特定できなかった。

〔カマド〕住居北辺に付設されている。燃焼部と側壁の一部、煙道の一部、煙出が残存していた。カマドの規模は側壁幅 110cm、焚口までの距離は住居奥壁から残存長 55cm である。燃焼部の規模は焚口幅 55cm、奥行き 55cm である。カマド側壁は地山削り出しで構築される。燃焼部の窪み等は見られず、焼面等の被熱も確認できなかった。煙道は、煙出側が 9m ほど残存しており、天井の一部が残存している状態で検出された。

〔周溝〕北東コーナーから東壁付近で検出した。カマド東側については、サブトレンチを設定した際、掘り過ぎてしまったため、カマド付近まで周溝が続いていたのか確認することはできなかった。最大で床面から深さ 13cm 残存していた。規模は上幅 20～27cm、下幅 6～10cm である。

〔その他の施設〕ピット・周溝以外では、床面で土坑 2 基(SK1・2)を検出した。SK1 は南側を斜面により削平されているが、90×100cm の楕円形を呈し、深さ 12cm である。SK2 はカマド前面で検出し、直径 46cm の円形を呈し、深さ 13cm である。堆積土には多量の炭化物片を含む。カマドに近いことから堆積土はこれに由来すると思われ、住居機能時にカマドの灰等を前面に掻き出すなどして溜まったものと考えられる。

〔堆積土〕住居堆積土は 1 層である。灰黄褐色シルト土で炭化物粒を少量含む。住居堆積土は 18cm ほど残存していた。

〔出土遺物〕SI11 では土師器 7 点（60g）が出土した。出土した土師器は、いずれも甕胴部の破片で、破片からはロクロ成形か否かは判断がつかなかった。遺物の出土地点・器種別でみると、**住居堆積土**から、土師器甕 2 点（55g）、**SK2 堆積土**から土師器甕 5 点（5g）が出土した。いずれも小破片のため図示できたものはない。

1．SI11 竪穴住居跡　完掘状況（南から）

第17図　SI11　竪穴住居跡（2）

【SI12　竪穴住居跡】（第 18・19 図）

〔位置〕南側西寄りの標高 25.7～26.2m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。住居の北側とカマドの一部分がわずかに残存している程度である。

〔重複〕周辺に土坑・ピットを検出するが、住居の残存状態が悪いため、その重複関係は不明である。

〔規模・平面形〕北東隅を現代の撹乱により削平を受けているが、規模を周溝から想定すると、東－西 4.5m となる。また、南北方向では中央部分で約 1.0m、カマド付近では 1.75m 残存していた。住居の隅は直角に曲がらず、丸みをもち、平面形は隅丸方形を呈する。

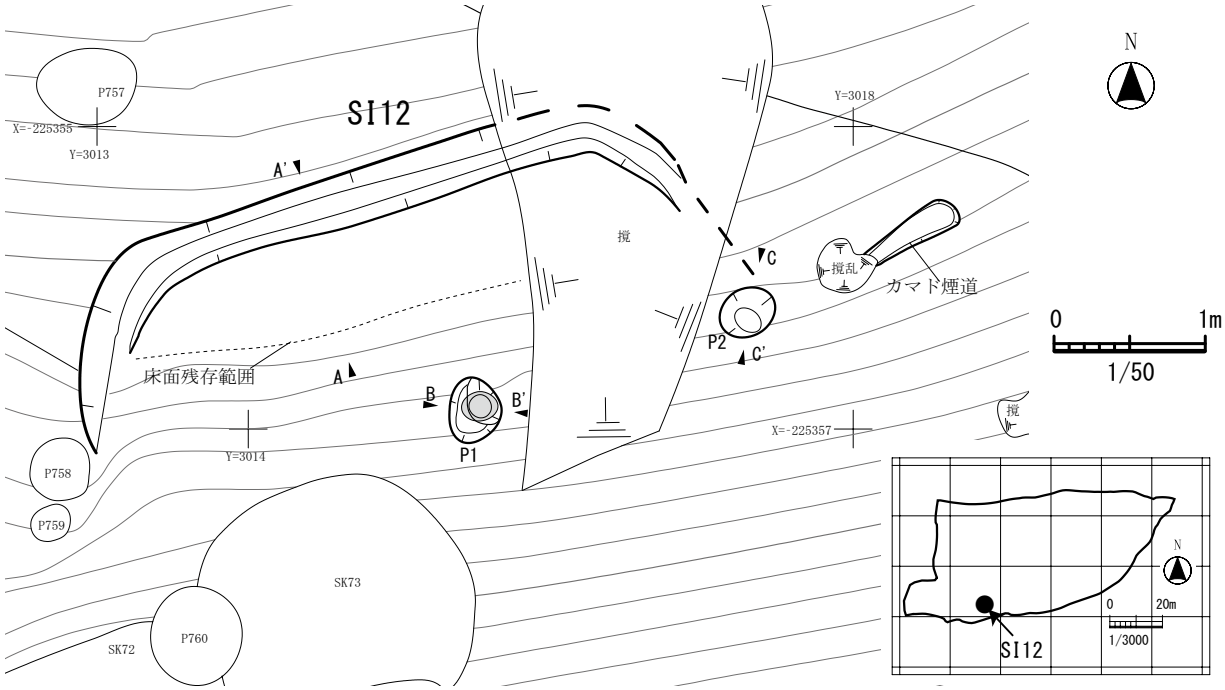
〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 18.1°傾く（N－18.1°－W）。

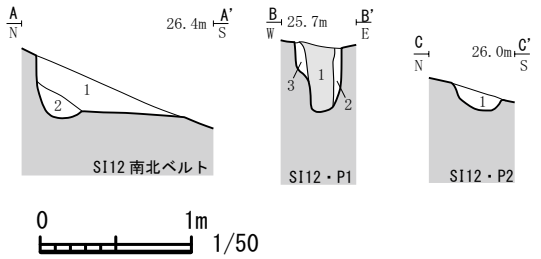
〔壁〕住居の北壁しか残存しておらず、残存高は 40cm 程度である。

〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山を床としている。

〔柱穴〕柱穴を 1 個(P1)検出した。直径 35×43cm の楕円形、底面直径 15cm の円形を呈し、深さ 45 cmで、20×25cm の楕円形を呈する柱痕跡を確認した。掘方は西側から南側にかけて段を有する。主柱穴の 1 つと考えられ、住居のほぼ中央部に位置している。

〔カマド〕煙道の一部と燃焼部の窪み（P2）が残存する程度である。P2 はにぶい黄褐色シルト土に 5cm 大の焼土が混入し、炭化物片も含む。被熱した痕跡はみられなかった。規模は直径 32×36cm の円形、深さは 12cm である。煙道は長さ 1.1m ほど残存しており、その西側は撹乱により削平を受けている。





【SI12 南北ベルト・P1、2 土層注記（A-A'～C-C'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI12 南北ベルト	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物片少量、焼土微量含む。
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	粘質	周溝堆積土。
SI12・P1	1	明褐色(7.5YR5/6) 黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	柱痕跡。
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	掘方埋土。
	3	黄褐色(10YR5/8)	シルト	掘方埋土。
SI12・P2	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土ブロック、炭化物片含む。

第18図　SI12　竪穴住居跡（1）

〔周溝〕北壁に沿って掘り込まれているが、それより南側は削平を受け、残存していない。周溝の上幅は約30cm、下幅は10～15cmである。深さは床面より約4cmと浅いことから、掘方埋土等が行われていた可能性も考えられるが、現状の土層からはうかがえなかった。壁材痕跡は認められなかった。

〔堆積土〕住居堆積土は１層である。暗褐色土で周囲からの流入土である。

〔出土遺物〕住居堆積土から非ロクロ成形の土師器坏２点（25g）・須恵器壺破片１点（15g）、P1の堆積土から非ロクロ成形の土師器甕１点（10g）が出土した。いずれも小破片のため図示できたものはない。

１．SI12竪穴住居跡　完掘状況（南から）

第19図　SI12　竪穴住居跡（2）

【SI13　竪穴住居跡】（第20～26図）

〔位置〕南側中央の標高24.6～25.8mの急斜面で確認した。検出面は東側が基本層Ⅶd層、西側が基本層Ⅶe層である。住居のカマド部分と北側が残存し、南側は斜面で大半が削られている。また、北側を巡る外周溝を検出した。

〔重複〕SK78・79、P762より古く、SI14より新しい。(SI14→SI13→SK78・79、P762)。また、東側・西側は現代の撹乱、住居南側の一部は、調査前の立木伐採時の重機搬入路造成に伴い、削平を受けている。

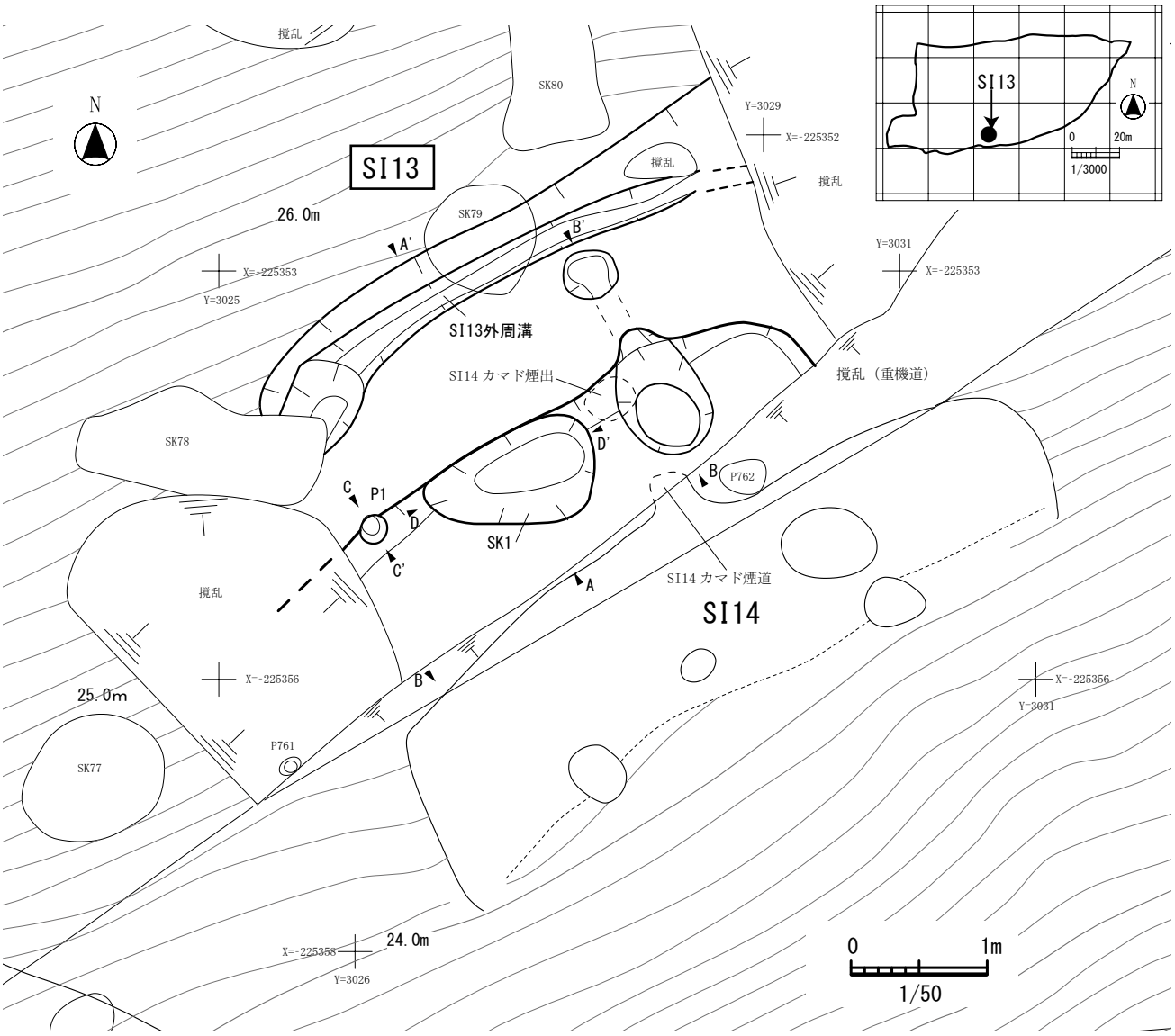
〔規模・平面形〕現存長東－西3.65m、北－南1.1mを測る。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

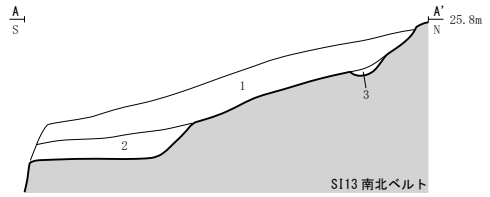
〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約32°傾く（N－32°－W）。

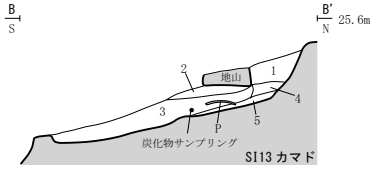
〔壁〕住居の北側が最も残りがよく、最大で高さ25cm残存していた。

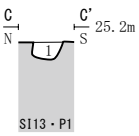
〔床面〕床面はほぼ平坦で、地山を床としている。

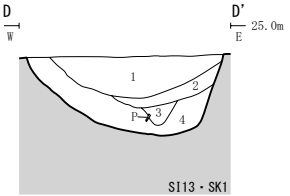
〔ピット〕北壁の西側でピット１個(P1)検出したのみである。上面の直径は20cm、底面は13cmの円形を呈し、深さ11cmである。堆積土は１層で灰黄褐色シルト土、柱痕跡等は確認できなかった。位置的にみて、壁柱穴の可能性がある。

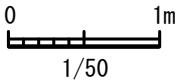












【SI13 南北ベルト・カマド・P1・SK1 土層注記（A-A'～D-D'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI13 南北ベルト	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物片少量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片少量含む。
	3	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。外周溝堆積土。
SI13 カマド	1	暗赤灰色(2.5YR3/1)	シルト	炭化物片多量含む。土器混入。
	2	褐灰色(10YR5/1)	シルト	混入物なし。
	3	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土、炭化物片多量含む。
	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	焼土少量、炭化物片微量含む。
	5	黄褐色(10YR5/6)	シルト	黒褐色土ブロック、炭化物片微量含む。
SI13・P1	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片微量含む。
SI13 ・SK1	1	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	炭化物片含む。
	2	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	焼土多量含む。
	3	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	混入物なし。
	4	黒褐色(7.5YR2/2)	シルト	炭化物片多量含む。

第20図　SI13 竪穴住居跡（1）

〔カマド〕住居北辺東寄りに付設されている。煙道・煙出は良好に残っていたが、側壁・焼面等は残存していなかった。カマド前面の燃焼部には窪みがあり、内黒処理の土師器坏や須恵器が出土したほか、多量の焼土・炭化物片とともに拳～頭大の自然礫（砂岩 2 石・花崗岩 1 石）や拳大の粘土塊が堆積していた。自然石・粘土塊はカマドの支脚や側壁の補強材等に使用されたものと思われる。煙道から煙出は良好に残っており、天井も崩落せずに残っていた。煙道の規模は、住居壁から長さ約 85cm、幅 25cm である。煙道の天井部に被熱痕跡は認められなかった。煙道底面の堆積土 5 層（土層断面 B-B’）は、地山である黄褐色シルト土に黒褐色シルト土がブロック状に混入した埋土（人為堆積層）であり、カマド煙道の床面を構築した埋土、あるいは暗渠的な役割を果たした埋土である可能性が考えられる。煙出の規模は底面で幅 30cm、深さ 25cm である。

〔周溝〕認められなかった。

〔その他の施設〕屋外の付属施設である外周溝（SD1）を北側で検出した。東側を現代の撹乱、西側を SK78 や現代の撹乱により削平を受け、残っていない。その規模は上幅 30～35cm、底面の幅 10～15cm ほどで、外周溝の南壁は 3cm ほどしか残存しておらず、削平を受けているものと思われる。

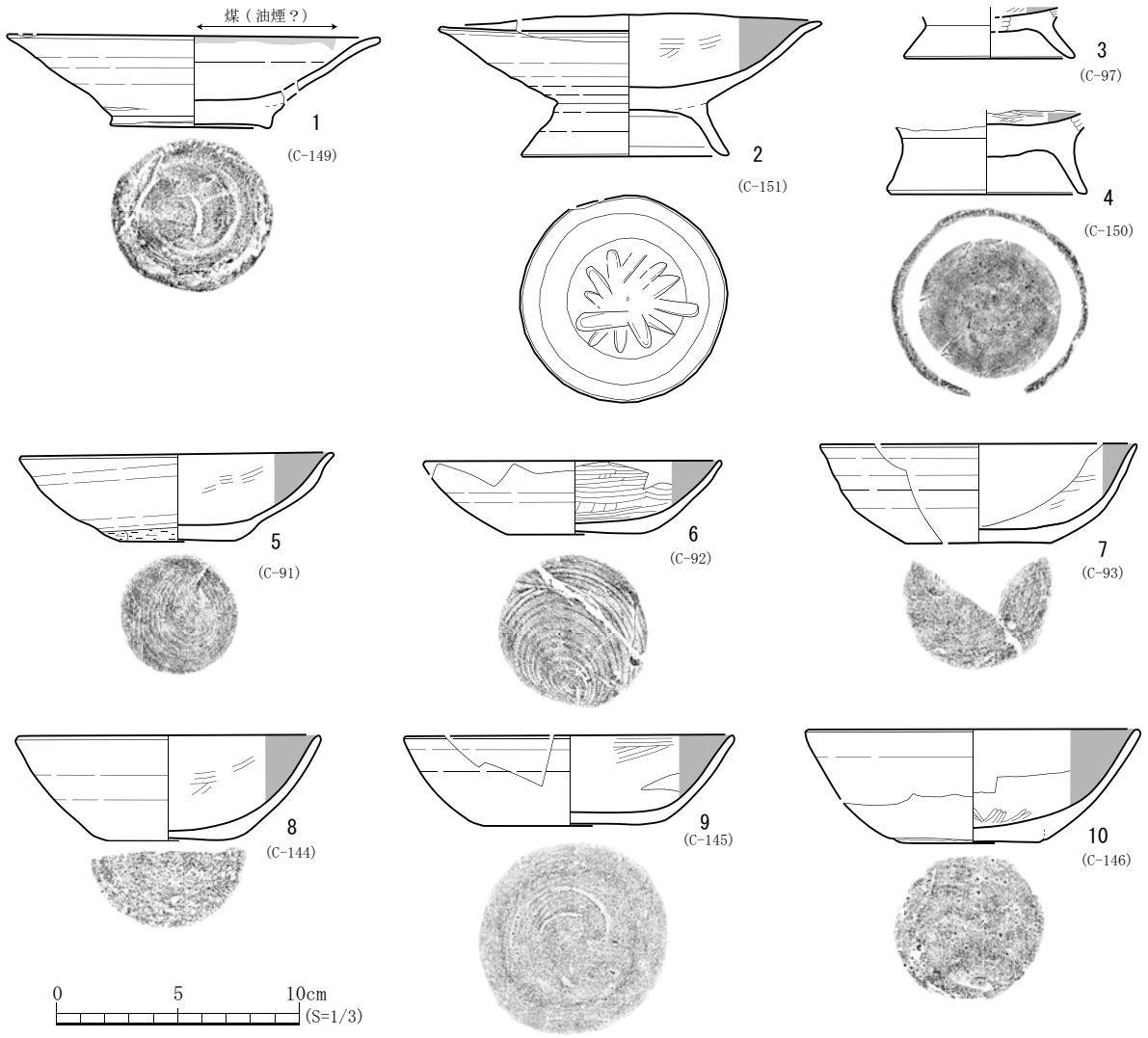
〔堆積土〕住居堆積土は 3 層（土層断面 A-A’）に分かれる。全て周囲からの流入土である。2 層は住居跡、3 層は外周溝堆積土であり、それが埋まった後、1 層が全体に堆積していた。

〔出土遺物〕SI13 からは縄文土器、土師器、須恵器が出土した。その内訳は、縄文土器深鉢 3 点（15g）、土師器 253 点（6,395g）【坏 82 点・高台付坏 4 点・蓋 1 点・甕 166 点】、須恵器甕 10 点（2,270g）が出土した。出土した土師器の大半は、ロクロ成形のもので、坏類は内黒処理のものと非内黒処理（赤焼）のものが混在している。

遺物の出土地点・器種別でみると、**堆積土**からロクロ成形の土師器坏 17 点（115g/内黒 13 点・赤焼 4 点）・甕 49 点（980g）、須恵器甕 3 点（370g）、**堆積土 1 層**からロクロ成形の土師器坏 6 点（105g/内黒 4 点・赤焼 2 点）・甕 8 点（450g）、**カマド燃焼部堆積土**からロクロ成形の土師器坏 2 点（215g/内黒 2 点）・甕 14（240g）、須恵器甕 1 点（15g）、**カマド燃焼部～煙道**からロクロ成形の土師器甕 20 点（1,875g）、**カマド東側の床面**からロクロ成形の土師器坏 6 点（395g/内黒 4 点・赤焼 2 点）・高台付坏 2 点（365g・内黒 2 点）・甕 11 点（65g）・蓋 1 点（5g）、**床面**からロクロ成形の土師器坏 1 点（45g・内黒 1 点）・甕 3 点（30g）、**SK1 堆積土**から縄文土器破片 3 点（15g）・ロクロ成形の土師器甕 21 点（185g）、**SK1・1 層**からロクロ成形の土師器坏 1 点（5g）、**SK1・4 層**からロクロ成形の土師器坏 5 点（305g/内黒 3 点・赤焼 2 点）・非ロクロ成形の土師器甕 5 点（20g）、**外周溝堆積土**からロクロ成形の土師器坏 23 点（195g/内黒 19 点・赤焼 4 点）・高台付坏 2 点（50g/内黒 1 点・赤焼 1 点）・甕 56 点（740g）、須恵器甕 6 点（1,885g/いずれも外面：平行タタキ格子タタキ・内面：当て具→ナデ）が出土した。

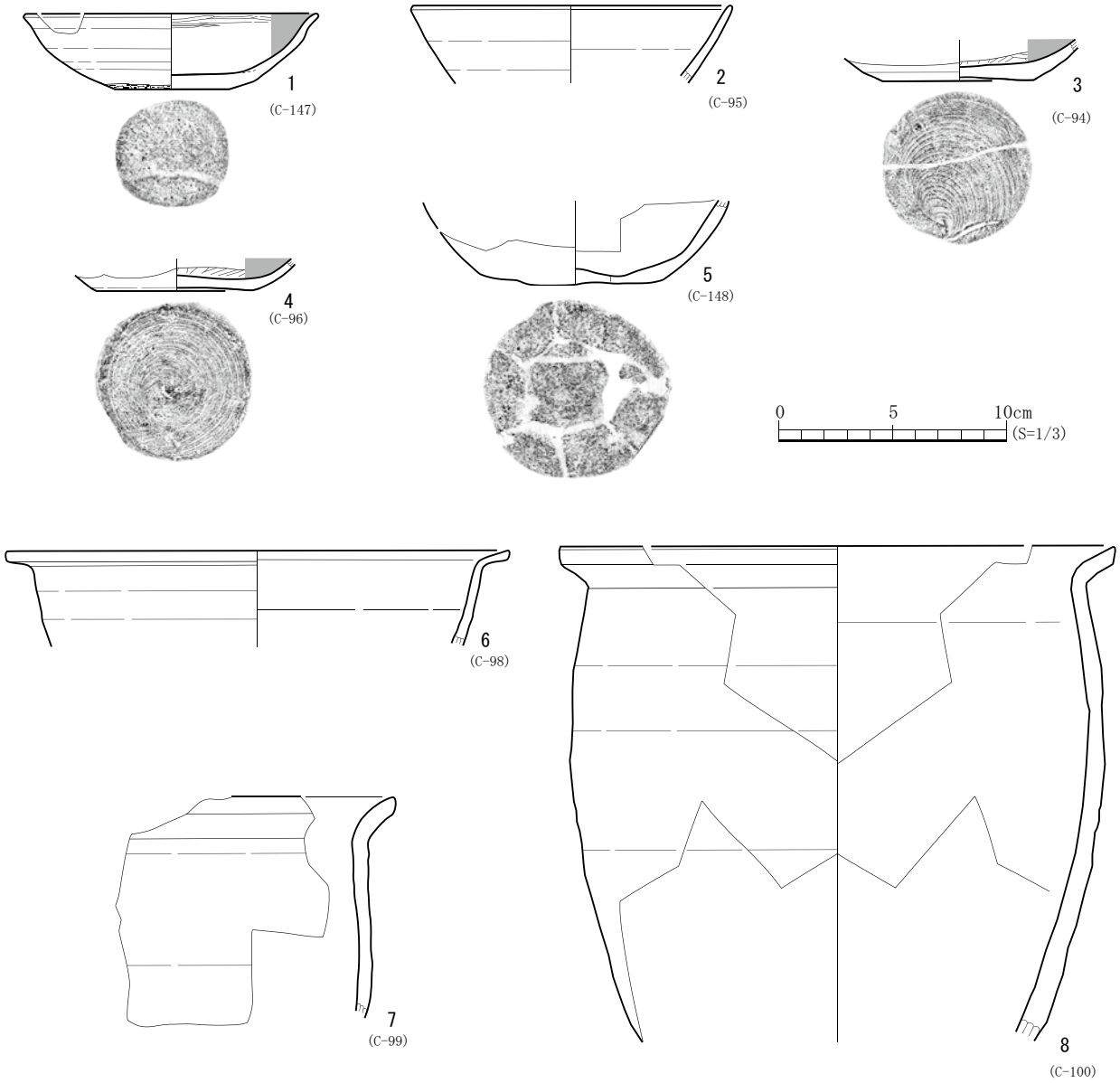
このうち、**堆積土 1 層**出土の土師器坏 2 点（第 22 図 2・3）・甕 1 点（第 23 図 3）、**カマド燃焼部堆積土**出土の土師器坏 2 点（第 21 図 5・6）、**カマド煙道**出土の土師器甕 2 点（第 22 図 7・第 23 図 1）、**カマド燃焼部～煙道**出土の土師器甕 2 点（第 22 図 8・第 23 図 2）、**カマド東側床面**出土の土師器坏 2 点（第 22 図 1・5）・高台付坏 3 点（第 21 図 1・2・4）、**床面**出土の土師器坏 1 点（第 22 図 4）・甕 1 点（第 22 図 6）、**SK1・4 層**出土の土師器坏 3 点（第 21 図 8～10）、**外周溝堆積土**出土の土師器坏 1 点（第 21 図 7）・高台付坏 1 点（第 21 図 3）を図示した。図示できた土師器坏 11 点・高台付坏 4 点・甕 6 点はいずれもロクロ成形のものである。

〔その他〕　燃焼部（土層断面 B-B’：3 層）に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 694～773cal AD であった。



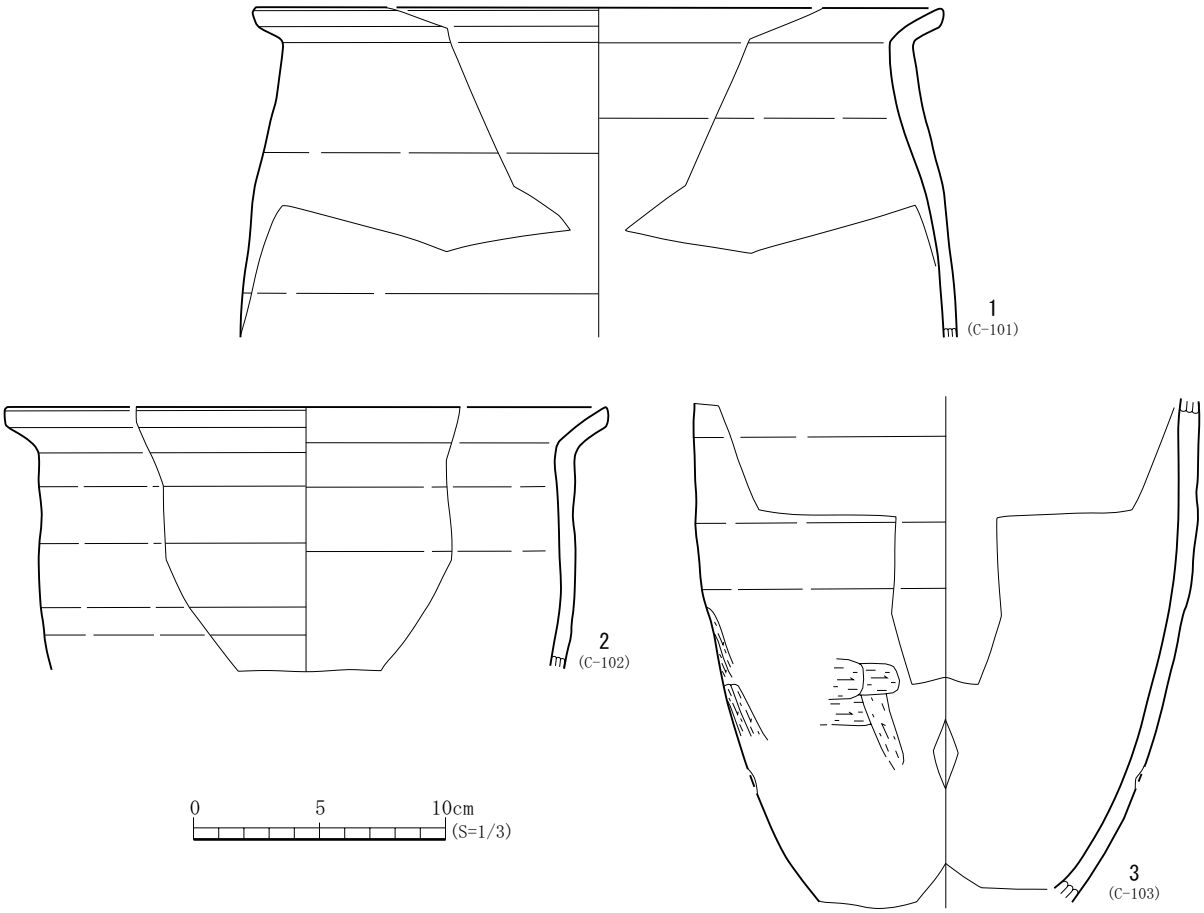
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI13・ｶﾏﾄﾞ東 床面	土師器	高台付坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・磨滅、内面：ロクロナデ・磨滅、口縁部に煤(油煙？)付着、灯明皿？、 色調：内外面・橙色(7.5YR7/6)、法量：口径15.3cm・器高4.4cm・底径6.5cm・器厚0.3cm、赤焼土器	C-149
2	SI13・ｶﾏﾄﾞ東 床面	土師器	高台付坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・坏部底部粘土塊に粘土積み上げ・高台貼り付け(ヘラ状工具で放射状に押圧して接着)、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)／灰黄褐色(10YR5/2)、内面・黒色(N2/0)、法量：口径15.7cm・器高5.7cm・底径8.4cm・器厚0.3～0.9cm	C-151
3	SI13・外周溝 堆積土	土師器	高台付坏	底部	外面：ロクロナデ・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・黄橙色(10YR8/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径(6.8)cm・残存高2.1cm・器厚0.5cm	C-97
4	SI13・ｶﾏﾄﾞ東 床面	土師器	高台付坏	底部	外面：ロクロナデ・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・橙色(5YR6/8)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径8.1cm・残存高3.3cm・器厚0.5～0.7cm	C-150
5	SI13・ｶﾏﾄﾞ 燃焼部堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端ヘラ削り・底部回転糸切無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・黄橙色(10YR7/8)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径12.8cm・器高3.1cm・底径4.7cm・器厚0.3～0.4cm、ほぼ完形	C-91
6	SI13・ｶﾏﾄﾞ 燃焼部堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/3)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(12.2)cm・器高3.0cm・底径5.6cm・器厚0.3～0.4cm	C-92
7	SI13・外周溝 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ？・黒色処理・磨滅、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)、内面・黒色(7.5YR2/1)、法量：口径(13.0)cm・器高4.1cm・底径(6.0)cm・器厚0.3～0.4cm	C-93
8	SI13・SK1 4層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・赤褐色(5YR4/8)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(12.4)cm・器高4.3cm・底径(5.0)cm・器厚0.4cm	C-144
9	SI13・SK1 4層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整or回転ヘラ切り無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明黄褐色(10YR6/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径13.4cm・器高3.7cm・底径8.0cm・器厚0.3cm、ほぼ完形	C-145
10	SI13・SK1 4層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→手持ちヘラ削り再調整？・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：内外面・橙色(5YR6/6)、法量：口径(13.6)cm・器高4.7cm・底径6.0cm・器厚0.3～0.4cm、底部と胴部の粘土塊の境が明瞭に残る	C-146

第21図　SI13 竪穴住居跡（2）ー 出土遺物１ー



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI13・ｶﾏﾄﾞ東 床面	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・胴部下端手持ちヘラ削り・底部回転糸切無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・黄橙色(10YR8/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径12.8cm・器高3.3cm・底径5.1cm・器厚0.3～0.4cm、ほぼ完形	C-147
2	SI13 1層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・にぶい橙色(5YR6/4)、法量：口径(14.0)cm・残存高3.4cm・器厚0.4cm、赤焼土器	C-95
3	SI13 1層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・明黄褐色(10YR6/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径6.7cm・残存高1.8cm・器厚0.4cm	C-94
4	SI13 床面	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明黄褐色(10YR7/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径6.8cm・残存高1.4cm・器厚0.3cm	C-96
5	SI13・ｶﾏﾄﾞ東 床面	土師器	坏?	胴部 ～底部	内外面：ロクロナデ？・磨滅、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、内面・にぶい黄橙色(7.5YR7/3)、法量：底径8.2cm・残存高3.6cm・器厚0.5～0.7cm、底部粘土塊内面に前段階の回転糸切痕残存か、赤焼土器？	C-148
6	SI13 床面	土師器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・にぶい褐色(7.5YR6/3)、法量：口径(22.0)cm・残存高4.2cm・器厚0.4cm	C-98
7	SI13・ｶﾏﾄﾞ 煙道	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：器厚0.7～0.9cm	C-99
8	SI13・ｶﾏﾄﾞ 燃焼部～煙道	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：外面・橙色(7.5YR7/6)、内面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：口径(24.4)cm・残存高21.7cm・器厚0.9cm、内外面：・煤焦げ付着	C-100

第22図　SI13 竪穴住居跡（3）　― 出土遺物２ ―



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI13・カマド 煙道	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・褐色(7.5YR4/6)、法量：口径(27.2)cm・残存高13.0cm・器厚0.6～1.1cm、内外面：煤焦げ付着	C-101
2	SI13・カマド 燃焼部～煙道	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：口径(23.6)cm・残存高10.5cm・器厚0.5～0.6cm	C-102
3	SI13 1層	土師器	甕	胴部	外面：ロクロナデ・下部ヘラ削り・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)／灰黄褐色(10YR5/2)、内面・褐灰色(7.5YR4/1)／にぶい褐色(7.5YR5/4)、法量：残存高20.0cm・器厚0.5～0.6cm	C-103

第23図　SI13 竪穴住居跡（4）　― 出土遺物３ ―

1．SI13 竪穴住居跡　完掘状況（南から）

第24図　SI13 竪穴住居跡（5）― 遺構写真図版 ―

C-149　（第21図1）

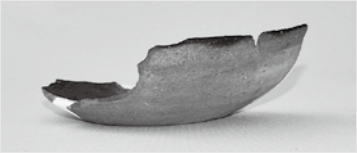
C-151（第21図2）

C-97
（第21図3）

C-150（第21図4）

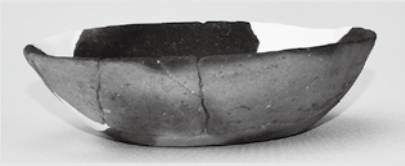
C-91（第21図5）

C-92（第21図6）



C-93　（第21図7）

C-144（第21図8）



C-145（第21図9）

C-146（第21図10）

C-147　（第22図1）

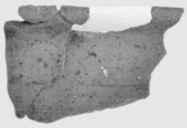
C-95
（第22図2）

0　5　10cm
(S=1/3)

C-94（第22図3）

C-96　（第22図4）

C-148
（第22図5）

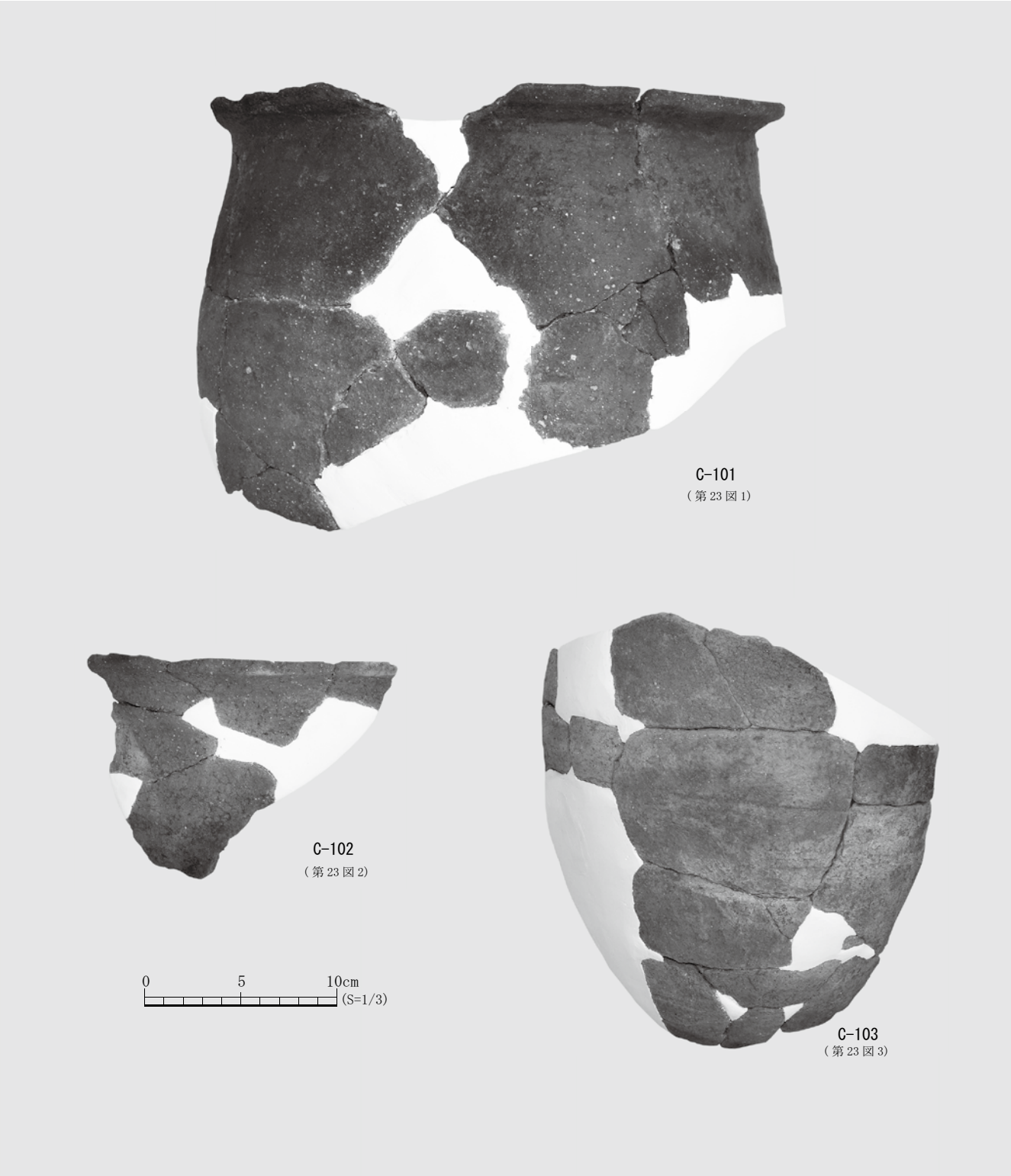


C-98
（第22図6）

C-99
（第22図7）

C-100　（第22図8）

第25図　SI13 竪穴住居跡（6）ー出土遺物 写真図版１ー



第26図　SI13 竪穴住居跡（7）ー出土遺物 写真図版２ー

【SI14　竪穴住居跡】（第 27～29 図）

〔位置〕南側中央の標高 24.0～25.1m の急斜面で確認した。検出面は東側が基本層Ⅶd 層、西側が基本層Ⅶe 層である。住居のカマド部分と北側が残存するが、住居北端の上面は重機道により、削平を受ける。

〔重複〕SI13、P762 と重複し、これらより古い（SI14→SI13、P762）。なお、北側に隣接する SI13 との重複関係については、SI13 の堆積土除去後の床面下で SI14 のカマド煙出を検出したことから、SI14 は SI13 より古いと判断した。

〔規模・平面形〕東－西 5.2m、北－南 1.7m 以上。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 32°傾く（N－32°－W）。SI13 とほぼ同じである。

〔壁〕住居の北東側で、高さ 30cm 程度残存していた。

〔床面〕北西隅～北東隅を掘方埋土、他は地山を床としている。掘方埋土は、灰黄褐色シルト土に明黄褐色シルト土と焼土がブロック状に混入し、埋土の厚さは 10cm 前後である。

〔柱穴・ピット〕床面では柱穴・ピット 4 個(P1～4)を検出した。P1・2 は主柱穴と思われる。北壁から約 1.2m 離れた位置にあり、柱穴間の距離は約 2.5m である。南側は削平を受け残存しないが、4 本柱であった可能性が高い。直径 35×55cm、深さ 24cm の楕円形を呈する。P1 では直径 16cm の円形を呈する柱痕跡を確認した。柱痕跡は柱穴掘方の底面より下に延び、深さ 27cm である。P2 は直径 34×42cm、深さ 28cm の楕円形を呈する。P3 は直径 50×70cm、深さ 4～13cm の楕円形を呈し、中に 10cm 前後の花崗岩が流れ込んでいた。P4 は直径 21cm、深さ 8cm の円形を呈する浅いピットであるが、中には多量の炭化物片が含まれていた。P3・4 は位置・堆積土の状況から、カマドに関連する遺構とみられる。

〔カマド〕住居北辺中央に付設される。煙道・煙出は良好に残っており、天井も崩落せず残っていた。側壁は残存しておらず、燃焼部焼面は確認することができなかった。煙道の長さは住居壁から約 110cm、幅 23cm、高さ 15cm である。煙出の規模は上面で 31×36cm、底面で幅 15×25cm、深さ最大 60cm である。

〔周溝〕カマド前面で途切れるが、残存する北側部分は周壁に沿って掘り込まれていた。周溝は上幅 25～40cm、下幅 8～15cm、床面からの深さ 6～10cm である。壁材痕跡は認められなかった。

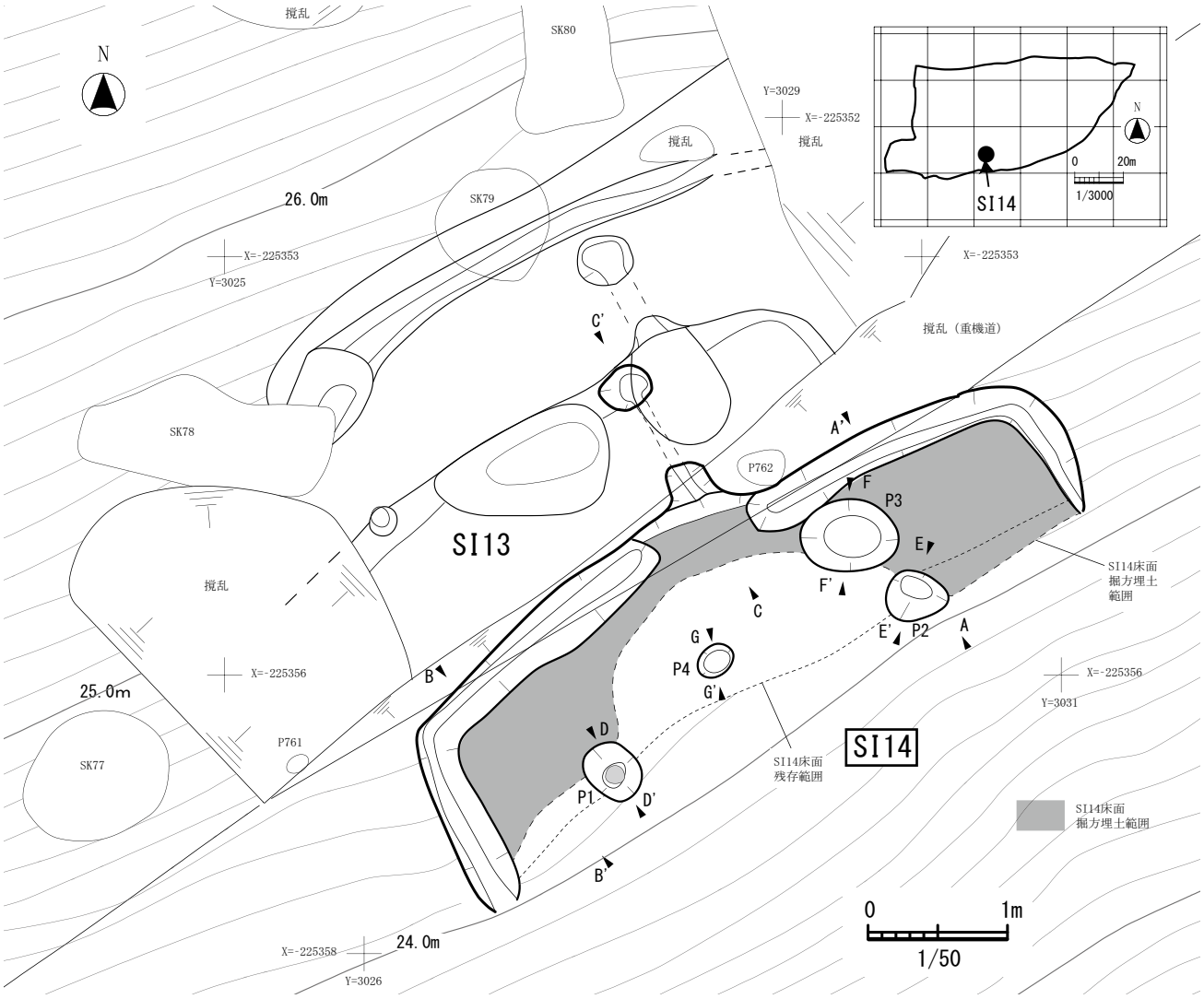
〔堆積土〕南北ベルト東側（土層断面 A-A’）の堆積状況は、1・2 層が住居北側からの流入土、3 層は周溝堆積土、4 層は掘方埋土である。

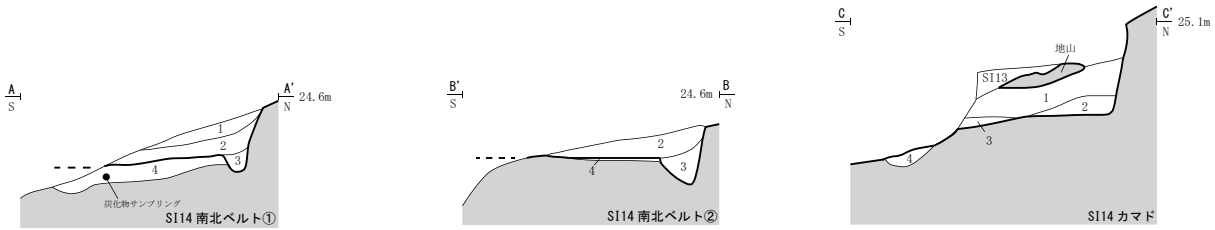
〔出土遺物〕SI14 からは土師器が 68 点（980g）出土した。出土器種は坏 7 点・甕 61 点で、ロクロ成形のものは約半数含まれる。坏類は内黒処理のものと非内黒処理（赤焼）のものが混在している。

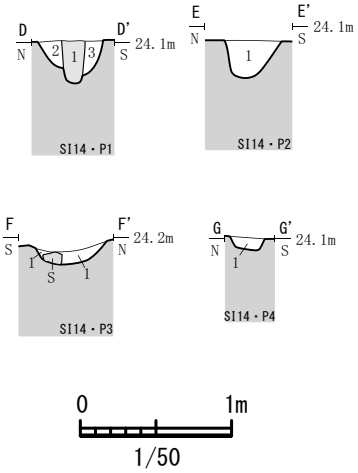
遺物の出土地点・器種別でみると、**堆積土**から非ロクロ成形の土師器甕 8 点（130g）・ロクロ成形の土師器甕 8 点（155g）、**カマド堆積土**からロクロ成形の土師器坏 1 点（10g・内黒 1 点）、**カマド煙道**から非ロクロ成形の土師器甕 2 点（15g）・ロクロ成形の土師器甕 1 点（10g）、**カマド煙出**からロクロ成形の土師器甕 3 点（15g）、**周溝堆積土**から非ロクロ成形の土師器甕 12 点（235g）・ロクロ成形の土師器甕 2 点（40g）、**P2 堆積土**から非ロクロ成形の土師器坏 3 点（20g）・ロクロ成形の土師器甕 4 点（25g）、**住居掘方埋土**からロクロ成形の坏 1 点（30g・赤焼 1）・甕 11 点（110g）、非ロクロ成形の土師器坏 2 点（20g・内黒 2）・甕 10 点（155g）が出土した。

このうち、住居掘方埋土出土のロクロ成形の土師器坏（第 28 図 1）・甕（第 28 図 2）、非ロクロ成形の土師器高坏（第 28 図 3）・甕（第 28 図 4）を図示したが、第 28 図 3・4 については掘方を埋め戻す際に周辺から混入したものとみられる。

〔その他〕　住居掘方埋土（土層断面 A-A’：4 層）に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 655～680cal AD であった。



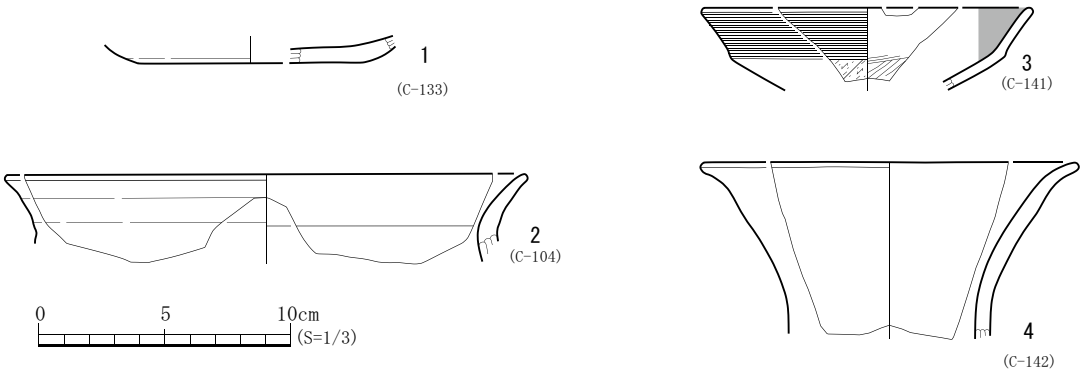




【SI14 南北ベルト①②・カマド・P1～4土層注記（A-A'～G-G'）】

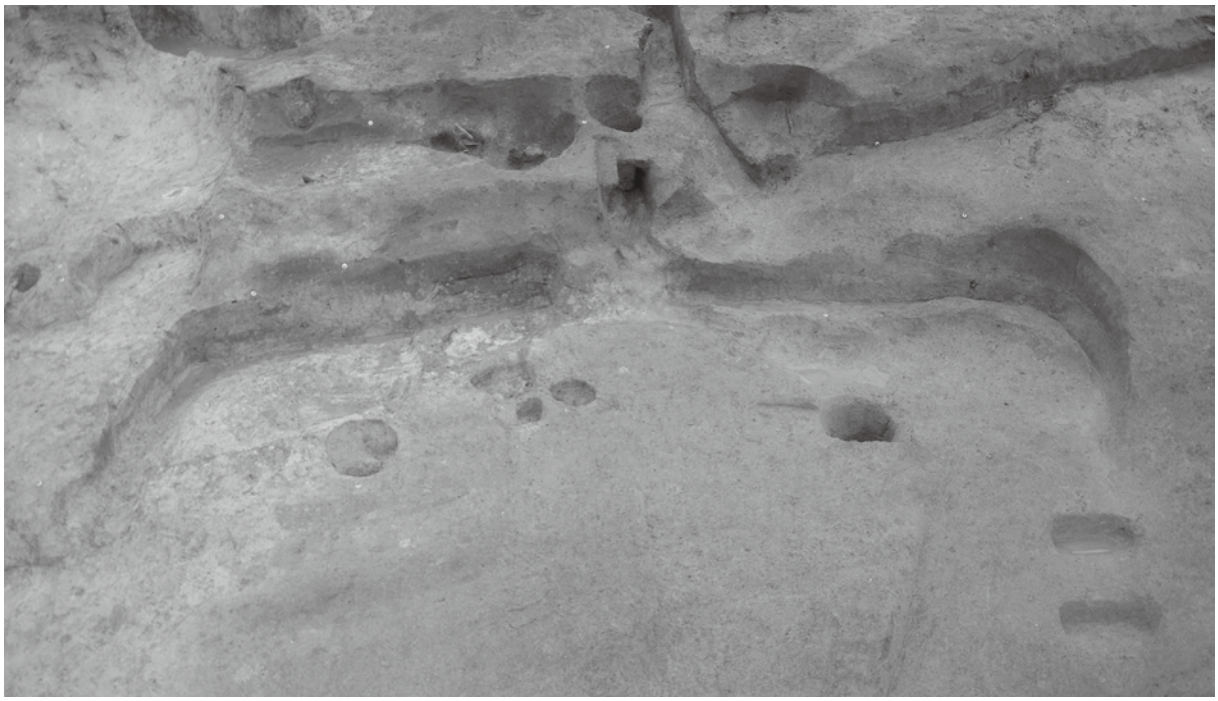
遺構No	層位	土色	土性	備考
SI14南北ベルト①・②	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片微量含む。
	3	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	周溝堆積土。
	4	灰黄褐色(10YR4/2) 黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	明黄褐色シルト土、焼土ブロック含む。 住居掘方埋土。
SI14カマド	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片多量含む。カマド煙道堆積土。
	2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片含む。カマド煙道堆積土。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物片、焼土多量含む。カマド煙道堆積土。
	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	焼土含む。住居掘方埋土。
SI14・P1	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	柱痕跡。
	2	明黄褐色(2.5Y7/6)	粘質	黄褐色粘土斑に含む。掘方埋土。
	3	浅黄色(2.5Y7/4)	粘質	明黄褐色粘質土斑に含む。掘方埋土。
SI14・P2	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片少量含む。
SI14・P3	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	黄褐色シルト土、炭化物片少量含む。
SI14・P4	1	黒色(7.5YR2/1)	シルト	炭化物片多量含む。

第27図　SI14 竪穴住居跡（1）



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI14 掘方埋土	土師器	坏	底部	内外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明・磨滅、色調：内外面・橙色(7.5YR6/6)、法量：底径(9.0)cm・残存高1.1cm・器厚0.6cm、赤焼土器	C-133
2	SI14 掘方埋土	土師器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・橙色(5YR6/8)、法量：口径(20.6)cm・残存高3.5cm・器厚0.6～0.7cm	C-104
3	SI14 掘方埋土	土師器	高坏？	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部下端ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(12.8)cm・残存高3.2cm・器厚0.4cm	C-141
4	SI14 掘方埋土	土師器	甕	口縁部 ～頸部	内外面：磨滅のため不明、色調：内外面・橙色(7.5YR7/6)、法量：口径(14.8)cm・残存高7.0cm・器厚0.6～0.7cm	C-142

第28図　SI14 竪穴住居跡（2）　―出土遺物―



1．SI14 竪穴住居跡　完掘状況（南から）

第29図　SI14 竪穴住居跡（3）　―遺構写真図版―

【SI15　竪穴住居跡】（第 30～39 図）

〔位置〕南側中央の標高 20.0～21.9m の急斜面で確認した。東側の浅い谷（谷部①）の裾部に位置する。検出面は基本層Ⅶd 層である。住居のカマド部分と北側は残存するが、南半は斜面により削平を受ける。

〔重複〕外周溝が位置する箇所に木根があり、撤去できなかった為、部分的な掘削で終わってしまった。SK86・88、P781・782・786～789 と重複し、これらより古い（SI15→SK86・88、P781・782・786～789）。

〔規模・平面形〕東－西 5.2m、北－南 2.5m 以上。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 18°傾く（N－18°－W）。

〔壁〕住居の北側が最も残りがよく、高さ 60cm 程度残存していた。

〔床面〕住居北側中央部は地山、北東・北西隅及びカマド燃焼部は掘方埋土を床としている。床面はほぼ平坦であるが、P1～3 のラインより南側は斜面で削られ、床面は残存していなかった。掘方埋土はにぶい炭化物粒・焼土を少量含んだ赤褐色シルト土、暗赤褐色シルト土である。埋土の厚さは最も深いところで 14cm である。中央部は地山である黄褐色シルト土（基本層Ⅶd 層）を床としている。

〔ピット〕ピットは 9 個(P1～9)検出し、床面では 3 個(P1～3)検出した。P1 は直径 52×60cm の楕円形を呈し、深さ 22cm（標高 19.9m）である。P2 は直径 50cm の円形を呈し、深さ 60cm（標高 19.54m）である。また、周溝に沿って 4 個(P4～7)のピットを検出した。これらは北東・北西の隅とカマドの両脇に規則的に並ぶ。上端 28～50cm、底面 7～14cm、深さ 22～90cm、底面標高は 19.75～19.9m で、ほぼ同レベルである。いずれも柱痕跡は確認できなかったが、住居内の位置関係から P1・2 は主柱穴、P4～7 は壁柱穴である可能性が高い。この他に、P8・9 の 2 個のピットは住居跡と外周溝の間で検出した。いずれも小ぶりで、深さは 12cm と浅い。住居に関連する柱穴である可能性がある。

〔カマド〕住居北壁中央に付設されている。燃焼部・側壁・煙道・煙出が残存していた。

燃焼部の規模は焚口幅 60cm、奥行き 65cm で、わずかに 3cm ほど窪む。

側壁は両側壁ともに残存していたが、側壁の幅は最大 16cm、高さ 8cm で、残存状況は悪かった。右側壁は黄褐色シルト土の１層、左側壁は上層：黄褐色シルト土、下層：灰黄褐色シルト土の２層で構築される。なお、右側壁は、本来、住居の北壁（カマド燃焼部奥壁）に接続していたが、調査時、誤って掘削してしまった。

煙道から煙出は、残存状態が良好で、天井も崩落せずに残っていた。煙道の長さは住居壁から約 120cm、幅 25 cm 前後、高さ 40cm である。煙出の規模は上面が 28×45cm、底面が 16×22cm の楕円形、深さは炭化物層までが 1.1m を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、北側の壁は 4cm ほど外に抉れる。

この他、煙出から煙道、燃焼部を通り、住居跡の中央を南北方向に走る溝（SD1）を検出した。南側は P788・789 に切られ、残存していない。その幅は上幅 15～20cm、下幅 10cm 前後で、深さは燃焼部より南側で約 20cm、北側で 6～9cm である。標高約 19.92m で燃焼部までは平坦であるが、そこから徐々に傾斜し、南端で標高 19.75m を測る。なお、SD1 は北西側の周溝と燃焼部付近で接続する。

カマドの堆積土については、カマドの南北断面（B-B’/第 30 図参照）のうち、1～9 層はカマド廃絶後の燃焼部～煙出の堆積土（天井崩落土を含む）、10～12 層は燃焼部奥壁付近から煙道に土器とともに埋めた人為堆積土、13～16 層は煙道～住居中央を南北方向に走る溝（SD1）の掘方埋土、17・18 層は煙出底面の掘方埋土である。カマド機能時の底面想定ラインは第 30 図に示した断面図（B-B’）のとおりで、10 層以下はカマドの地下構造の埋土となる。10～12 層の埋土（人為堆積土）からは、内黒土器、土師器の甕・鉢等の破片が多数出土した。燃焼部付近では甕・坏類等の土師器がまとまって出土し（第 32 図写真 3）、煙道入口～中央付近では、土師器甕の破片が煙道の形状に沿うように南北方向に敷き詰められた状態で出土しており（第 32 図写真 2）、それぞれの破片は計画的に配置されたものとみられる。煙道に敷き詰められた甕の下には 16 層（SD1 溝跡掘方埋土）があり、その底面の地山と接する箇所には鉄分の沈着が確認さ

れた。水の流れた痕跡と思われる。こうした鉄分の沈着状況は、煙出の掘方底面にあたる 18 層最下層まで続いていた。18 層は褐灰色シルト土でやや硬く締まるが、上層の 17 層は炭化物を多く含む土が敷き詰められ、締まりがなく、ふかふかである。

以上のように SI15 で確認されたカマドは、①カマドの煙出・煙道・燃焼部の下部に溝（SD1）を掘り、②その溝の上部に土師器甕等を敷き詰めるなどした後、③埋戻しを行いカマドの機能面を構築するといった排水を意識した構造であったとみられ、SD1 はカマド下の暗渠として機能していたと考えられる。なお、SD1 は、その南端が削平を受けているため、住居外まで延びていたか不明であるが、カマド煙出等から住居内部に侵入した雨水を住居外に排水するための外延溝であったとみておきたい。SI15 の位置する地点は狭い谷の裾部にあたり、水が最も集まる場所である。その排水対策として、こうしたカマドの構造が採用されたと考えられる。

〔周溝〕カマド前面にも巡り、残存する北側部分は周壁に沿って掘り込まれていた。北西壁際の周溝は、カマド燃焼部付近で、カマド煙道から住居の中央を南北方向に走る SD1 と接続する。周溝の底面は北西端が最も高く 20.1m、そこから南側・東側ともに 15cm 低くなり、北東端から南側へは 8cm 低くなる。周溝は概ね上幅 30cm、下幅 6～25cm、床面からの深さは北側で最大 20cm である。壁材痕跡は認められなかった。周溝の上面では、土師器坏・甕や完形の須恵器坏等が出土していることから、住居機能時には周溝は埋まっていたと考えられる。

〔その他の施設〕屋外の付属施設として SD2 溝跡を住居北東～西側で検出した。SD2 は、住居北側の斜面を削って造られたテラス状の緩い平坦面上に位置する。溝の東側部分は木痕により未精査、西側部分は P9 付近で途切れているが、カマド煙出との位置関係や溝の残存状況等から、住居の周囲を全周しないものとみられる。その平面形は住居に沿って弧状を描く半円形を呈する。規模は、東側部分は上幅 23～30cm、下幅 15cm、深さ 5～20cm、西側部分は上幅 15cm、下幅 10cm、深さは 4cm 前後である。いずれも南側に向かって徐々に幅広となる。住居との位置関係からみて、SI15 の外周溝であると考えらえる。

〔堆積土〕南北断面（A-A’/第 30 図参照）では、堆積土・埋土が 7 層に分かれ、1～4 層は住居堆積土、5・6 層は周溝堆積土、7 層は掘方埋土である。

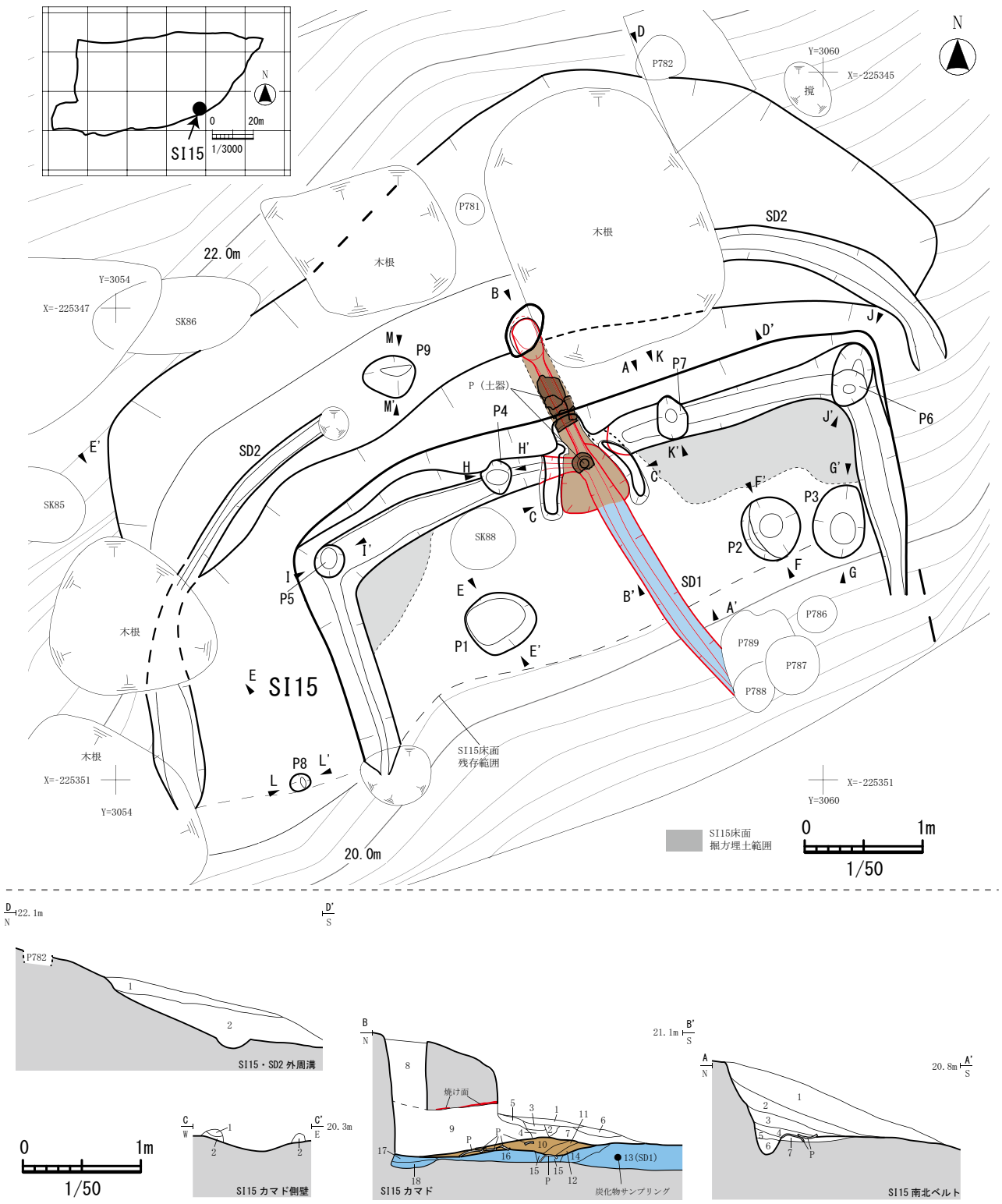
〔出土遺物〕SI15 では縄文土器 3 点（35g）、非ロクロ成形の土師器 239 点（9,905g）【坏 47 点・鉢 2 点・筒形土器 1 点・甕 189 点】、須恵器 6 点（575g）【坏 3 点・甕 3 点】、砥石 1 点（360g）が出土した。このうち、出土した土師器はすべて非ロクロ成形のものである。

遺物の出土地点・器種別でみると、**検出面**から土師器甕 3 点（25g）、**住居堆積土**から土師器坏 8 点（625g）・鉢 1 点（690g）・甕 41 点（575g）、須恵器坏 1 点（190g）・甕 1 点（25g）、**床面直上**から土師器坏 1 点（95g）、**床面**から土師器坏 3 点（160g）・筒形土器 1 点（95g）・甕 6 点（200g）、須恵器坏 1 点（205g）、砥石 1 点（360g）、**周溝埋土**から土師器坏 3 点（105g）・甕 27 点（530g）、**カマド燃焼部埋土**から土師器坏 10 点（385g）・鉢 1 点（310g）・甕 28 点（1,705g）、**カマド煙道埋土**から土師器坏 2 点（40g）・甕 8 点（980g）、**カマド燃焼部～煙道埋土**から土師器坏 1 点（45g）・甕 2 点（2,275g）、**住居床の掘方埋土**から縄文土器 2 点（20g）、土師器坏 4 点（45g）・甕 11 点（95g）、**SD1 埋土**から土師器甕 6 点（70g）、**P1 堆積土**から土師器坏 5 点（50g）・甕 11 点（135g）、須恵器坏 1 点（10g）・甕 2 点（145g）、**P3 堆積土**から土師器坏 4 点（130g）、**外周溝（SD2）堆積土**から縄文土器 1 点（15g）、土師器坏 4 点（50g）・甕 46 点（490g）が出土した。このうち、カマド燃焼部～煙道の埋土出土の遺物の多くは、住居構築時に使用されたものと考えられる。

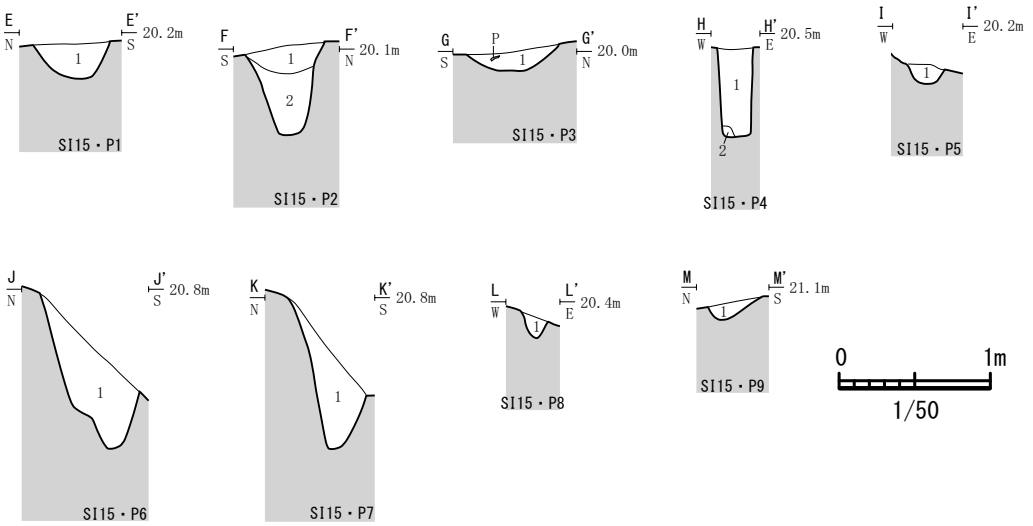
出土した遺物のうち、図示できたものは土師器坏 14 点・鉢 2 点・筒形土器 1 点・甕 11 点、須恵器坏 2 点・甕 1 点の計 31 点である。その内訳は、堆積土出土の土師器坏 4 点（第 33 図 1・2・7・14）、土師器鉢 1 点（第 38 図 3）・甕 1 点（第 35 図 1）、須恵器坏 1 点（第 38 図 4）・甕 1 点（第 38 図 6）、カマド燃焼部埋土出土の土師器坏 2 点（第 33 図 6・11）・鉢 1 点（第 38 図 1）・甕 6 点（第 34 図 1・5、第 35 図 2～5）、カマド煙道埋土出土の土師器坏 1 点（第 33 図 9）・甕 2 点（第 34 図 2・3）、カマド燃焼部～煙道出土の坏

1 点（第 33 図 3）・甕 2 点（第 34 図 4、第 35 図 6）、床直上出土の土師器坏 1 点（第 33 図 4）、床面出土の土師器坏 1 点（第 33 図 8）・筒形土器 1 点（第 38 図 2）、須恵器坏 1 点（第 38 図 5）、住居床掘方埋土出土の土師器坏 1 点（第 33 図 10）、外周溝（SD1）堆積土出土の土師器坏 1 点（第 33 図 12）、P3 堆積土出土の坏 2 点（第 33 図 5・13）である。

〔その他〕 SD1（土層断面 B-B’：13 層）に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 655～677cal AD であった。



第30図　SI15 竪穴住居跡（1）



【SI15 南北ベルト・カマド及び SD1・カマド側壁・SD2 外周溝・P1 ～ 9 土層注記（A-A' ～ M-M'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI15南北ベルト	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片含む。住居堆積土。
	2	褐色(10YR4/6)	シルト	混入物なし。住居堆積土。
	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片含む。住居堆積土。
	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片、焼土含む。住居堆積土。
	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片、焼土含む。周溝埋土(人為堆積)。
	6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	明黄褐色シルト土含む。周溝埋土(人為堆積)。
	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物ブロック状、焼土多量含む。住居掘方埋土(人為堆積)。
SI15カマド及び SD1	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物ブロック、焼土粒状含む。カマド燃焼部堆積土。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片含む。カマド燃焼部堆積土。
	3	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	明黄褐色シルト土斑に含む。カマド燃焼部堆積土。
	4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	明黄褐色シルト土斑状、焼土ブロック状含む。カマド燃焼部堆積土。
	5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土斑に含む。カマド燃焼部堆積土。
	6	赤褐色(2.5YR4/6)	粘質	灰黄褐色シルト土含む。カマド燃焼部堆積土。
	7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	焼土ブロック状含む。　カマド燃焼部堆積土。
	8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片、焼土少量含む。カマド煙出堆積土。
	9	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片・焼土少量、黄色粒含む。　カマド煙出～煙道堆積土。
	10	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒状含む。カマド燃焼部埋土(人為堆積)。
	11	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黄褐色シルト土斑に含む。カマド燃焼部埋土(人為堆積)。
	12	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	黄褐色シルト土斑に含む。カマド燃焼部埋土(人為堆積)。
	13	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片、焼土多量含む。SD1掘方埋土(人為堆積)。
	14	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片、焼土含む。SD1掘方埋土(人為堆積)。
	15	褐灰色(5YR5/1)	シルト	炭化物片、焼土少量含む。SD1掘方埋土(人為堆積)。
	16	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片少量含む。締まりなし。最下層鉄分沈着。SD1掘方埋土(人為堆積)。
	17	黒色(7.5YR2/1)	シルト	炭化物片多量含む。カマド煙出掘方埋土(人為堆積)。
	18	褐灰色(7.5YR5/1)	シルト	やや固く締まる。下層鉄分沈着。カマド煙出掘方埋土(人為堆積)。
SI15カマド側壁	1	黄褐色(2.5Y5/4)	シルト	明黄褐色シルト土斑に含む。カマド側壁構築土。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。住居堆積土。カマド側壁構築土。
SI15・SD2外周溝	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黄褐色土斑に含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。
SI15・P1	1	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片少量含む。
SI15・P2	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物ブロック状多量含む。
	2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	灰黄褐色土、炭化物片少量含む。
SI15・P3	1	にぶい赤褐色(5YR5/4)	シルト	炭化物片、焼土少量含む。
SI15・P4	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片多量含む。
	2	黄灰色(2.5Y4/1)	粘質	混入物なし。
SI15・P5～7	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片含む。
SI15・P8～9	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。

第31図　SI15 竪穴住居跡（2）

1．SI15 竪穴住居跡　完掘状況（上が北）

2．SI15 竪穴住居跡　カマド完掘状況（南から）

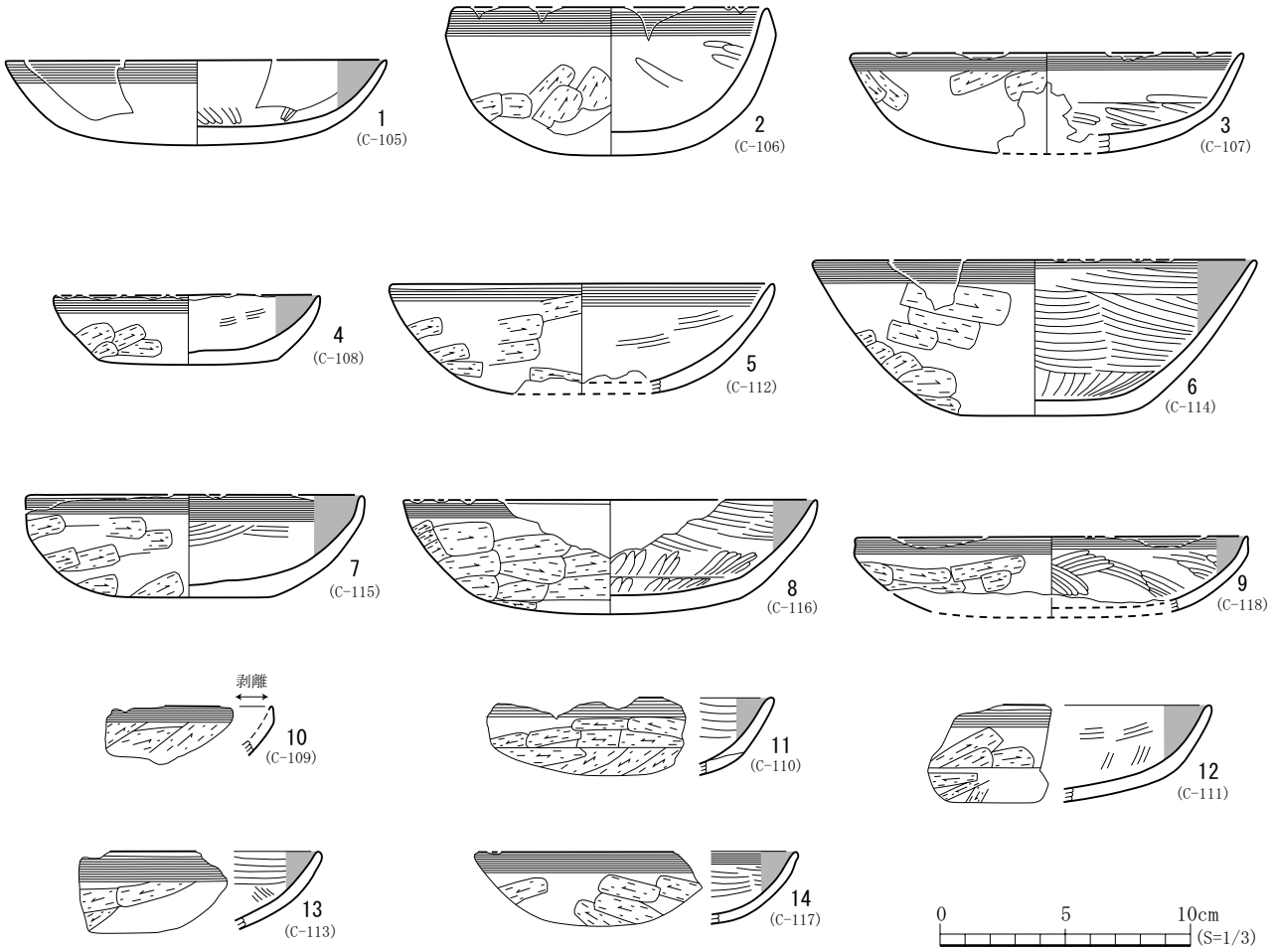
3．SI15 竪穴住居跡　カマド燃焼部下遺物出土状況（南から）

4．SI15 竪穴住居跡 カマド燃焼部及び煙道下・遺物出土状況（南から）

5．SI15 竪穴住居跡　カマド煙道～煙出断ち割り状況（西から）

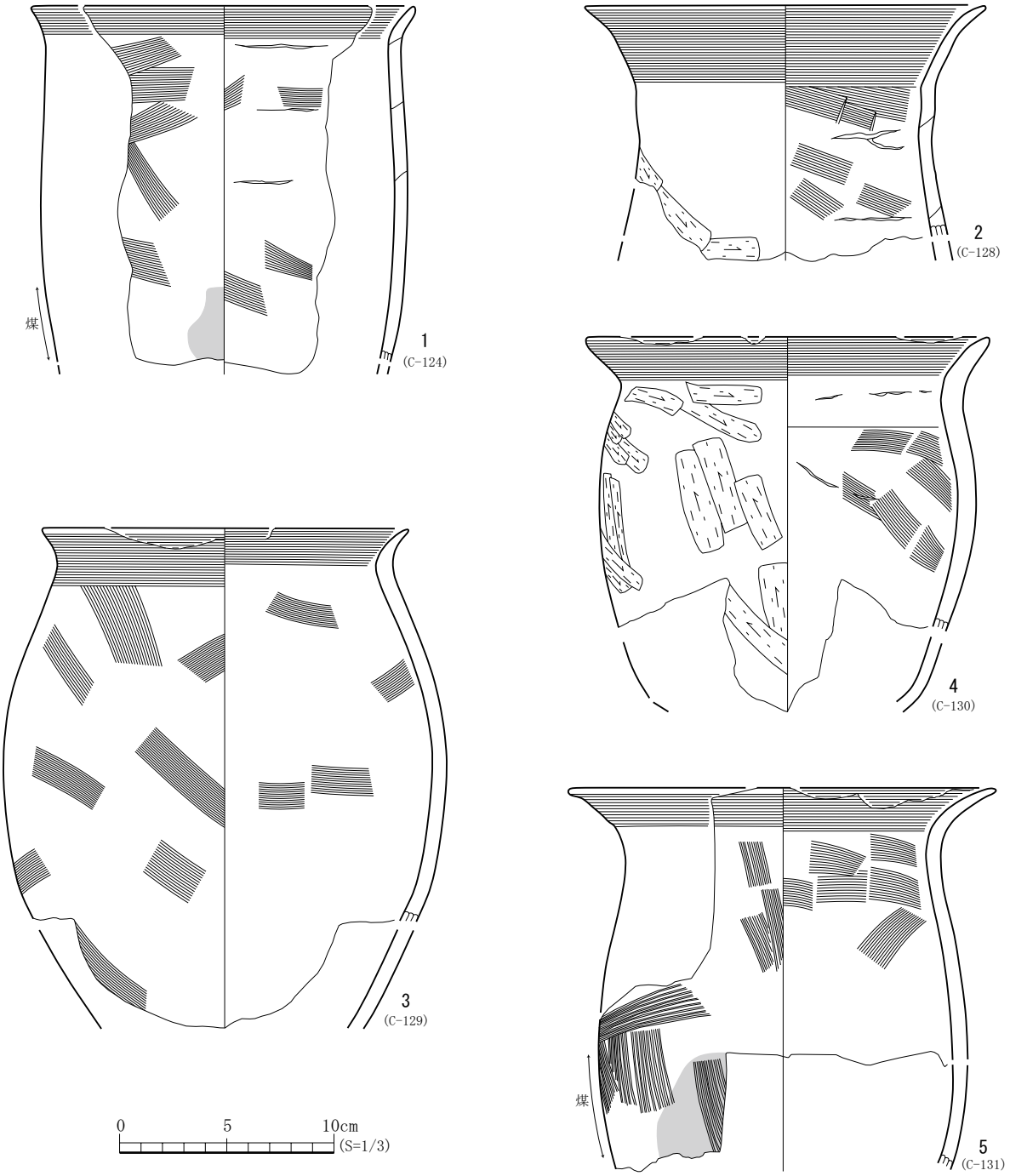
6．SI15 竪穴住居跡　床下 SD1 溝跡 完掘状況（南から）

第32図　SI15 竪穴住居跡（3）ー遺構写真図版ー



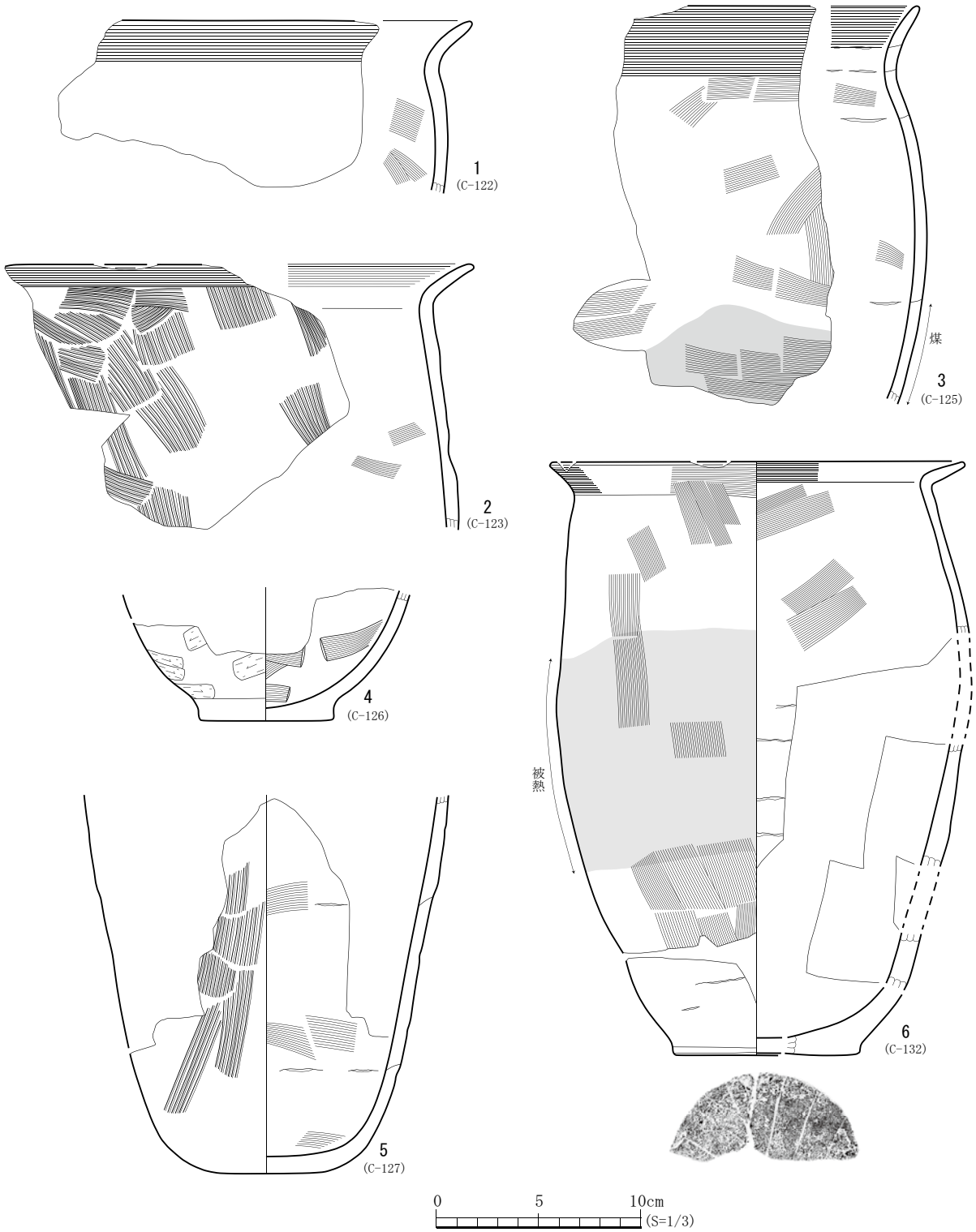
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI15 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部～胴部ヨコナデ・ヘラ削り？・底部ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(15.2)cm・器高3.4cm・器厚0.3～0.7cm	C-105
2	SI15 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・底部剥落のため不明、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・橙色(7.5YR7/6)、法量：口径(12.8)cm・器高5.9cm・器厚0.6～1.0cm、非内黒、ほぼ完形	C-106
3	SI15・カマド 燃焼部～煙道 埋土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ、色調：内外面・明赤褐色(5YR5/8)、法量：口径(15.8)cm・残存高4.0cm・器厚0.3～0.7cm、非内黒	C-107
4	SI15 床直上	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ？・胴部～底部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径10.6cm・器高2.8cm・器厚0.4～0.8cm	C-108
5	SI15・P3 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ？・胴部ヘラ削り・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ・磨滅、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・にぶい橙色(7.5YR6/4)、法量：口径15.4cm・残存高4.4cm・器厚0.4～0.7cm	C-112
6	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り・磨滅、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径17.8cm・器高6.2cm・底径5.7cm・器厚0.4～0.8cm、ほぼ完形	C-114
7	SI15 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)／黒色(10YR1.7/1)、内面・黒色(10YR1.7/1)、法量：口径13.5cm・器高4.1cm・底径5.9cm・器厚0.4～0.9cm、ほぼ完形	C-115
8	SI15 床面	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：内外面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(16.6)cm・器高4.6cm・器厚0.5～0.8cm	C-116
9	SI15・カマド 煙道埋土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・黒色(黒色処理かは不明)、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ・黒色処理、色調：内外面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(15.6)cm・残存高3.0cm・器厚0.2～0.6cm	C-118
10	SI15 掘方埋土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：磨滅のため不明、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・浅黄橙色(10YR8/4)、法量：器厚0.3～0.5cm	C-109
11	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・黒褐色(10YR3/1)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：残存高3.1cm・器厚0.4～0.6cm	C-110
12	SI15・外周溝 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ？・黒色処理・磨滅、色調：外面・橙色(7.5YR6/8)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：器厚0.4～0.6cm	C-111
13	SI15・P3 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/3)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：残存高3.3cm・器厚0.3～0.5cm	C-113
14	SI15 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り・黒色(黒色処理かは不明)、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラミガキ・黒色処理、色調：内外面・黒色(10YR2/1)、法量：残存高3.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-117

第33図　SI15 竪穴住居跡（4）－出土遺物１－



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI15・カマド燃焼部埋土	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、色調：外面・赤褐色(5YR4/6)、内面・明褐色(7.5YR5/8)、法量：口径(17.9)cm・残存高16.6cm・器厚0.3～0.6cm、外面：二次被熱による煤付着	C-124
2	SI15・カマド煙道埋土	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ、色調：外面・明赤褐色(5YR5/6)、内面・赤褐色(2.5YR4/6)、法量：口径18.8cm・残存高11.9cm・器厚0.5～1.1cm	C-128
3	SI15・カマド煙道埋土	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、色調：外面・にぶい橙色(7.5YR7/3)、内面・橙色(7.5YR6/8)、法量：口径(17.1)cm・残存高23.3cm・器厚0.3～0.7cm	C-129
4	SI15・カマド燃焼部～煙道埋土	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラナデ？・磨滅、色調：外面・橙色(5YR6/6)、内面・にぶい黄褐色(10YR5/3)、法量：口径(18.8)cm・残存高13.0cm・器厚0.5～1.0cm、外面：二次被熱による煤付着	C-130
5	SI15・カマド燃焼部埋土	土師器	甕	口縁部～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ、内面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・明黄褐色(10YR7/6)、法量：口径(20.0)cm・残存高17.9cm・器厚0.3～0.7cm、外面：煤付着	C-131

第34図　SI15 竪穴住居跡（5）－出土遺物２－

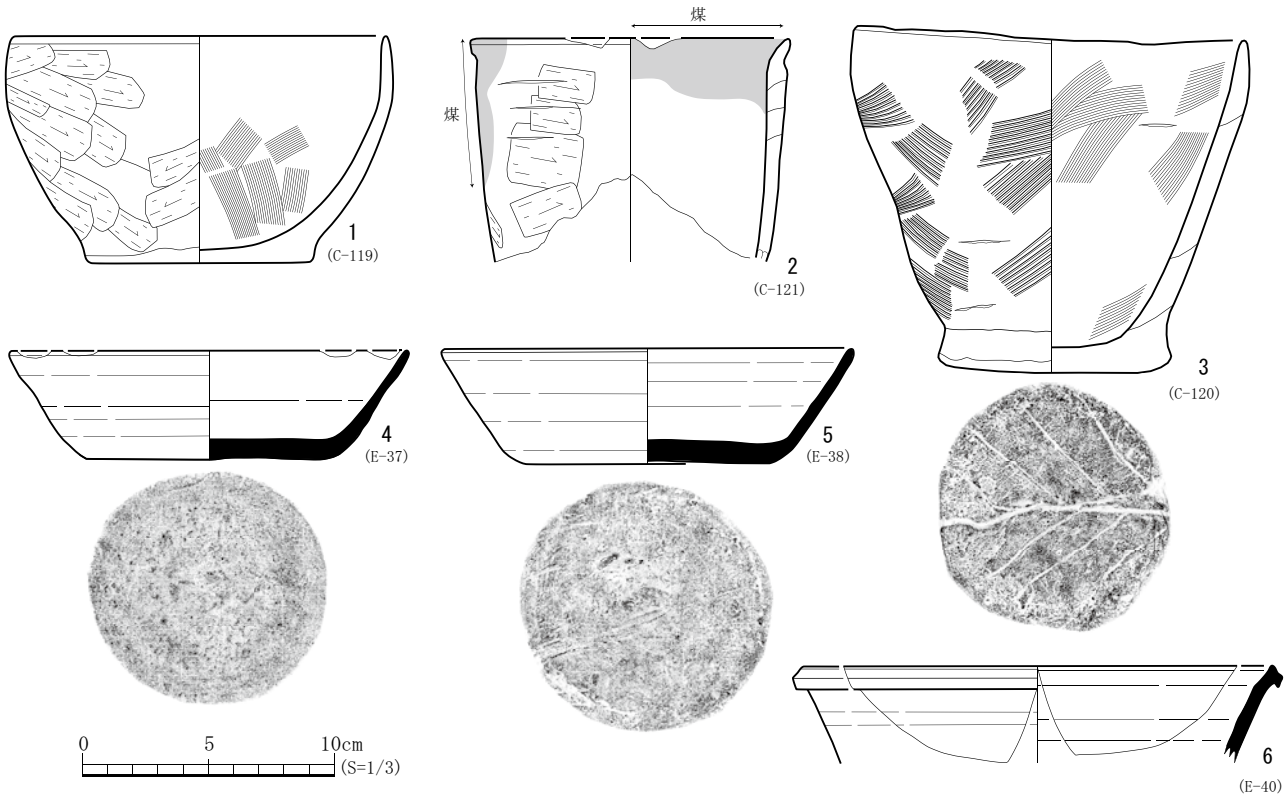


No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI15 堆積土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部磨滅のため不明、内面：口縁部ヨコナデ？・胴部ナデ・磨滅、色調：外面・赤褐色(5YR4/6)、内面・明赤褐色(2.5YR5/6)、法量：器厚0.5～0.7cm	C-122
2	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ハケメ、内面：口縁部ヨコナデ・ナデ？・磨滅、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、内面・橙色(7.5YR6/6)、法量：残存高13.0cm・器厚0.4～0.7cm	C-123
3	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	甕	口縁部 ～胴部	内外面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ、色調：外面・褐色(7.5YR4/6)、内面・明褐色(7.5YR5/6)、法量：残存高18.0cm・器厚0.4～0.7cm、外面：煤付着	C-125
4	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：ヘラ削り、内面：ヘラナデ・磨滅、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・明黄褐色(10YR6/6)、法量：底径6.5cm・残存高6.5cm・器厚0.6～1.4cm	C-126
5	SI15・カマド 燃焼部埋土	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：ハケメ・底部剥落のため不明、内面：ナデ？・磨滅、色調：外面・褐色(7.5YR4/4)、内面・明黄褐色(10YR6/6)、法量：底径(5.2)cm・残存高18.4cm・器厚0.7～1.0cm	C-127
6	SI15・カマド 燃焼部～煙道 埋土	土師器	甕	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ナデ？・底部木葉痕・磨滅、内面：ナデ？・磨滅、色調：外面・橙色(5YR7/8)／浅黄橙色(10YR8/4)／褐灰色(10YR5/1)、内面・浅黄橙色(10YR8/4)、法量：口径21.0cm・器高29.0cm・胴部径(20.4)cm・底径9.1cm・器厚0.4～1.1cm	C-132

第35図　SI15 竪穴住居跡（6）－出土遺物３－

第36図　SI15 竪穴住居跡（7）ー出土遺物 写真図版１ー

第37図　SI15 竪穴住居跡（8）－出土遺物 写真図版２－



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI15・カマド燃焼部埋土	土師器	鉢？	口縁部～底部	外面：ヘラ削り、内面：ナデ？・磨滅、色調：外面・明赤褐色(5YR5/6)、内面・明褐色(7.5YR5/8)、法量：口径(14.8)cm・器高9.0cm・底径8.6cm・器厚0.4～1.4cm	C-119
2	SI15 床面	土師器	筒形土器	口縁部～胴部	外面：ヘラ削り・磨滅・輪積痕残存、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい赤褐色(2.5YR5/4)、内面・明黄褐色(10YR7/6)、法量：口径(12.8)cm・残存高8.8cm・器厚0.4～0.8cm、内外面：煤付着	C-121
3	SI15 堆積土	土師器	鉢	口縁部～底部	外面：ハケメ・底部木葉痕・磨滅、内面：ナデ？・磨滅、色調：外面・にぶい赤褐色(5YR4/4)、内面・橙色(7.5YR6/6)、法量：口径15.5cm・器高13.2cm・底径9.1cm・器厚0.5～2.1cm	C-120
4	SI15 堆積土	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転ヘラ切り→ナデによる再調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・褐灰色(10YR6/1)、法量：口径(15.8)cm・器高4.3cm・底径(9.8)cm・器厚0.4～0.7cm	E-37
5	SI15 床面	須恵器	坏	口縁部～底部	外面：ロクロナデ・底部回転ヘラ切り→手持ちヘラ削り再調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・橙色(7.5YR6/6)、法量：口径(16.2)cm・器高4.6cm・底径(9.4)cm・器厚0.4cm	E-38
6	SI15 堆積土	須恵器	甕	口縁部	内外面：ロクロナデ、色調：内外面・褐灰色(10YR4/1)、法量：口径(18.6)cm・残存高3.8cm・器厚0.5cm	E-40

第38図　SI15 竪穴住居跡（9）－出土遺物４－

第39図　SI15 竪穴住居跡（10）－出土遺物 写真図版３－

【SI16　竪穴住居跡】（第 40～42 図）

〔位置〕北側東端の標高 21.4～22.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。

〔重複〕表土（約 20cm）直下で遺構を検出したが、残存状況が悪く、北西壁面と周溝部分しか残っていなかった。調査時、SI16 の堆積土が現代の撹乱と類似し、土に締まりがなかったことから、当初は撹乱として掘削を行ったが、掘削途中に住居跡であることが明らかとなったため、床面付近で住居跡プランを確認する形となった。そのため、隣接する SI17 との重複関係を確認することができなかった。

〔規模・平面形〕南－北 3.2m 以上、東－西 1.7m 以上。北西コーナーのみが残存する。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 12°傾く（N－12°－W）。

〔壁〕最も残りの良い箇所で、高さ 40cm 程度残存していた。

〔床面〕北西隅は掘方埋土、その他は地山を床としている。床面は多少の凸凹はあるが、ほぼ平坦である。

〔柱穴・ピット〕柱穴・ピットは 5 個(P1～5)検出し、床面ではピット 3 個(P1～3)検出した。いずれも柱痕跡はなく、直径 23～46cm の円形を呈し、深さ 8～28cm である。西壁付近ではピット 2 個(P4・5)検出した。P4 は削平される前、周溝上にあったものと思われる。直径 23×25cm の円形で、深さ 24cm、直径 10cm の柱痕跡が認められた。P5 は直径約 35cm の楕円形を呈し、検出面からの深さ 72cm である。柱痕跡は確認できなかった。P4・5 は位置的に見て、壁柱穴の可能性がある。

〔カマド〕確認できなかった。

〔周溝〕残存する部分は周壁に沿って掘り込まれていた。周溝は最大で上幅 58cm、下幅 23cm、床面からの深さ 24cm である。壁材痕跡は認められなかった。周溝の底面は多少凸凹はあるが、ほぼ平坦である。

〔堆積土〕堆積土は 1 層のみ確認できた。堆積土は褐灰色シルト土で、締まりはない。

〔出土遺物〕SI16 では非ロクロ成形の土師器 22 点（370g）【坏 10 点・甕 12 点】、須恵器 2 点（35g）【坏 1 点・甕 1 点】、鉄滓 3 点（215g）が出土した。遺物の出土地点・器種別でみてみると、**住居堆積土**から土師器坏 5 点（55g/内黒 5 点）・甕 9 点（100g）、**周溝堆積土**から土師器坏 5 点（60g/内黒 3 点・非内黒 2 点）・甕 3 点（155g）、須恵器坏 1 点（20g）・甕 1 点（5g）、鉄滓 3 点（215g）が出土した。このうち、住居堆積土出土の土師器坏（第 42 図 1・2）、周溝堆積土出土の土師器坏（第 42 図 3）・甕（第 42 図 4）を図示した。

【SI17　竪穴住居跡】（第 40・41 図）

〔位置〕北側東端の標高 21.1～21.4m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。

〔重複〕表土（約 20cm）直下で遺構を検出したが、残存状況は悪い。また、隣接する SI16 と同様、検出時は現代の撹乱として上層を掘削してしまったため、SI16 との重複関係は不明である。

〔規模・平面形〕南－北 3.4m 以上、東－西 2.1m 以上。SI16 同様、北西コーナーのみが残存する。平面形は隅丸方形の竪穴住居跡であると推定される。

〔主軸方向〕住居西辺が真北に対し、西に約 13°傾く（N－13°－W）。

〔壁〕最も残りの良い箇所で、高さ 30cm 程度残存していた。

〔床面〕地山を床面としており、多少の凸凹はあるが、ほぼ平坦である。

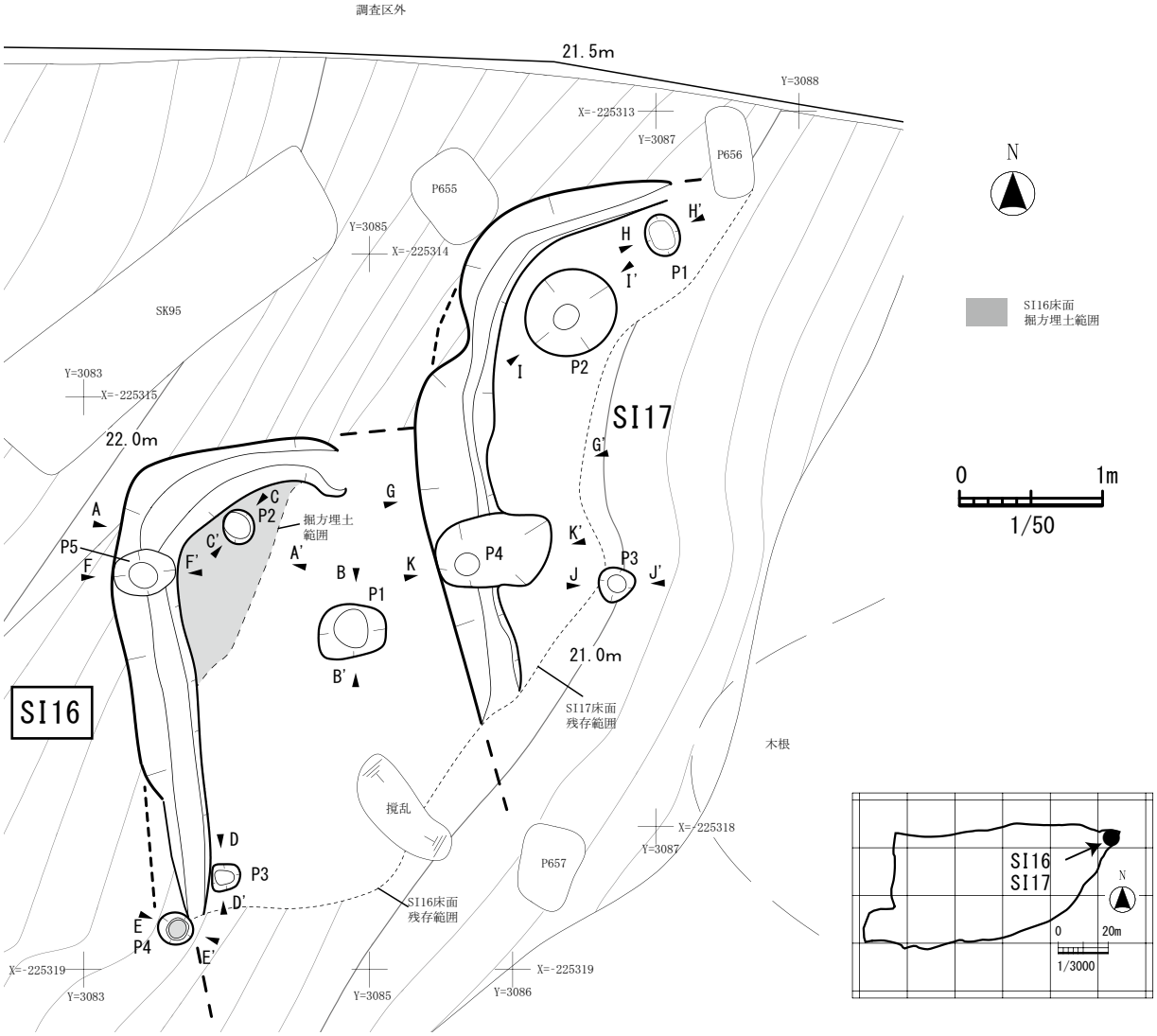
〔ピット〕ピット 4 個(P1～4)検出し、床面では 3 個(P1～3)検出した。すべて柱痕跡はなく、直径 25～60cm の円形～楕円形を呈し、深さは P1 が 4cm、P2 が 15cm、P3 が 22cm である。この他、西壁中央で 1 個(P4)検出した。48×60cm の楕円形を呈し、深さ 68cm である。柱痕跡は確認できなかった。位置的にみて壁柱穴の可能性がある。

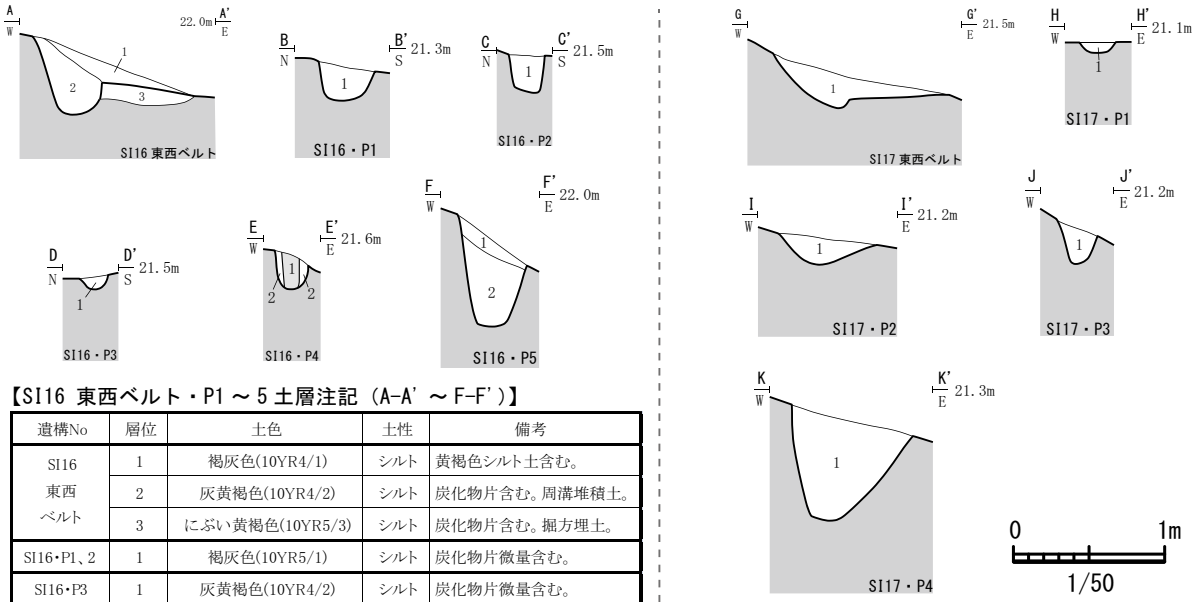
〔カマド〕確認できなかった。

〔周溝〕残存部分は周壁に沿って掘り込まれていた。最大で上幅 55cm、下幅 15cm、床面からの深さ 4cm。壁材痕跡は認められなかった。周溝の底面は地形に沿って北西端が最も高く、東・南に向かって低くなる。

〔堆積土〕堆積土は 1 層のみで、褐灰色シルト土である。SI16 同様、土に締まりがない。

〔出土遺物〕SI17 では非ロクロ成形の土師器 5 点（25g）【坏 2 点・甕 3 点】、須恵器 1 点（50g）、鉄滓 7 点（545g）が出土した。遺物の出土地点・器種別でみてみると、**住居堆積土**から土師器坏破片 2 点（5g/内黒？）・甕破片 1 点（5g）、**周溝堆積土**から土師器甕破片 2 点（15g）、**P4 堆積土**から須恵器鉢破片 1 点（50g）・鉄滓 7 点（545g）が出土した。いずれも小破片のため図示できたものはない。





【SI16 東西ベルト・P1～5 土層注記（A-A'～F-F'）】

遺構No	層位	土色	土性	備考
SI16 東西ベルト	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	黄褐色シルト土含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片含む。周溝堆積土。
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物片含む。掘方埋土。
SI16・P1、2	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SI16・P3	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片微量含む。
SI16・P4	1	褐灰色(10YR4/1)	粘質	柱痕跡。
	2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	掘方埋土。
SI16・P5	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片微量含む。

【SI17 東西ベルト・P1～4 土層注記（G-G'～K-K'）】

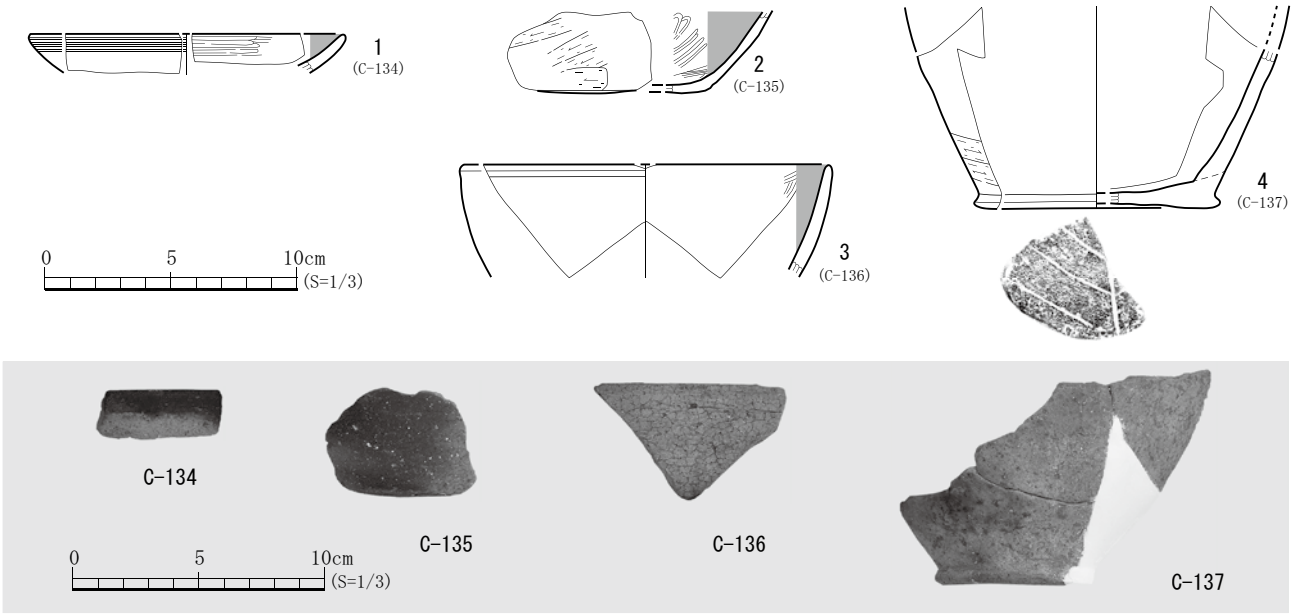
遺構No	層位	土色	土性	備考
SI17東西ベルト	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SI17・P1～4	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片少量含む。

第40図　SI16・17 竪穴住居跡（1）

1．SI16 竪穴住居跡
完掘状況（東から）

1．SI17 竪穴住居跡
完掘状況（南東から）

第41図　SI16・17 竪穴住居跡（2）



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SI16 堆積土	土師器	坏	口縁部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り？・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・黄橙色(10YR8/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(12.6)cm・残存高1.6cm・器厚0.4cm	C-134
2	SI16 堆積土	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：胴部ヘラ削り・底部ヘラ削り？・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)、内面・黒色(7.5YR2/1)、法量：残存高3.3cm・器厚0.3～0.4cm	C-135
3	SI16 周溝堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：磨滅のため不明、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・浅黄橙色(7.5YR8/6)、内面・黒色(7.5YR2/1)、法量：口径(14.5)cm・残存高4.5cm・器厚0.4～0.5cm	C-136
4	SI16 周溝堆積土	土師器	甕	胴部 ～底部	外面：ヘラ削り・底部木葉痕・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・明黄褐色(10YR7/6)、法量：底径(9.0)cm・残存高8.0cm・器厚0.5cm	C-137

第42図　SI16 竪穴住居跡　－出土遺物－

２．柱穴列跡、その他の柱穴・ピット

今回の調査では、152 個の柱穴跡・ピット（小穴）を検出した（P646～797）。これらの多くは、掘立柱建物や柱穴列などを構成する柱穴であったと考えられる。検出した 152 個の柱穴・ピットを検討した結果、柱穴列跡１条（SA1）を抽出することができた。以下、柱穴・ピットの調査方法、全体の特徴、柱穴列跡の認定基準とその詳細について記載する。

（１）柱穴・ピットの調査方法

今回の調査では、柱穴・ピットの一部の記録作成の省略（単層ないし柱痕跡のないピットの断面図作成の省略、一部の柱穴の断面写真撮影の省略）を行った。一方で、今後も建物の再検討ができる情報を記録・提示するために、柱痕跡の有無の確認、重複関係の確認、検出した柱穴・ピットすべての土層注記作成、底面標高の記録は徹底して行い、発掘調査報告書に検出した柱穴・ピットすべての情報（平面・属性表）を掲載することとした。

（２）柱穴・ピットの特徴

【柱穴・ピットの特徴】

柱穴・ピットの確認面は基本層Ｖa～c、Ⅶ層上面である。その規模・平面形は、長軸 16～90cm、短軸 7～64cm の円形・楕円形・隅丸方形・隅丸長方形・不整形を呈し、残存深は 3～85cm ほどである。検出した 152 個のうち、13 個で直径 12～30cm の柱痕跡を確認した。柱痕跡の大半は円形を呈する。

なお、それぞれの柱穴・ピットの規模、柱痕跡の有無、堆積土・埋土、重複関係等の特徴については、柱穴列跡の柱穴として認定したものは次項の第 43 図中の属性表、認定できなかった柱穴・ピットは第６表にまとめた。

【柱穴・ピットの分布範囲】

柱穴・ピットは、調査区内で分布密度に濃淡がある。西側谷部②の斜面裾部に集中しており、急斜面では閑散としている状況である。北側頂部の緩斜面では焼成土坑はみられるが、ピットは確認できなかった。他遺構の残存状況から頂部が大きく削平されている可能性は低いため、もともとピット等の他遺構は造られなかったと思われる。

最も多くの柱穴・ピットを検出した西側の「谷部②」では、基本層「土層 4」（第５図参照）に示すように２面の遺構面を確認した。第１面の検出面は黒色を呈する遺物包含層（基本層Ｖa～c 層）の上面、第２面の検出面は遺物包含層直下の地山（基本層Ⅶ層）の上面である。なお、第１面検出の遺構覆土は、遺物包含層の堆積土と類似していたため、その識別が非常に困難であった。したがって、第２面で検出した柱穴・ピットの中には、第１面上面で認識できなかった遺構を第２面で検出したものも含まれている可能性がある。

（３）建物の認定

今回の調査で検出した柱穴・ピットにより構成される建物について、現地調査の段階で、柱通り・柱の対応関係を考慮し、繰り返し検討を行った。その結果、南北ないし東西方向で柱軸が通るものは数例抽出することはできたが、その柱列に対応する柱穴・ピットを確認することができず、建物を認定するまでには至らなかった。また、柱軸が通るものの中で、柱穴列跡として認定できたものは１条（SA1）のみであった。西側「谷部②」の斜面裾部には柱穴・ピットが多く分布する。今回の検討では、建物抽出には至らなかったが、柱穴・ピットの存在から、この範囲に何らかの建物が存在していた可能性は高いと考えられる。

（４）柱穴列跡

南側中央で１条（SA1）検出した。以下、その概要について説明する。

【SA1 柱穴列跡】（第 43 図）

［位置］　南側中央の標高 22.2～22.4m の緩斜面で確認した。柱穴列は等高線に平行して並び、比較的緩やかな平場に造られている。この平場は、柱穴列を構築する際、北側の斜面を削り、造り出されたと考えられる。東西方向約 20m、南北方向約 5m の範囲が緩やかになっている。検出面は基本層Ⅶd 層である。

［重複］　なし。柱穴の重複は見られないが、柱間がまちまちであることから、幾度かの造り変えを行っている可能性が考えられる。

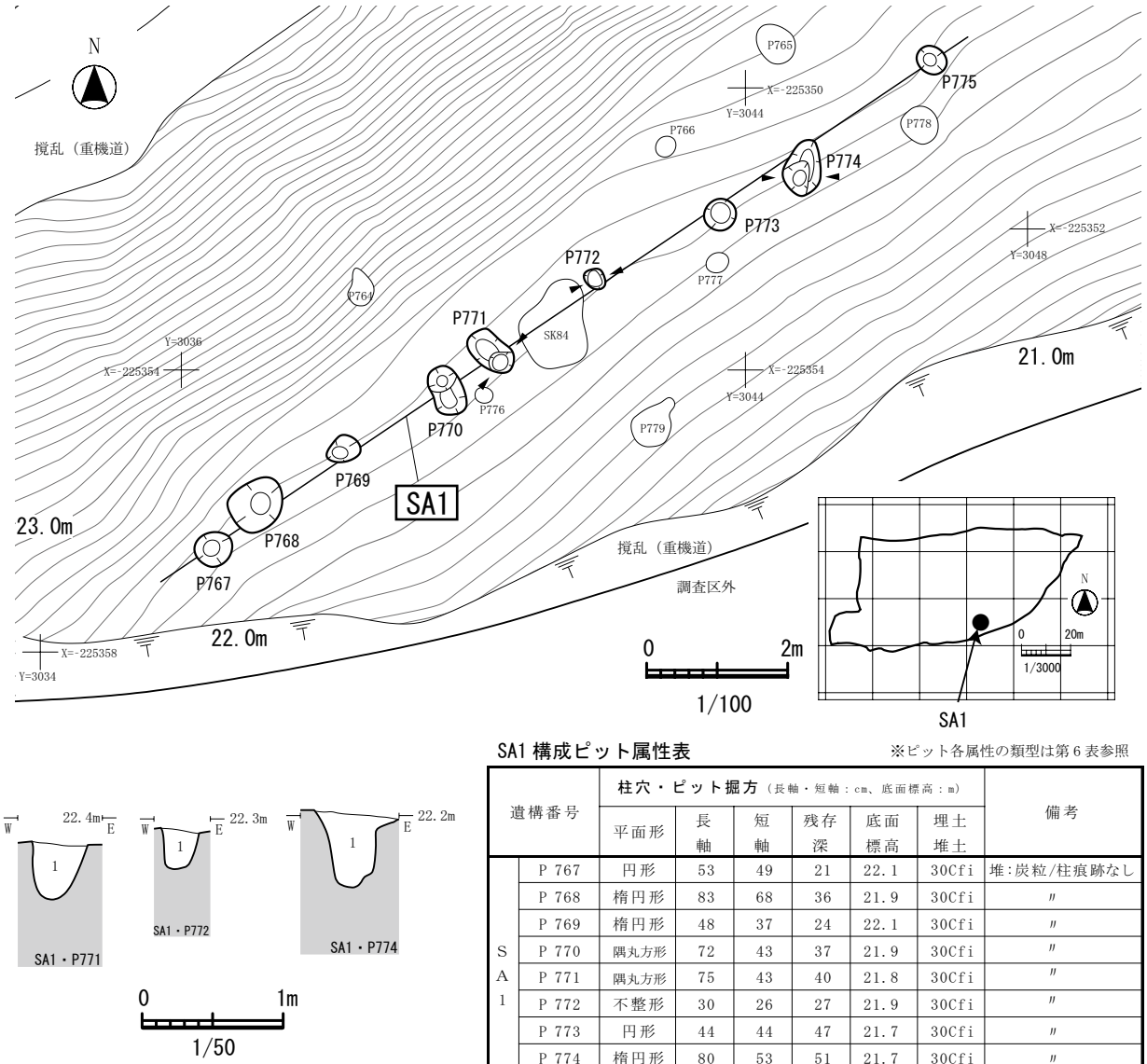
［構成 Pit］　P767～775

［規模］　８間・12.5m 、柱穴の底面標高は 21.7m～22.1m である。

［柱間寸法］　1.0～2.5m

［方向］　**東西**　真北に対し、東に約 56.0°傾く（N－56.0°－E）。

［出土遺物］　なし。



SA1 構成ピット属性表　　※ピット各属性の類型は第６表参照

遺構番号		柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						備考
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土堆土	
SA1	P 767	円形	53	49	21	22.1	30Cfi	堆:炭粒/柱痕跡なし
	P 768	楕円形	83	68	36	21.9	30Cfi	〃
	P 769	楕円形	48	37	24	22.1	30Cfi	〃
	P 770	隅丸方形	72	43	37	21.9	30Cfi	〃
	P 771	隅丸方形	75	43	40	21.8	30Cfi	〃
	P 772	不整形	30	26	27	21.9	30Cfi	〃
	P 773	円形	44	44	47	21.7	30Cfi	〃
	P 774	楕円形	80	53	51	21.7	30Cfi	〃
	P 775	円形	43	37	33	21.9	30Cfi	〃

第43図　SA1 柱穴列跡

（５）その他の柱穴・ピット（第 9-1～4・44・45 図、第 5・6 表）

前項（２）～（４）で示したとおり、今回確認した柱穴・ピット 152 個のうち、柱穴列として認定できたものはわずか 9 個であり、ほとんどの性格を判断することができなかった。柱穴・ピット全体の特徴については、前項（２）に記載したとおりである。柱穴列から漏れた柱穴・ピット個別の情報は、前述のとおり、今後もさらなる検討が加えられるよう、規模・堆積土・出土遺物などのデータを第 6 表にまとめた。

柱穴列跡以外の柱穴・ピットからは、縄文土器・弥生土器・土師器・鉄滓が出土した。遺物が出土した遺構とその内容については第 5 表のとおりである。

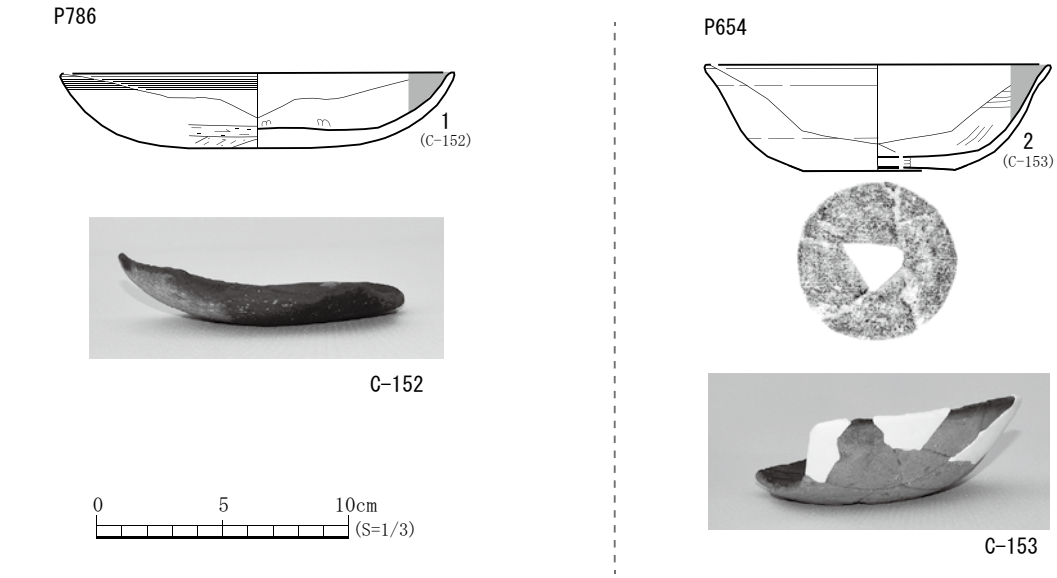
出土状況からみて、そのほとんどは周辺から流入したものとみられる。

このうち、図示できたものは、P786 堆積土出土の非ロクロ成形の土師器坏 1 点（第 44 図 1）、P654 堆積土出土のロクロ成形の土師器坏 1 点（第 44 図 2）である。

第5表　その他の柱穴･ピット出土遺物一覧

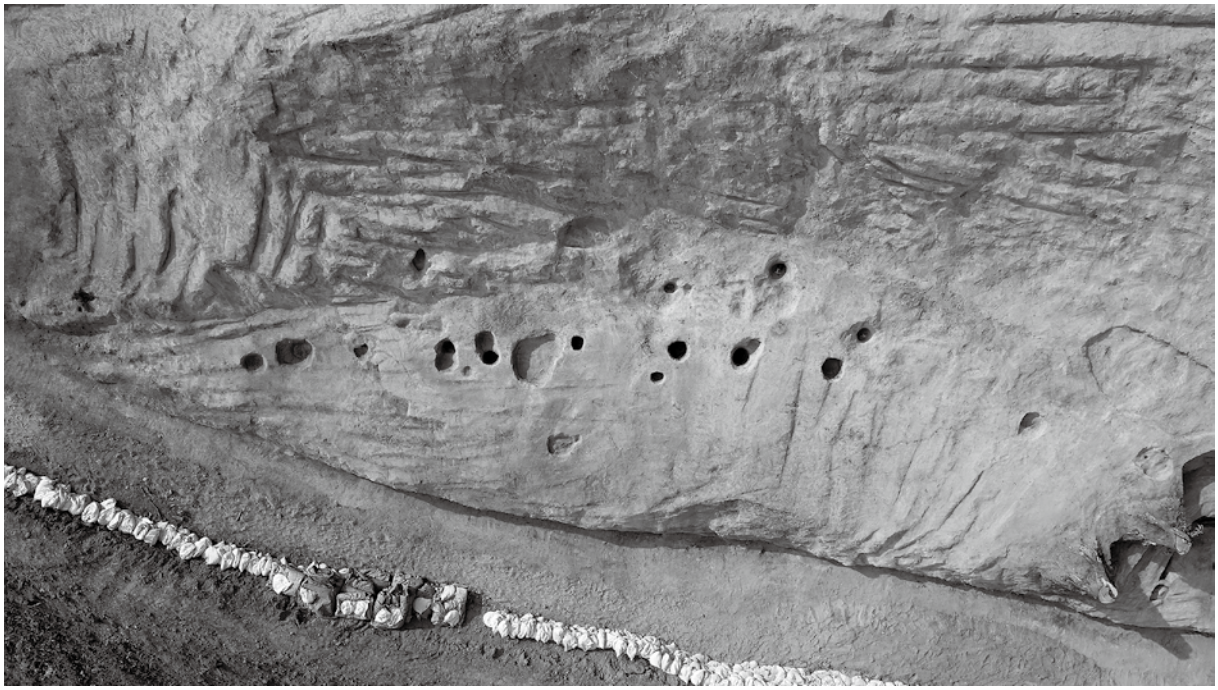
遺構名	出土層位	種類	器種	点数	質量(g)
P654	堆積土	鉄滓	－	1	35
		土師器	坏	4	85
			甕	2	10
P664	堆積土	土師器	坏	5	35
P679	堆積土	土師器	甕	3	40
P698	1層	土師器	甕	3	10
P707	堆積土	土師器	甕	1	5
P714	堆積土	縄文土器	深鉢	2	10
P718	堆積土	土師器	坏	1	5
		土師器	甕	3	20
P719	堆積土	土師器	坏	1	5
		土師器	甕	6	35
P723	堆積土	土師器	坏	2	10
		土師器	甕	1	5
P724	堆積土	縄文土器	深鉢	1	5
P725	堆積土	土師器	甕	2	5
P726	堆積土	土師器	甕	2	15
P730	堆積土	縄文土器	深鉢	2	15
P731	堆積土	土師器	甕	2	15
P732	堆積土	縄文土器	深鉢	2	20
P733	堆積土	縄文土器	深鉢	4	10
P734	堆積土	縄文土器	深鉢	5	25
P735	堆積土	土師器	甕	3	30
		弥生土器	鉢	1	5

遺構名	出土層位	種類	器種	点数	質量(g)
P736	堆積土	土師器	坏	1	5
		土師器	甕	11	255
P737	堆積土	土師器	坏	3	15
		土師器	甕	5	30
P741	堆積土	土師器	坏	1	25
P744	堆積土	縄文土器	深鉢	4	30
P745	堆積土	土師器	坏	1	5
		土師器	甕	2	20
P747	堆積土	弥生土器	壺？	1	10
P748	堆積土	土師器	坏	2	15
		土師器	甕	2	10
P754	堆積土	土師器	甕	2	5
P760	堆積土	土師器	坏	1	10
P761	堆積土	土師器	坏	2	5
		土師器	甕	9	35
P762	堆積土	土師器	坏	2	20
		土師器	甕	3	10
P763	堆積土	土師器	甕	1	5
P786	堆積土	土師器	坏	2	80
P788	堆積土	土師器	甕	2	20
P789	堆積土	土師器	甕	8	250
P791	堆積土	土師器	甕	1	5
P797	堆積土	土師器	甕	6	70



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	P786 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部下半～底部ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(15.4)cm・器高3.0cm・底径(5.0)cm・器厚0.4cm	C-152
2	P654 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・橙色(7.5YR6/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(13.6)cm・器高4.2cm・底径(6.0)cm・器厚0.2～0.3cm	C-153

第44図　その他の柱穴・ピット出土遺物



1．SA1 柱穴列跡　完掘状況（上が北）

2．西側谷部②柱穴・ピット群　完掘状況（上が北）

第45図　SA1柱穴列跡 及び 西側谷部②柱穴・ピット群

第6－1表　日向遺跡2次調査　ピット・柱穴跡属性表（P646～720）

遺構番号	種類	柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
P 646	小穴	楕円形	57	42	43	23.0	6Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒・焼粒
P 647	小穴	楕円形	40	30	18	23.1	1層:13Ah 2層:4Ah	－	－	－	－	－	
P 648	小穴	円形	31	27	5	23.5	23Ah＋29Ab	－	－	－	－	－	
P 649	小穴	円形	29	27	10	23.4	23Ah＋29Ab	－	－	－	－	－	
P 650	小穴	円形	35	32	32	22.6	9Ah	－	－	－	－	－	SK93より古
P 651	小穴	楕円形	(30)	23	17	22.7	9Ah	－	－	－	－	－	SK93より古
P 652	小穴	円形	28	23	30	22.0	9Ah	－	－	－	－	－	
P 653	小穴	円形	28	25	31	23.0	9Ah	－	－	－	－	－	
P 654	小穴	隅丸方形	65	52	80	22.9	9Ah	－	－	－	－	－	土師器、鉄滓
P 655	柱穴	隅丸方形	62	50	85	20.9	切穴:12Bg 掘穴:13Ah	円形	30	27	10B	あ	
P 656	小穴	隅丸長方形	65	29	42	20.8	12Bg	－	－	－	－	－	
P 657	小穴	隅丸長方形	55	41	50	20.4	1層:24Ah 2層:16Ah 3層:12Ai 4層:16Bh	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 658	柱穴	円形	33	30	30	27.6	掘穴:6A g	円形	15	15	4Ag	あ	
P 659	小穴	円形	23	20	5	27.5	1Ah	－	－	－	－	－	
P 660	小穴	円形	43	38	10	27.5	1Ah	－	－	－	－	－	SK66・P702・P703より古
P 661	小穴	円形	18	18	5	27.1	3Ah	－	－	－	－	－	
P 662	小穴	楕円形	48	38	25	26.9	1層:1Ag 2層：3Ag	－	－	－	－	－	SD5より古
P 663	小穴	円形	25	23	22	26.8	1層:5Ah 2層:3Ah	－	－	－	－	－	P712より新
P 664	小穴	円形	21	20	7	27.2	5Ag	－	－	－	－	－	P711より新、土師器
P 665	小穴	円形	20	18	7	27.3	6Ag	－	－	－	－	－	
P 666	小穴	円形	25	20	25	27.0	4Ahg	－	－	－	－	－	
P 667	小穴	円形	30	25	34	27.6	1層:16Ai 2層:5Ah	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 668	小穴	円形	24	22	16	27.8	16Ah	－	－	－	－	－	
P 669	小穴	楕円形	50	42	18	217.5	1Ah	－	－	－	－	－	P696より新
P 670	小穴	円形	26	23	28	27.3	1層:5Ag 2層:4Ah	－	－	－	－	－	
P 671	小穴	円形	21	20	28	27.3	5Ag	－	－	－	－	－	
P 672	小穴	円形	25	19	7	27.2	23Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 673	柱穴	円形	20	19	10	27.2	掘穴:12Ag	円形	15	15	12A 6A	あ	
P 674	小穴	円形	23	21	12	26.9	5Ah	－	－	－	－	－	
P 675	小穴	円形	23	20	18	26.5	23Ah	－	－	－	－	－	
P 676	小穴	円形	21	21	10	26.4	21Ah	－	－	－	－	－	
P 677	小穴	円形	20	20	10	26.3	21Ah	－	－	－	－	－	
P 678	小穴	円形	23	20	16	25.8	23Ah	－	－	－	－	－	
P 679	小穴	楕円形	50	40	13	25.8	23Ah＋12Ah	－	－	－	－	－	土師器
P 680	小穴	不整形	55	40	20	26.0	21Bg	－	－	－	－	－	P721より新
P 681	小穴	円形	43	40	23	25.4	21Ah	－	－	－	－	－	P738より新
P 682	小穴	円形	29	27	26	28.4	6Ch	－	－	－	－	－	
P 683	柱穴	円形	33	30	28	28.8	掘埋:15Ch	円形	20	20	10A	う	
P 684	小穴	円形	27	17	14	29.0	15Ch	－	－	－	－	－	SD1より古
P 685	柱穴	円形	36	34	50	28.9	掘埋1:11Ch 掘埋2:15Ch	円形	23	23	16C	あ	
P 686	小穴	円形	28	26	20	29.8	15Ch	－	－	－	－	－	
P 687	小穴	円形	38	37	37	29.8	15Ch	－	－	－	－	－	
P 688	小穴	円形	40	36	14	20.2	1層:22Ch 2層:5Ch	－	－	－	－	－	
P 689	小穴	円形	24	20	13	28.9	2Cg	－	－	－	－	－	
P 690	小穴	楕円形	41	30	25	28.7	2Cg	－	－	－	－	－	
P 691	小穴	円形	26	21	11	28.0	16Cg	－	－	－	－	－	SD2より新
P 692	小穴	円形	30	27	20	27.8	1層:5・16C g 2層:5Cg	－	－	－	－	－	
P 693	小穴	円形	33	30	20	27.6	5Cg	－	－	－	－	－	
P 694	小穴	円形	21	20	32	27.8	15Ah	－	－	－	－	－	SD2より新
P 695	小穴	円形	29	27	42	27.6	1層:9＋18Ch 2層:5Ch	－	－	－	－	－	
P 696	小穴	円形	29	29	13	27.6	9Ch＋17Ah	－	－	－	－	－	P669より古
P 697	小穴	楕円形	43	36	24	27.2	9Ch＋17Ah	－	－	－	－	－	
P 698	小穴	円形	26	26	21	26.8	14Ah	－	－	－	－	－	土師器
P 699	小穴	円形	17	12	8	27.9	1層:4Cg 2層:9Cg	－	－	－	－	－	
P 700	小穴	円形	24	24	30	27.0	16Ch	－	－	－	－	－	

遺構番号	種類	柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
P 701	小穴	不整形	30	20	12	27.1	16Ag	－	－	－	－	－	
P 702	小穴	円形	21	21	18	27.7	25Ag＋8Ah	－	－	－	－	－	SK66、P660より新
P 703	柱穴	円形	33	28	30	27.5	切穴:25Ag＋8Ah 掘穴:3Ag	円形	12	12	25A	い	P660より新
P 704	小穴	円形	36	31	10	27.5	25Ag＋8Ah	－	－	－	－	－	
P 705	小穴	円形	16	7	16	17.3	25Ag＋8Ah	－	－	－	－	－	
P 706	柱穴	円形	33	28	15	27.1	切穴:5Ah 掘穴:7Ag	円形	15	14	12A	あ	
P 707	柱穴	円形	36	35	32	27.4	掘穴1:5Ag＋13Ag 掘穴2:9Ah	円形	20	17	11A 16A	い	土師器
P 708	小穴	円形	42	37	14	27.7	5Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 709	小穴	円形	37	33	13	27.6	5Ag	－	－	－	－	－	
P 710	小穴	円形	40	37	9	27.9	23Ah	－	－	－	－	－	
P 711	小穴	楕円形	59	44	30	27.4	1層:5Ah 2層:7Ah	－	－	－	－	－	P664より古
P 712	小穴	楕円形	50	36	17	27.4	1層:5Ah 2層:6Ah	－	－	－	－	－	P663より古
P 713	小穴	楕円形	25	20	22	27.1	24Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 714	小穴	円形	26	22	35	26.6	24Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒、縄文土器
P 715	小穴	円形	30	26	34	26.6	24Am	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 716	小穴	円形	(30)	35	20	26.4	21Ai	－	－	－	－	－	SK67より古、堆:炭粒
P 717	小穴	円形	35	34	26	26.4	21Ai	－	－	－	－	－	SK67より古、堆:炭粒
P 718	小穴	楕円形	50	38	23	26.2	1層:21Ai 2層:19Ai	－	－	－	－	－	P719より新 堆:炭粒、土師器
P 719	小穴	楕円形	61	45	23	26.1	抜穴:23Ah 掘穴:12Ag	－	－	－	－	－	P718より古、土師器
P 720	小穴	円形	(19)	30	5	26.5	5Ag＋13Ag	－	－	－	－	－	SD4より古

●ピット（柱穴・小穴）類型

【柱類型】

あ：柱痕跡が柱穴掘方底面に接するもの

い：柱痕跡が柱穴掘方底面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴掘方底面よりさらに下に延びるもの

【柱痕跡・堀方の埋土・堆積土類型】

■土色

1：黒褐色（10YR3/1）　2：黒褐色（10YR3/2）　3：暗褐色（10YR3/3）
4：褐灰色（10YR4/1）　5：灰黄褐色（10YR4/2）　6：にぶい黄褐色（10YR4/3）
7：褐色（10YR4/4）　8：褐色（10YR4/6）　9：褐灰色（10YR5/1）
10：灰黄褐色（10YR5/2）　11：にぶい黄褐色（10YR5/3）　12：にぶい黄褐色（10YR5/4）
13：黄褐色（10YR5/6）　14：灰黄褐色（10YR6/2）　15：にぶい黄橙色（10YR6/4）
16：明黄褐色（10YR6/6）　17：明黄褐色（10YR6/8）　18：黄橙色（10YR8/8）
19：黒褐色（7.5YR2/2）　20：黒褐色（7.5YR3/1）　21：黒褐色（7.5YR3/2）
22：暗褐色（7.5YR3/3）　23：褐灰色（7.5YR4/1）　24：褐色（7.5YR4/6）
25：褐灰色（7.5YR5/1）　26：にぶい褐色（7.5YR5/4）　27：明褐色（7.5YR5/6）
28：橙色（7.5YR6/6）　29：明褐灰色（7.5YR7/2）　30：赤灰色（2.5YR5/1）

※＋@の@はブロック状に混入するもの

■土性

A：シルト　B：砂質シルト　C：粘土質シルト

■混入物

a：地山ブロック多量含む　b：地山ブロック含む　c：地山ブロック少量含む
d：地山ブロック微量含む　e：地山粒子多く含む　f：地山粒子含む
g：地山粒子少量含む　h：地山粒子微量含む　i：その他

※iを選択した場合は備考欄に堆積土混入物を記載

炭化物粒子　→　炭粒　　焼土粒子　→　焼粒

【記載例】1Aa→土色：黒褐色（10YR3/1）土性：シルト　混入物：地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値

・（数値）は推定値を示す

■柱穴・ピット掘欄の「埋土・堆土（堆積土）」記載事項

・柱穴の場合は「掘方埋土」を意味する

・「1層・2層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が2層以上に分層した場合を示す

・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・堆積土／「抜穴1」：抜き取り穴1層の埋土・堆積土

・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・堆積土／「切穴1」：切き取り穴1層の埋土・堆積土

■備考欄の記載事項

・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの

・この他、重複関係・出土遺物を記載

第6－2表　日向遺跡2次調査　ピット・柱穴跡属性表（P721～797）

遺構番号	種類	柱穴・ピット掘方（長軸・短軸：cm、底面標高：m）						柱痕跡				柱類型	備考（重複・出土遺物等）
		平面形	長軸	短軸	残存深	底面標高	埋土 堆土	平面形	長軸	短軸	堆土		
P 721	小穴	円形	(43)	55	16	26.4	24Ai	－	－	－	－	－	P680より古、堆:炭粒
P 722	小穴	楕円形	48	36	11	26.2	20Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 723	小穴	楕円形	60	42	9	26.2	21Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒、土師器
P 724	小穴	円形	44	42	5	26.1	24Ai	－	－	－	－	－	P725より新、縄文土器 堆:炭粒
P 725	小穴	円形	30	27	16	26.4	24Ai	－	－	－	－	－	P724より古、土師器 堆:炭粒
P 726	小穴	楕円形	57	36	14	25.8	21Ai	－	－	－	－	－	SD4より新、土師器 堆:炭粒
P 727	小穴	円形	68	55	15	26.0	21Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 728	小穴	円形	50	45	21	26.0	20Ag	－	－	－	－	－	P729より古
P 729	小穴	楕円形	36	29	8	26.0	21Abi	－	－	－	－	－	P728より新 堆:炭粒
P 730	小穴	円形	47	45	10	25.9	21Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒、縄文土器
P 731	小穴	楕円形	47	37	22	26.0	2Ag	－	－	－	－	－	P732より古、土師器
P 732	小穴	円形	47	31	36	25.8	1層:23Ah＋13Ag 2層:4Ah 3層:5Ah	－	－	－	－	－	P731より新 縄文土器
P 733	小穴	円形	70	64	21	25.9	20Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒、縄文土器
P 734	小穴	楕円形	90	54	14	25.9	24Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒、縄文土器
P 735	柱穴	円形	65	62	44	25.4	新 掘穴1:16Ah＋4Ag 掘穴2：6Ah	円形	22	20	4B	い	SD6・P736より新、立て替えの可能性あり 新柱痕底面標高(25.6m) 弥生土器、土師器
	小穴	－	－	－	－	－	古 抜穴:1Ah 掘穴:12Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒・焼粒
P 736	小穴	楕円形	75	57	37	25.4	23Ag＋13Ag	－	－	－	－	－	SD6より新、P735より古、土師器
P 737	小穴	円形	65	58	14	25.7	23A＋13Ag	－	－	－	－	－	土師器
P 738	小穴	楕円形	33	25	23	26.0	1層:20Ai 2層:21Ah 3層:19Ah	－	－	－	－	－	P681より古
P 739	小穴	楕円形	69	62	27	26.2	21Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 740	小穴	円形	31	29	29	25.9	1層:23Ah＋13Ah 2層:20Ah 3層:21Ah	－	－	－	－	－	SD7・P783より新
P 741	小穴	楕円形	52	42	27	25.8	抜穴:21Ai 掘穴:3Ah	－	－	－	－	－	P742より古、土師器 堆:炭粒
P 742	小穴	円形	31	31	23	25.8	11Ah＋28Ah	－	－	－	－	－	P741より新
P 743	小穴	楕円形	40	34	25	25.6	1層:23Ah＋13Ah 2層:20Ah 3層:21Ah	－	－	－	－	－	
P 744	柱穴	円形	61	56	37	25.3	抜穴1:23Ai 抜穴2:20Ai 抜穴3:4Ah 掘穴:4Ah	円形	24	22	6A	う	P745より新 堆:炭粒・焼粒 縄文土器
P 745	小穴	円形	61	61	34	25.3	4Ah＋11Ag	－	－	－	－	－	P744より古、土師器
P 746	小穴	円形	33	29	15	25.4	1層:12Ai 2層:5Ah	－	－	－	－	－	SK71より新 堆:炭粒・焼粒
P 747	小穴	楕円形	70	63	14	25.1	1層:10Ah＋12Ah 2層:4Ah	－	－	－	－	－	弥生土器
P 748	小穴	不整形	60	39	18	24.7	16Ai	－	－	－	－	－	SD10・P749より新 土師器
P 749	小穴	隅丸方形ﾀ	(45)	50	14	24.9	16Ah	－	－	－	－	－	SD10より新、P748より古
P 750	柱穴	楕円形	57	41	8	27.5	23Ai	円形	23	20	23A	う	堆:炭粒
P 751	小穴	円形	49	46	3	27.5	23Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 752	小穴	円形	36	36	9	27.4	23Ai	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 753	小穴	円形	30	30	19	27.3	5Ai	－	－	－	－	－	S19より新、P754より古、堆:炭粒
P 754	小穴	円形	36	34	16	27.3	12Ai	－	－	－	－	－	S19・P753より新 堆:炭粒、土師器
P 755	小穴	円形	30	28	35	27.0	1層:10Agi 2層:14Bg	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 756	小穴	円形	26	22	11	27.1	14Ag	－	－	－	－	－	
P 757	小穴	楕円形	65	50	13	26.6	4Agi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 758	小穴	円形	41	39	12	25.6	4Agi	－	－	－	－	－	
P 759	小穴	円形	26	23	20	25.4	4Agi	－	－	－	－	－	
P 760	小穴	円形	60	54	23	24.7	1層:12Ai 2層:5Ai 3層:7Ah	－	－	－	－	－	SK72・73より新、土師器 堆:炭粒・焼粒
P 761	小穴	楕円形	17	12	16	24.9	24Ci	－	－	－	－	－	土師器
P 762	小穴	楕円形	34	25	10	24.4	20Ai	－	－	－	－	－	S113・14より新 堆:炭粒、土師器
P 763	小穴	楕円形	52	45	17	22.9	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒、土師器
P 764	小穴	不整形	54	39	30	22.8	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 765	小穴	楕円形	60	50	42	22.2	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 766	小穴	円形	30	27	18	22.1	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 776	小穴	円形	25	22	8	22.1	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 777	小穴	円形	33	27	13	21.9	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 778	小穴	円形	53	53	43	21.8	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 779	小穴	不整形	78	52	15	21.6	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 780	小穴	楕円形	62	56	25	21.6	30Cfi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 781	小穴	円形	26	25	25	21.1	1Ai	－	－	－	－	－	S115より新、堆:炭粒
P 782	小穴	円形	44	38	11	21.4	23Ag	－	－	－	－	－	S115より新
P 783	小穴	楕円形	70	44	33	25.7	21Ah	－	－	－	－	－	SD7、P740・784より古
P 784	小穴	円形	30	28	29	25.6	23Ah	－	－	－	－	－	P783より新 SD7、P785より古
P 785	小穴	楕円形	32	24	38	25.4	21Ah	－	－	－	－	－	P784より新
P 786	小穴	円形	34	30	6	19.8	3Agi＋16Ag	－	－	－	－	－	S115より新、土師器 堆:炭粒
P 787	小穴	円形	48	46	10	19.7	3Ai	－	－	－	－	－	S115、P788・789より新、堆:炭粒・焼粒
P 788	小穴	楕円形	(40)	35	12	19.7	3Ai	－	－	－	－	－	S115・P789より新 P787より古、土師器 堆:炭粒・焼粒
P 789	小穴	円形	(62)	(62)	22	19.7	3Ai	－	－	－	－	－	P787・788より古 S115より新、土師器 堆:炭粒・焼粒
P 790	柱穴	円形	47	36	18	22.8	切穴:5Ah＋12Ah 掘穴:13Ag	円形	22	20	1A	あ	
P 791	柱穴	円形	43	38	27	22.4	掘穴13Ag	円形	25	23	1A	あ	土師器
P 792	小穴	円形?	(43)	58	30	23.2	抜穴:16Ag＋5Ag 掘穴1:16A＋2Ag 掘穴2:5Ag	－	－	－	－	－	SK89より新
P 793	小穴	楕円形	41	32	23	23.3	16Ah	－	－	－	－	－	P795より新、P794より古
P 794	小穴	隅丸方形	54	47	38	23.1	1層:16Ah 2層:23Ah	－	－	－	－	－	P793・795より新
P 795	小穴	楕円形	(46)	35	14	23.5	23Ah	－	－	－	－	－	P793・794より古
P 796	小穴	楕円形	35	23	13	23.4	23Ahi	－	－	－	－	－	堆:炭粒
P 797	小穴	楕円形	56	36	18	23.5	23Ahi	－	－	－	－	－	堆:炭粒、土師器

●ピット（柱穴・小穴）類型

【柱類型】

あ：柱痕跡が柱穴掘方底面に接するもの

い：柱痕跡が柱穴掘方底面まで至らないもの

う：柱痕跡が柱穴掘方底面よりさらに下に延びるもの

【柱痕跡・堀方の埋土・堆積土類型】

■土色

1: 黒褐色（10YR3/1）　2: 黒褐色（10YR3/2）　3: 暗褐色（10YR3/3）
4: 褐灰色（10YR4/1）　5: 灰黄褐色（10YR4/2）　6: にぶい黄褐色（10YR4/3）
7: 褐色（10YR4/4）　8: 褐色（10YR4/6）　9: 褐灰色（10YR5/1）
10: 灰黄褐色（10YR5/2）　11: にぶい黄褐色（10YR5/3）　12: にぶい黄褐色（10YR5/4）
13: 黄褐色（10YR5/6）　14: 灰黄褐色（10YR6/2）　15: にぶい黄橙色（10YR6/4）
16: 明黄褐色（10YR6/6）　17: 明黄褐色（10YR6/8）　18: 黄橙色（10YR8/8）
19: 黒褐色（7.5YR2/2）　20: 黒褐色（7.5YR3/1）　21: 黒褐色（7.5YR3/2）
22: 暗褐色（7.5YR3/3）　23: 褐灰色（7.5YR4/1）　24: 褐色（7.5YR4/6）
25: 褐灰色（7.5YR5/1）　26: にぶい褐色（7.5YR5/4）　27: 明褐色（7.5YR5/6）
28: 橙色（7.5YR6/6）　29: 明褐灰色（7.5YR7/2）　30: 赤灰色（2.5YR5/1）

※＋@の@はブロック状に混入するもの

■土性

A: シルト　B: 砂質シルト　C: 粘土質シルト

■混入物

a: 地山ブロック多量含む　b: 地山ブロック含む　c: 地山ブロック少量含む
d: 地山ブロック微量含む　e: 地山粒子多く含む　f: 地山粒子含む
g: 地山粒子少量含む　h: 地山粒子微量含む　i: その他

※i を選択した場合は備考欄に堆積土混入物を記載
炭化物粒子　→　炭粒　　焼土粒子　→　焼粒

【記載例】1Aa→土色：黒褐色（10YR3/1）土性：シルト　混入物：地山ブロック多く含む

●その他の記載事項

■柱穴・ピットの計測値
・（数値）は推定値を示す
■柱穴・ピット掘欄の「埋土・堆土（堆積土）」記載事項
・柱穴の場合は「掘方埋土」を意味する
・「1 層・2 層」等の記載：「柱穴・小穴」の埋土等が 2 層以上に分層した場合を示す
・「抜穴」：柱抜き取り穴の埋土・堆積土／「抜穴 1」：抜き取り穴 1 層の埋土・堆積土
・「切穴」：柱切り取り穴の埋土・堆積土／「切穴 1」：切き取り穴 1 層の埋土・堆積土
■備考欄の記載事項
・柱抜取：柱が抜き取られているもの　・柱切取：柱が切り取られているもの
・この他、重複関係・出土遺物を記載

３．溝跡

溝跡は西側の谷部②で 10 条（SD1～10）を検出した（第 46・47 図、第 7 表）。以下、それぞれの特徴について記載する。

第7表　日向遺跡2次調査　溝跡一覧（SD1～10）

遺構No.	方向	検出長(m)	規模（cm）			断面形	出土遺物	備考
			上幅	下幅	深さ			
SD 1	南-北（直線）	5.82	30～158	11～50	37	U字状	なし	重複：P684→SD1/底面傾斜：ほぼ平坦
SD 2	南西-北東（直線）	8.63	37～205	23～102	10～37	U字状	金属製品	重複：SD2→P691・694/底面傾斜：南（高）→北（低）
SD 3	南東-北西（L字型）	3.61	32～63	28～48	5～30	皿状	なし	底面傾斜：北（高）→南（低）
SD 4	南東-北西（直線）	4.12	17～38	7～32	6	皿状	なし	重複：P720→SD4→P726
SD 5	南東-北西（直線）	1.12	23	18	17	皿状	なし	重複：P662→SD5/底面傾斜：北（高）→南（低）
SD 6	南東-北西（直線）	1.56	13～16	6～14	5	皿状	なし	重複：SD6→P735・736/底面傾斜：北（高）→南（低）
SD 7	南東-北西（湾曲）	7.60	25～33	10～17	4～15	皿状	弥生土器・土師器	重複：P783・784→SD7→SD8・9、P740/底面傾斜：北（高）→南（低）
SD 8	南東-北西（L字型）	7.20	15～55	12～44	7～22	皿状	土師器・須恵器	重複：SD7・10→SD8/底面傾斜：北（高）→南（低）
SD 9	南西-北東（直線）	2.94	19～30	12～19	3～8	皿状	なし	重複：SD7、SK71→SD9/底面傾斜：ほぼ平坦
SD 10	南東-北西（直線）	3.78	31	23	4～8	皿状	土師器	重複：SD10→SD8、P748・749//底面傾斜：北（高）→南（低）

【SD1 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南西端の標高 29.1～29.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。

［重複］　P684 より新しい（P684→SD1）。

［規模・形状］　南－北方向に直線的に延びる溝で、検出長約 5.82m、上幅 30～158cm、下幅 11～50cm、最深 37cm である。等高線に沿って走り、南側は急激に細くなるが、削平を受けている可能性がある。底面標高は、若干の凸凹はあるものの約 29.05m とほぼ同じで、断面形はＵ字状である。

［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD2 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南西端の SD1 の東側、標高 28.1～28.5m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。

［重複］　P691・P694 より古い（SD2→ P691・P694）。尚、中央２か所を現代の撹乱により大きく削平される。

［規模・形状］　南西－北東方向に等高線に沿って直線的に延びる溝である。検出長 8.63m で、南端が隅丸方形を呈しており、上幅は 205cm、そこから北側 1.35m のところで約 150cm、北端では 37cm と段々狭くなる。下幅は中央が最も幅広で 102cm、南側が 81cm、北側が 23cm である。深さは 10～37cm である。底面標高は、南側が最も高く標高 28.18m で、北側へ 10cm ほど徐々に低くなる。断面形はＵ字状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土から不明鉄製品破片 1 点（10g）が出土した。出土状況からみて周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SD3 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 26.4～26.7m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴa・c 層である。

［重複］　基本土層のトレンチを掘削する際、その一部を削平してしまったため、端部の状況は不明である。

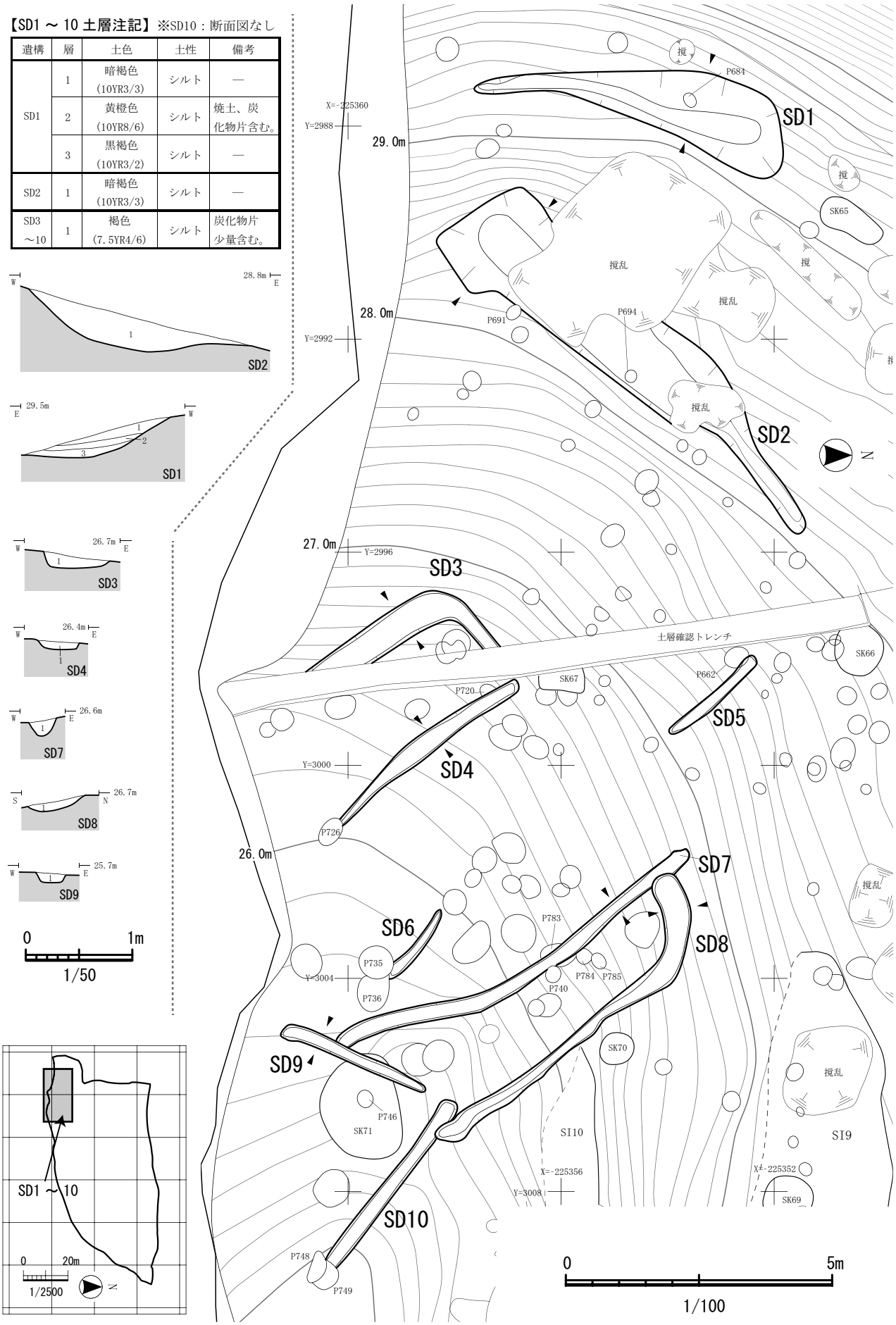
［規模・形状］　南東－北西方向に延び、等高線に沿って北東方向に折れるＬ字型の溝である。検出長 3.61m、上幅は 32～63cm、下幅 28～48cm、深さ 5～30cm である。底面標高は、溝の北側が標高 26.5m と高く、南側は 26.3m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD1 ～ 10 土層注記】※SD10：断面図なし

遺構	層	土色	土性	備考
SD1	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	—
	2	黄橙色 (10YR8/6)	シルト	焼土、炭化物片含む。
	3	黒褐色 (10YR3/2)	シルト	—
SD2	1	暗褐色 (10YR3/3)	シルト	—
SD3 ～10	1	褐色 (7.5YR4/6)	シルト	炭化物片少量含む。



第46図　SD1～10溝跡（1）

【SD4 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 26.0～26.5m の緩斜面で確認した。東側の SD3 から約 1.5m 離れて、ほぼ並列して走る。検出面は基本層Ⅴa・c 層である。

［重複］　P720 より新しく、P726 より古い(P720 →SD4→P726)。

［規模・形状］　南東－北西方向に直線的に延びる溝で、検出長 4.12m、上幅 17～38cm、下幅 7～32cm、深さ 6cm である。底面は北側が標高 26.56m と高く、南側は 25.96m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD5 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 27.0～27.5m の緩斜面で確認した。SD3・4 とほぼ同一方向に走る。検出面は基本層Ⅴa 層である。

［重複］　P662 より新しい（P662→SD5）。

［規模・形状］　南東－北西方向に直線的に延びる溝で、検出長 1.12m、上幅約 23cm、下幅約 18cm、深さ 17cm である。底面標高は、溝の北側が 26.83m と高く、南側が 23.94m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD6 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 25.8～26.0m の緩斜面で確認した。SD3・4・5 とほぼ同一方向に走る。検出面は基本層Ⅴc 層である。

［重複］　P735・736 より古い。（SD6→P735・736）。

［規模・形状］　南東－北西方向に直線的に延びる溝で、検出長 1.56m、上幅 13～16cm、下幅 6～14cm、深さ 5cm である。底面標高は、溝の北側が標高 25.9m と高く、南側が 25.8m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD7 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 25.7～26.9m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴa・c 層である。

［重複］　SD8・9、P740 より古く、P783・784 より新しい（P783・784→SD7→SD8・9、P740）。

［規模・形状］　南東－北西方向に直線的に延びる溝で、南側がやや西側へ湾曲する。溝の北側は SD3～6 とほぼ同一方向に走る。検出長約 7.6m、上幅 25～33cm、下幅 10～17cm、深さ 4～15cm である。底面標高は、溝の北側が標高 26.62m と高く、南側が 25.63m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土から弥生土器破片 4 点（25g）、非ロクロ成形の土師器甕破片 3 点（20g）が出土した。出土状況からみて周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SD8 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西の標高 25.5～26.8m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴa 層である。

［重複］　SD7・10 より新しい（SD7・10→SD8）。

［規模・形状］　南東－北西方向に延びる溝で、北側で緩やかに西側へと折れる L 字型を呈する。検出長約 7.2m、上幅 15～55cm、下幅 12～44cm、深さ 7～22cm である。底面標高は、溝の北側が標高 26.57m と高く、南側が 25.47m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土から非ロクロ成形の土師器坏破片 9 点（85g）・甕破片 11 点（135g）、須恵器甕破片 1 点（25g）が出土した。出土状況からみて周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SD9 溝跡】（第 46・47 図）

［位置］　南側西寄りの標高 25.4～25.7m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴc 層である。

［重複］　SD7、SK71 より新しい（SD7、SK71→SD9）。

［規模・形状］　南西－北東方向に直線的に延びる溝で、検出長 2.94m、上幅 19～30cm、下幅 12～19cm、深さ 3～8cm である。底面標高は、ほぼ同じで平坦で、標高は 25.56m である。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　なし。

【SD10 溝跡】（第 46・47 図）

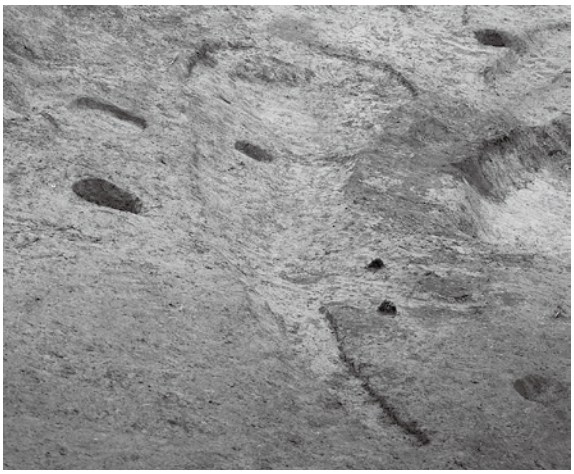
［位置］　南側西寄りの標高 25.0～25.5m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴa 層である。

［重複］　SD8・P748・749 より古い（SD10→SD8、P748・749）。

［規模・形状］　南東－北西方向に直線的に延びる溝で、検出長 3.78m、上幅約 31cm、下幅約 23cm、深さ 4～8cm である。底面標高は、溝の北側が標高 25.52m と高く、南側が 25.0m と低い。断面形は皿状である。

［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。

［出土遺物］　堆積土から非ロクロ成形の土師器甕 1 点（30g）が出土した。出土状況からみて周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。



1．SD1 溝跡　完掘状況（南から）

2．SD2 溝跡　完掘状況（南西から）

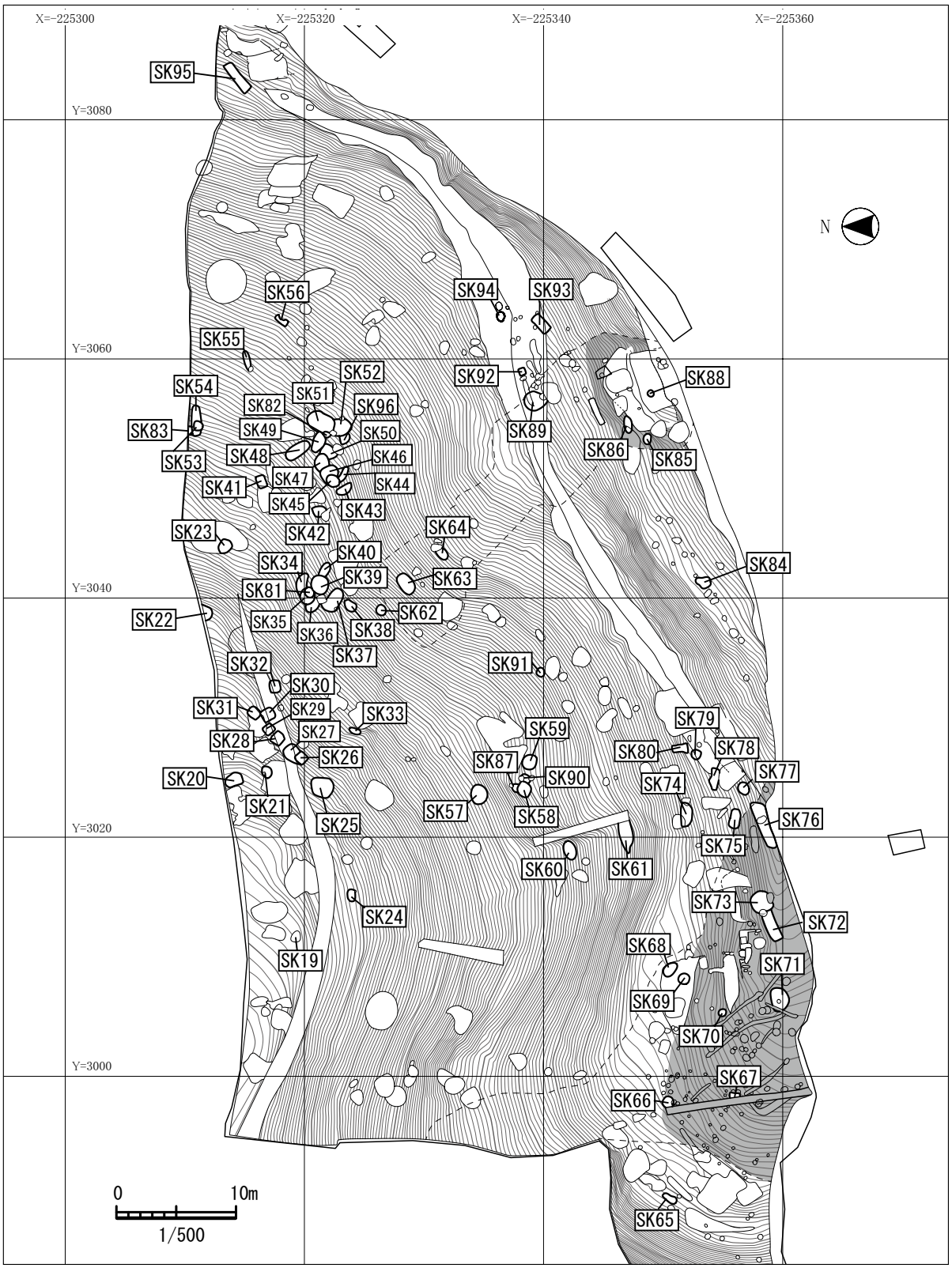
1．SD3 ～ 10 溝跡　完掘状況（南東から）

第47図　SD1～10 溝跡（2）

４．土坑

土坑は、78 基（SK19～96）確認した（第 48～67 図・第 8 表）。遺構の重複関係・出土遺物の所属時期から、これらの土坑は縄文時代～近世のものが混在している。それぞれの特徴等については、第 8 表に示したとおりである。

以下、それぞれの特徴について記載する。



第48図　日向遺跡B区　土坑（SK）遺構配置図

第8表　日向遺跡2次調査　土坑属性表（SK19～96）

遺構No.	平面形	規模	深さ	断面形	堆積土	出土遺物	備考
SK 19	楕円形	97×75	15	U字状	自然	－	焼成土坑
SK 20	隅丸方形	150×105	28	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 21	楕円形	102×76	45	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 22	楕円形?	130×(60)	40	逆台形	自然	弥生土器・土師器	焼成土坑
SK 23	楕円形	125×91	30	U字状	自然	弥生土器・土師器	
SK 24	隅丸方形	100×64	11	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 25	円形	180×160	175	フラスコ状	自然	縄文土器	床面中央に45×35cm、深さ20cmのピット有
SK 26	方形	90×90	90	逆台形	自然	－	近世墓、SK27より新
SK 27	隅丸長方形	180×130	132	逆台形	自然	－	近世墓、SK26より古
SK 28	方形	105×95	116	逆台形	自然	－	近世墓
SK 29	方形	85×85	120	逆台形	自然	－	近世墓
SK 30	方形	110×100	145	逆台形	自然	金属製品・硝子製品・人骨	近世墓、SK31より新
SK 31	方形	105×90	103	逆台形	自然	磁器・金属製品・人骨	近世墓、SK30より古
SK 32	方形	105×90	80	逆台形	自然	－	近世墓
SK 33	楕円形	100×45	9	皿状	自然	－	焼成土坑
SK 34	不整形?	(170)×85	30	U字状	自然	－	SK35・81より古
SK 35	円形	135×120	32	逆台形	自然	－	SK34・36より新、SK39・81より古
SK 36	楕円形	135×90	43	逆台形	自然	－	SK35より古
SK 37	楕円形	210×110	35	逆台形	自然	－	
SK 38	楕円形	120×80	20	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 39	円形	155×145	25	皿状	自然	－	SK35・40・81より新
SK 40	楕円形?	(150)×72	10	皿状	自然	－	SK39より古
SK 41	隅丸方形	103×76	32	逆台形	人為＋自然	－	焼成土坑
SK 42	隅丸方形	109×87	25	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 43	楕円形	143×70	30	U字状	自然	－	
SK 44	不整形?	(158)×48	40	逆台形	自然	－	SK45より古
SK 45	楕円形	115×95	30	U字状	自然	－	SK44・46より新
SK 46	楕円形	150×143	25	皿状	自然	土師器	SK47より新、SK45より古
SK 47	楕円形?	(150)×120	32	皿状	自然	縄文土器	SK50より新、SK46より古
SK 48	楕円形	228×100	40	皿状	自然	-	
SK 49	不整形	170×145	13	皿状	自然	－	SK50・51・82より新 床面に32×26cm、深さ10cmのピット有
SK 50	不整形	142×125	10	皿状	自然	－	SK47・49より古
SK 51	楕円形	235×153	25	皿状	自然	弥生土器	SK52より新、SK49・82より古
SK 52	楕円形?	(155)×141	30	U字状	自然	－	SK96より新、SK51より古
SK 53	隅丸方形	85×85	8	逆台形	自然	－	SK54より新、焼成土坑
SK 54	楕円形	255×80	27	U字状	自然	－	SK83より新、SK53より古
SK 55	楕円形?	(160)×51	14	皿状	自然	－	
SK 56	隅丸方形?	116×(54)	8	逆台形	自然	－	焼成土坑
SK 57	円形	162×135	93	円筒状	自然	－	床面ほぼ中央に径30cm・深さ30cmのピット有
SK 58	隅丸方形	136×114	38	逆台形	自然	－	SK87・90より新
SK 59	円形	131×116	33	U字状	自然	－	
SK 60	楕円形	160×97	127	円筒状	自然	縄文土器	
SK 61	楕円形?	(267)×112	33	U字状	自然	弥生土器	
SK 62	円形	87×78	13	U字状	自然	－	
SK 63	楕円形	185×120	16	皿状	自然	－	
SK 64	楕円形?	(105)×70	20	U字状	自然	－	
SK 65	楕円形	124×56	12	皿状	自然	土師器	床面南側に50×45cm、深さ6cmのピット有
SK 66	円形	93×93	10	皿状	自然	－	P660より新、P702より古
SK 67	方形?	88×(45)	8	皿状	自然	－	P716・717より新
SK 68	楕円形	138×87	36	U字状	自然	土師器・須恵器	SI9より新
SK 69	円形	88×88	10	皿状	自然	土師器	SI9より新
SK 70	円形?	63×(56)	25	U字状	自然	－	
SK 71	楕円形	192×148	15	皿状	自然	弥生土器・土師器	SD9・P746より古
SK 72	隅丸長方形?	(260)×94	15	皿状	自然	土師器・須恵器	SK73・P760より古
SK 73	隅丸方形	177×167	25	U字状	自然	土師器・須恵器	SK72より新、P760より古
SK 74	楕円形	195×123	90	フラスコ～円筒状	自然	－	
SK 75	隅丸長方形	162×82	40	逆台形	自然	土師器	
SK 76	隅丸長方形	400×92	18	皿状	自然	－	
SK 77	円形	107×85	53	U字状	自然	－	
SK 78	隅丸長方形	177×67	38	逆台形	人為＋自然	縄文土器	SI13より新
SK 79	円形	80×80	12	皿状	自然	土師器	SI13より新
SK 80	隅丸長方形	130×60	100	逆台形	自然	－	
SK 81	円形	84×70	38	逆台形	自然	－	SK34・35より新、SK39より古
SK 82	楕円形	67×44	22	逆台形	自然	－	SK51より新、SK49より古
SK 83	円形?	69×(30)	27	U字状	自然	縄文土器・石器	SK54より古
SK 84	不整形	130×100	25	皿状	自然	須恵器	
SK 85	楕円形	86×60	8	皿状	自然	－	
SK 86	楕円形	145×65	7	皿状	自然	－	SI15より新
SK 87	楕円形?	66×(53)	27	U字状	自然	－	SK58より古
SK 88	円形	51×51	15	U字状	自然	－	SI15より新
SK 89	円形?	(185)×164	90	逆台形	人為	土師器・須恵器・鉄滓	P792より古
SK 90	楕円形?	88×(70)	15	皿状	自然	－	SK58より古
SK 91	円形	74×66	30	U字状	自然	－	
SK 92	隅丸方形	55×55	53	逆台形	自然	－	
SK 93	長方形	167×80	105	フラスコ～円筒状	自然	－	P650・651より新
SK 94	楕円形?	81×(65)	15	皿状	自然	－	焼成土坑
SK 95	隅丸長方形	282×73	42	フラスコ～逆台形	自然	土師器・須恵器	
SK 96	不整形?	85×(70)	30	U字状	自然	－	SK52より古

※規模()は残存長／規模・深さの単位：cm

【SK19 土坑】（第 49・64 図）
［位置］　北側西寄りの標高 39.7m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　97 ㎝×75 ㎝の楕円形。深さ 15 ㎝。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　3 層確認した。1・2 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 3 層は厚さ 10 ㎝前後の炭化物片を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。壁面および底面に被熱痕跡はみられなかったが、堆積状況から木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］　なし。
［その他］堆積土 3 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 772～869cal AD であった。

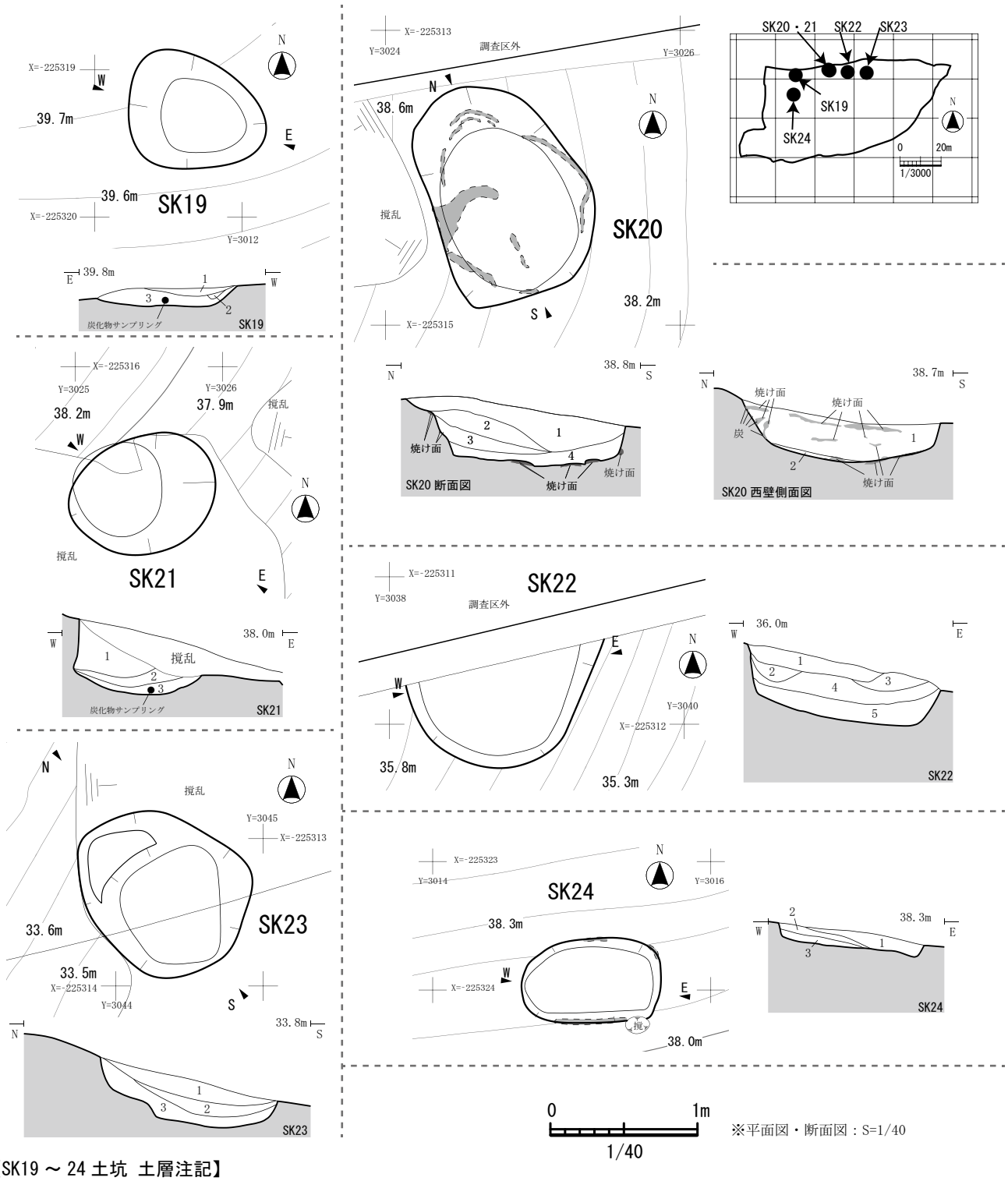
【SK20 土坑】（第 49・64 図）
［位置］　北側やや西寄りの標高 38.3～38.6m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　150 ㎝×105m の隅丸方形。深さ 28 ㎝。底面には凸凹があり、断面形は逆台形である。
［堆積土］　4 層確認した。1～3 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 4 層は厚さ 10 ㎝前後の炭化物片を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。周壁および底面は部分的に厚さ 1～2 ㎝ほどの被熱痕跡がみられたことから、木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］　なし。

【SK21 土坑】（第 49 図）
［位置］　北側やや西寄りの標高 37.7～38.0m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa 層である。
［重複］　なし。南側上面は現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　102 ㎝×76 ㎝の楕円形。深さ 45 ㎝で、北西側は壁が底面からややオーバーハングするが、東側は緩やかに立ち上がる。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　3 層確認した。1・2 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 3 層は厚さ 10 ㎝前後の炭化物片と焼土を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。南西側壁面で厚さ 5mm ほどの被熱痕跡がみられたことから、木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］　なし。
［その他］堆積土 3 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 717～866cal AD であった。

【SK22 土坑】（第 49 図）
［位置］　北側中央の標高 35.5～35.8m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。遺構の北半は調査区外へ延びる。
［規模・形状］　130 ㎝×60 ㎝以上の楕円形（推定）。深さ 40 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　5 層確認した。1～4 層が周囲からの自然流入土とみられる。最下層の 5 層は厚さ 15 ㎝前後の炭化物片と焼土粒を多量に含んだ層、炭化した細かい木片もみられた。壁面および底面に被熱痕跡はみられなかったが、堆積状況から木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］堆積土から弥生土器破片 1 点（10g）、土師器甕破片 3 点（40g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK23 土坑】（第 49 図）
［位置］　北側中央の標高 33.3～33.6m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。遺構上部全体を現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　125 ㎝×91 ㎝の楕円形。深さ 30 ㎝で、北側に段を有する。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］　堆積土から弥生土器甕破片 1 点（15g）、土師器甕破片 12 点（45g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK24 土坑】（第 49・64 図）
［位置］　北側中央やや西寄りの標高 38.1～38.2m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　100 ㎝×64 ㎝の隅丸方形。深さ 11 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　3 層確認した。2 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 3 層と上層の 1 層は炭化物と焼土を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。南側１か所と北側２か所の壁面に厚さ 5mm ほどの被熱痕跡がみられたことから、木炭焼成土坑と考えられる。なお、炭層の間に堆積土 2 層を挟むことから 2 度の操業が行われた可能性が考えられる。
［出土遺物］　なし。



【SK19 ～ 24 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK 19	1	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片少量、木片状多量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物粒状含む。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物片多量含む。
SK 20	1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片少量含む。
	2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片少量含む。
	3	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物片少量含む。
	4	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土粒状少量含む。炭化物層。
SK 21	1	黄褐色(2.5Y5/6)	シルト	炭化物片・木片多量、焼土粒状含む。
	2	黄褐色(10YR5/8)	シルト	炭化物片、焼土粒状多量含む。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土粒状多量含む。炭化物層。

	層	土色	土性	備考
SK 22	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片少量含む。
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物片少量含む。
	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片少量含む。
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物片少量含む。
	5	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土粒状含む。炭化物層。
SK 23	1	黄褐色(10YR5/6)	粘質	灰黄褐色シルト土ブロック含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	褐色粘土質シルト土ブロック含む。
	3	明褐色(7.5YR5/6)	粘質	灰黄褐色シルト土ブロック含む。
SK 24	1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物粒状多量、焼土粒少量含む。
	2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物片、焼土少量含む。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物粒状多量、焼土粒少量含む。

第49図　SK19～24 土坑

【SK25 土坑】（第 50・64 図）

［位置］　北側中央の標高 36.8～37.3m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。

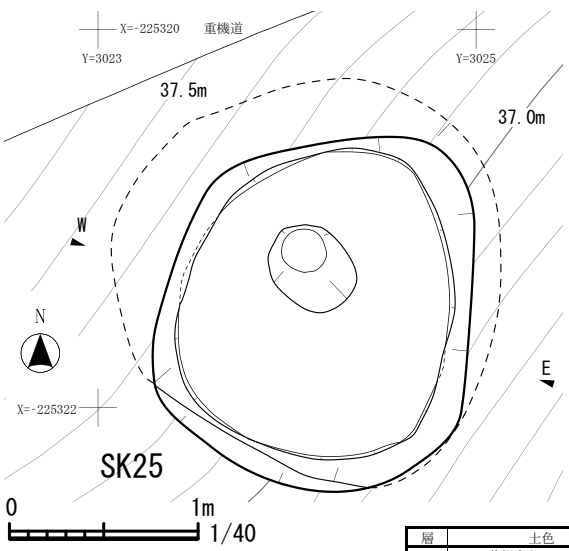
［重複］　なし。

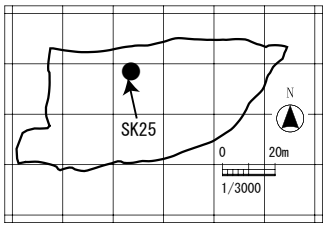
［規模・形状］　180 ㎝×160 ㎝のやや歪な円形。深さ 175 ㎝。底面は平坦で、中央で 45×35 ㎝、深さ 20 ㎝のピットを検出した。断面形はフラスコ状である。壁は底面から大きくオーバーハングして立ち上がり、途中から外側に緩やかに開く。南側と東側は比較的緩やかである。

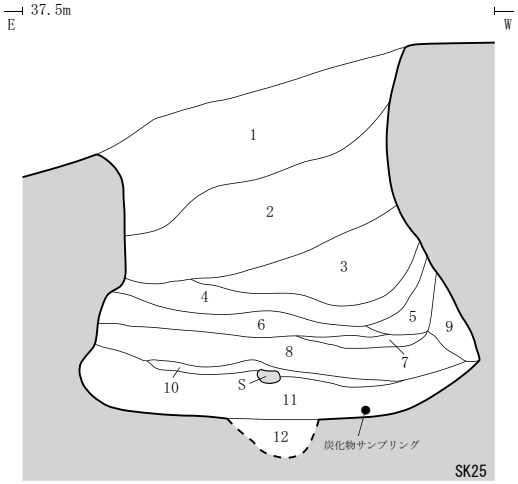
［堆積土］　12 層確認した。壁の崩壊を伴いながら、自然に堆積した状況である。底面から 10～20 ㎝程度浮いた状態で花崗岩、斑岩、砂岩等の自然礫が多量に出土した。これに伴う堆積土は均一な層であるため自然堆積と思われ、人為的に石を投げ込んだ可能性は考えがたい。また、最下層の 11 層からは少量の炭化物片が出土する程度であるが、その直上の 10 層からは多量の炭化物片が出土した。なお、堆積土 11 層中の底面から約 30 ㎝浮いた状態で、縄文土器の深鉢の口縁部片が出土した。底面にピットを有することや形状から貯蔵穴であると考えられる。

［出土遺物］　堆積土 11 層から縄文土器深鉢破片 11 点（60g）が出土した。このうち、口縁部破片 1 点を図示した（第 50 図 1）。

［その他］堆積土 10 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 2287～2201cal BC であった。

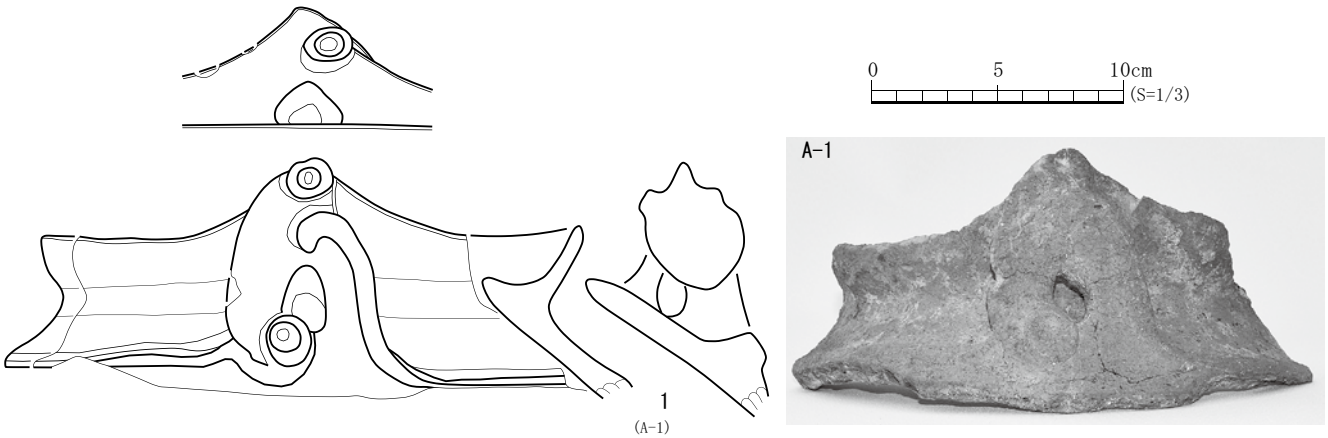






【SK25 土坑 土層注記】　※平面図・断面図：S=1/40

層	土色	土性	備考
1	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物粒状多量、オリーブ灰色粘質土ブロック含む。
2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒多量、淡黄色粘土ブロック少量含む。
3	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物粒多量、淡黄色粘土ブロック、赤褐色砂質ブロック含む。
4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	炭化物片少量、明黄褐色砂質土ブロック含む。
5	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	明黄褐色砂質土ブロック含む。
6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	明黄褐色砂質土ブロック、淡黄色粘土含む。
7	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	明黄褐色砂質土ブロック含む。
8	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物ブロック少量、黄橙色砂質土ブロック含む。
9	明褐色(7.5YR5/8)	シルト	淡黄色粘土ブロック含む。
10	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物粒状、炭化物ブロック多量含む。
11	黄褐色(10YR5/6)	シルト	炭化物ブロック、礫(拳大)少量含む。
12	褐灰色(7.5YR5/1)	砂質	混入物なし。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK25 11層	縄文土器	深鉢	口縁部	外面：突起(透かし有／単位不明)・盲孔・刺突文(非連続)、内面：上部ボタン状貼付文、色調：外面・橙色(2.5YR6/8)、内面・橙色(5YR6/6)、法量：口径(21.3)㎝・残存高9.5㎝・器厚0.4～2.4㎝	A-1

第50図　SK25 土坑

【SK26 土坑】（第 51 図）

［位置］　北側中央の標高 36.6～36.9m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。

［重複］　SK27 より新しい(SK27→SK26)。頂部緩斜面を巡る重機通路により、遺構上部全体が削平を受ける。

［規模・形状］　一辺 90 cmの方形。深さ 90 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開くが直線的に立ち上がる。

［堆積土］　2 層確認した。2 層は下層に厚さ 8 cmほど堆積する黒色土で、その上に 1 層（灰黄褐色 10YR5/2 シルト）が自然堆積する。堆積土は締まりがなく、柔らかい。形状が類似する SK30 の最下層から人骨が出土しているため、その機能は墓と考えられる。また、堆積土 2 層と壁面に沿って非常に多くの根があり、一定期間空洞もしくは、その部分にのみ根が入りやすい状況になっていたと考えられる。壁面が直線的なことから、板等が当たっていた痕跡と思われ、土坑内に直接板等で墓が構築されたか、板等を組み合わせた箱形木棺を埋納した可能性が考えられる。

［出土遺物］　なし。

【SK27 土坑】（第 51 図）

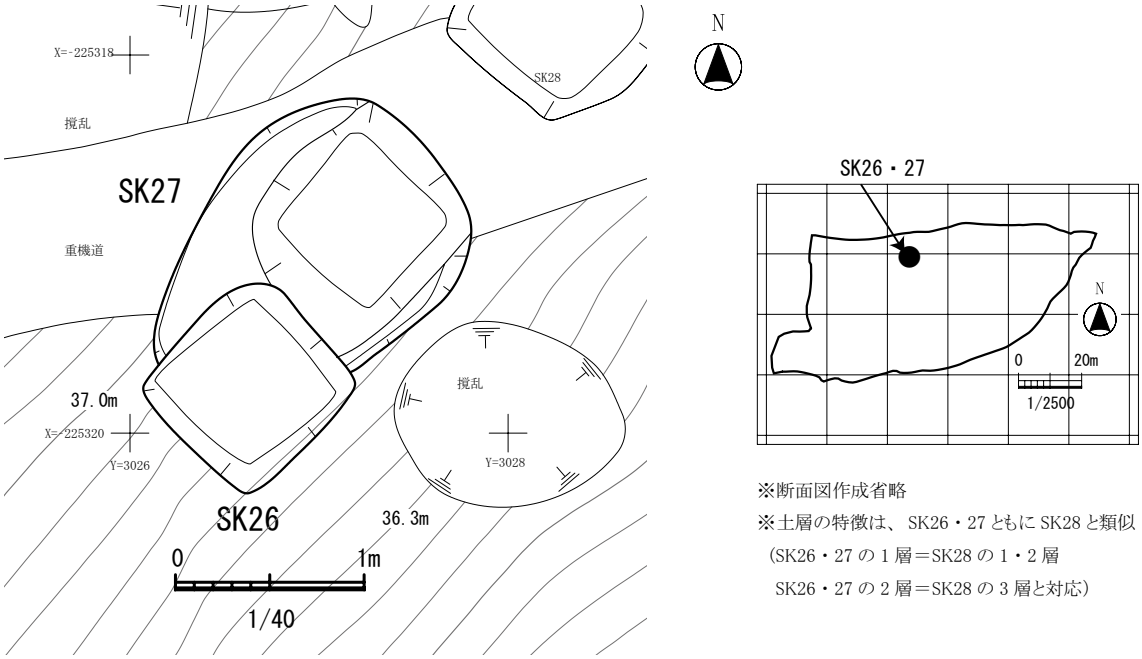
［位置］　北側中央の標高 36.6～37.0m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。

［重複］　SK26 より古い（SK27→SK26）。頂部緩斜面を巡る重機通路により、遺構上部全体が削平を受ける。

［規模・形状］　遺構検出面では 180 cm×130 cmの隅丸長方形を呈するが、掘り込み面から 50 cmほど下で東側寄りに一辺約 100 cmの方形の墓壙を検出した。深さ 132 cmである。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開くが、直線的に立ち上がる。

［堆積土］　2 層確認した。1 層（灰黄褐色 10YR5/2 シルト）は自然堆積、2 層は層厚 8 cmほどの黒色土で最下層に堆積する。SK26 と同様の堆積状況を呈しており、同様の構造をもつ墓と考えられる。

［出土遺物］　なし。



第51図　SK26・27 土坑

【SK28 土坑】（第 52・65 図）
［位置］　北側中央の標高 36.6～36.8m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。頂部緩斜面を巡る重機通路により、遺構南側が削平を受ける。
［規模・形状］　105 ㎝×95 ㎝の方形。深さ 116 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開き、直線的に立ち上がる。
［堆積土］　3 層確認した。1・2 層は自然堆積であり、3 層は層厚 8 ㎝ほどの黒色土で、非常に多くの根が混入し、締まりがない。SK26 と同様の堆積状況を呈しており、同様の構造をもつ墓と考えられる。
［出土遺物］　なし。

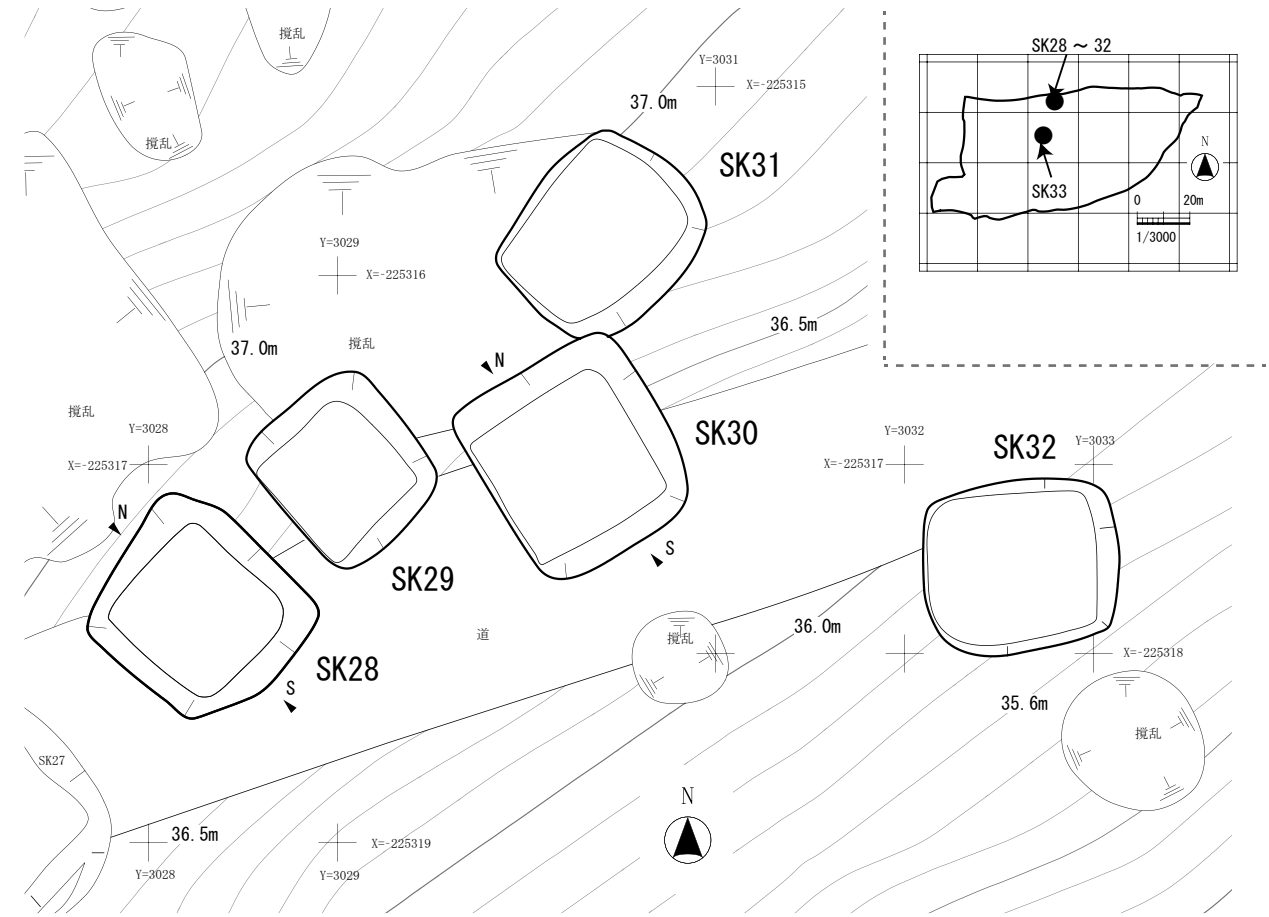
【SK29 土坑】（第 52・65 図）
［位置］　北側中央の標高 36.6～36.8m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa・c 層である。
［重複］　なし。遺構南側は頂部緩斜面を巡る重機通路、遺構北側は現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　一辺 85 ㎝の方形。深さ 120 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開き、直線的に立ち上がる。
［堆積土］　2 層確認した。上層の 1 層（灰黄褐色 10YR5/2 シルト）は自然堆積であり、下層の 2 層は層厚 8 ㎝ほどの黒色土が最下層に堆積する。SK26 と同様の堆積状況を呈しており、同様の構造をもつ墓と考えられる。
［出土遺物］　なし。

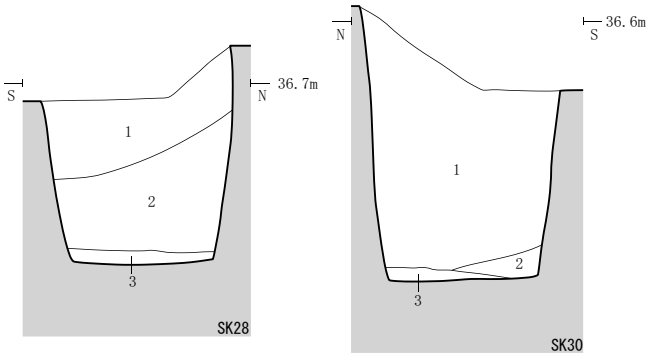
【SK30 土坑】（第 52・65 図）
［位置］　北側中央の標高 36.3～36.6m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa・c 層である。
［重複］　SK31 より新しい（SK31→SK30）。遺構南側は頂部緩斜面を巡る重機通路、遺構北側は現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　110 ㎝×100 ㎝の方形。深さ 145 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開き、直線的に立ち上がる。
［堆積土］　3 層確認した。1・2 層は自然堆積であり、3 層は層厚 8 ㎝ほどの黒色土が北側寄りに堆積する。この黒色土より人骨、ガラス玉（数珠）等が出土することから墓と考えられる。
［出土遺物］　最下層の黒色土より人骨、ガラス玉、青銅製のキセル、鉄製品の破片が出土した。

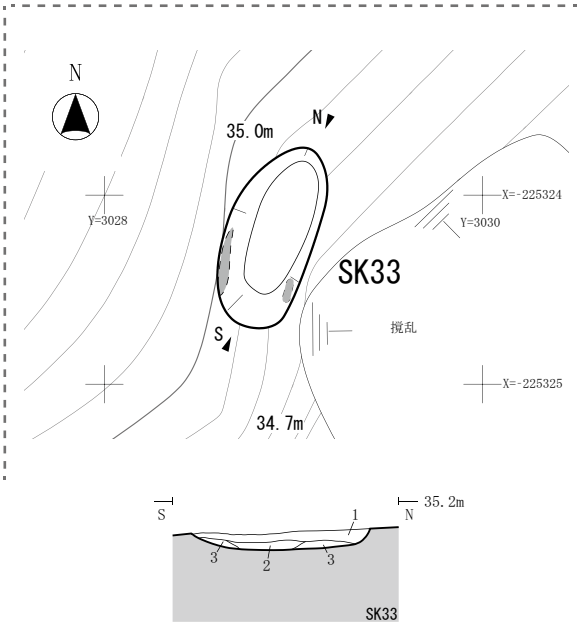
【SK31 土坑】（第 52・65 図）
［位置］　北側中央の標高 36.7～37.0m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶa 層である。
［重複］　SK30 より古い（SK31→SK30）。遺構西側が現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　105 ㎝×90 ㎝の方形。深さ 103 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開き、直線的に立ち上がる。
［堆積土］　2 層確認した。上層の 1 層（灰黄褐色 10YR5/2 シルト）は自然堆積であり、2 層は厚さ 8 ㎝ほどの黒色土が最下層に堆積する。SK26 と同様の堆積状況を呈しており、同様の構造をもつ墓と考えられる。
［出土遺物］　最下層の黒色土より人骨、釘等の鉄製品の破片、磁器の破片が出土した。

【SK32 土坑】（第 52 図）
［位置］　北側中央の標高 35.6～36.0m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。頂部緩斜面を巡る重機通路により、遺構上部北側が削平を受ける。
［規模・形状］　105㎝×90 ㎝の方形。深さ 80 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。壁は底面からやや開き、直線的に立ち上がる。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。周辺の類似する土坑の最下層でみられた黒色土は確認できなかったが、SK26～31 と同じ形状であることから、同様の構造をもつ墓と考えられる。
［出土遺物］　なし。

【SK33 土坑】（第 52・64 図）
［位置］　北側中央の標高 34.8～35.0m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。　**［出土遺物］**　なし。
［規模・形状］　100 ㎝×45 ㎝の楕円形。深さ 9 ㎝。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　3 層確認した。1 層は炭化物片を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。2・3 層には焼土と炭化物片が少量含まれる。東側と西側の壁面に厚さ 5mm ほどの被熱痕跡が見られたことから木炭焼成土坑と考えられる。







【SK28・30・33 土坑 土層注記】 ※SK29・31・32 断面図なし

	層	土色	土性	備考
SK 28	1	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質	明黄褐色シルト土層状に含む。
	2	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質	明黄褐色粘質土ブロック含む。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	根多く含む。
SK 30	1	灰黄褐色(10YR5/2)	砂質	明黄褐色シルト土ブロック含む。
	2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	混入物なし。
	3	黒色(10YR2/1)	シルト	根多く含む。
SK 33	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物片多量含む。
	2	赤褐色5YR4/8	シルト	炭化物片含む。焼土。
	3	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物片少量、焼土含む。

0　1m
1/40

※平面図・断面図：S=1/40

第52図　SK28～33 土坑

【SK34 土坑】（第 53・65 図）
［位置］　北側中央の標高 32.5～33.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK35・81 より古い（SK34→SK35・81）。
［規模・形状］　170 ㎝以上×85 ㎝の不整形（推定）。深さ 30 ㎝。底面は船底状で、断面形は U 字状である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。

【SK35 土坑】（第 53 図）
［位置］　北側中央の標高 32.7～33.1m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK34・36 より新しく、SK39・81 より古い（SK34・36→SK35→SK39・81）。
［規模・形状］　135 ㎝×120 ㎝の円形。深さ 32 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。

【SK36 土坑】（第 53 図）
［位置］　北側中央の標高 32.7～33.2m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK35 より古い（SK36→SK35）。遺構南端の一部が現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　135 ㎝×90 ㎝の楕円形。深さ 43 ㎝。北西側に段を有し、底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。

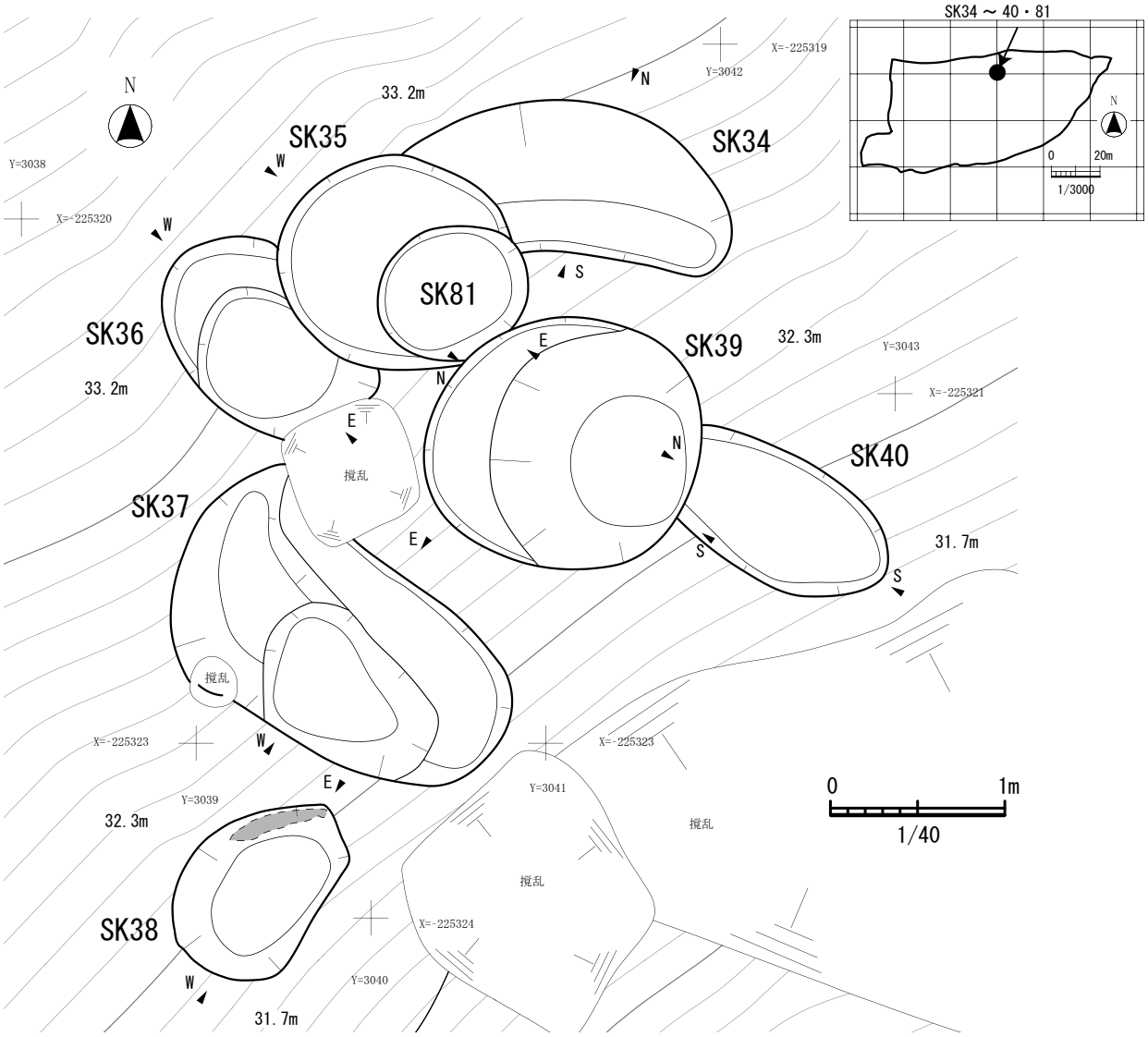
【SK37 土坑】（第 53・65 図）
［位置］　北側中央の標高 31.9～32.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。遺構北西の一部が現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　210 ㎝×110 ㎝の楕円形。深さ 35 ㎝。東側全体に狭い段を有し、北側へと落ち、南側が最も深くなる。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。

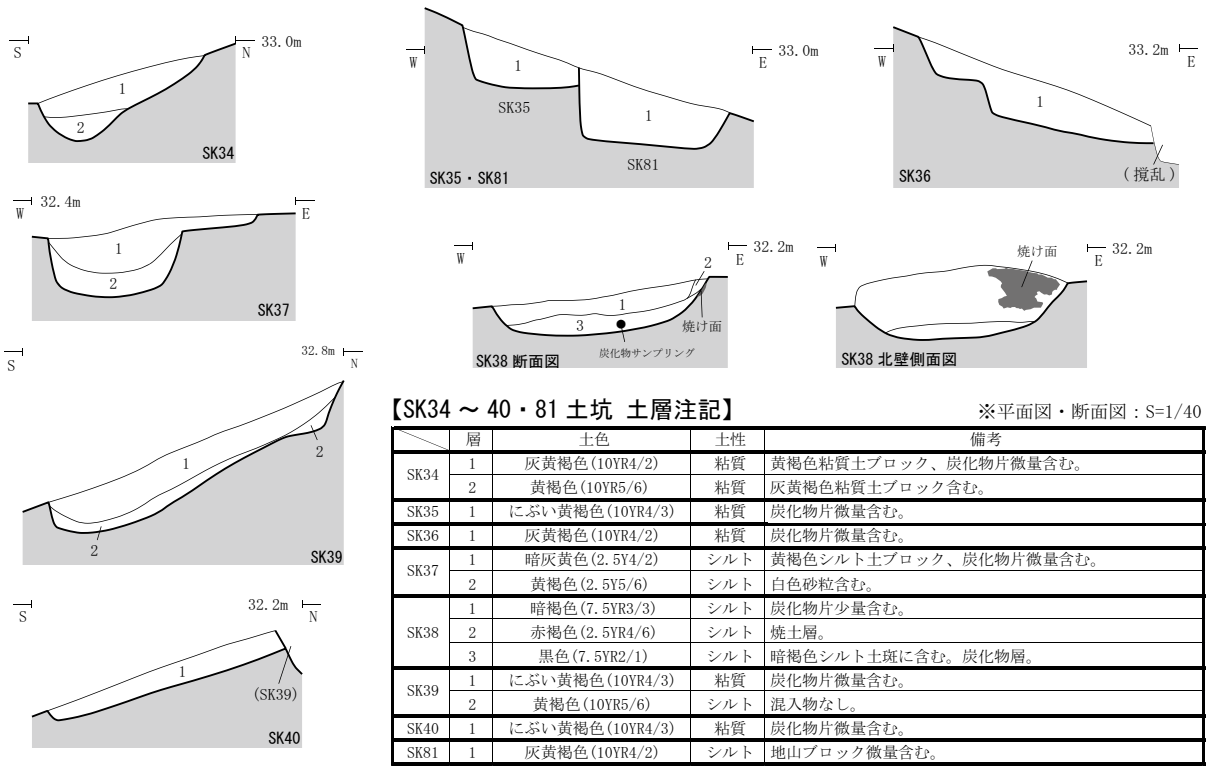
【SK38 土坑】（第 53・65 図）
［位置］　北側中央の標高 31.8～32.1m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　120 ㎝×80 ㎝の楕円形。深さ 20 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　3 層確認した。1・2 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 3 層は層厚 10 ㎝前後の炭化物片と焼土を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。北東側壁面で長さ 60 ㎝、高さ 20 ㎝、厚さ 5㎜ ほどの被熱痕跡がみられたことから、木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］なし。
［その他］堆積土 3 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 654～676cal AD であった。

【SK39 土坑】（第 53 図）
［位置］　北側中央の標高 32.0～32.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK35・40・81 より新しい（SK35・40・81→SK39）。
［規模・形状］　155 ㎝×145 ㎝の円形。深さ 25 ㎝。西側に段を有し、東側が低くなる。底面は斜面に沿って傾斜する。断面形は皿状である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK40 土坑】（第 53 図）
［位置］　北側中央の標高 31.7～32.9m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK39 より古い（SK40→SK39）。
［規模・形状］　150 ㎝以上×72 ㎝の楕円形（推定）。深さ 10 ㎝。底面は斜面に沿って傾斜し、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK81 土坑】（第 53 図）
［位置］　北側中央の標高 32.7～32.9m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK35 より新しく、SK39 より古い（SK35→SK81→SK39）。
［規模・形状］　84 ㎝×70 ㎝の円形。深さ 38 ㎝。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。





【SK34 ～ 40・81 土坑 土層注記】　※平面図・断面図：S=1/40

	層	土色	土性	備考
SK34	1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	黄褐色粘質土ブロック、炭化物片微量含む。
	2	黄褐色(10YR5/6)	粘質	灰黄褐色粘質土ブロック含む。
SK35	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質	炭化物片微量含む。
SK36	1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	炭化物片微量含む。
SK37	1	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	黄褐色シルト土ブロック、炭化物片微量含む。
	2	黄褐色(2.5Y5/6)	シルト	白色砂粒含む。
SK38	1	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	炭化物片少量含む。
	2	赤褐色(2.5YR4/6)	シルト	焼土層。
	3	黒色(7.5YR2/1)	シルト	暗褐色シルト土斑に含む。炭化物層。
SK39	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質	炭化物片微量含む。
	2	黄褐色(10YR5/6)	シルト	混入物なし。
SK40	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質	炭化物片微量含む。
SK81	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロック微量含む。

第53図　SK34～40・81 土坑

【SK41 土坑】（第 54・65・66 図）
［**位置**］　北側中央の標高 31.8～32.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　なし。西側の一部は、現代の撹乱により削平を受ける。
［**規模・形状**］　103 cm×76 cmの隅丸方形。深さ 32 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［**堆積土**］　3 層確認した。1・2 層は周囲からの自然流入土とみられるが、最下層の 3 層は層厚 7～15 cmの炭化物片と焼土を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。壁面は 4 面とも被熱しており、上部は赤色、下部は灰色を呈する。被熱の厚さは 5～10mm ほどである。木炭焼成土坑と考えられる。
［**出土遺物**］なし。
［**その他**］堆積土 3 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 687～767cal AD であった。

【SK42 土坑】（第 54 図）
［**位置**］　北側中央の標高 31.1～31.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　なし。南西側の一部は現代の撹乱により削平を受ける。
［**規模・形状**］　109 cm×87 cmの隅丸方形。深さ 25 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［**堆積土**］　2 層確認した。いずれも炭化物片が混入しており、壁面等に被熱痕跡は残っていないが、形状等から木炭焼成土坑と考えられる。
［**出土遺物**］なし。

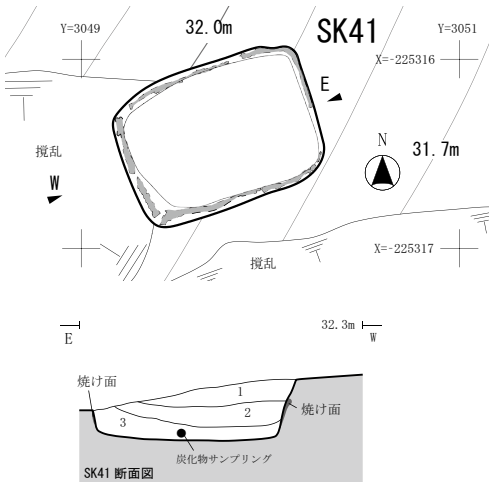
【SK43 土坑】（第 54・66 図）
［**位置**］　北側中央の標高 30.1～30.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　143 cm×70 cmの楕円形。深さ 30 cm。底面は平坦で、断面形は U 字状である。
［**堆積土**］　4 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

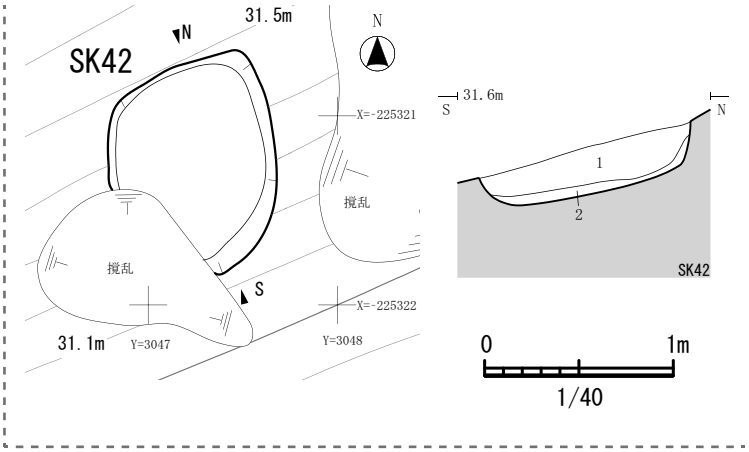
【SK44 土坑】（第 54 図）
［**位置**］　北側中央の標高 30.0～30.4m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　SK45 より古い（SK44→SK45）。
［**規模・形状**］　158 cm以上×48 cmの不整形（推定）。深さ 40 cm。底面は平坦で、壁は垂直気味に立ち上がる。断面形は逆台形である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

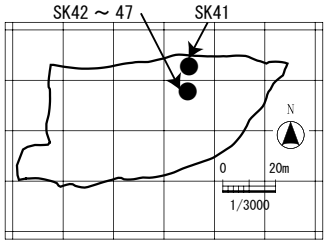
【SK45 土坑】（第 54・66 図）
［**位置**］　北側中央の標高 30.4～30.7m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　SK44・46 より新しい（SK44・46→SK45）。
［**規模・形状**］　115 cm×95 cmの楕円形。深さ 30 cm。底面は船底状で、北西側の壁は緩やかに立ち上がり、南東側の壁は垂直気味に立ち上がる。断面形は U 字状である。
［**堆積土**］　4 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

【SK46 土坑】（第 54 図）
［**位置**］　北側中央の標高 30.3～30.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　SK47 より新しく、SK45 より古い（SK47→SK46→SK45）。
［**規模・形状**］　150 cm×143 cmの楕円形。深さ 25 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］　堆積土から土師器甕破片 10 点（35g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK47 土坑】（第 54 図）
［**位置**］　北側中央の標高 30.3～30.7m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　SK50 より新しく、SK46 より古い（SK50→SK47→SK46）。
［**規模・形状**］　150 cm以上×120 cmの楕円形（推定）。深さ 32 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］　堆積土から縄文土器深鉢破片 7 点（35g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

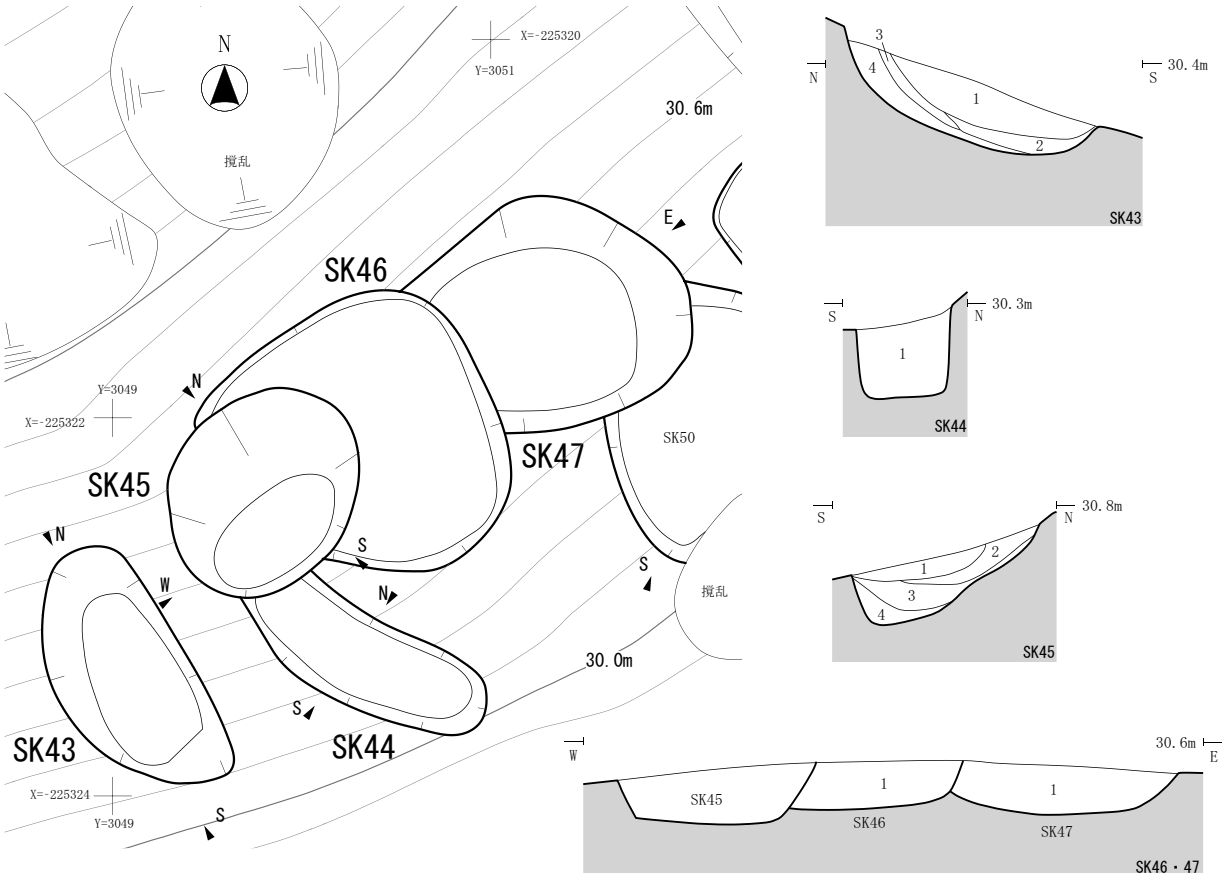






【SK41～47 土坑 土層注記】　※平面図・断面図：S=1/40

	層	土色	土性	備考
SK41	1	黄褐色(10YR5/6)	粘質	黒色粘質土ブロック含む。
	2	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土粒状含む。炭化物層。
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質	炭化物片、焼土含む。
SK42	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片含む。
	2	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	炭化物片少量含む。
SK43	1	黄褐色(10YR5/6)	粘質	灰黄褐色粘土ブロック、炭化物片微量含む。
	2	にぶい褐色(7.5YR5/4)	シルト	やや砂質帯びる。
	3	褐灰色(10YR4/1)	シルト	混入物なし。
	4	明褐色(7.5YR5/8)	粘質	灰黄褐色粘質土少量含む。
SK44	1	にぶい褐色(7.5YR5/4)	粘質	炭化物片微量含む。
SK45	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質	混入物なし。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	粘質	炭化物片少量含む。
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物片少量含む。
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	にぶい黄褐色シルト土含む。
SK46	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK47	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片微量含む。



第54図　SK41～47 土坑

【SK48 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 30.4～31.1m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　228 cm×100 cmの楕円形。深さ 40 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK49 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 30.0～30.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK50・51・82 より新しい（SK50・51・82→SK49）。
［規模・形状］　170 cm×145 cmの不整形。深さ 13 cm。底面は斜面に沿って傾斜し、断面形は皿状である。底面の中央南側寄りに 32 cm×26 cm、深さ 10 cmのピットを検出した。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

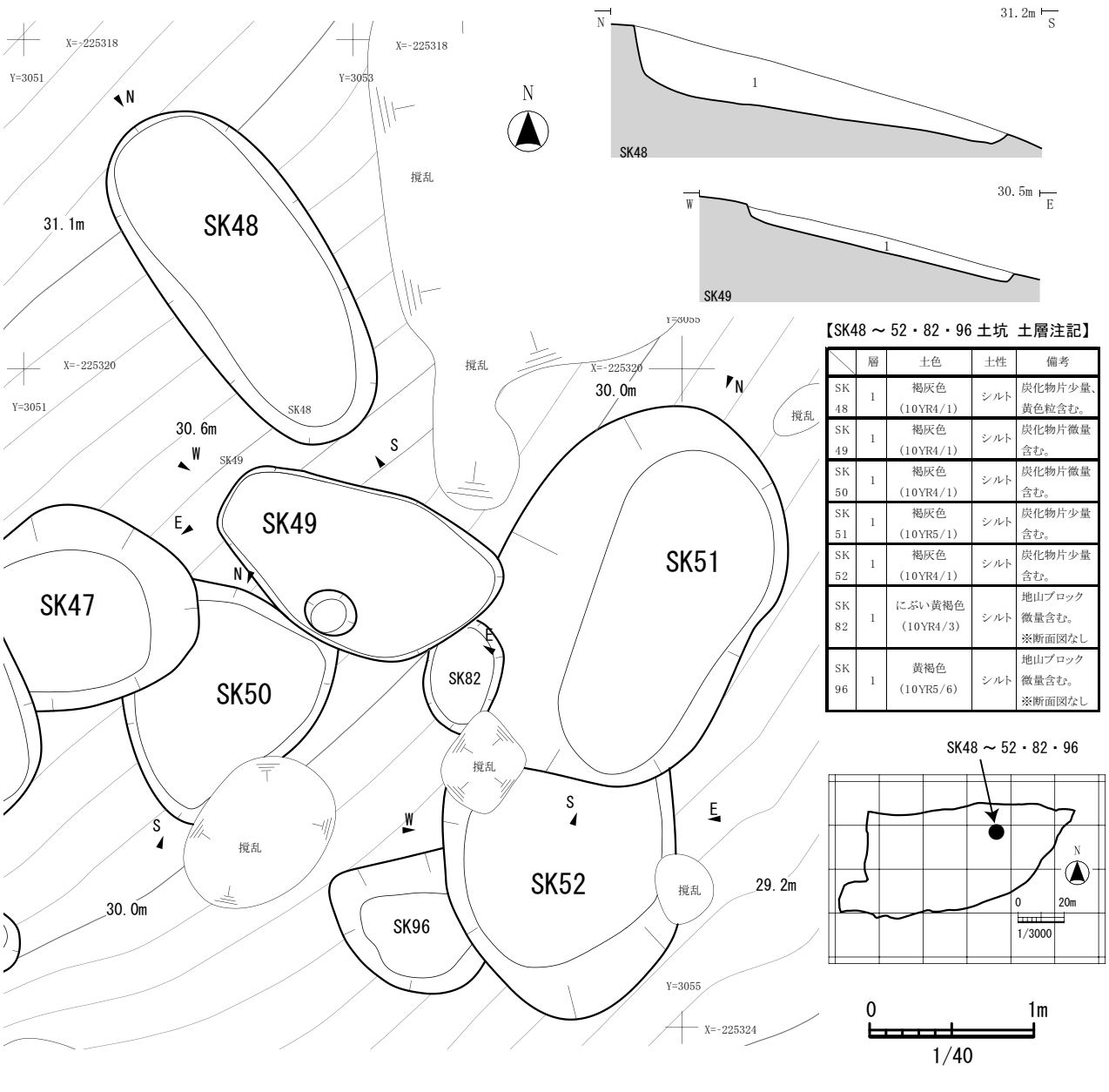
【SK50 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 30.0～30.4m の斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK47・49 より古い（SK50→SK47・49）。南側は一部現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　142 cm×125 cmの不整形。深さ 10 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK51 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 29.5.～30.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK52 より新しく、SK49・82 より古い（SK52→SK51→SK49・82）。
［規模・形状］　235 cm×153 cmの楕円形。深さ 25 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から弥生土器破片 3 点（55g）出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。このうち、鉢の底部または蓋の天井部と考えられる弥生土器破片 1 点（第 55 図 1）と壺の胴部破片 1 点（第 55 図 2）を図示した。

【SK52 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 29.2～29.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK96 より新しく、SK51 より古い（SK96→SK52→SK51）。
［規模・形状］　155 cm以上×141 cmの楕円形（推定）。深さ 30 cm。底面は船底状で、断面形は U 字状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK82 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 29.8～30.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK51 より新しく、SK49 より古い（SK51→SK82→SK49）。
［規模・形状］　67 cm×44 cmの楕円形。深さ 22 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK96 土坑】（第 55 図）
［位置］　北側中央の標高 29.5～29.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK52 より古い（SK96→SK52）。
［規模・形状］　85 cm×70 cm以上の不整形（推定）。深さ 30 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は U 字状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

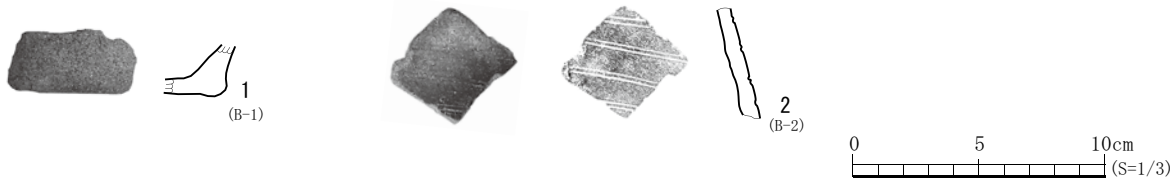


【SK48～52・82・96 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK 48	1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物片少量、黄色粒含む。
SK 49	1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK 50	1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK 51	1	褐灰色 (10YR5/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SK 52	1	褐灰色 (10YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SK 82	1	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	シルト	地山ブロック微量含む。※断面図なし
SK 96	1	黄褐色 (10YR5/6)	シルト	地山ブロック微量含む。※断面図なし

※平面図・断面図：S=1/40

SK51 出土遺物



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK51 堆積土	弥生土器	鉢or蓋	底部	内外面：磨滅のため不明、色調：外面・橙色(5YR6/8)、内面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：器厚0.5～1.4cm	B-1
2	SK51 堆積土	弥生土器	壺	胴部	外面：縄文(原胴不明)・平行沈線文、内面：剥離のため不明、色調：外面・にぶい黄褐色(10YR5/4)、内面・にぶい褐色(7.5YR5/3)、法量：器厚0.5～0.7cm	B-2

第55図　SK48～52・82・96 土坑

【SK53 土坑】（第 56 図）
［位置］　北側中央の標高 31.1～31.4m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK54 より新しい（SK54→SK53）。
［規模・形状］　一辺 85 cmの隅丸方形で、やや南側が丸みをもつ。深さ 8 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。3 層は炭化物片を多量に含んでおり、木炭焼成土坑に関連する遺構と思われる。
［出土遺物］なし。

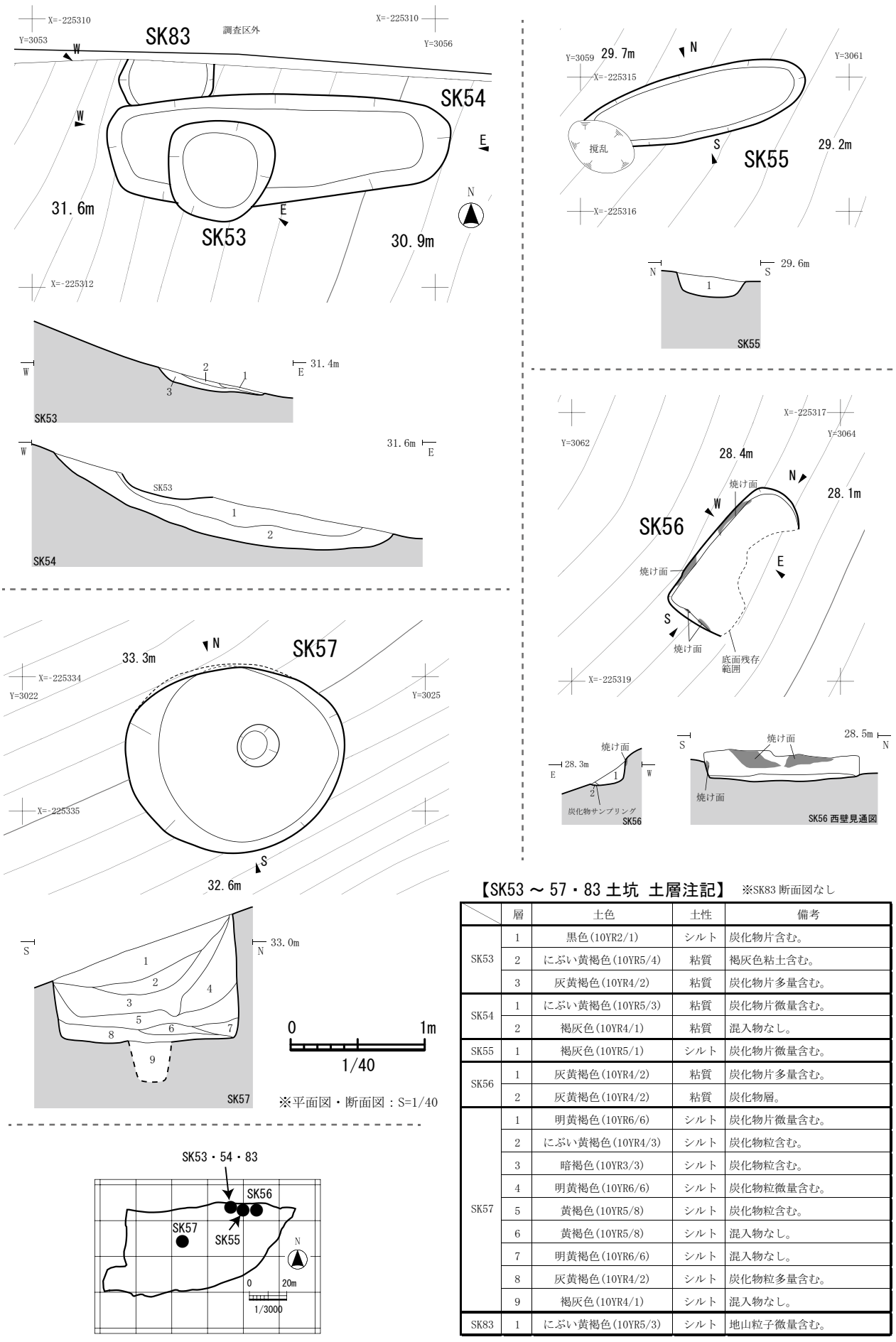
【SK54 土坑】（第 56 図）
［位置］　北側中央の標高 30.9～31.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK83 より新しく、SK53 より古い（SK83→SK54→SK53）。
［規模・形状］　255 cm×80 cmの楕円形。深さ 27 cm。底面はほぼ船底状で、東側に向かってやや低くなる。断面形はＵ字状である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層で、非常に硬く締まる。
［出土遺物］なし。

【SK83 土坑】（第 56 図）
［位置］　北側中央の標高 31.3～31.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　SK54 より古い（SK83→SK54）。遺構の北半は調査区外に延びる。
［規模・形状］　69 cm×30 cm以上の円形（推定）。深さ 27 cm。底面はほぼ平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から縄文土器破片 3 点（30g）、石器剥片 1 点（15g）が出土した。遺構に伴う遺物かは不明である。小破片のため、図示できなかった。

【SK55 土坑】（第 56 図）
［位置］　北側中央の標高 29.3～29.7m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。西側は一部現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　160 cm以上×51 cmの楕円形（推定）。深さ 14 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK56 土坑】（第 56・66 図）
［位置］　北側中央の標高 28.2～28.4m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。標高が低い南東側は大きく削平を受け、残っていなかった。
［規模・形状］　116 cm×54 cm以上の隅丸方形（推定）。深さ 8 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　2 層確認した。2 層は中央部分の炭化物層である。1 層は層厚 10 cm前後の炭化物片と焼土を多量に含んだ層で、炭化した細かい木片もみられた。南西側壁面で厚さ 5mm ほどの被熱痕跡がみられたことから木炭焼成土坑と考えられる。
［出土遺物］　なし。
［その他］堆積土 1 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 666～764cal AD であった。

【SK57 土坑】（第 56・66 図）
［位置］　中央やや西寄りの標高 32.7～33.2m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　162 cm×135 cmの円形。深さ 93 cm。底面は平坦で、断面形は円筒状である。底面のほぼ中央で直径 30 cm、深さ 30 cmのピットを検出した。西側の壁面は緩やかだが、他面は垂直に立ち上がる。形状から縄文時代の貯蔵穴と考えられる。
［堆積土］　9 層確認した。いずれも自然堆積層である。5～8 層は水平堆積であるが、1～4 層は北側からの流れ込みが顕著にみられた。炭化物片は最下層の 8 層に比較的多く含まれていた。9 層は底面ピットの堆積土で、褐灰色シルト土である。
［出土遺物］なし。下層から 7 cm×10 cmほどの花崗岩の自然石が 3 個出土した。



【SK53 ～ 57・83 土坑 土層注記】 ※SK83 断面図なし

	層	土色	土性	備考
SK53	1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物片含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質	褐灰色粘土含む。
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	炭化物片多量含む。
SK54	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	粘質	炭化物片微量含む。
	2	褐灰色(10YR4/1)	粘質	混入物なし。
SK55	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK56	1	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	炭化物片多量含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	炭化物層。
SK57	1	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物粒含む。
	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒含む。
	4	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	炭化物粒微量含む。
	5	黄褐色(10YR5/8)	シルト	炭化物粒含む。
	6	黄褐色(10YR5/8)	シルト	混入物なし。
	7	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	混入物なし。
	8	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物粒多量含む。
	9	褐灰色(10YR4/1)	シルト	混入物なし。
SK83	1	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	地山粒子微量含む。

第56図　SK53～57・83 土坑

【SK58 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 31.0～31.3m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［**重複**］　SK87・90 より新しい（SK87・90→SK58）。
［**規模・形状**］　136 cm×114 cmの隅丸方形。深さ 38 cm。底面はやや凸凹を呈し、断面形は逆台形である。
［**堆積土**］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

【SK59 土坑】（第 57・66 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 30.8～31.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　131 cm×116 cmの円形。深さ 33 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　5 層確認した。いずれも自然堆積層である。1 層には炭化物粒が比較的多く含まれていた。
［**出土遺物**］なし。

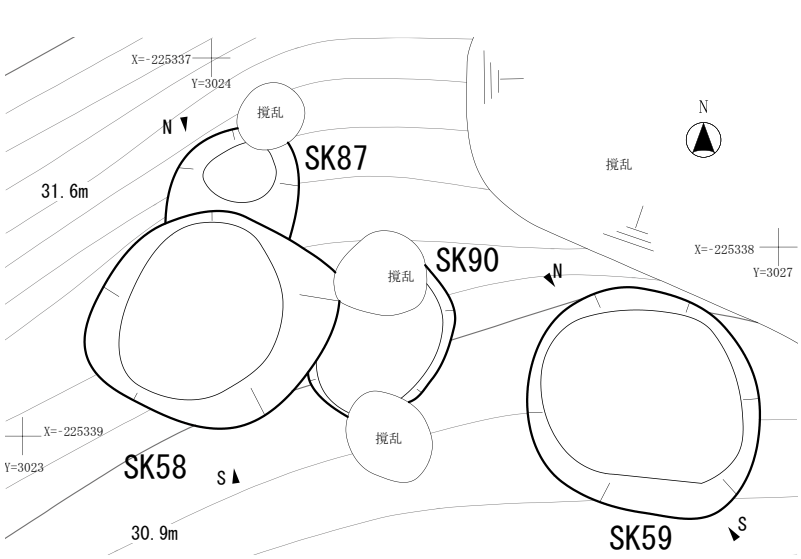
【SK87 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 31.2～31.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［**重複**］　SK58 より古い（SK87→SK58）。
［**規模・形状**］　66 cm×53 cm以上の楕円形（推定）。深さ 27 cm。底面はほぼ平坦で、断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

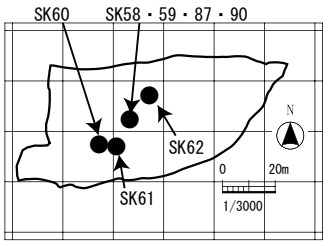
【SK90 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 31.0～31.2m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［**重複**］　SK58 より古い（SK90→SK58）。
［**規模・形状**］　88 cm×70 cm以上の楕円形（推定）。深さ 15 cm。底面はほぼ平坦で、断面形は皿状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

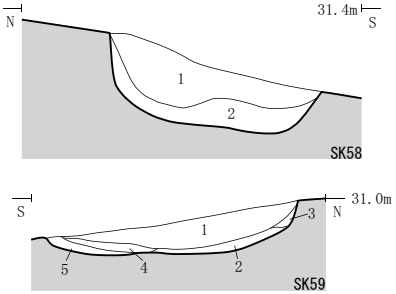
【SK60 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 31.1～31.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　160 cm×97 cmの楕円形。深さ 127 cm。底面は平坦で、断面形は円筒状である。北側と南側の壁面は緩やかに立ち上がるが、東側は垂直に、西側は底面近くでわずかにオーバーハングし、そこから垂直に立ち上がる。
［**堆積土**］　5 層確認した。いずれも自然堆積層である。最下層は水平であるが、4 層で東側からの流れ込みがあったため、その上はレンズ状に堆積していた。すべての層に炭化物片が混入するが、顕著な箇所は見られなかった。
［**出土遺物**］堆積土から縄文土器破片 6 点（75g）が出土したが、小破片のため、図示できなかった。

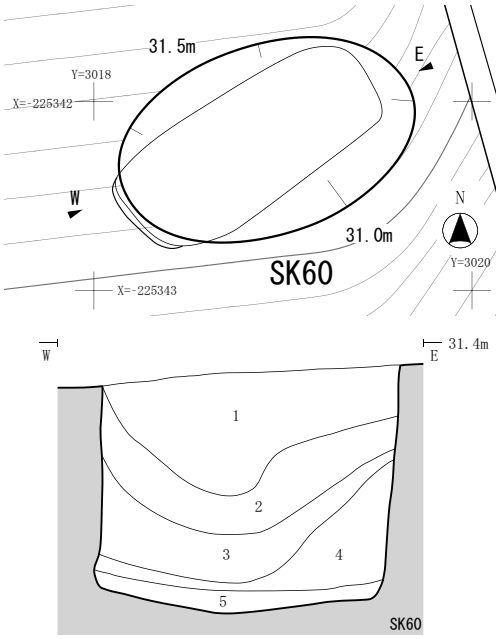
【SK61 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 29.0～29.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　267 cm以上×112m の楕円形（推定）。深さ 33 cm。底面は凸凹で、短軸方向の断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　6 層確認した。いずれも自然堆積層であるが、大きく 1～3 層の上層と 4～6 層の下層に分かれる。上層・中層中でも不整合な堆積となっているが、根等で撹乱されたものと考えられる。
［**出土遺物**］堆積土下層から弥生土器破片が 2 点（30g）出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。このうち、鉢の胴部片 1 点（第 57 図 1）を図示した。

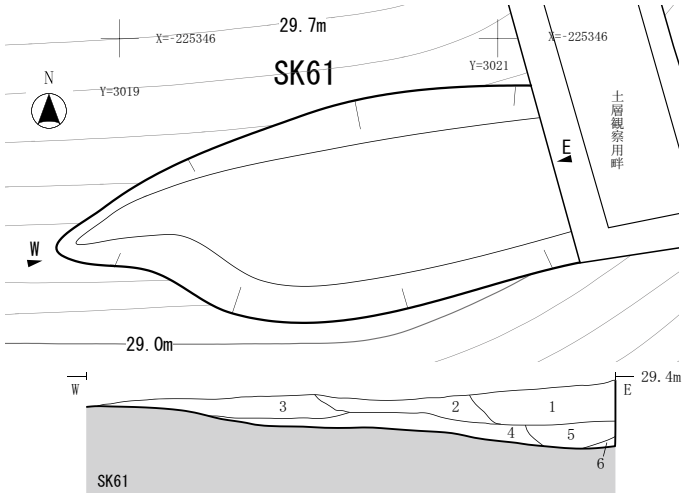
【SK62 土坑】（第 57 図）
［**位置**］　中央東側谷部①の標高 31.1～31.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　87 cm×78 cmの円形。深さ 13 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　3 層確認した。いずれも自然堆積層で、レンズ状に堆積していた。
［**出土遺物**］なし。

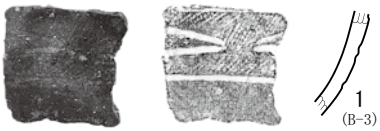










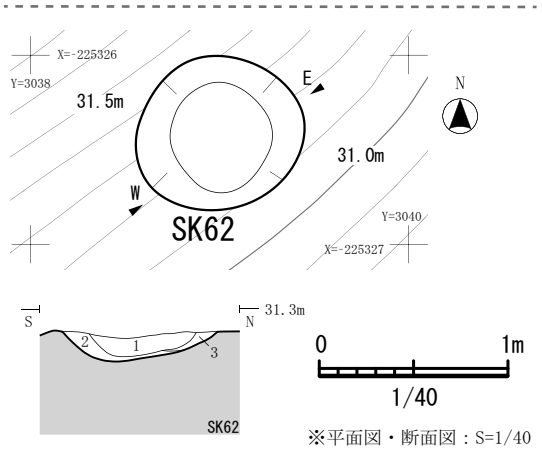


SK61 出土遺物

0　5　10cm

(S=1/3)

No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK61 堆積土	弥生土器	鉢	胴部	外面：縄文(縄文LR)・変形工字文・赤彩？、内面：磨滅のため不明、色調：外面・灰黄褐色(10YR4/2)、内面・橙色(7.5YR6/6)、法量：器厚0.6cm	B-3



※平面図・断面図：S=1/40

【SK58 ～ 62・87・90 土坑 土層注記】 ※SK87・90 断面図なし

	層	土色	土性	備考
SK58	1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	炭化物少量含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	褐色粘土ブロック含む。
SK59	1	黒色(10YR2/1)	シルト	焼土ブロック含む。炭化物層。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	褐色シルトブロック含む。
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	混入物なし。
	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物少量含む。
	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	混入物なし。
SK60	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物含む。
	2	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物含む。
	3	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	炭化物含む。
	4	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	炭化物、褐色シルトブロック含む。
	5	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	炭化物、灰褐色シルトブロック含む。
SK61	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物少量含む。
	2	褐色(10YR4/4) にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	混入物なし。
	3	褐色(10YR4/6)	シルト	混入物なし。
	4	褐色(10YR4/4)	シルト	土器出土。
	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	土器出土、炭化物粒状多量含む。
	6	褐色(7.5YR4/6)	シルト	にぶい黄褐色シルト含む。
SK62	1	黒褐色(7.5YR3/1)	シルト	炭化物粒含む。
	2	暗褐色(7.5YR3/3)	粘質	明黄褐色シルト土ブロック含む。
	3	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	にぶい黄褐色シルト土ブロック含む。
SK87	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック微量含む。
SK90	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロック微量含む。

第57図　SK58～62・87・90 土坑

【SK63 土坑】（第 58 図）
［位置］　中央東側谷部①の標高 29.6～30.1m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　185 cm×120 cmの楕円形。深さ 16 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK64 土坑】（第 58 図）
［位置］　中央東側谷部①の標高 27.9～28.3m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶc 層である。
［重複］　なし。東側を現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　105 cm以上×70 cmの楕円形（推定）。深さ 20 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

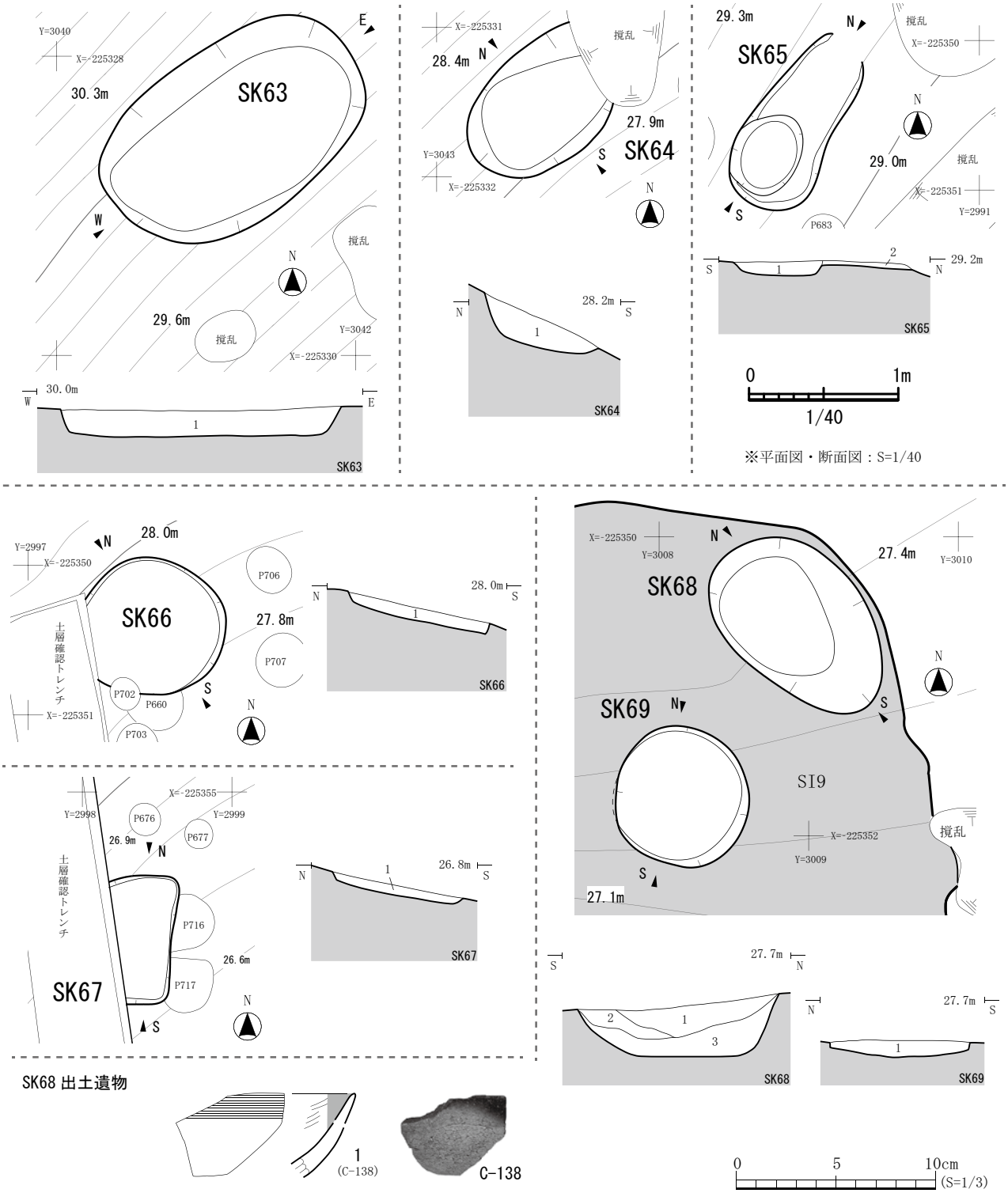
【SK65 土坑】（第 58・66 図）
［位置］　南側西寄りの標高 29.2m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　124 cm×56 cmの楕円形。深さ 12 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。北側と東側に段を有し、南側に 50 cm×45 cmの円形で、深さ 6 cmのピットを検出した。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から土師器の甕破片 3 点（75g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK66 土坑】（第 58 図）
［位置］　南側西寄りの標高 27.8～28.0m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　P660 より新しく、P702 より古い（P660→SK66→P702）。
［規模・形状］　直径 93 cmの円形。深さ 10 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］　なし。

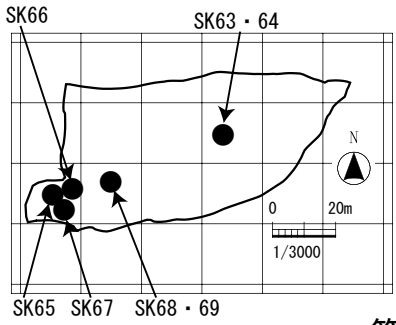
【SK67 土坑】（第 58 図）
［位置］　南側西寄りの標高 26.6～26.8m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴa 層である。
［重複］　西側を基本層④のトレンチで掘削してしまった。P716・717 より新しい（P716・717→SK67）。
［規模・形状］　88 cm×45 cm以上の方形（推定）。深さ 8 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK68 土坑】（第 58・67 図）
［位置］　南側西寄りの標高 27.4m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　SI9 より新しい（SI9→SK68）。
［規模・形状］　138 cm×87 cmの楕円形。深さ 36 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から土師器坏破片 4 点（40g）・甕破片 54 点（235g）、須恵器坏破片 2 点（15g）が出土した。このうち、非ロクロ成形の土師器坏破片 1 点（第 58 図 1）を図示した。遺物の出土量は多いが、出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。

【SK69 土坑】（第 58 図）
［位置］　南側西寄りの標高 27.2～27.3m の谷部斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　SI9 より新しい（SI9→SK69）。
［規模・形状］　直径 88 cmの円形。深さ 10 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から土師器甕破片 11 点（40g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK68 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り？・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：器厚0.4～0.8cm	C-138



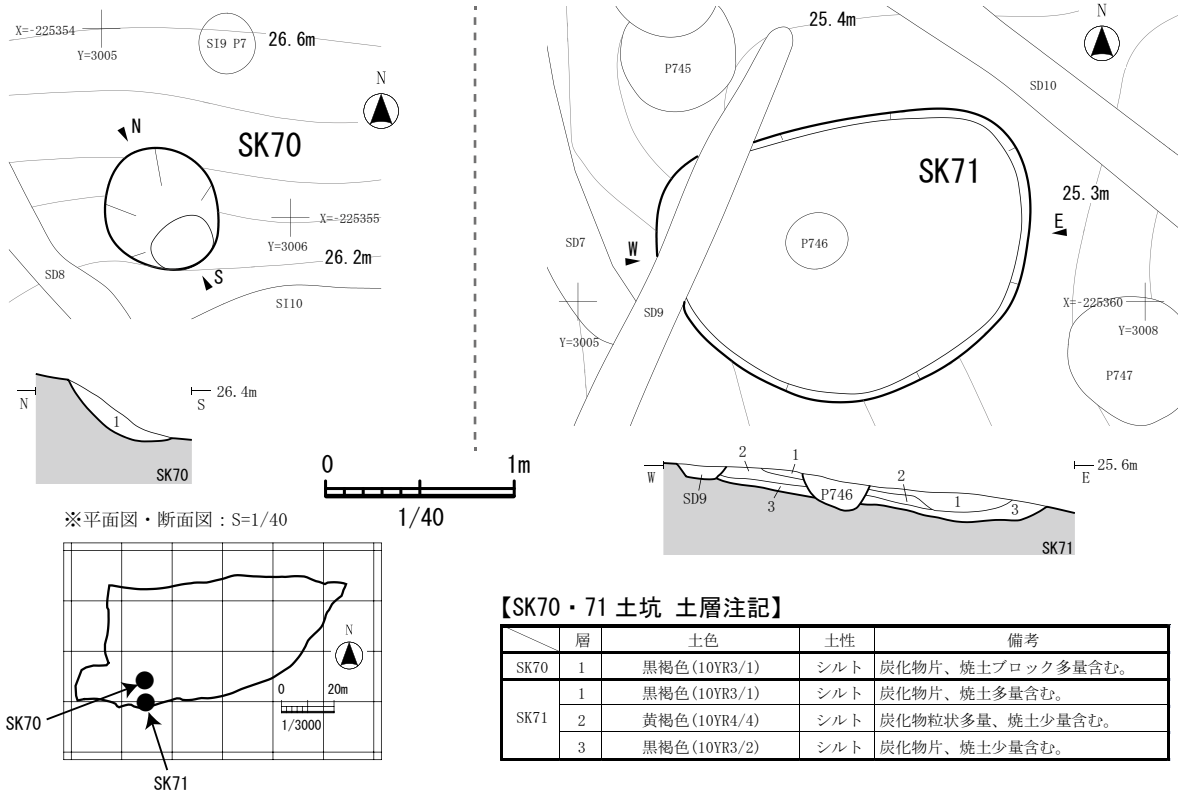
【SK63 ～ 69 土坑　土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK63	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK64	1	褐灰色(10YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK65	1	褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	褐色(10YR4/6)	シルト	混入物なし。
SK66	1	褐色(7.5YR4/6)	シルト	炭化物片含む。
SK67	1	褐色(7.5YR4/6)	シルト	炭化物片含む。
SK68	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片、焼土含む。
	2	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	混入物なし。
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	黄褐色シルト粒状含む。
SK69	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片、焼土微量含む。

第58図　SK63～69 土坑

【SK70 土坑】（第 59 図）
［位置］　南側西寄りの標高 26.2～26.4m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。南側は斜面により、削平を受ける。
［規模・形状］　63 cm×56 cm以上の円形（推定）。深さ 25 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層で、炭化物片や焼土を多く含む。
［出土遺物］なし。

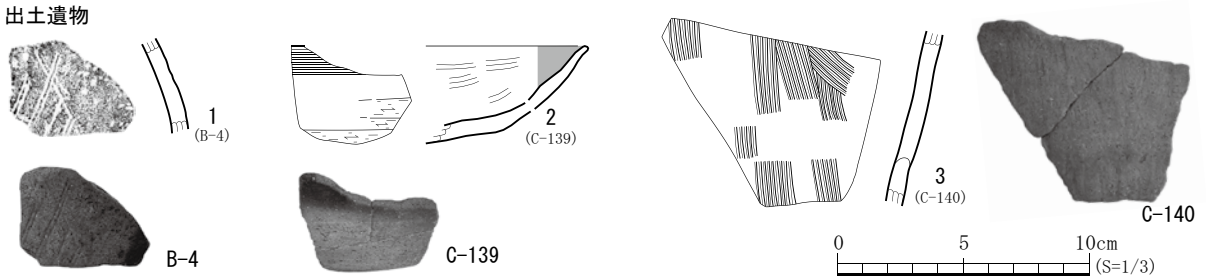
【SK71 土坑】（第 59・67 図）
［位置］　南側西寄りの標高 25.3～25.6m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅴb・c 層である。
［重複］　SD9、P746 より古い（SK71→SD9・P746）。
［規模・形状］　192 cm×148 cmの楕円形。深さ 15 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　3 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から弥生土器破片 1 点（15g）、非ロクロ成形の土師器坏 8 点（60g）・甕破片 22 点（305g）が出土した。このうち、弥生土器壺胴部破片 1 点（第 59 図 1）、土師器坏破片 1 点（第 59 図 2）・甕胴部破片（第 59 図 3）を図示した。出土状況から見て、土師器が遺構に伴う遺物である可能性が高い。



【SK70・71 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK70	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片、焼土ブロック多量含む。
SK71	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	炭化物片、焼土多量含む。
	2	黄褐色(10YR4/4)	シルト	炭化物粒状多量、焼土少量含む。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土少量含む。

SK71 出土遺物



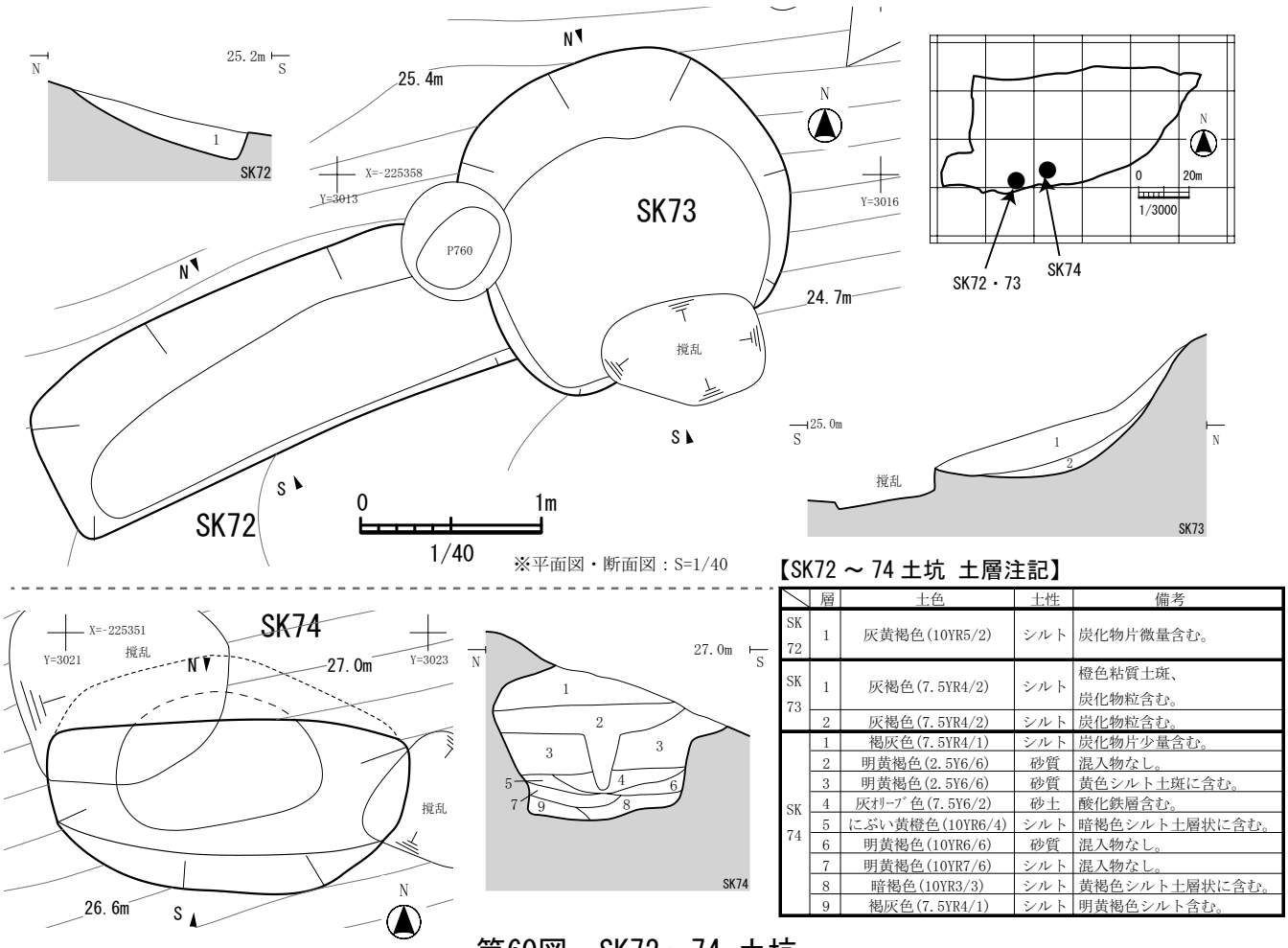
No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	SK71 堆積土	弥生土器	壺	胴部	外面：平行沈線文・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・明褐色(7.5YR5/6)、内面・黄褐色(10YR5/6)、法量：器厚0.6cm	B-4
2	SK71 堆積土	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部～底部ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明黄褐色(10YR7/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：器厚0.25～0.6cm	C-139
3	SK71 堆積土	土師器	甕	胴部	外面：ハケメ、内面：磨滅のため不明、色調：内外面・橙色(7.5YR6/6)、法量：器厚0.7～0.8cm	C-140

第59図　SK70・71 土坑

【SK72 土坑】（第 60 図）
［位置］　南側西寄りの標高 24.8～25.1m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　SK73、P760 より古い（SK72→SK73・P760）。
［規模・形状］　260 cm以上×94 cmの隅丸長方形（推定）。深さ 15 cm。底面は斜面に沿って傾斜し、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から非ロクロ成形・ロクロ成形の土師器坏破片 3 点（45g）、非ロクロ成形の土師器甕破片 25 点（125g）、須恵器甕破片 1 点（40g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK73 土坑】（第 60 図）
［位置］　南側西寄りの標高 24.7～25.4m の谷部②斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　SK72 より新、P760 より古い（SK72→SK73→P760）。南側を現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　177 cm×167 cmの隅丸方形。深さ 25 cm。底面は平坦で、断面形はＵ字状である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］堆積土から非ロクロ成形の土師器坏破片 4 点（20g）・甕破片 25 点（235g）、須恵器甕破片 1 点（20g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK74 土坑】（第 60・67 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 26.5～27.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。北西側と東側を一部、現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　195 cm×123 cmの楕円形。深さ 90 cm。底面は平坦で、断面形はフラスコ～円筒状である。東側と西側の壁はほぼ垂直に、南側の壁は緩やかに立ち上がる。北側は底面から 15 cmほど垂直に立ち上がり、オーバーハングし、強く内傾する。
［堆積土］　9 層確認した。いずれも自然堆積層である。下層の 4～9 層は薄く堆積し、上層の 1～3 層は比較的層厚が厚い。また、4 層には膜状の薄い酸化鉄が層状に入っていることから、水が溜まるなど、ある一定期間開いていた可能性が考えられる。2 層は柱状にみえるが、実際木根が入り込んでおり、撹乱であった。
［出土遺物］なし。



【SK72 ～ 74 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK 72	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	炭化物片微量含む。
SK 73	1	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	橙色粘質土斑、炭化物粒含む。
	2	灰褐色(7.5YR4/2)	シルト	炭化物粒含む。
SK 74	1	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。
	2	明黄褐色(2.5Y6/6)	砂質	混入物なし。
	3	明黄褐色(2.5Y6/6)	砂質	黄色シルト土斑に含む。
	4	灰ｵﾘｰﾌﾞ色(7.5Y6/2)	砂土	酸化鉄層含む。
	5	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	暗褐色シルト土層状に含む。
	6	明黄褐色(10YR6/6)	砂質	混入物なし。
	7	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	混入物なし。
	8	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黄褐色シルト土層状に含む。
	9	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	明黄褐色シルト含む。

第60図　SK72～74 土坑

【SK75 土坑】（第 61・67 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 25.2～25.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶe 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　162 cm×82 cmの隅丸長方形。深さ 40 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　4 層確認した。いずれも自然堆積層で、北側からの流入が顕著にみられた。
［出土遺物］堆積土から土師器甕破片 1 点（5g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK76 土坑】（第 61 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 24.2～24.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。南側は重機通路により、削平を受け、中央部を現代の撹乱に壊される。
［規模・形状］　400 cm×92 cmの隅丸長方形。深さ 18 cm。底面は平坦で、短軸方向の断面形は皿状である。SK72 に形状が類似している。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

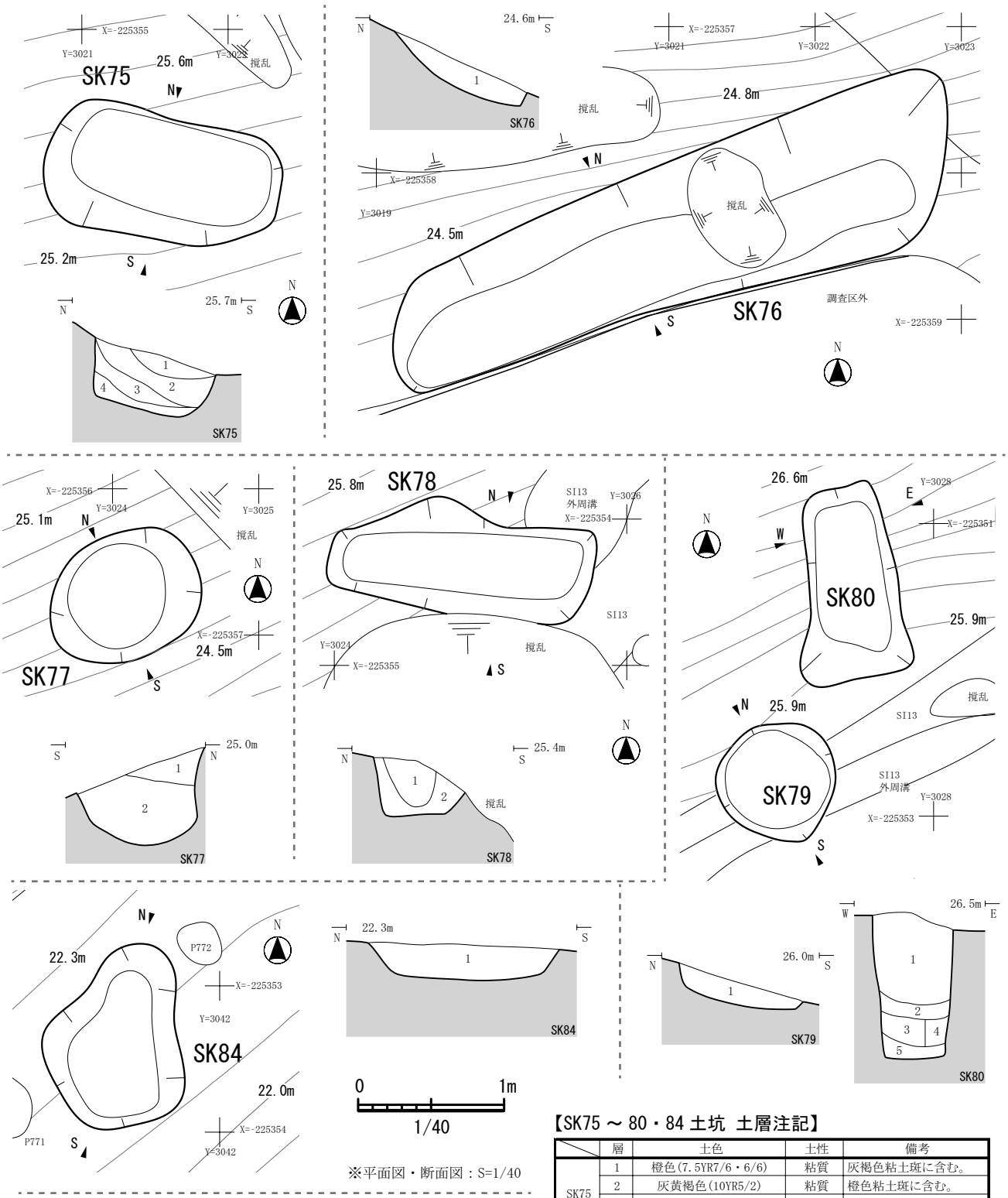
【SK77 土坑】（第 61・67 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 24.6～25.0m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶe 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　107 cm×85 cmの円形。深さ 53 cm。底面は丸底で、断面形は U 字状である。北側壁面はややオーバーハング気味に立ち上がる。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。
［出土遺物］なし。

【SK78 土坑】（第 61 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 25.3～25.7m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶe 層である。
［重複］　SI13 より新しい（SI13→SK78）。南側を現代の撹乱により、削平を受ける。
［規模・形状］　177 cm×67 cmの隅丸長方形。深さ 38 cm。底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［堆積土］　2 層確認した。１層は２層が堆積した後、再掘削を行ったか１層に何らかの構築物があり、それが失われ、他所から土が流入したものと思われる。
［出土遺物］堆積土から縄文土器破片 1 点（5g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK79 土坑】（第 61 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 25.6～25.9m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　SI13 より新しい（SI13→SK79）。
［規模・形状］　直径 80 cmの円形。深さ 12 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層で、炭化物片を少量含む。
［出土遺物］堆積土からロクロ成形の土師器坏破片 1 点（5g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

【SK80 土坑】（第 61 図）
［位置］　南側やや西寄りの標高 25.9～26.5m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　130 cm×60 cmの隅丸長方形。深さ 100 cm。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。断面形は逆台形である。
［堆積土］　5 層確認した。いずれも自然堆積層と思われるが、3・4 層はどちらかにブロック状で混入したのか、不整合を成す。
［出土遺物］なし。

【SK84 土坑】（第 61 図）
［位置］　南側中央の標高 22.1～22.3m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　130 cm×100 cmの不整形。深さ 25 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　1 層確認した。自然堆積層で、炭化物片を少量含み、非常に硬く締まる。
［出土遺物］堆積土から須恵器坏破片 1 点（5g）・甕破片 2 点（60g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。



【SK75 ～ 80・84 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK75	1	橙色(7.5YR7/6・6/6)	粘質	灰褐色粘土斑に含む。
	2	灰黄褐色(10YR5/2)	粘質	橙色粘土斑に含む。
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質	橙色粘土斑に含む。
	4	橙色(7.5YR7/6)	粘質	混入物なし。
SK76	1	褐灰色(7.5YR5/1)	シルト	炭化物片微量含む。
SK77	1	橙色(7.5YR7/6)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	橙色(7.5YR6/6) にぶい橙色(5YR6/4)	シルト	混入物なし。
SK78	1	橙色(7.5YR7/6)	粘質	混入物なし。
	2	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土含む。
SK79	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SK80	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片微量含む。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。
	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	混入物なし。
	4	褐灰色(10YR4/1)	シルト	混入物なし。
	5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。
SK84	1	黄灰色(2.5Y5/1)	粘土	炭化物片少量含む。

第61図　SK75～80・84 土坑

【SK85 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 21.6～21.9m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　86 cm×60 cmの楕円形。深さ 8 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

【SK86 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 21.7～22.1m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　SI15 より新しい（SI15→SK86）。西側を現代の撹乱により、削平を受ける。
［**規模・形状**］　145 cm×65 cmの楕円形。深さ 7 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

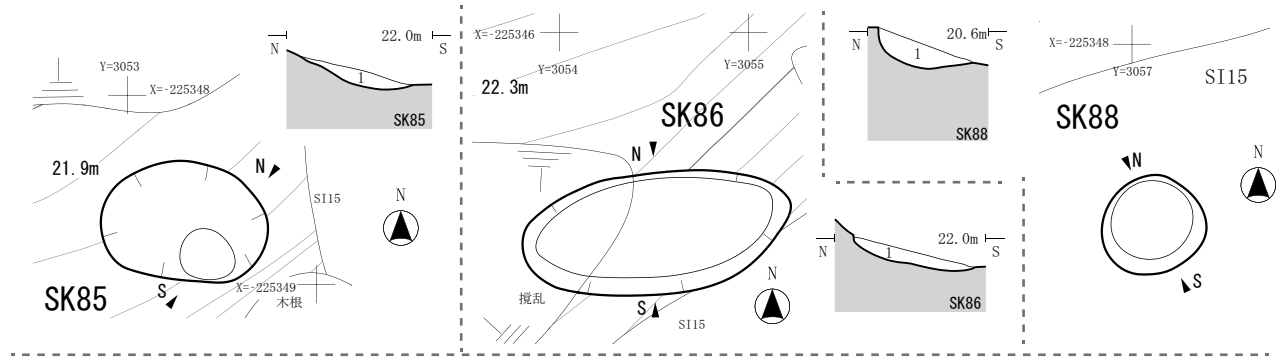
【SK88 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 20.6m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　SI15 より新しい（SI15→SK88）。
［**規模・形状**］　直径 51 cmの円形。深さ 15 cm。底面は丸底で、断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層で、炭化物片を多量含む。
［**出土遺物**］なし。

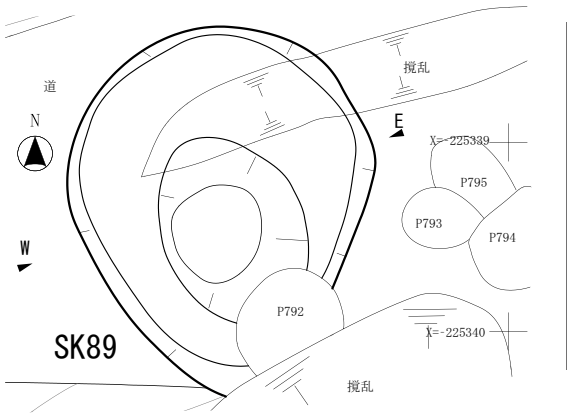
【SK89 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 23.6～24.0m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　P792 より古い（SK89→P792）。南側及び北側の一部は現代の撹乱により、削平を受ける。
［**規模・形状**］　185 cm以上×164 cmの円形（推定）。深さ 90 cm。周囲に段を有し、底面は平坦で、断面形は逆台形である。
［**堆積土**］　8 層確認した。1 層は他所からの流入土、2～8 層は不整合で、ブロック状の堆積を成していることから、人為堆積層と考えられる。
［**出土遺物**］堆積土から土師器甕破片 2 点（50g）、須恵器坏破片 1 点（55g）、鉄滓 1 点（25g）が出土した。これらの遺物は、遺構を埋め戻す際に混入したものとみられる。このうち、須恵器坏破片（第 62 図 1）を図示した。

【SK91 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　中央やや西寄りの標高 29.4～29.8m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶb 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　74 cm×66 cmの円形。深さ 30 cm。底面はほぼ平坦で、断面形はＵ字状である。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。
［**その他**］堆積度 1 層に含まれていた炭化物片の放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年較正年代は 1211～1126cal BC であった。

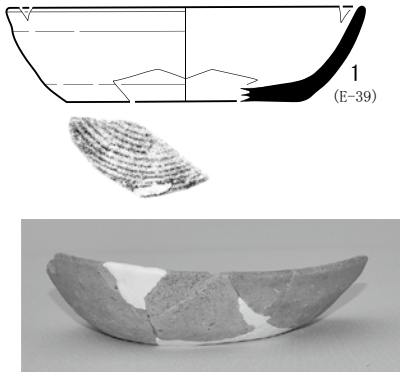
【SK92 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 23.6m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　なし。
［**規模・形状**］　一辺 55 cmの隅丸方形。深さ 53 cm。断面形は逆台形である。壁は直線的に立ち上がる。
［**堆積土**］　1 層確認した。自然堆積層である。
［**出土遺物**］なし。

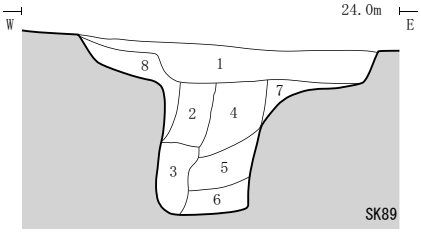
【SK93 土坑】（第 62 図）
［**位置**］　南側中央の標高 22.7～22.9 m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［**重複**］　P650・651 より新しい（P650・651→SK93）。
［**規模・形状**］　167 cm×80 cmの長方形。深さ 105 cm。底面は平坦で、断面形はフラスコ～円筒状である。東側と西側の壁面は垂直に、南側はやや緩やかにに立ち上がる。北側は底面からオーバーハングして立ち上がり、中位で内傾する。
［**堆積土**］　7 層確認した。いずれも自然堆積層であるが、3～6 層はブロック状に堆積しており、壁面が崩れる等して堆積したものと考えられる。
［**出土遺物**］なし。





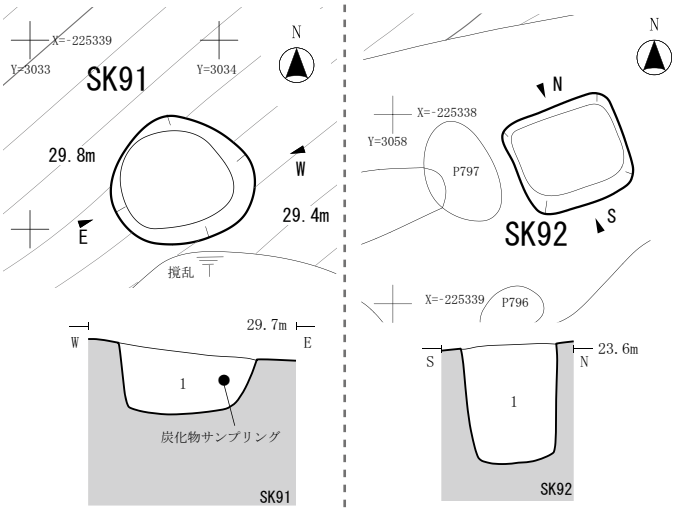
SK89 出土遺物





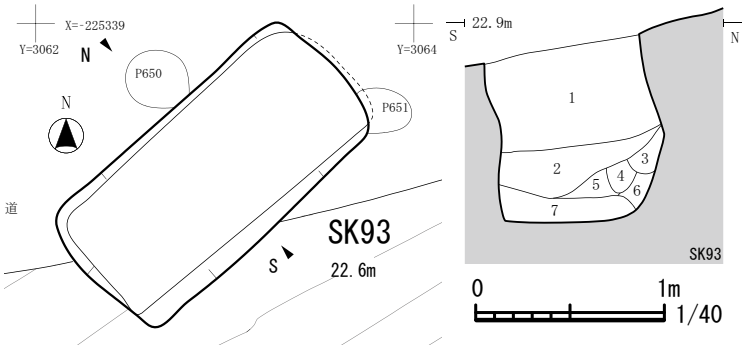
0　5　10cm
(S=1/3)

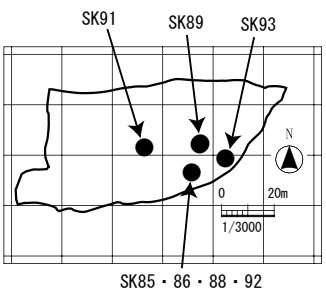
No.	層	種別	器種	残　存	登録
1	SK89・堆積土	須恵器	坏	口縁部～底部	E-39
	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】				
	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整、内面：ロクロナデ、色調：内外面・にぶい黄橙色(10YR7/3)、法量：口径(14.0)cm・器高3.7cm・底径(9.4)cm・器厚0.4～0.6cm、焼成：還元弱い				



【SK85・86・88・89・91～93 土坑 土層注記】

	層	土色	土性	備考
SK85	1	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SK86	1	褐灰色(7.5YR4/1)	シルト	炭化物片少量含む。
SK88	1	黒色(10YR2/1)	シルト	炭化物層。
SK89	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	混入物なし。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黄灰色粘質土多量含む。
	3	暗灰黄色(2.5Y4/2)	シルト	炭化物粒状含む。
	4	黄褐色(2.5Y5/3)	シルト	混入物なし。
	5	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	シルト	混入物なし。
	6	オリーブ褐色(2.5Y4/4)	シルト	混入物なし。
	7	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山ブロック含む。
	8	黄褐色(10YR5/6)	シルト	灰黄褐色シルト土含む。
SK91	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	炭化物片少量含む。
SK92	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	混入物なし。
SK93	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	炭化物片、焼土粒状含む。
	2	黄褐色(10YR5/6) 黒褐色(10YR3/2)	シルト	混入物なし。
	3	明黄褐色(10YR6/6)	シルト	混入物なし。
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	根か。
	5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	炭化物片微量含む。
	6	黄褐色(10YR5/6)	シルト	混入物なし。
	7	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	混入物なし。



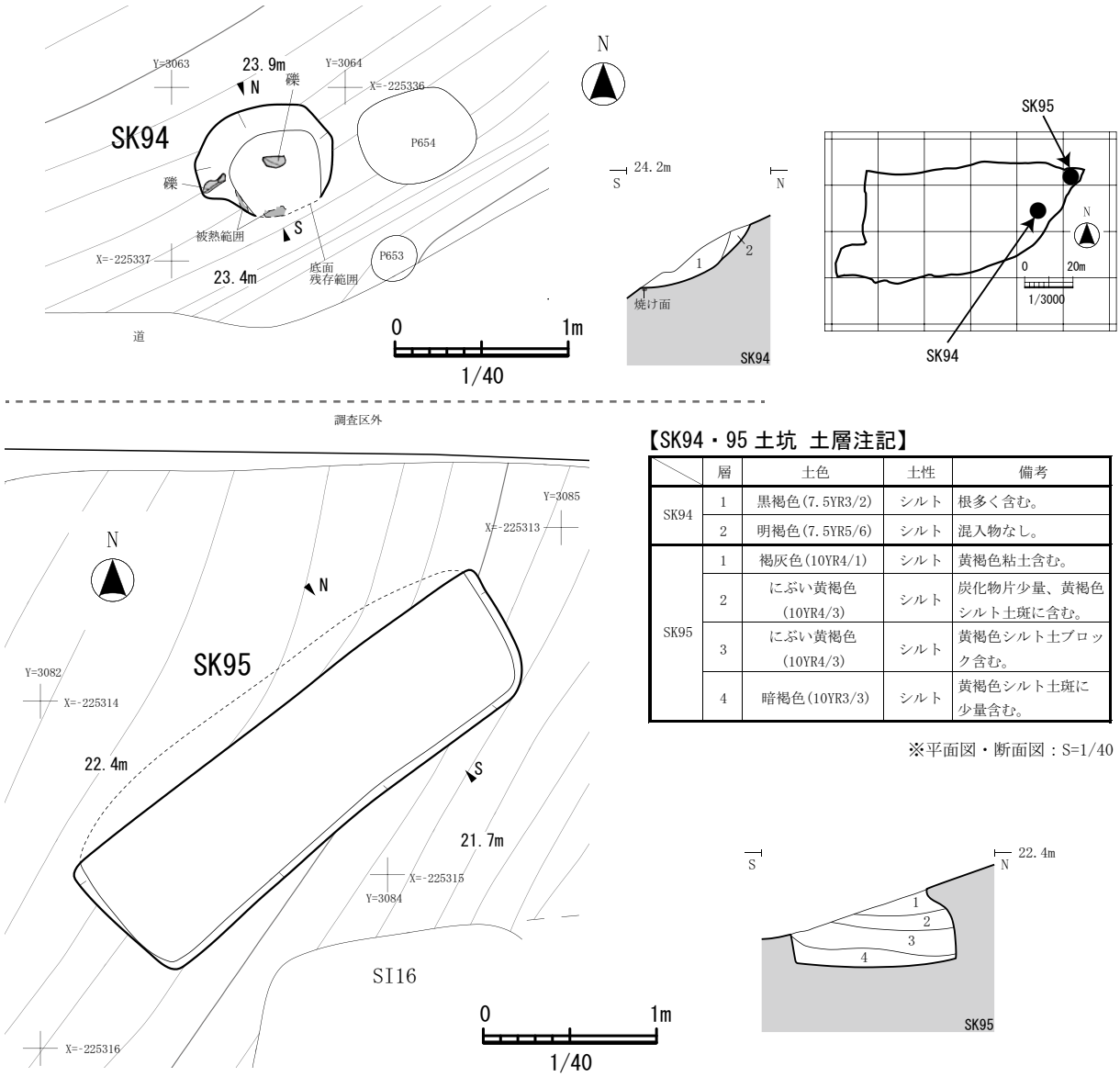


0　1m
1/40　※平面図・断面図：S=1/40

第62図　SK85・86・88・89～93 土坑

【SK94 土坑】（第 63・67 図）
［位置］　南側中央の標高 23.5～23.9m の急斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　81 cm×65 cm以上の楕円形（推定）。南側は斜面により、削平を受けている。深さ 15 cm。底面は平坦で、断面形は皿状である。
［堆積土］　2 層確認した。いずれも自然堆積層である。南側 2 か所の壁面に厚さ 5mm ほどの被熱痕跡がみられることから、木炭焼成土坑と考えられる。また、堆積土中に花崗岩の自然礫が 2 個出土した。
［出土遺物］なし。

【SK95 土坑】（第 63 図）
［位置］　北側東寄りの標高 21.8～22.3m の緩斜面で確認した。検出面は基本層Ⅶd 層である。
［重複］　なし。
［規模・形状］　282 cm×73 cmの隅丸長方形。深さ 42 cm。底面は平坦で、断面形はフラスコ状～逆台形である。残存状況が良い西側は底面からオーバーハングして壁が立ち上がり、内傾する。
［堆積土］　4 層確認した。いずれも自然堆積層で、水平に堆積していた。
［出土遺物］堆積土からロクロ成形の土師器坏 6 点（50g）・甕 34 点（390g）、須恵器坏 1 点（5g）が出土した。出土状況からみて、周辺から流入したものとみられる。小破片のため、図示できなかった。

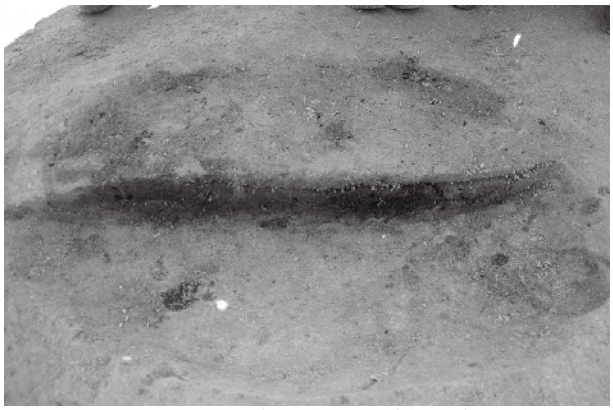


【SK94・95 土坑 土層注記】

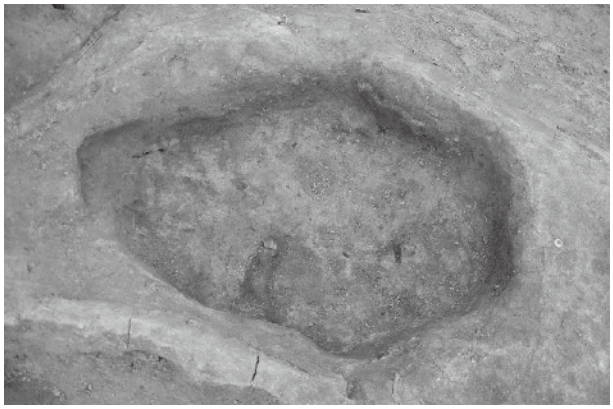
	層	土色	土性	備考
SK94	1	黒褐色(7.5YR3/2)	シルト	根多く含む。
	2	明褐色(7.5YR5/6)	シルト	混入物なし。
SK95	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	黄褐色粘土含む。
	2	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	炭化物片少量、黄褐色シルト土斑に含む。
	3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	黄褐色シルト土ブロック含む。
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	黄褐色シルト土斑に少量含む。

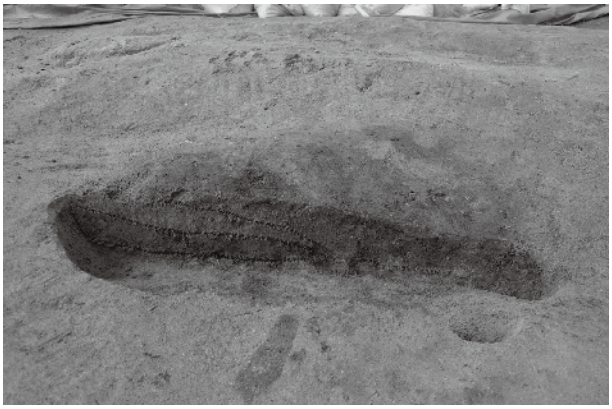
※平面図・断面図：S=1/40

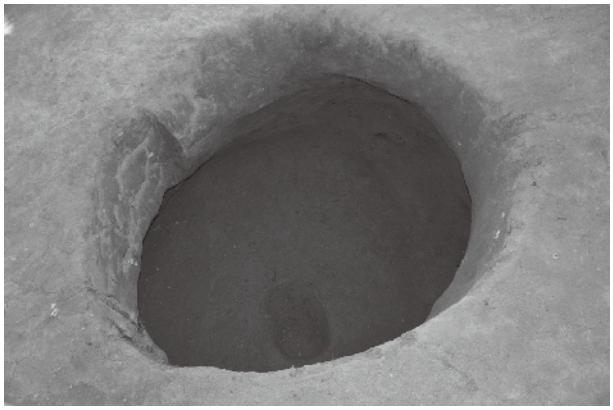
第63図　SK94・95 土坑


1．SK19 土坑　土層断面（北から）

2．SK20 土坑　土層断面（西から）


3．SK20 土坑　完掘状況（西から）


4．SK24 土坑　土層断面（南から）


5．SK25 土坑　完掘状況（北から）

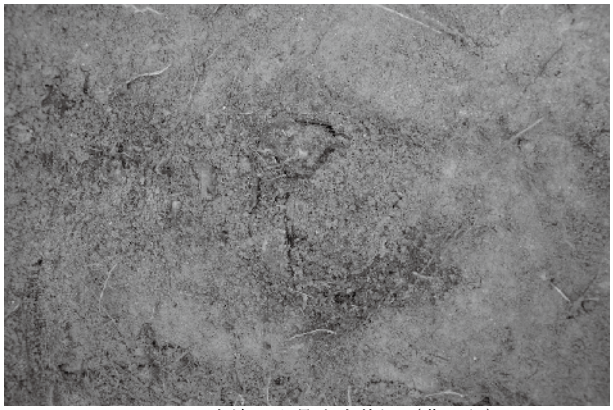
6．SK25 土坑　礫出土状況（東から）

7．SK25 土坑　遺物（A-1）出土状況（北から）

8．SK33 土坑　土層断面（南東から）

第64図　主要土坑（SK）写真図版（1）

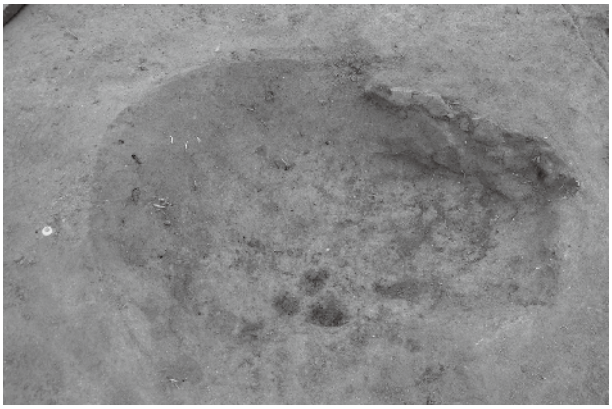
1．SK28 ～ 31 土坑　完掘状況（北から）


2．SK30 土坑　人骨出土状況（北から）

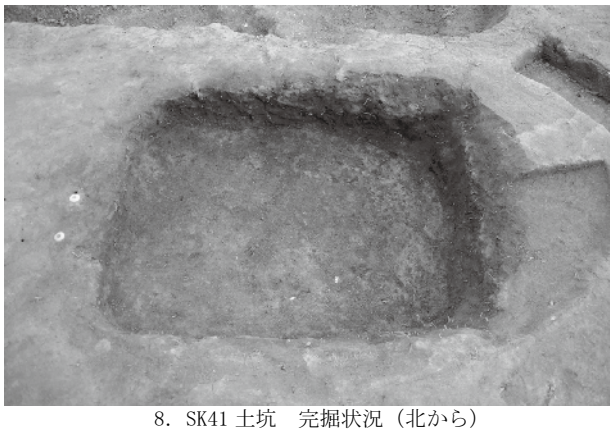
3．SK34 土坑　土層断面（東から）

4．SK37 土坑　土層断面（南東から）

5．SK38 土坑　土層断面（南東から）

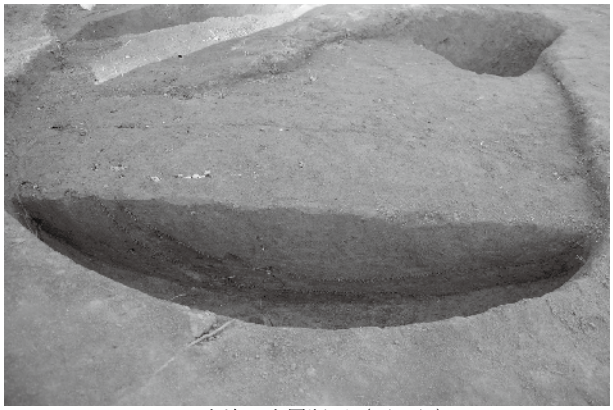

6．SK38 土坑　完掘状況（南東から）

7．SK38 土坑　壁面被熱状況（南から）

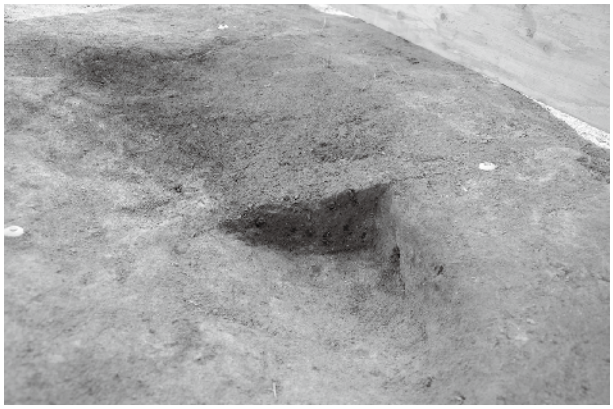

8．SK41 土坑　完掘状況（北から）

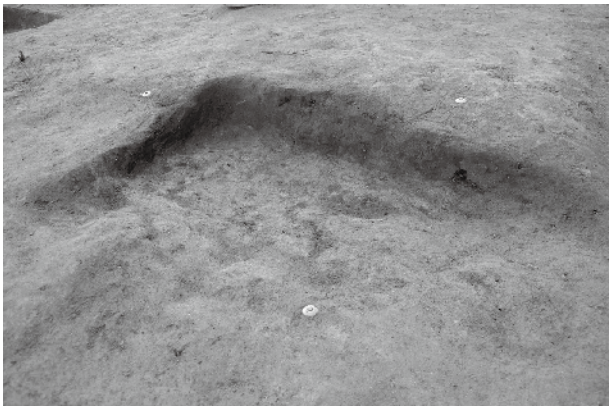
第65図　主要土坑（SK）写真図版（2）

1．SK41 土坑　土層断面（北から）


2．SK43 土坑　土層断面（西から）

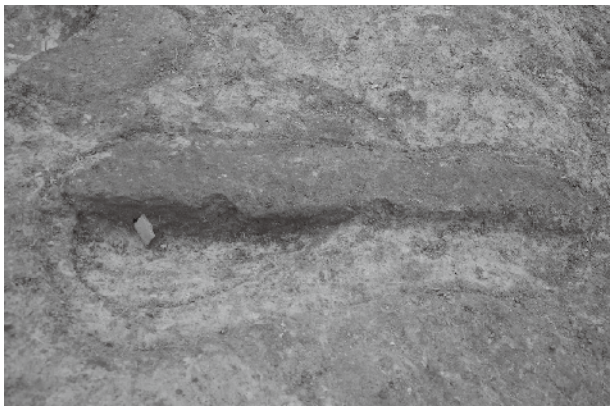
3．SK45 土坑　土層断面（東から）


4．SK56 土坑　土層断面（北東から）

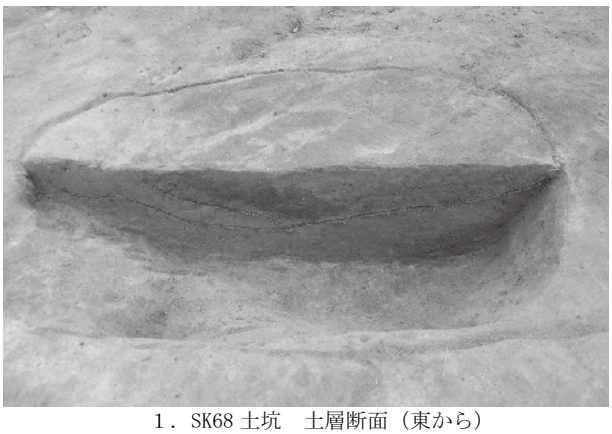

5．SK56 土坑　完掘状況（北東から）

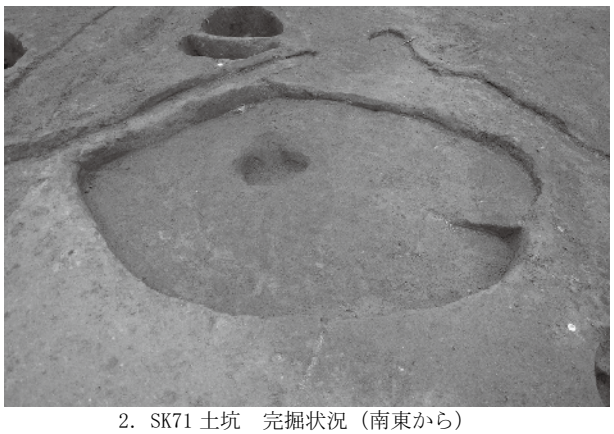
6．SK57 土坑　完掘状況（北から）

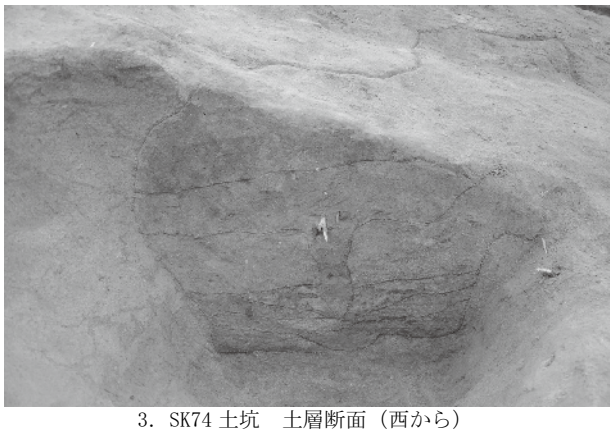
7．SK59 土坑　土層断面（東から）


8．SK65 土坑　土層断面（南東から）

第66図　主要土坑（SK）写真図版（3）


1．SK68 土坑　土層断面（東から）


2．SK71 土坑　完掘状況（南東から）


3．SK74 土坑　土層断面（西から）

4．SK75 土坑　土層断面（西から）

5．SK77 土坑　土層断面（東から）

6．SK94 土坑　土層断面（東から）

第67図　主要土坑（SK）写真図版（4）

５．基本層Ⅳ・Ⅴ層出土遺物

調査区西側の「谷部②」の標高 26.0～28.2m付近に堆積している基本層Ⅳ・Ⅴ層、調査区東側の「谷部①」の標高 20～22.5m 付近に堆積している基本層Ⅴg 層に遺物が比較的多く含まれていたことから、この分布範囲を遺物包含層と認識し調査を行った（包含層の範囲は第 5・8・9 図、基本層の詳細は第Ⅲ章第 2 節を参照）。調査にあたっては、遺物包含層と認識された範囲にサブトレンチを設定し、土層断面で包含層の基本層序を確認した後、各層ごとに掘削を行い、遺物の取り上げを行った。

調査区西側の**「谷部②」**で確認した**基本層Ⅴ層**では、縄文土器・弥生土器・土師器（非ロクロ成形）、**基本層Ⅳ層**では縄文土器・弥生土器・土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）・須恵器・金属製品・鉄滓が出土した。また、東側の**「谷部①」**で確認した**基本層Ⅴg 層**では、弥生土器・土師器が出土している（第 9 表）。出土した遺物は、ほとんどが破片資料で、高所からの流れ込みと考えられるが、調査範囲内ではそれにあたる遺構は確認されていないことから、その起源は包含層周辺の遺構から流入または遺棄され、堆積したものとみておきたい。出土遺物の特徴や包含層上で確認した遺構の性格等から、古代前後以降に堆積した層と判断される。この他、西側「谷部②」の基本層Ⅲ層でも縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が少量出土しているが、Ⅳ・Ⅴ層と比較して、出土量が少なく小破片が大半を占めることから、今回の調査では遺物包含層には認定せず、基本層出土遺物として取り扱っている。

以下、比較的多くの遺物が出土した西側「谷部②」の基本層Ⅵ・Ⅴ層出土遺物と、地点が異なる東側「谷部①」の基本層Ⅴg 層出土遺物について、その概要を提示する。

（１）西側谷部②・基本層Ⅴ層出土遺物（第 68 図 4～6）

西側谷部・基本層Ⅴ層から出土した遺物の総数は 152 点（1,425g）で、その内訳は縄文土器 15 点（215g）、弥生土器 1 点（10g）、土師器 136 点（1,200g）である。このうち、図示できたのは、土師器 3 点である。

土師器は、すべて非ロクロ成形のもので、出土した器種は坏・甕である。このうち、図示できたものは、非ロクロ成形の坏 3 点（第 68 図 4～6）である。図示した坏は、胴部外面にヘラ削り・口縁部外面にヨコナデ、内面にミガキを施すものであり、図示できなかった坏類についても、同様の特徴を有する。なお、第 68 図 6 には内黒処理が施されるが、第 68 図 4・5 は内黒処理が施されない。甕については、破片資料のため図示できたものはないが、外面にハケメ・ヘラ削りを施すものが大半を占める。

（２）西側谷部②・基本層Ⅳ層出土遺物（第 68 図 1～3）

西側谷部・基本層Ⅳ層から出土した遺物の総数は 366 点（3,370g）で、その内訳は縄文土器 18 点（265g）、弥生土器 2 点（35g）、土師器 339 点（2,830g）、須恵器 5 点（230g）、不明金属製品 1 点（5g）、鉄滓 1 点（5g）である。このうち、図示できたのは、土師器 3 点である。

土師器は非ロクロ成形・ロクロ成形のものが混在しており、339 点中 14 点がロクロ成形のものであった。このうち、ロクロ・非ロクロの識別ができなかった甕の胴部破片は、便宜的に非ロクロ成形に分類したので、ロクロ成形の土師器の点数はさらに増加するとみられる。出土器種には、坏・高台付坏・甕がある。このうち、図示できたものは、ロクロ成形の内黒処理を施した坏 2 点（第 68 図 1・2）と非ロクロ成形の坏 1 点（第 68 図 3）である。ロクロ成形の坏には、底部切離技法が回転糸切無調整のものが含まれる。非ロクロ成形の土師器坏は西側谷部・基本層Ⅴ層で出土したものとほぼ同様の特徴を有する。

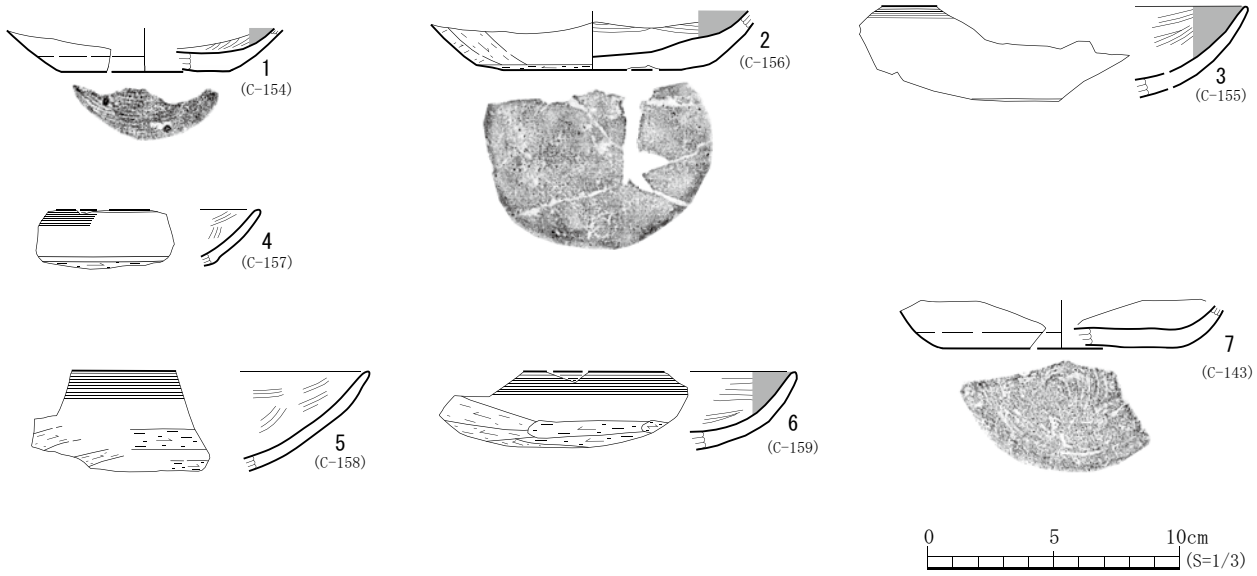
須恵器は小破片のため図示できたものはないが、出土した器種は甕胴部破片のみである。

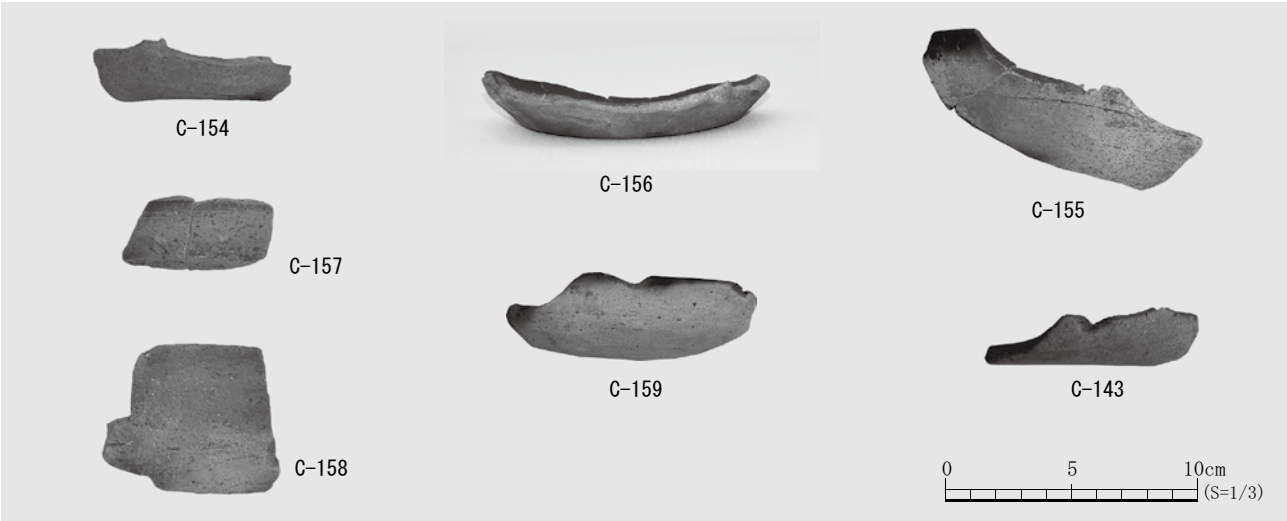
（３）東側谷部①・基本層Ⅴg 層出土遺物（第 68 図 7）

東側谷部・基本層Ⅴg 層から出土した遺物の総数は 84 点（1,400g）で、その内訳は弥生土器 3 点（50g）、

土師師 81 点（1,350g）である。このうち、図示できたのは、土師器 1 点である。

土師器は非ロクロ成形・ロクロ成形のものが混在しており、その様相は、西側谷部基本層Ⅳ層に類似する。出土した器種は坏・甕・甑である。このうち、図示できたものは、ロクロ成形の坏 1 点（第 68 図 7）である。





No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	基本層 Ⅳ層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・底部回転糸切無調整・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明黄褐色(10YR7/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径(6.6)cm・残存高1.7cm・器厚0.3～0.7cm	C-154
2	基本層 Ⅳa層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・ヘラ削り・底部切り離し技法不明→ヘラ削り再調整、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・明赤褐色(5YR5/6)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：底径(9.4)cm・残存高2.3cm・器厚0.6～1.1cm	C-156
3	基本層 Ⅳa層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部磨滅のため不明・磨滅、内面：ヘラミガキ・黒色処理・磨滅、色調：外面・にぶい黄橙色(10YR7/4)、内面・黒色(10YR2/1)／にぶい黄橙色(10YR7/4)、法量：残存高3.6cm・器厚0.4～0.6cm	C-155
4	基本層 Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～底部	外面：口縁部～胴部ヨコナデ・底部ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・磨滅、色調：内外面・橙色(7.5YR7/6)、法量：残存高2.2cm・器厚0.3～0.4cm	C-157
5	基本層 Ⅴ層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部下半ヘラ削り・磨滅、内面：ヘラミガキ・磨滅、色調：外面・赤褐色(5YR4/8)、内面・橙色(7.5YR6/6)、法量：残存高4.0cm・器厚0.3～0.5cm	C-158
6	基本層 Ⅴa層	土師器	坏	口縁部 ～胴部	外面：口縁部ヨコナデ・胴部ヘラ削り、内面：ヘラミガキ・黒色処理、色調：外面・浅黄橙色(10YR8/3)、内面・黒色(10YR2/1)、法量：口径(15.2)cm・残存高3.1cm・器厚0.3～0.7cm	C-159
7	基本層 Ⅴg層	土師器	坏	胴部 ～底部	外面：ロクロナデ・磨滅・底部回転糸切→周縁部ヘラ切り再調整、内面：ロクロナデ・磨滅、色調：内外面・明黄褐色(10YR6/6)、法量：底径(9.4)cm・残存高1.9cm・器厚0.4cm	C-143

第68図　基本層 出土遺物

第9表　日向遺跡2次調査　基本層出土遺物一覧

地点	層位	縄文土器	弥生土器		土師器				須恵器		金属製品	鉄滓	層合計
		深鉢	鉢	甕	坏	高台坏	甕	甑	坏	甕			
西側　谷部②	基本層Ⅲ層	1 (10)	1 (5)		2 (20)		29 (175)		4 (15)	2 (30)			39 (255)
	基本層Ⅳ層	8 (155)			15 (4) (140)		126 (740)					1 (5)	150 (1040)
	基本層Ⅳa層	1 (15)		2 (35)	24 (2) (345)	2 (2) (40)	146 (1385)			5 (230)	1 (5)		181 (2055)
	基本層Ⅳb層	9 (95)			6 (6) (40)		20 (140)						35 (275)
	基本層Ⅴ層	15 (215)	1 (10)		26 (300)		110 (900)						152 (1425)
東側　谷部①	基本層Ⅴg層		3 (50)		16 (11) (120)		64 (1185)	1 (45)					84 (1400)
種別合計		34 (490)	5 (65)	2 (35)	89 (23) (965)	2 (2) (40)	495 (4525)	1 (45)	4 (15)	7 (260)	1 (5)	1 (5)	641 (6450)

※上段:遺物の出土点数、下段:遺物の乾燥重量(g)を示す

※土師器の出土点数のうち、()内の数値はロクロ成形の土師器点数を示す

６．遺構外出土遺物（第 69 図・第 10 表）

今回の調査区では、遺構検出面や表土、表土掘削時に発生した排土、撹乱などから、縄文土器深鉢破片 15 点（235g）、弥生土器壺破片 4 点（30g）、土師器 164 点[坏 18 点（185g）・甕 146 点（2,135g）]、須恵器 26 点[坏 3 点（25g）・高台付坏 1 点（60g）・蓋 4 点（100g）・壺 1 点（40g）・甕 17 点（2,130g）]、中世陶器甕 1 点（50g）、近現代の陶器 5 点（310g）・瓦質土器 1 点（45g）・磁器 2 点（110g）、石器 3 点[砥石 1 点（40g）・剥片 2 点（15g）]、銅銭 1 点（5g）、鉄滓 2 点（145g）が出土した（第 10 表）。

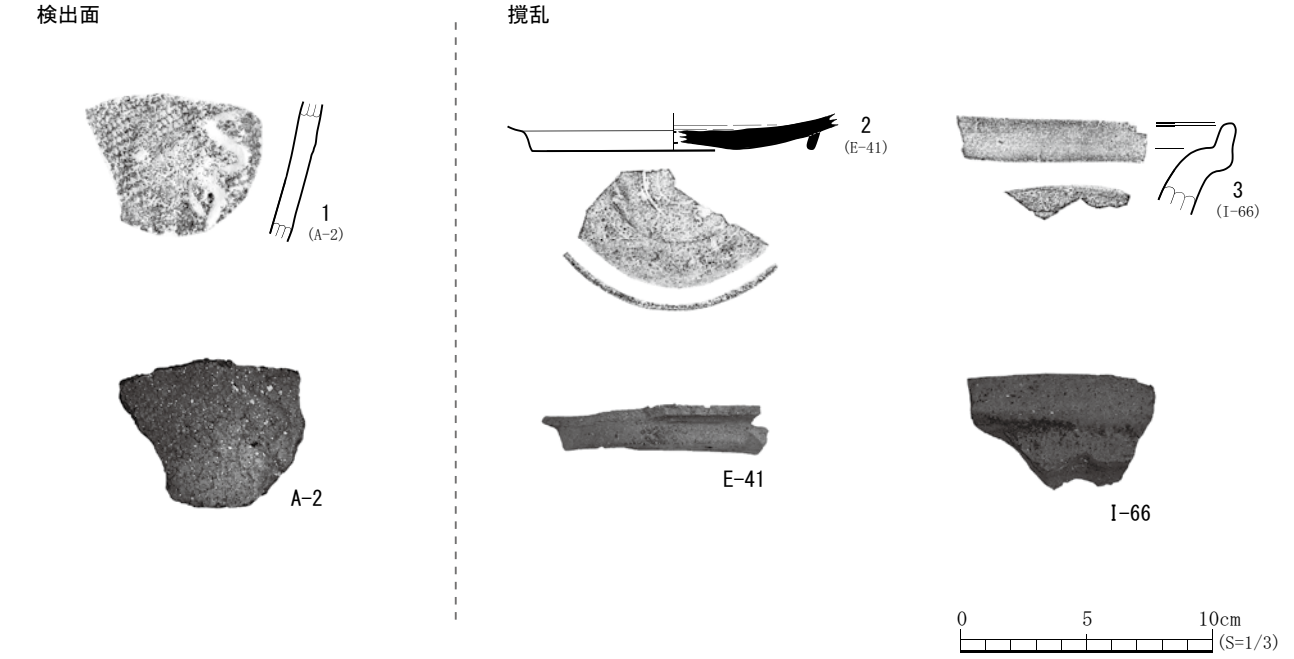
このうち、図示できたのは、検出面出土の縄文土器深鉢破片（第 69 図 1）、撹乱出土の須恵器高台付坏（第 69 図 2）・中世陶器甕（第 69 図 3）である。

第10表　日向遺跡2次調査　遺構外出土遺物一覧

層位	縄文土器	弥生土器	土師器		須恵器					中世陶器	陶器	瓦質土器	磁器	石器		銅銭	鉄滓	層合計
	深鉢	壺	坏	甕	坏	高台坏	蓋	壺	甕					剥片	砥石			
検出面	2 (60)	1 (5)	1 (1) (5)	21 (240)	1 (5)				1 (30)									27 (345)
表土	7 (45)		6 (100)	35 (750)					5 (1140)		5 (310)						2 (145)	60 (2490)
撹乱	3 (45)	3 (25)	5 (2) (50)	74 (770)	1 (15)	1 (60)		1 (40)	7 (775)	1 (50)			2 (110)	2 (15)				100 (1955)
表採排土			6 (1) (30)	12 (175)	1 (5)							1 (45)			1 (40)			21 (295)
その他	3 (85)			4 (200)			4 (100)		4 (185)							1 (5)		16 (575)
	15 (235)	4 (30)	18 (4) (185)	146 (2135)	3 (25)	1 (60)	4 (100)	1 (40)	17 (2130)	1 (50)	5 (310)	1 (45)	2 (110)	2 (15)	1 (40)	1 (5)	2 (145)	224 (5660)

※上段:遺物の出土点数、下段:遺物の乾燥重量(g)を示す

※土師器の出土点数のうち、()内の数値はロクロ成形の土師器点数を示す



No.	層	種別	器種	残　存	特徴【技法(外面・内面)→色調(外面・内面)→法量→その他の特徴の順に記載】	登録
1	検出面	縄文土器	深鉢	胴部	外面：縄文(原胴不明)・Ｓ字状沈線・磨滅、内面：磨滅のため不明、色調：外面・にぶい褐色(7.5YR5/4)、内面・にぶい黄橙色(10YR6/4)、法量：器厚0.7cm	A-2
2	撹乱	須恵器	高台付坏	底部	外面：ロクロナデ・底部切り離し技法不明→回転ヘラ削り再調整・高台貼り付け、内面：ロクロナデ、色調：内外面・褐灰色(10YR6/1)、法量：底径(11.2)cm・残存高1.4cm・器厚0.5cm	E-41
3	撹乱	中世陶器	甕	口縁部～頸部	色調：外面・黄灰色(2.5Y6/1)、内面・暗赤褐色(5YR3/3)、法量：器厚0.5～1.4cm、産地：白石窯	I-66

第69図　遺構外出土遺物

第Ⅳ章　自然科学分析

第１節　はじめに

１．自然科学分析の項目と分析目的

今回の調査では、下記の１項目について、業務委託により自然科学分析等を実施した。分析内容、分析目的、分析機関については以下のとおりである。

（１）遺構出土炭化物の放射性炭素年代測定

［分　析　内　容］　土坑２基（SK25・91）、竪穴住居跡３基（SI13・SI14・SI15）、焼成土坑５基（SK19・SK21・SK38・SK41・SK56）出土炭化物の放射性炭素年代測定

［分　析　目　的］　各遺構の年代推定

［分析委託機関］　㈱加速器分析研究所

［分　析　結　果］　第Ⅳ章第２節に記載

２．試料の採取地点と採取方法

それぞれの分析試料の採取地点等は第 11 表のとおりである。放射性炭素年代測定に使用した試料は、発掘担当者が直接発掘調査現場で採取した。

試料については、炭化物が含まれる土壌一式を採取し、出土層位を記録した上でビニール袋に詰めて現場から持ち帰り、その後、整理作業の段階で年代測定に適した炭化物を数点抽出した上で、分析委託機関に試料を引き渡し、分析を実施した（分析実施年度：平成 28 年度）。

第 11 表　炭化物試料採取遺構・層位一覧

試料 No.	遺構名	採取箇所	備考
1	SK25 土坑（フラスコ状土坑）	堆積土 11 層	第 50 図参照
2	SI15 竪穴住居跡	カマド下排水溝（SD1）埋土（13 層）	第 30 図土層断面 B-B’参照
3	SI13 竪穴住居跡	カマド燃焼部（カマド堆積土 3 層）	第 20 図土層断面 B-B’参照
4	SI14 竪穴住居跡	住居床掘方埋土（住居堆積土 4 層）	第 27 図土層断面 A-A’参照
5	SK19 焼成土坑	堆積土 3 層	第 49 図参照
6	SK21 焼成土坑	堆積土 3 層	第 49 図参照
7	SK38 焼成土坑	堆積土 3 層	第 53 図参照
8	SK41 焼成土坑	堆積土 3 層	第 54 図参照
9	SK56 焼成土坑	堆積土 2 層	第 56 図参照
10	SK91 土坑	堆積土 1 層	第 62 図参照

第２節　　日向遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

日向遺跡は、宮城県亘理郡山元町山寺字日向に所在する。測定対象試料は、貯蔵穴や竪穴住居跡、土坑、ピット等の遺構から出土した炭化物 10 点である（表 1）。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合は「AaA」と表 1 に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し、^{14}C の計数、^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の ^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表 1）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。^{14}C 年代と誤差は、下 1 桁を丸めて 10 年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±1σ）は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が 100 以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表 1 に、補正していない値を参考値として表 2 に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1 標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは 2 標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下 1 桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13 データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 2 に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

５　測定結果

測定結果を表 1、2 に示す。

竪穴住居跡と土坑から出土した試料 8 点（No.2～9）の ^{14}C 年代は、1340±20yrBP（試料 No.2、4、7）から 1210±20yrBP（試料 No.5）の範囲にまとまる。暦年較正年代（1σ）は、最も古い No.7 が 654～676cal AD の範囲、最も新しい No.5 が 772～869cal AD の間に 2 つの範囲で示される。

他の試料 2 点の ^{14}C 年代は、土坑 SK25 の No.1 が 3800±30yrBP、土坑 SK91 の No.10 が 2950±30yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、No.1 が縄文時代後期前葉頃、No.10 が晩期初頭頃に相当する（小林編 2008）。

試料の炭素含有率はすべて 60%を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり Libby Age（yrBP）	δ^{13}C 補正あり pMC (%)
IAAA-160365	No.1	土坑 SK25　最下層	炭化物	AAA	**-28.61 ± 0.41**	**3,800 ± 30**	**62.29 ± 0.22**
IAAA-160366	No.2	竪穴住居跡 SI15 カマド排水溝(SD1)	炭化物	AAA	**-27.36 ± 0.50**	**1,340 ± 20**	**84.61 ± 0.24**
IAAA-160367	No.3	竪穴住居跡 SI13 カマド燃焼部	炭化物	AAA	**-27.36 ± 0.52**	**1,250 ± 20**	**85.60 ± 0.24**
IAAA-160368	No.4	竪穴住居跡 SI14 床掘方埋土	炭化物	AAA	**-24.88 ± 0.62**	**1,340 ± 20**	**84.63 ± 0.25**
IAAA-160369	No.5	焼成土坑 SK19	炭化物	AAA	**-26.63 ± 0.49**	**1,210 ± 20**	**86.01 ± 0.26**
IAAA-160370	No.6	焼成土坑 SK21	炭化物	AAA	**-26.77 ± 0.51**	**1,230 ± 20**	**85.81 ± 0.26**
IAAA-160371	No.7	焼成土坑 SK38	炭化物	AAA	**-27.65 ± 0.50**	**1,340 ± 20**	**84.59 ± 0.26**
IAAA-160372	No.8	焼成土坑 SK41	炭化物	AaA	**-26.31 ± 0.58**	**1,280 ± 20**	**85.32 ± 0.26**
IAAA-160373	No.9	焼成土坑 SK56	炭化物	AAA	**-27.56 ± 0.53**	**1,310 ± 20**	**85.00 ± 0.26**
IAAA-160374	No.10	土坑 SK91	炭化物	AAA	**-24.73 ± 0.49**	**2,950 ± 30**	**69.22 ± 0.23**

[#8054]

表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし Age (yrBP)	δ^{13}C 補正なし pMC (%)	暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
IAAA-160365	3,860 ± 30	61.83 ± 0.21	3,802 ± 28	2287calBC - 2201calBC (68.2%)	2338calBC - 2316calBC (2.6%) 2310calBC - 2141calBC (92.8%)
IAAA-160366	1,380 ± 20	84.20 ± 0.22	1,342 ± 22	655calAD - 677calAD (68.2%)	646calAD - 693calAD (91.5%) 748calAD - 762calAD (3.9%)
IAAA-160367	1,290 ± 20	85.19 ± 0.23	1,249 ± 22	694calAD - 747calAD (58.1%) 763calAD - 773calAD (10.1%)	679calAD - 779calAD (84.8%) 791calAD - 828calAD (6.2%) 839calAD - 864calAD (4.4%)
IAAA-160368	1,340 ± 20	84.65 ± 0.22	1,340 ± 23	655calAD - 680calAD (68.2%)	646calAD - 710calAD (89.6%) 746calAD - 764calAD (5.8%)
IAAA-160369	1,240 ± 20	85.72 ± 0.24	1,210 ± 23	772calAD - 779calAD (5.3%) 789calAD - 869calAD (62.9%)	722calAD - 740calAD (6.1%) 766calAD - 887calAD (89.3%)
IAAA-160370	1,260 ± 20	85.50 ± 0.24	1,229 ± 24	717calAD - 743calAD (20.4%) 766calAD - 779calAD (10.3%) 790calAD - 829calAD (21.7%) 838calAD - 866calAD (15.7%)	691calAD - 749calAD (31.3%) 761calAD - 881calAD (64.1%)
IAAA-160371	1,390 ± 20	84.13 ± 0.24	1,344 ± 24	654calAD - 676calAD (68.2%)	645calAD - 695calAD (89.8%) 703calAD - 707calAD (0.6%) 747calAD - 764calAD (4.9%)
IAAA-160372	1,300 ± 20	85.09 ± 0.24	1,275 ± 24	687calAD - 721calAD (38.9%) 741calAD - 767calAD (29.3%)	675calAD - 770calAD (95.4%)
IAAA-160373	1,350 ± 20	84.55 ± 0.24	1,305 ± 24	666calAD - 710calAD (48.6%) 746calAD - 764calAD (19.6%)	660calAD - 724calAD (66.6%) 739calAD - 768calAD (28.8%)
IAAA-160374	2,950 ± 30	69.26 ± 0.22	2,954 ± 26	1211calBC - 1126calBC (68.2%)	1259calBC - 1246calBC (2.4%) 1234calBC - 1056calBC (93.0%)

［参考値］

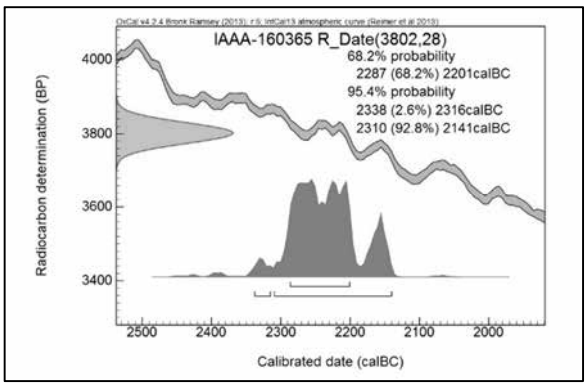
文献

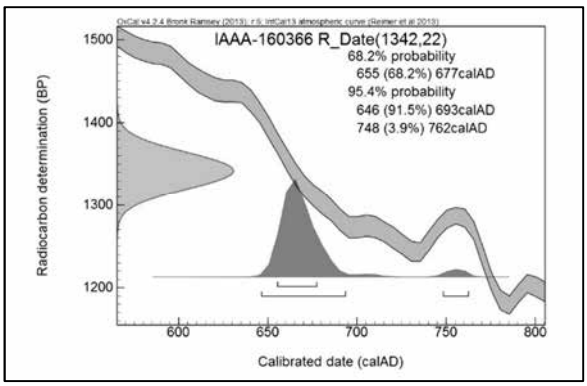
Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

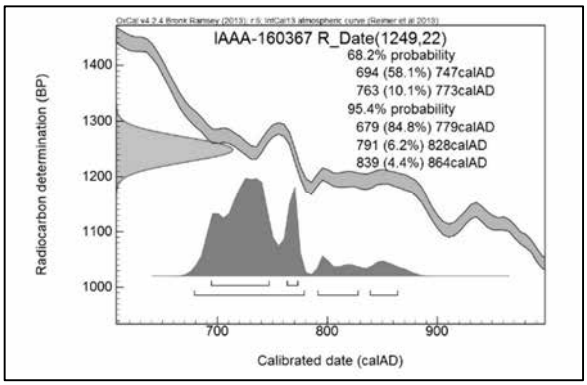
小林達雄編 2008 総覧縄文土器, 総覧縄文土器刊行委員会, アム・プロモーション

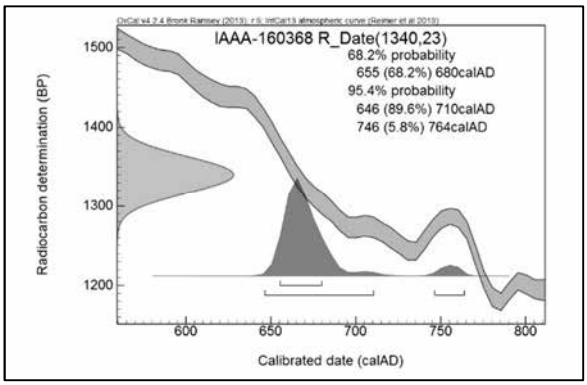
Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

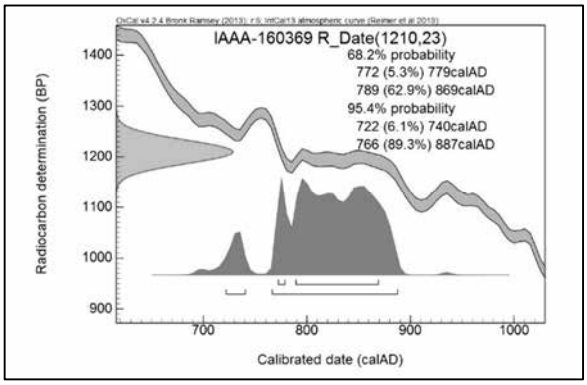
Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

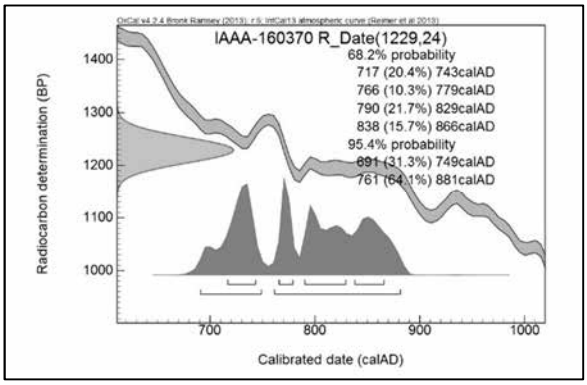


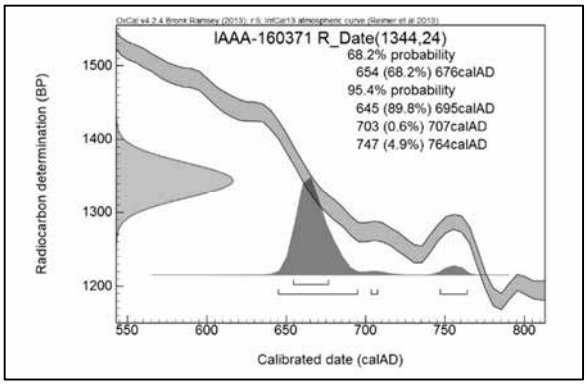


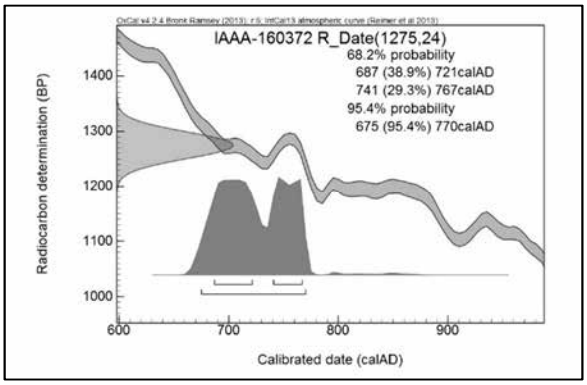


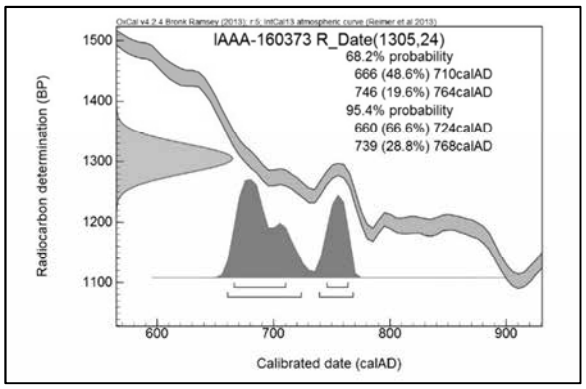


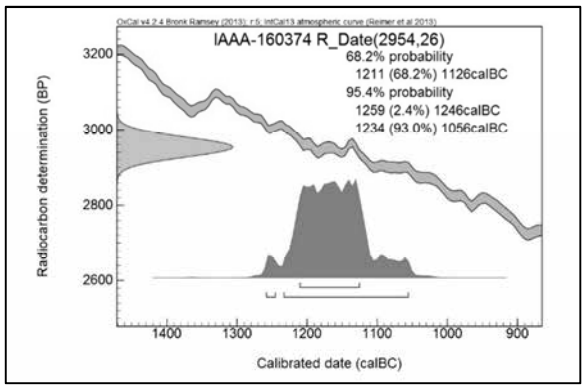












[図版]暦年較正年代グラフ（参考）

日向遺跡2次調査（B区）調査風景

第Ⅴ章　総　括

今回の調査で検出した遺物・遺構について、ここでは、その特徴や時期を検討し、本遺跡における各時代の特徴をまとめる。

第１節　出土遺物の特徴と時期

日向遺跡２次調査（B 区）において出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世陶器、陶器、瓦質土器、磁器、石器、金属製品、硝子製品、鉄滓である。その総数は 2,156 点（約 40,390g）である。その内訳は、土器類 2,071 点（約 38,810g）、石器 5 点（約 420g）、金属製品 64 点（約 185g）、硝子製品 1 点（約 5g）、鉄滓 15 点（約 970g）である（第 12 表）。

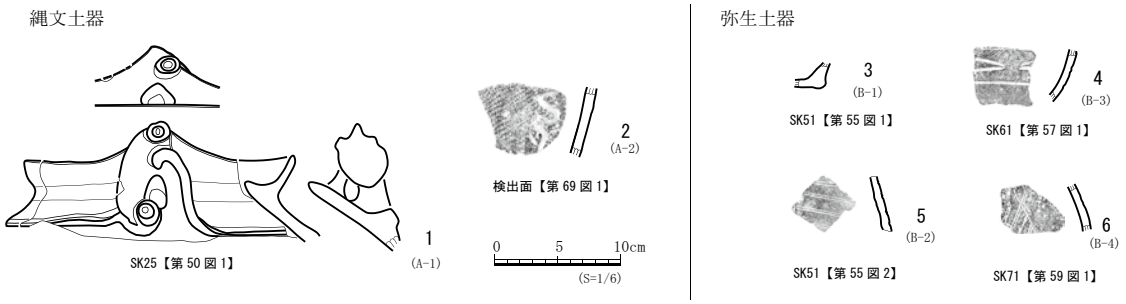
以下、それぞれについて検討を行う。

1.　縄文土器（第 70 図 1・2）

縄文土器は 104 点（1,645g）出土した。出土地点の内訳は、遺構内出土が 55 点（920g）、遺物包含層（基本層）出土が 34 点（490g）、遺構外出土が 15 点（235g）である。出土器種は深鉢で、その大半は破片資料である。このうち、図示できたものは SK25 土坑出土の深鉢口縁部破片 1 点（第 70 図 1）と検出面出土の深鉢胴部破片 1 点（第 70 図 2）の 2 点のみである。第 70 図 1 の深鉢は、無文の口縁部に粘土貼付による突起、ボタン状貼付文・盲孔を付すもので、縄文時代後期初頭前後のものとみられる。第 70 図 2 の深鉢は、胴部に沈線による S 字状ないしジグザグ文が施文されるもので、蔵王町二屋敷遺跡（加藤 1984）、同町西浦 B 遺跡（鈴木 2011）のほか、隣接する山元町谷原遺跡（山田ほか 2016）などに類例があり、縄文時代後期初頭～前葉に位置付けられる。

2.　弥生土器（第 70 図 3～6）

弥生土器は 27 点（305g）出土した。出土地点の内訳は、遺構内出土が 16 点（165g）、遺物包含層（基本層）出土が 7 点（100g）、遺構外出土が 4 点（40g）である。出土器種は鉢・壺で、すべて小破片資料である。このうち、図示できたものは、鉢または蓋 1 点（第 70 図 3）、鉢 1 点（第 70 図 4）、壺 2 点（第 70 図 5・6）の合計 4 点である。第 70 図 4 の鉢は、胴部に縄文 LR→変形工字文を施すもので、その特徴から中期中葉の枡形囲式（伊東 1957）に位置付けられる。第 70 図 5・6 の壺は、胴部に 2 本 1 単位の平行沈線を施すもので、中期後半の十三塚式（伊東 1957）に位置付けられる。第 70 図 3 は鉢の底部または蓋の天井部の破片で、文様等がなく時期不明である。他の弥生土器の年代からみて、中期頃のものとみておきたい。



第70図　日向遺跡2次調査（B区）出土　縄文土器・弥生土器

第12表　日向遺跡2次調査　出土遺物一覧

	縄文土器	弥生土器	土師器（非ロクロ）	土師器（ロクロ）	須恵器	中世陶器	陶器	瓦質土器	磁器	石器	金属製品	硝子製品	鉄滓
SI9			120 (835)	4 (510)	13 (150)						2 (15)		
SI10	1 (10)												
SI11			7 (60)										
SI12			23 (155)		1 (15)								
SI13	3 (15)			253 (6395)	10 (2270)								
SI14			37 (570)	31 (410)									
SI15	3 (35)		239 (9905)		6 (575)					1 (360)			
SI16			22 (370)		2 (25)								3 (215)
SI17			5 (25)		1 (50)								7 (545)
SD2			7 (110)								1 (10)		
SD7		4 (25)	3 (20)										
SD8			20 (220)		1 (25)								
SD10			1 (30)										
SK22		1 (10)	3 (40)										
SK23		1 (15)	12 (45)										
SK25	11 (600)												
SK30											55 (105)	1 (5)	
SK31									1 (85)		4 (45)		
SK46			10 (35)										
SK47	7 (35)												
SK51		5 (55)											
SK60	6 (75)												
SK61		2 (30)											
SK65			3 (75)										
SK68			58 (275)		2 (15)								
SK69			11 (40)										
SK71		1 (15)	30 (365)										
SK72			27 (155)	1 (15)	1 (40)								
SK73			29 (255)		1 (20)								
SK75			1 (5)										
SK78	1 (5)												
SK79			1 (5)										
SK83	3 (30)									1 (15)			
SK84					3 (65)								
SK89			2 (50)		1 (55)								1 (25)
SK95				40 (440)	1 (5)								
P654				7 (130)									1 (35)
P664				5 (35)									
P679			3 (40)										
P698			3 (10)										
P707			1 (5)										
P714	2 (10)												
P718			4 (25)										
P719			7 (40)										
P723			3 (15)										
P724	1 (5)												
P725			2 (5)										
P726			2 (15)										
P730	2 (15)												
P731			1 (5)	1 (10)									
P732	2 (20)												
P733	4 (10)												
P734	5 (25)												
P735		1 (5)	2 (20)	1 (10)									
P736			12 (260)										
P737			8 (45)										
P741			1 (25)										
P744	4 (30)												
P745			3 (25)										
P747		1 (10)											
P748			4 (25)										
P754			2 (5)										
P760			1 (10)										
P761			11 (40)										
P762			3 (30)										
P763			1 (5)										
P786			1 (5)	1 (75)									
P788			2 (20)										
P791			1 (5)										
P797			6 (70)										
基本層	34 (490)	7 (100)	561 (5215)	26 (360)	11 (275)						1 (5)		1 (5)
遺構外	15 (235)	4 (40)	160 (2280)	4 (40)	26 (2355)	1 (50)	5 (310)	1 (45)	2 (110)	3 (45)	1 (5)		2 (145)
種別合計	104 (1645)	27 (305)	1476 (21890)	374 (8430)	80 (5940)	1 (50)	5 (310)	1 (45)	3 (195)	5 (420)	64 (185)	1 (5)	15 (970)

※(　)内の数値は、遺物の乾燥重量(g)を示す

３．土師器・須恵器（第 71 図 1～31・第 72 図 1～40）

土師器は 1,850 点（約 30,320g・うちロクロ土師器 374 点 8,430g）出土した。出土地点の内訳は、遺構出土 1,099 点（22,425g）、遺物包含層（基本層）出土 587 点（5,575g）、遺構外出土 164 点（2,320g）である。出土器種は坏・高坏・高台付坏・蓋・鉢・筒形土器・甑・甕で、このうち、図示できたものは、坏 41 点、高坏 1 点・高台付坏 4 点・鉢 2 点・筒形土器 1 点・甕 22 点の合計 71 点である。**須恵器**は 80 点（約 5,940g）出土した。出土地点の内訳は、遺構出土 43 点（3,310g）、基本層出土 11 点（275g）、遺構外出土 26 点（2,355g）である。出土器種は、坏・高台付坏・蓋・鉢・壺・甕で、このうち、図示できたものは坏 3 点・高台付坏 1 点・甕 1 点の合計 5 点である。

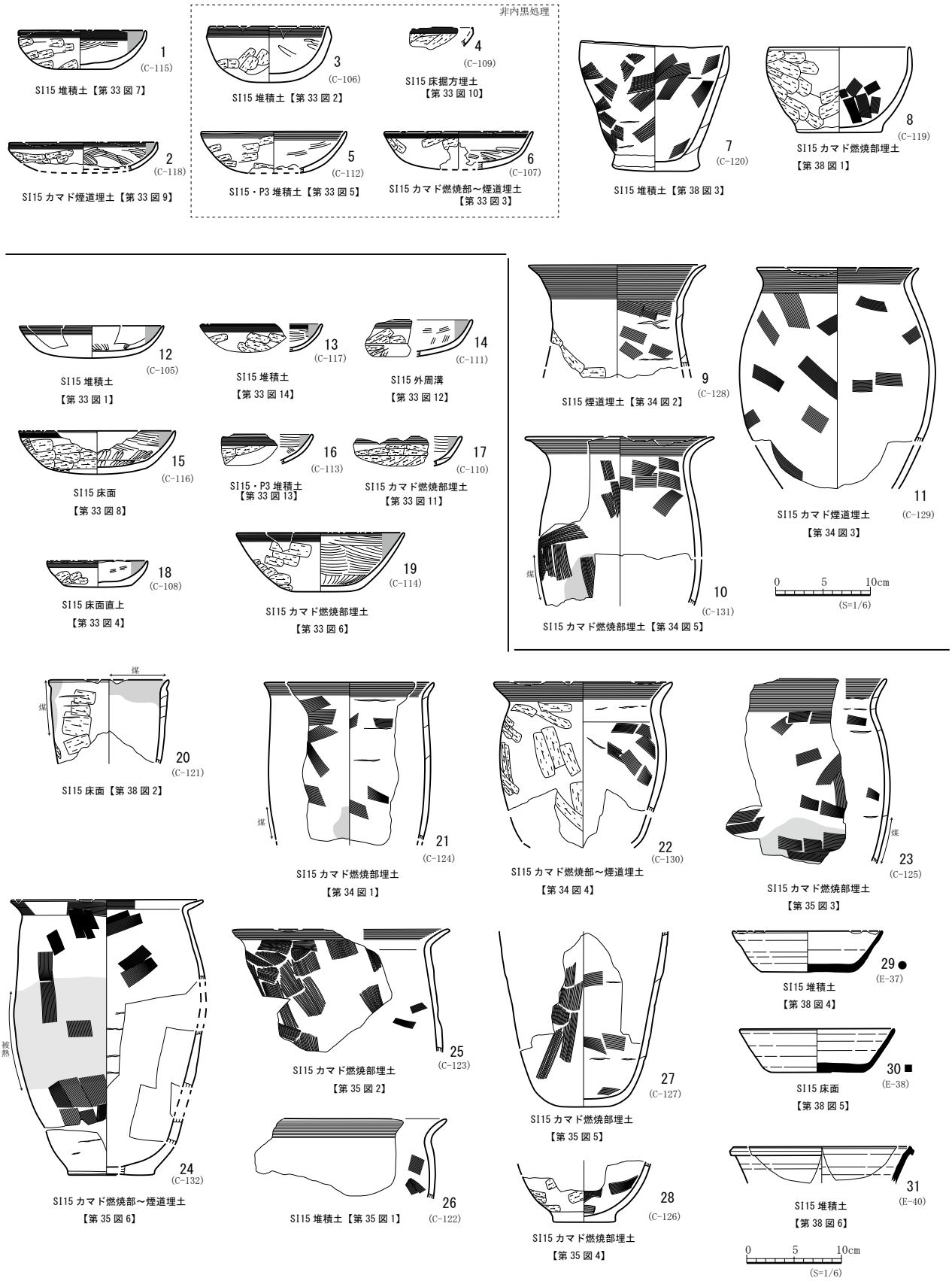
以下、遺物が比較的まとまって出土した SI13・15 竪穴住居跡出土遺物を中心に、その特徴・年代について検討する。

(1) SI15 竪穴住居跡出土土器（第 71 図 1～31）

SI15 では非ロクロ成形の土師器 239 点（9,905g）【坏 47 点・鉢 2 点・筒形土器 1 点・甕 189 点】、須恵器 6 点（575g）【坏 3 点・甕 3 点】が出土した。このうち、出土した土師器はすべて非ロクロ成形である。土師器坏は、口縁部の内外面にヨコナデ、胴部～底部の外面にヘラ削り・内面にヘラミガキを施すもので、皿形のものが多い。破片資料も含め、大半が内黒処理を施すもの:A 類（第 71 図１・2・12～19）であるが、一部非内黒処理のもの:B 類（第 71 図 3～6）も含まれる。内黒処理の坏（A 類）は、平底・丸底風のもので、A1 類：口縁部端部が直立し立ち上がるもの（第 71 図 1・2）、A2 類：口縁部が外傾して立ち上がるもの（第 71 図 12～18）、A3 類：平底で逆台形の器形のもの（第 71 図 19）があり、いずれも胴部下端には段は形成されない。非内黒処理（B 類）のものには、内黒坏 1・2 類の器形の両者が認められる（B1 類:第 71 図 3・4/B2 類:第 71 図 5・6）。土師器甕は全体の器形が把握できるものが少ないが、頸部と口縁部の境には段はなく、a 類：口縁部が大きく外反するもの（第 71 図 9・10）、b 類：口縁部は短く外反し胴部中位に最大径をもつもの（第 71 図 11）、c 類：口径と胴部径がほぼ同じで口縁部が短く外反するもの（第 71 図 21～26）がある。外面調整は、口縁部にヨコナデ、胴部にハケメ・ヘラ削りナデを施すものなどがある。土師器鉢は、頸部にくびれのない器形で外面にハケメ・内面にナデを施すもの（第 71 図 7）、薄手で椀状の器形のもの（第 71 図 8）がある。須恵器坏（第 71 図 29・30）は、口径 16cm 前後、器高 4.5cm 前後、底径 9.5cm 前後の皿状の器形で、底径/口径比は 0.58～0.59、器高/口径比 0.27～0.28 である。底部切り離し技法はヘラ切り後、ナデ・ヘラ削りによる再調整を施す。須恵器甕（第 71 図 31）は、頸部が無文で、口縁部端部を下方につまみ出す形態である。

SI15 で出土した土器群は、その技法・器形等の特徴から、土師器坏 A1・B1・B2 類、甕 a・b 類、鉢のⅠ群土器（第 71 図 1～11）とそれ以外の土師器と須恵器のⅡ群土器（第 71 図 12～31）に分けることができる。前者のⅠ群土器と類似する土器は、山元町日向北遺跡 SI2 竪穴住居跡（山田・丹野 2014）・日向遺跡 1 次調査基本層Ⅴ層（山田・藤田 2015）、亘理町舘南囲遺跡 6 号住居（古川ほか 1991）、仙台市下飯田遺跡 SR2・4 河川跡（中富 1995）・郡山遺跡（長島 2005）などで出土しており、宮城県中・南部の 6～8 世紀の土器をまとめた村田晃一氏の編年の 5 段階にあたる（村田 2007、鈴木・村田 2016）。したがって、Ⅰ群土器の年代は 7 世紀後半～8 世紀初頭頃と考えられる（註 1）。一方、後者のⅡ群土器と同様の特徴を有する土器は、名取市清水遺跡第 58 号住居跡（丹羽 1981）・仙台市下の内遺跡 SI9 住居跡（篠原 1990）などに類例があり、前述の村田晃一氏の編年の７段階（8 世紀中頃～後半）に相当する。これにⅡ群土器に含まれる須恵器の特徴を踏まえると、その年代は 8 世紀後半頃と考えられる。

以上のとおり、SI15 では、時期の異なる土器群が共存する形で出土していることが明らかとなった。そこで再度、土器群の出土状況を確認すると、Ⅰ群土器はカマドの暗渠や住居床掘方の埋土（人為堆積土）から出土したものが多く、住居床面出土のものはない。一方、Ⅱ群土器はⅠ群土器と同様、カマド等の埋土出土のものもあるが、床面出土資料が含まれる。このことから、SI15 の機能時期は、Ⅱ群土器の年代であると考えられる。なお、時期の異なる土器群が共伴した要因については、次節（第Ⅴ章第 2 節）で検討することとしたい。



※1 ～ 28：土師器　29 ～ 31：須恵器

（1・2・12 ～ 19：内黒処理　3 ～ 6：非内黒処理）

※【須恵器坏の底部切り離し技法】 ●底部：ヘラ切→ナデ　■底部：ヘラ切→手持ちヘラケズリ

第71図　日向遺跡2次調査（B区）SI15竪穴住居跡出土遺物

(2) SI13 竪穴住居跡出土土器（第 72 図 1～21）

土師器 253 点（6,395g）【坏 82 点・高台付坏 4 点・蓋 1 点・甕 166 点】、須恵器甕 10 点（2,270g）が出土した。出土した土師器はすべてロクロ成形である。土師器坏は、図示できなかった破片資料も含めると、内黒処理のもの（以下、内黒土師器）と非内黒処理（以下、赤焼土器 註 2）のものが混在しているが、前者の方が量的に多い。内黒土師器の坏は、椀形の器形で、口径 12.2～13.6cm、底径 4.7～8.0cm、器高 3.0～4.7cm、底径/口径比が 0.36～0.59（0.3～0.4 が主体）、器高/口径比が 0.24～0.34 である。底部切り離しは回転糸切り無調整のもの（第 72 図 1～3・7・8・9・11）が主体で、再調整を施すもの（第 72 図 5・6）がわずかに含まれる。また、胴部下端にヘラ削りの調整を施すもの（第 72 図 1・7）が少量認められるが、大半は調整を施さない。

同様の特徴を有する土器は、山元町涌沢遺跡 SX118 土器集積遺構（初鹿野ほか 2015）、同町西石山原遺跡 SI78 竪穴住居跡（初鹿野ほか 2012）などに類例があり、9 世紀後半～10 世紀前半頃のものと考えられるが、SI13 出土の土師器坏類は、これらの類例と比較して器高が低い皿状のものが多い点から、10 世紀前半代に近い年代のものとみておきたい。

(3) その他の出土土器

【SI9・14 竪穴住居跡出土土器】（第 72 図 22～25）

大半が破片資料で、図示できたものは少ないが、ロクロ成形の土師器が出土し、その組成に赤焼土器が含まれることから、SI13 竪穴住居跡に近い年代であると考えられる。なお、SI13 と SI14 は重複関係にあり、SI14→SI13 の変遷が確認されている。

また、P654 出土の土師器坏（第 72 図 32）も同様の年代とみられる。

【SI16 竪穴住居跡出土土器】（第 72 図 26～29）

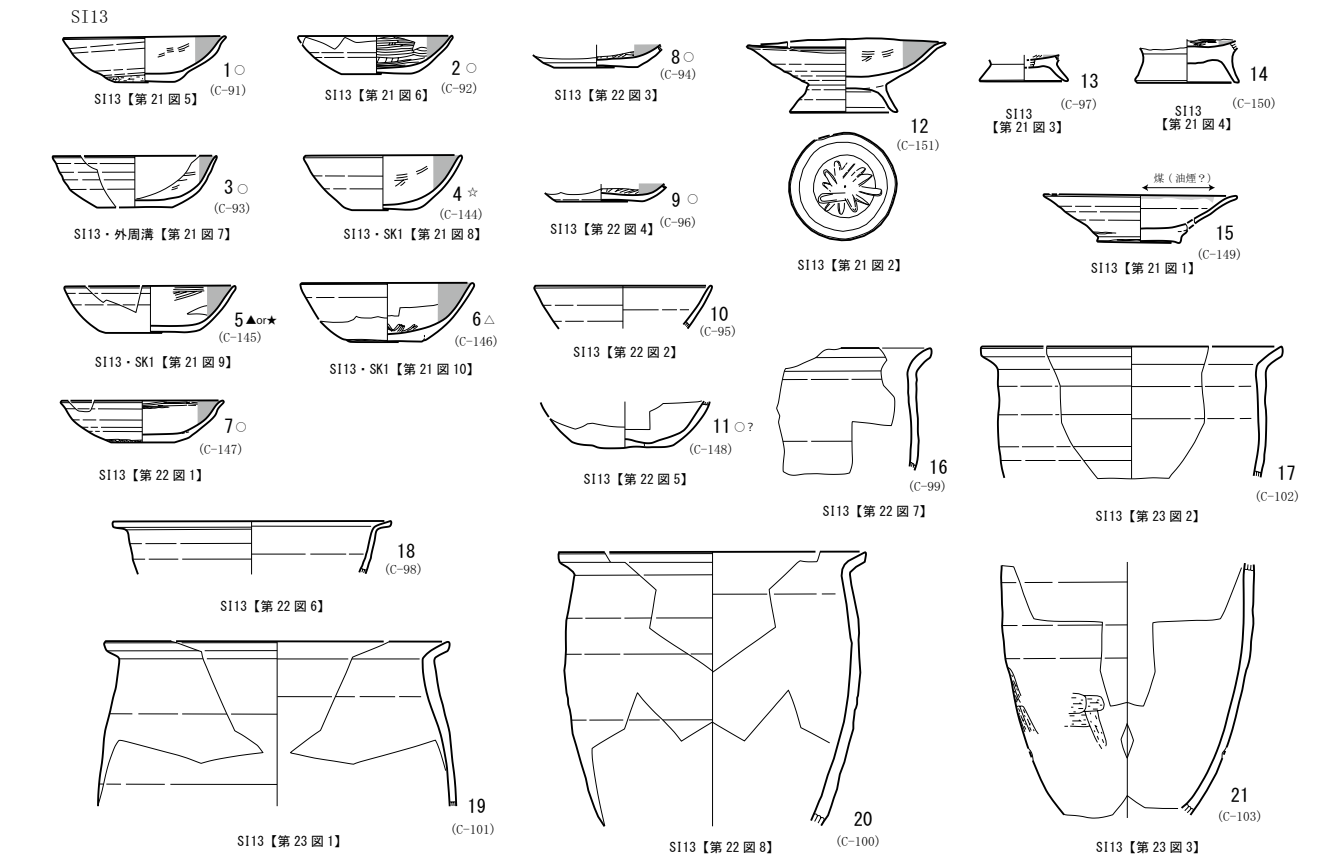
非ロクロ土師器の坏・甕で構成され、須恵器がわずかに含まれる。ほとんどが破片資料のため、全体の器形が復元できるものはないが、土師器坏は無段で、皿状の器形のもの（第 72 図 26）や平底のもの（第 72 図 27）、椀状の器形のもの（第 72 図 28）も含まれる点が SI15 と類似している。したがって、ここでは、SI15 と同様の年代幅におさまるものとみておきたい。

また、P786 出土の土師器坏（第 72 図 31）も同様の年代とみられる。

【基本層出土土器ほか】（第 72 図 30・33～40）

基本層Ⅳ・Ⅴ層出土の非ロクロ成形の土師器坏には、無段の皿状のもの（第 72 図 35・37・38）、有段で皿状のもの（第 72 図 36）がある。前者は SI15 に近い年代のものと考えられる。後者の有段坏に類似するものは、日向遺跡 1 次調査（A 区）基本層Ⅴ層（山田・藤田 2015）や隣接する日向北遺跡（山田・丹野 2015）などで出土しており、7 世紀後半～8 世紀前半頃のものとみられる。また、基本層Ⅴ層からはロクロ成形の土師器（第 72 図 33・34・39）も出土している。その特徴は SI13 竪穴住居出土遺物と類似しており、概ね 9 世紀後半～10 世紀代のものとみられる。

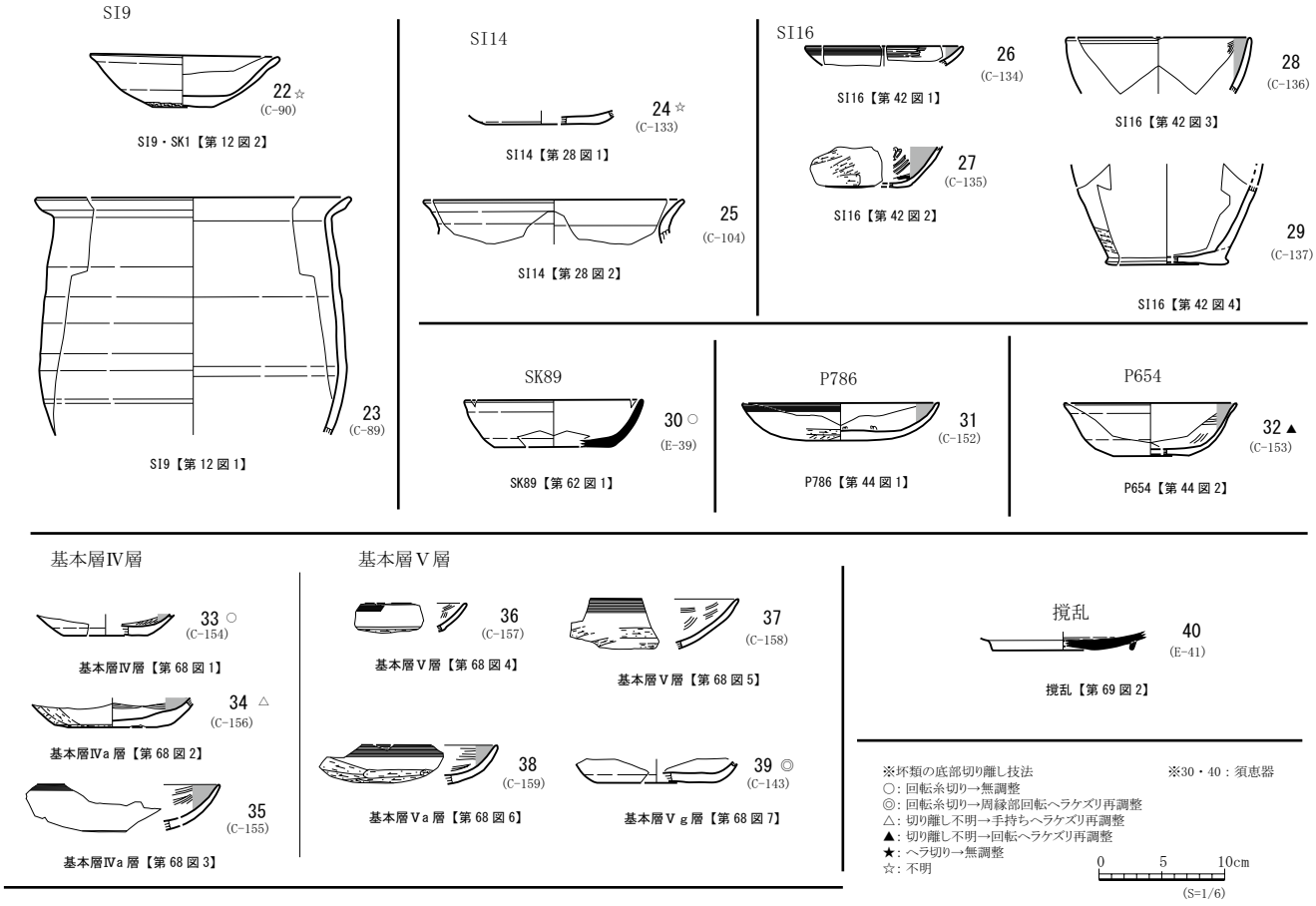
この他、SK89 土坑出土の回転糸切り無調整の須恵器坏（第 72 図 30）は、山元町北名生東窯跡（鍛冶 1971）に類例があり 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、撹乱出土の底部が高台とほぼ同じ高さに吐出する須恵器高台付坏（第 72 図 40）は、隣接する山元町谷原遺跡（山田 2016）の類例から、7 世紀後半以降のものとみておきたい。



※出土地点

堆積土：8・10・21／カマド燃焼部堆積土：1・2／カマド煙道堆積土：16・19／カマド燃焼部～煙道堆積土：17・20／

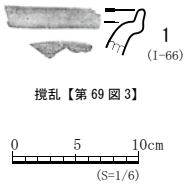
SK1・4層：4～6　／床面：7・9・11・12・14・15・18／外周溝堆積土：3・13



第72図　日向遺跡2次調査（B区）SI13竪穴住居跡ほか出土遺物

４．　中世陶器（第 73 図 1）

中世陶器は、甕 1 点（50g）が出土したのみである。図示した甕（第 73 図 1）は、口縁部の形態が受け口状になるもので、胎土や焼成の特徴から、在地の宮城県白石市に所在する「白石窯」産と推定される。白石窯は、大きく 4 つの支群（東北支群・市ノ沢支群・黒森支群・一本杉支群）からなっており、このうち、本格的な発掘調査が実施されたのは一本杉窯跡群（菊地・早川 1996）のみである。一本杉窯跡の調査では、受け口状の口縁をもつ甕・大型壺のほか、短頸壺・無頸壺・細口壺・小壺・仏花瓶、擂鉢、皿、火鉢などが出土しており、その年代については、甕・壺の口縁部の形態から、13 世紀後半～14 世紀前半頃と推定されている。したがって、今回の調査で出土した中世陶器甕についても同様の年代幅で捉えておきたい。



第73図　日向遺跡2次調査（B区）出土 中世陶器

５．その他の遺物

この他、今回の調査では、陶器、瓦質土器、磁器、石器、金属製品、硝子製品、鉄滓が出土した。いずれも、小破片ないし細片であったため、図示はしていない。このうち、遺構外ないし一部の土坑から出土した陶器、瓦質土器、磁器、金属製品、硝子製品等の遺物（第 12 表参照）については、その特徴から近代以降のものと考えている。また、鉄滓については、今回の調査区に隣接する 1 次調査区（A 区）においても、鉄滓が一定量出土し、かつ SI2・3 竪穴住居跡（所属時期：古代）のカマド支脚に鞴の羽口が使用されている事例が確認されていることから、その年代は古代のものと考えられる。

第 2 節　検出遺構の特徴と時期

今回の調査で本調査を実施した B 区で検出した遺構は、竪穴住居跡 9 棟、柱穴列跡 1 条、溝跡 10 条、土坑 78 基、ピット 152 個（柱穴列跡を構成する柱穴を含む）、遺物包含層である。これらの遺構からは、縄文土器、弥生土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器が出土した。ここでは、これらの遺構の特徴・出土遺物・重複関係等から、その時期・性格について検討する。

１．今回の調査区（B 区）で検出した各遺構の時期

（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡は 9 棟（SI9～16）検出した。前節の出土遺物の検討結果を踏まえると、**SI15・16** は 8 世紀後半～9 世紀初頭頃、**SI9・13・14** は 9 世紀後半～10 世紀前半頃の年代が想定される。このうち、SI13 と SI14 は、その重複関係から、SI14 の方が古い遺構であることが確認されている（SI14→13）。これら以外の竪穴住居跡（SI10～12・17）については、器形が復元できる遺物が出土していないため、詳細な年代を推定することは難しい。そこで、出土した破片資料の特徴や遺構の重複関係に着目してみると、**SI10・12・17** は、非ロクロ成形の土師器のみが出土していることから、少なくとも奈良時代を中心とする竪穴住居跡であると推定できる。また、**SI11** は SI10 との重複関係から、SI10 よりも新しい遺構であることが確認されており（SI10→SI11）、SI10 に近い年代が想定される。

前項でも触れたとおり、SI15 の出土遺物は、大きく 7 世紀末～8 世紀初頭頃と 8 世紀後半頃のものに分けることができ、この 2 時期の遺物は同遺構内で共存した状態で出土した。このうち、古い時期の遺物は、周辺から一

定量持ち込まれ、住居の暗渠構築材として使用されたとみられ、SI15 の機能時期は、新しい遺物の年代である 8 世紀後半代と考えられる。混在した 7 世紀末頃の遺物の起源は、同時期の遺物が今回の調査区で確認された遺物包含層や隣接する日向遺跡 1 次調査の遺物包含層で出土していることから、周辺の遺構等で採集されたものが使用されたものと推定しておきたい。

この他、SI13～15 で採取した炭化物の放射性炭素年代測定を実施したが、その分析結果では、その暦年校正年代は、SI13 カマド燃焼部：694～773calAD（7 世紀末～8 世紀後半代）/ SI14 掘方埋土：655～680calAD（7 世紀後半代）/SI15 カマド排水溝（SD1）：655～677calAD（7 世紀後半代）の年代が得られており（第Ⅳ章第 2 節参照）、いずれも住居出土土器の年代観よりも古い結果となった。今回の調査区では、炭化物の年代と同時期の土器群が周辺で出土しており、住居の埋土等に混入したものと考えられる。したがって、SI13～15 の年代は、出土遺物の年代観を優先し、住居の年代を決定したことを申し添えておく。

(2) 柱穴列跡・ピット

柱穴列跡は 1 条（SA1）検出したが、出土遺物はないため、その詳細な時期は不明である。また、今回、建物として認定できなかったピット群についても、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などが出土しているが、その出土状況から確実に遺構に伴うと判断できた遺物はないため、柱穴列と同様、その時期は不明である。そこで、日向遺跡 1 次調査（A 区）で検出した中世の掘立柱建物跡を構成する柱穴と比較してみると、柱穴の掘方の形状・規模、堆積土の特徴に類似性が認められる。以上のことから、今回の調査区で検出した柱穴列・ピットの年代は、中世の遺構と想定しておきたい。

(3) 溝跡

溝跡は 10 条（SD1～10）確認した。このうち、遺物が出土したのは SD2・7・8・10 であるが、いずれも遺構に伴うと判断できた遺物はない。遺構の重複関係をみると、中世と想定したピットよりも古いもの、新しいものが混在している状況である。以上のことから、溝跡の詳細な年代は不明と言わざるを得ないが、いずれも中世と想定したピット群の周辺に位置しており、これらに関わる遺構の可能性があると考えられ、これらの溝跡も中世前後ものと想定しておきたい。

(4) 土坑

土坑は 78 基（SK19～96）確認した。このうち、出土遺物・堆積土中の炭化物の年代測定結果や遺構の形状等の特徴から年代が推定できるものがある。以下、それぞれの土坑の年代・性格について検討する。

【縄文時代または縄文時時代以降の土坑】7 基：SK25・47・57・60・74・83・91

縄文土器のみ（石器も含む）が出土した土坑、または遺構の形状から縄文時代の遺構と推定できる土坑。

SK25 はその形状から縄文時代のフラスコ状土坑と考えられる。その年代は、土坑最下層から縄文時代後期初頭前後の深鉢が出土したこと、同一層から出土した炭化物の放射性炭素年代が 2287～2201calBC であることから、縄文時代後期のフラスコ状土坑とみられる。**SK57・74** については遺物が出土していないが、その形状から SK25 と同様の遺構と考えられる。**SK60** は縄文土器破片が出土し、その形状・堆積土が SK25 に類似することから、SK25 と同時期の遺構の可能性がある。**SK47・83** は、縄文土器のみが出土しているが、遺物が遺構に伴うと判断できなかったことから、少なくとも縄文時代以降の遺構とみておく。**SK91** は遺物が出土していないが、堆積土に含まれていた炭化物の放射性炭素年代が 1211～1126calBC であることから、縄文時代晩期初頭以降の遺構と考えられる。

【弥生時代以降の土坑】2 基：SK51・61

弥生土器のみが出土した土坑。出土した弥生土器は中期中葉～後半のものである。**SK51・61** ともに、遺物の出土状況からみて、弥生土器は周辺から流入したものと判断されるため、その年代は弥生時代中期以降と考え

られる。

【古代以降の土坑】14 基：SK23・46・65・68・69・71～73・75・78・79・84・89・95

出土遺物のうち、最も時代の新しい遺物として土師器・須恵器が出土した土坑。SK23・46・65・68・69・71・73・75・79・89 で非ロクロ土師器、SK84 で須恵器、SK72・95 でロクロ土師器が出土した。前述の竪穴住居跡の年代を踏まえると、非ロクロ土師器・須恵器が出土した土坑は 7 世紀後半～8 世紀代以降、ロクロ土師器が出土した土坑は平安時代でも 9 世紀～10 世紀前半以降の年代が想定される。

このうち、**SK68・69・79** は、SI13→SK79、SI9→SK68・69 の重複関係があり、竪穴住居が完全に埋没した後構築されている点から、平安時代以降でも中世に近い時期の可能性がある。また、**SK78** は、縄文土器のみが出土している遺構であるが、SI13 と重複し、これより新しいことから平安時代以降の土坑とみられる。

【古代の焼成土坑】12 基：SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94

堆積土中に炭化物片を多く含み、壁面・底面等に焼面が認められる土坑を焼成土坑として認定した。これらは、最大径 80～150cm ほどの楕円形・隅丸方形を呈する土坑で、掘方の形状・堆積土の類似性から、いずれも近い時期につくられた遺構と判断される。このうち、遺物が出土したのは SK22 の 1 基のみで、非ロクロ成形の土師器が出土した。また、SK19・21・38・41・56 の 5 基の堆積土中に含まれていた炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、その年代は、SK19：772～869calAD／SK21：717～866calAD／SK38：654～676calAD／SK41：687～767calAD／SK56：666～764calAD であった。この中で、SK38 のみ 7 世紀後半代の年代測定結果が得られているが、その形状・堆積土が他の土坑と類似していることから、SK38 も含め、今回検出した焼成土坑は概ね奈良・平安時代の遺構と想定しておく。

【近現代の遺構】7 基：SK26～32

近現代の遺物が出土した遺構、または遺構の形状・堆積土の状況から、近現代の墓と判断される土坑。なお、遺物が出土したのは、SK30・31 のみである。

【その他の土坑】

上記以外の遺構で、出土遺物がなく年代推定が難しい土坑（SK34～37・39・40・43～45・48～50・52・54・55・58・59・62～64・66・67・70・76・77・80～82・85～88・90・92・93・96 の計 36 基）。このうち、重複する遺構の年代からある程度の時期が推定できるものは、以下のとおりである。

SK45 は古代以降の SK46 より新しいことから古代以降、**SK54** は縄文時代以降の SK83（縄文時代以降）より新しく、古代の焼成土坑 SK53 より古いことから縄文時代～古代、**SK49・82** は弥生時代中期以降の SK51 より新しいことから少なくとも弥生時代以降、**SK86・88** は SI15 よりも新しい遺構であることから 8 世紀後半以降、**SK67・93** は中世とみられる遺構より新しいこと（P716・717→SK67/ P651・650→SK93）から中世以降、**SK66** は、中世とみられる P660・702 との重複関係（P660→SK66→P702）から中世頃の遺構と考えられる。これら以外の土坑の年代は不明である。

（5）遺物包含層

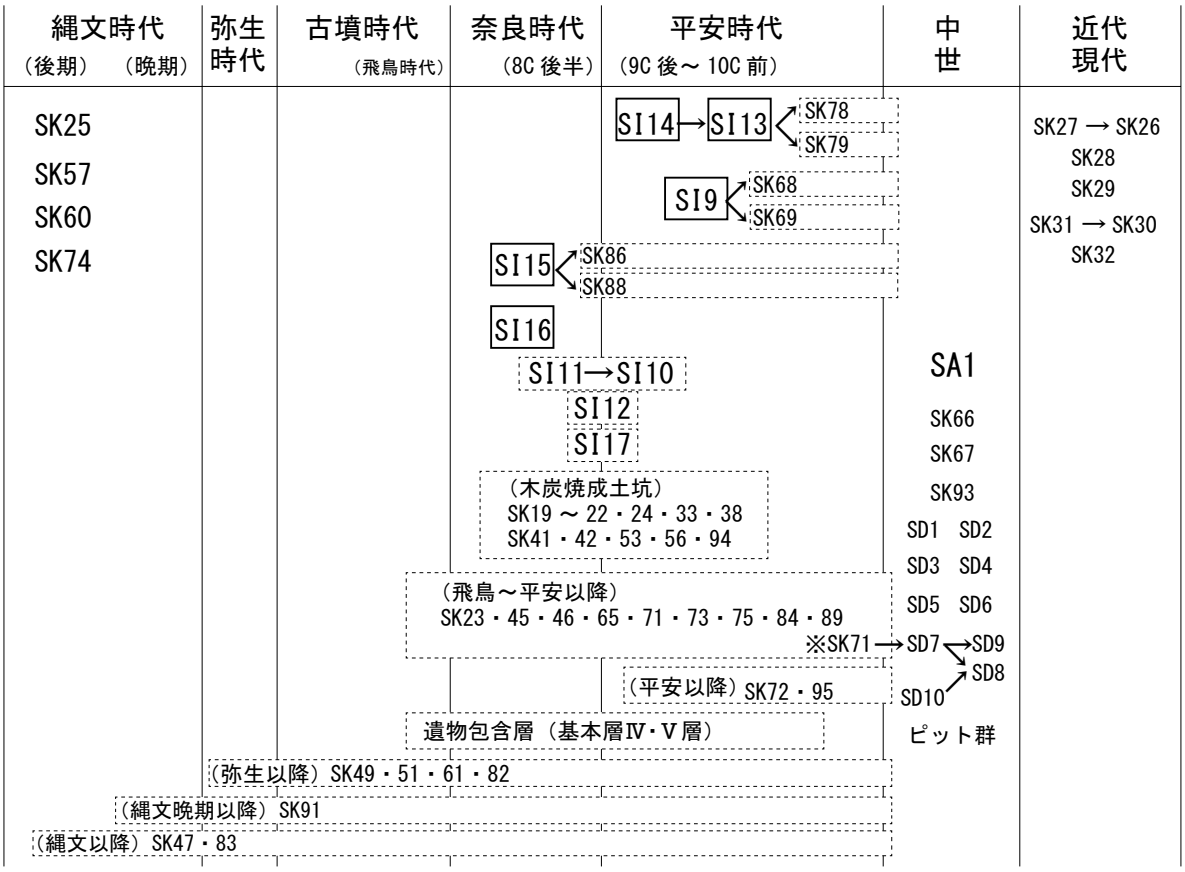
遺物包含層は、調査区東側の「谷部①」の基本層Ⅴ層、調査西側の「谷部②」の基本層Ⅳ・Ⅴ層で確認した。出土遺物は、縄文時代～古代の遺物であるが、その主体（全体の 9 割以上）は土師器・須恵器で、7 世紀後半代～平安時代（10 世紀代）の遺物が混在する。以上の点から、今回の調査で確認した遺物包含層の形成時期は、概ね古代前後と考えられる。

（6）まとめ

以上の検討の結果をまとめると、今回の調査で検出した主な遺構の重複関係、所属時期は第 74 図・第 13 表のとおりとなる。

第 13 表　日向遺跡 B 区（2 次調査）　遺構の所属時期

所属時期	遺構番号
縄文時代後期初頭前後	SK25・57・60・74 土坑
縄文時代晩期初頭以降	SK91 土坑
縄文時代以降	SK47・83 土坑
縄文時代～古代	SK54 土坑
弥生時代中期以降	SK49・51・61・82 土坑
奈良時代（8C 後半頃）	SI15・16 竪穴住居跡
奈良時代　以降	SI10・11・12・17 竪穴住居跡、SK86・88 土坑
飛鳥～奈良時代以降（7C 後半～8C 代）	SK23・45・46・65・71・73・75・84・89 土坑
飛鳥～平安時代（7C 後半～10C 代）	遺物包含層（基本層Ⅳ・Ⅴ層）
奈良～平安時代	SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94 土坑（焼成土坑）
平安時代（9C 後半～10C 前半頃）	SI9・13・14 竪穴住居跡
平安時代　以降	SK68・69・72・78・79・95 土坑
中世	SA1 柱穴列、SD1～10 溝跡、SK66・67・93 土坑、ピット
近現代	SK26～32 土坑（墓跡）
時期不明	SK34～37・39・40・43・44・48・50・52・55・58・59・62～64・70・76・77・80・81・85・87・90・92・96 土坑



第74図　日向遺跡2次調査（B区）主要遺構の所属時期と新旧関係

２．各時代の遺構の特徴と変遷

日向遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 16～40m の丘陵南緩斜面及び急斜面に立地する。遺跡の南側には西から東に流れる谷原川があり、遺跡の東側で南東から流れる山寺川と合流する。遺跡が所在する丘陵東側には古墳時代終末期・平安時代・中近世の遺構が確認された日向北遺跡（山田・丹野 2014）、南側の谷原川南岸の平坦面には縄文時代から中世の谷原遺跡（山田・藤田 2016）が所在する。また、丘陵西側の山上院には鎌倉時代後期の正保元年（1312 年）の板碑が 1 基確認されている（石黒 2005）。日向遺跡は、平成 23 年度に常磐自動車道建設工事に伴う第 1 次調査（A 区/調査面積 1,975 ㎡）が行われ、古代・中世を中心とする遺構が検出されている（山田・藤田 2015）。今回の調査箇所（B 区）は、この 1 次調査の西側隣接地にあたり、縄文・古代・中世・近現代の遺構を検出した。

本項では、これまでの周辺の調査事例を踏まえつつ、今回の調査区で発見された遺構の概要について、時代ごとにまとめることとする。

(1) 縄文時代の遺構

今回の調査区（B 区）で発見された遺構のうち、縄文時代の遺構として認定できた遺構は土坑 4 基（SK25・57・60・74）である（第 48・50・56・57・60 図）。これらの遺構は、調査区中央部の急斜面上に立地し、その形状からフラスコ状土坑と考えられる。その年代は、SK25 土坑出土土器の特徴から概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。

日向遺跡が立地する丘陵南斜面上では、今回の調査の他に、日向遺跡 1 次調査（A 区）（山田・藤田 2015）、日向北遺跡（山田・丹野 2014）の発掘調査が実施されているが、縄文時代の遺構は検出されておらず、同時期の遺物の出土数も少ない。一方、日向遺跡南側に隣接する谷原遺跡では、縄文時代後期初頭前後の環状集落が確認されており（山田 2016）、今回の調査で発見されたフラスコ状土坑の時期とほぼ一致する。以上のことから、日向遺跡が立地する丘陵は、谷原遺跡で集落を営んだ集団の狩猟採集等の活動の場であった可能性が考えられる。

(2) 奈良・平安時代の遺構

今回の調査区（B 区）において確認した奈良・平安時代に所属すると考えられる遺構は、竪穴住居跡 9 軒（SI9～17）、焼成土坑 12 基（SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94）、遺物包含層がある。この他、奈良・平安時代以降と想定された遺構もあるが（第 13 表・第 74 図）、これらは所属時期が確定していないこと、性格が不明なものがほとんどであることから、本項での検討からは除外することとする。

①竪穴住居跡

竪穴住居跡は丘陵裾部の斜面に立地する。住居の年代は SI15・16 が 8 世紀後半代頃、SI9・13・14 が 9 世紀後半～10 世紀前半頃とみられる。SI10～12・17 は非ロクロ土師器のみが出土している点から奈良時代を中心とする年代が考えられ、SI15・16 に近い年代の可能性が高い。したがって、今回の調査区で検出した竪穴住居は、大きく 8 世紀後半頃のもの（SI10～12・15～17）と 9 世紀後半～10 世紀前半代頃のもの（SI9・13・14）に分けることができる。これらの住居は、ある一定の範囲内で 2 軒ないし 3 軒重複した状態で検出されている。これは、斜面に住居を構えるにあたり、一度住居がつくられ比較的平坦となっていた範囲を幾度となく利用した結果、このような分布になったと考えられる。こうした斜面裾部での土地利用の在り方は、東側に隣接する日向遺跡 A 区でも確認されており（山田・藤田 2015）、住居の年代もほぼ一致している。

次に、住居の構造的特徴について着目すると、まず、住居壁については、いずれの住居跡も斜面上につくられたためか、現状で斜面下方が残存していないこともあり、住居下方にも住居壁が存在していたのか否かは不明である。ただし、現況での斜面傾斜角度を踏まえると、住居下方の壁は存在していなかった可能性が高いと考えら

れる。住居の規模・平面形は一辺 4～6m 前後の隅丸方形を呈し、住居東壁ないし北壁にカマドが付設される。周溝は巡るものと巡らないものがある。床面は地山を床とするもの・床面の一部を掘方埋土とするものがあり、すべての住居で貼床は確認されなかった。SI13･15 には外周溝が巡る。SI15 では住居中央部の床下に外延溝があり、カマド煙道～燃焼部下の排水溝や周溝に土器片を敷き詰め暗渠状とするなど、特徴的な構造の住居も確認されている（註 3）。このように、住居構造の面では、所属時期の違いによる大きな差異は認められなかった。

②焼成土坑

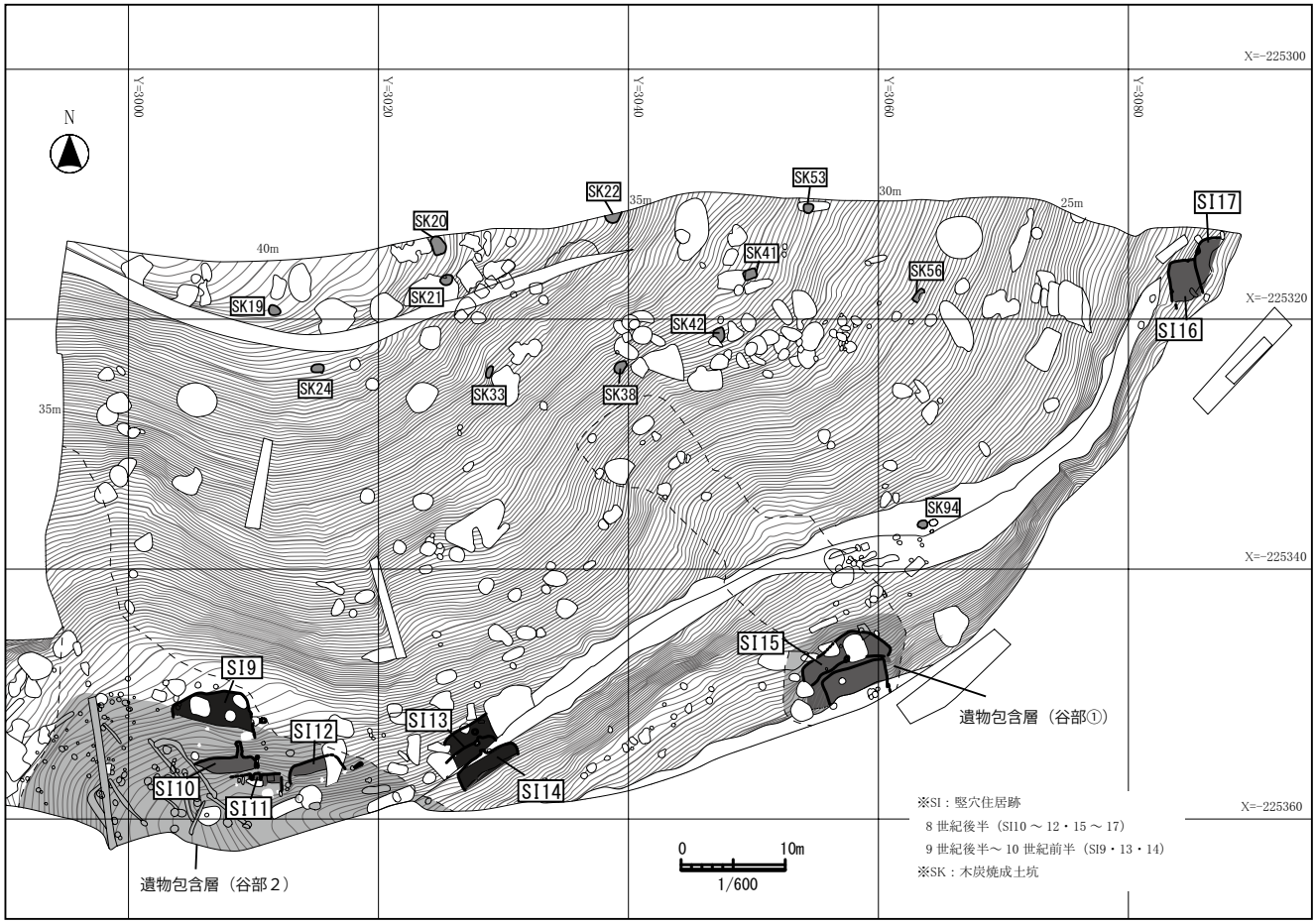
焼成土坑は丘陵頂部付近に立地しており、住居とは明らかに分布域が異なる。焼成土坑の堆積土には炭化物片が多く含まれており、その性格は木炭焼成土坑とみられる。年代は、放射性炭素年代測定の結果などから概ね住居と同時期のものと考えられ、住居に居住した集団が木炭を生産していたと推定される。

③遺物包含層

遺物包含層は調査区東側の谷部①と西側の谷部②の２箇所で検出した。その形成時期は７世紀後半代～平安時代（10 世紀代）で、同時期の遺構等から流入もしくは、住居に居住した集団が不要になった遺物を遺棄などした結果、形成された包含層と考えられる。なお、遺物包含層では、住居等の機能時期（8 世紀後半・9 世紀後半～10 世紀前半）よりも古い 7 世紀後半～8 世紀初頭前後の遺物が出土している。この遺物の起源については、同時期の遺構が確認されていないため不明であるが、今回の調査区外等にこの時期の遺構が存在する可能性がある。

④日向遺跡Ｂ区の古代集落　ーまとめー

以上をまとめると、日向遺跡 B 区においては、丘陵南側の裾部が居住域で、その北側の丘陵頂部で木炭生産、丘陵斜面に谷地形に遺物包含層（捨て場）といった土地利用であったと考えられる（第 75 図）。



第75図　日向遺跡B区 奈良・平安時代 遺構配置図

⑤日向遺跡周辺の古代集落について

日向遺跡が立地する丘陵南斜面では、今回の調査区（B 区）も含め、日向遺跡 1 次（A 区）（山田・藤田 2015）、日向北遺跡（山田・丹野 2014）の 3 度にわたる発掘調査により、古墳時代～平安時代の集落の様相がある程度把握できる状況になっている。そこで、本項では、日向遺跡集落の概要についてまとめることとする。

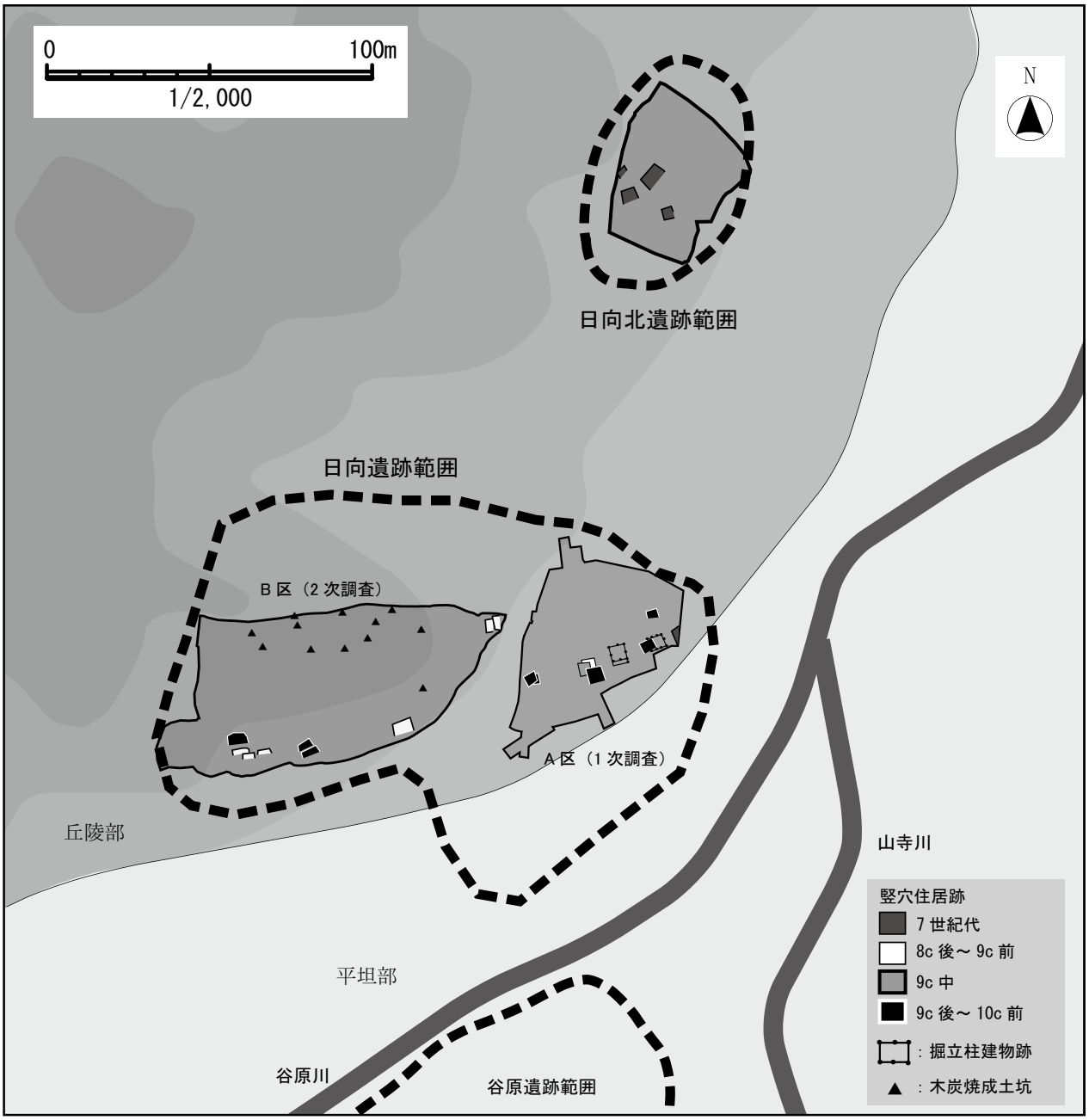
日向遺跡周辺の調査事例をまとめたものが第 14 表・第 76 図である。これをもとに、日向遺跡が所在する丘陵南斜面の集落展開を概観すると、まず、7 世紀前半頃に日向遺跡で１軒、日向北遺跡で１軒、合計２軒の竪穴住居が確認される。これが古代における土地利用のはじまりとなる。7 世紀代は、丘陵東部の日向北遺跡を中心に集落が展開するが、奈良時代の後半（8 世紀後半代）になると、丘陵西部の日向遺跡の範囲に集落の中心が移り、その集落は平安時代前半（9 世紀～10 世紀前半）まで存続する。その後は、中世に入るまで土地利用の痕跡は確認されない。第 14 表・第 76 図のとおり、同丘陵上で集落が広く展開するのは、8 世紀後半～9 世紀後半頃である。この時期の遺構には、鞴の羽口を住居カマドの支脚に利用した住居（日向 1 次/SI2・3）や木炭焼成土坑（日向 2 次/SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94）があり、加えて、遺構内外から少量ではあるが鉄滓も出土する。こうした出土遺物の内容を踏まえると、8～9 世紀代の日向遺跡の集落の立地する丘陵周辺には、製鉄等に関わる遺構が存在している可能性が高い（現状で、同丘陵内に製鉄炉や木炭窯等の遺構は確認されていないが、日向遺跡の調査区北側には、沢状の地形が多く残っており、こうした範囲に製鉄関連遺構が存在する可能性がある）。また、日向遺跡の集落が、製鉄に関わる集団の居住域であった可能性も考えられるが、現段階では検討する材料が少ないこともあり、本報告での言及は避けたい。今後、さらなる周辺の調査事例の蓄積を待って、検討する必要がある。

なお、参考までに、近隣の古代集落の様相をみてみると、日向遺跡が所在する丘陵南側に広がる平坦面には、谷原・涌沢遺跡が所在し、日向遺跡と同時期の集落が展開する（山田 2016・初鹿野 2015）。谷原・涌沢遺跡では、古代の竪穴住居のほかに、掘立柱建物・区画溝・土器集積遺構・鍛冶関連遺構などが発見され、墨書土器、陶硯、八稜鏡などが出土しており、当地域の有力者層の集落と考えられている。加えて、谷原・涌沢遺跡のさらに南側に位置する丘陵上の所在する内手遺跡（初鹿野 2015）や内手 B 遺跡などで、須恵器窯や製鉄関連遺構が相次いで発見されており（山田 2016）、谷原・涌沢遺跡の集団が製鉄・須恵器生産に関わっていた可能性も指摘されるようになってきている。以上のように、日向遺跡周辺の古代集落は、谷原・涌沢遺跡を中心に展開すると考えられ、今後、これら周辺の調査事例を総括し、その様相についてまとめていきたいと考えている。

第 14 表　日向遺跡周辺の古代集落 主要遺構の年代

<table>
<tr><th rowspan="2">遺跡名
所属時期</th><th colspan="3">谷原・山寺川北側　丘陵南斜面の主要遺構</th><th colspan="2">参考：谷原川南側の平坦面主要遺構</th></tr>
<tr><th>日向北遺跡
【山教委 8 集】</th><th colspan="2">日向遺跡</th><th>谷原遺跡
【山教委 12・13 集】</th><th>涌沢遺跡
【県教委 239 集】</th></tr>
<tr><th></th><th></th><th>A 区（1 次調査）【山教委 9 集】</th><th>B 区（2 次調査）【本書】</th><th></th><th></th></tr>
<tr><td>6c 後～7c 前</td><td>SI3</td><td>SI8</td><td></td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>7c 後</td><td></td><td></td><td></td><td>SI1</td><td></td></tr>
<tr><td>7c 中～8c 前</td><td>SI1・2・4</td><td></td><td></td><td>SI3</td><td></td></tr>
<tr><td>8c 後</td><td></td><td></td><td>SI10～12・15～17</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>8c 末～9c 前</td><td></td><td>SI5</td><td rowspan="2">SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94
（木炭焼成遺構）
※8c～10c 前</td><td>SI2</td><td>SI102</td></tr>
<tr><td>9c 中</td><td></td><td>SI3</td><td rowspan="2">SD1・2
SB1～5
※平安時代前半</td><td>SI93A・125
SK124・126・127</td></tr>
<tr><td>9c 後</td><td></td><td>SI1・2・4・6・7、SB1・2
SK8・9・11～13・15（土坑）
SK7・18（焼成遺構）</td><td>SI31、SX118、SK24</td></tr>
<tr><td>9c 後～10c 前</td><td></td><td></td><td>SI9・13・14</td><td>SI4・5</td><td></td></tr>
<tr><td>10c 前</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>SK117</td></tr>
<tr><td>10c 後</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>SX29・SX41</td></tr>
</table>

※SI：竪穴住居　SB:掘立柱建物　SK：土坑・焼成遺構・木炭焼成遺構　SX：土器集積遺構



第76図　日向遺跡・日向北遺跡 古代集落の状況

(3) 中世の遺構

今回の調査区（B 区）において確認した中世に所属すると考えられる遺構には、SA1 柱穴列跡、SD1～10 溝跡、SK66・67・93 土坑、その他のピットがある。これらの遺構からは中世の遺物は出土していないが、遺構内から近世以降の遺物が出土していないこと、1 点のみであるが遺構外から在地産とみられる中世陶器が出土したこと、東側に隣接する日向遺跡 1 次調査（A 区）の調査事例を踏まえ、中世の遺構と判断した。その年代は、出土した中世陶器の特徴、A 区の調査事例等から、13 世紀後半以降とみておく。

今回の調査区では、多数の柱穴が発見されているが、建物として認定できたのは SA1 柱穴列跡の 1 条のみであり、その様相は不明と言わざるをえない。ただし、その東側に隣接する日向遺跡 1 次調査（A 区）の丘陵頂部平坦面では、掘立柱建物跡 40 棟・井戸跡 4 基、土坑 1 基が確認されており（山田・藤田 2015）、日向遺跡における中世集落の中心は A 区にあったと考えられる。今回の調査区（B 区）は、その地形・遺構の分布からみて、この A 区の中心的な集落の末端部にあたると推定され、これらの遺構は、A 区の建物群と同時期のものとみておきたい。

（4）近現代の遺構

今回の調査区（B 区）では、この他に近現代の遺構として SK26～32 土坑を確認した。これらの土坑は、丘陵頂部のある一定範囲内に分布しており、掘方の形状、堆積土・出土遺物の状況から墓跡と考えられる。

第 3 節　まとめ

日向遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高 16～40m の丘陵南緩斜面及び急斜面に立地する。今回の調査（2 次調査）で検出した遺構は、竪穴住居跡 9 棟、柱穴列跡 1 条、溝跡 10 条、土坑 78 基、ピット 152 個（柱穴列跡を構成する柱穴を含む）、遺物包含層である。これらの遺構や遺物包含層・遺構外からは、縄文土器、弥生土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、陶器、瓦質土器、磁器、石器、金属製品、硝子製品、鉄滓が出土した。

以下、各時代の遺構・遺物について、その要点をまとめる。

1．縄文時代の遺構には土坑 4 基（SK25・57・60・74）がある。これらの遺構は、調査区中央部の急斜面上に立地し、その形状からフラスコ状土坑と考えられる。その年代は、SK25 土坑出土土器の特徴から概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。

2．奈良・平安時代の遺構には、竪穴住居跡 9 軒（SI9～17）、木炭焼成土坑 12 基（SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94）、遺物包含層がある。竪穴住居跡は丘陵南側裾部、木炭焼成土坑は丘陵頂部、遺物包含層は丘陵斜面に谷部 2 箇所に分布する。出土遺物の特徴等から、竪穴住居跡は大きく 8 世紀後半頃のもの（SI10～12・15～17）と 9 世紀後半～10 世紀前半代頃のもの（SI9・13・14）に分けられ、木炭焼成土坑についても概ね住居と同時期のものと考えられる。

3．中世の遺構には、柱穴列跡 1 条（SA1）、溝跡 10 条（SD1～10）、土坑 3 基（SK66・67・93）、ピット多数がある。その年代は、周辺から出土した中世陶器の特徴、A 区の調査事例等から、13 世紀後半以降と考えられる。

4．近現代の遺構には、土坑 7 基（SK26～32）がある。これらの土坑は、掘方の形状や出土遺物の特徴から墓跡と考えられる。

5．この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは縄文時代、奈良・平安時代、中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。また、今回の調査区では、弥生時代中期及び 7 世紀後半～8 世紀前半頃の遺物も出土しており、この時期の遺構も周辺に存在する可能性がある。

（註）

1） SI15 竪穴住居跡出土の土師器坏 A1 類・B1 類は、在地の土師器と同様の技法（外面ヨコナデ・ヘラケズリ/内面ヘラミガキ）で製作されているが、形態的特徴が当該時期の在地の伝統的な器形とは異なる。また、その中には在地の伝統的な技法である内黒処理を行わないものも含まれる。胎土の特徴から、これらの土器は在地で生産されたとみられるが、その製作技法の一部に外的要素が取り入られていると考えられる。本調査区と隣接する日向遺跡 1 次調査（山田・藤田 2015）では、同時期の関東系土師器がわずかではあるが出土しており、これらとの関連性が考えられる。

2） 宮城県内において、平安時代のロクロ成形の内黒処理されていない土師器について、「赤焼土器」・「須恵系土器」等の名称で呼ばれる場合がある（桑原 1976・小井川 1984）。本稿では、原則として内黒処理・非内黒処理のものすべてを土師器として分類したが、両者を区別する際に「赤焼土器」の名称を使用することとした。

3） SI15 で確認した周溝・カマド下の溝（暗渠構造）は、カマド燃焼部付近で外延溝と接続している。今回の調査区は斜面に立地し、丘陵南側裾部に位置する竪穴住居には多くの雨水が流れ込む環境下にあったと想定される。このことから、SI15 の暗渠・外延溝は住居の排水設備として機能していたと考えられる。また、SI13・15 で検出した外周溝についても、住居の上方斜面側に位置することから、同様の機能を有していたと考えられる。なお、丘陵斜面に立地する竪穴住居で、周溝を暗渠状にして利用している例は、同丘陵上に所在する日向北遺跡（山田・丹野 2014）でも確認されている。

引用・参考文献

青山博樹ほか 2000「宮城県山元町合戦原古墳群の測量調査」『宮城考古学』第 2 号
吾妻俊典 1994「多賀城跡周辺における須恵器製作技法の変化」『古代の土器研究　律令的土器様式の西・東 6　須恵器の製作技法とその転換』
石黒伸一朗 2005「山元町の板碑と蔵王町の中世石塔」『宮城考古学』第 7 号
伊東信雄 1957「第 2 章　弥生式文化時代」『宮城県史 1　古代史・中世史』宮城県史刊行会
伊藤晶文 2006「仙台平野における歴史時代の海岸線変化」『鹿児島大学教育学部紀要自然科学編』57
岩見和泰・佐藤憲幸 1991「合戦原遺跡」『合戦原遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 140 集
氏家和典 1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14
岡田茂弘・桑原滋郎 1974「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要Ⅰ』宮城県多賀城跡調査研究所
小山正忠・竹原秀雄編 1973『新版標準土色帖』2010 年版
押山雄三 2002「東北地方南部における縄文後期前葉の土器」『第 15 回縄文セミナー　後期前半の再検討』
鍛冶一郎 1971「合戦原古窯址群」『山元町誌』
加藤道男 1984「二屋敷遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ』宮城県文化財調査報告書第 99 集
加藤道男 1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』
菊地逸夫・早川英紀 1996『一本杉窯跡群』宮城県文化財調査報告書第 172 集
菊地逸夫 2003 「一本杉窯跡」『中世奥羽の土器・陶磁器』高志書院
窪田忍 1995『狐塚遺跡』山元町文化財調査報告書
桑原滋郎 1976「須恵系土器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会
小井川和夫 1984「いわゆる赤焼土器について」『東北歴史資料館研究紀要』第 10 巻
佐藤祐輔 2015「Ⅳ各地の弥生土器及び並行期土器群の研究　7 東北」『考古学調査ハンドブック 12　弥生土器』ニューサイエンス社
佐々久・志間泰治・氏家和典 1971「井戸沢横穴古墳群発掘調査報告書」『山元町誌』
白鳥良一 1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥良一 1982「土器」『多賀城跡政庁跡本文編』宮城県多賀城跡調査研究所
紫桃正隆 1974『史料 仙台領内古城・館』第四巻
篠原信彦 1990『下ノ内遺跡』仙台市文化財調査報告書第 136 集
志間泰治 1956「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1
志間泰治 1975『亘理の古墳』
志間泰治 2007『彙報 1　歴史を掘り起こす』
鈴木雅 2011『西浦 B 遺跡』蔵王町文化財調査報告書第 10 集
鈴木朋子・村田晃一 2016『国史跡 三十三間堂官衙遺跡−平安時代の陸奥国日理郡衙跡発掘調査総括報告書−』亘理町文化財調査報告書第 19 集
関敦司 2004『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 3 集
仙臺叢書出版協会 1893『仙台叢書　封内風土記　巻ノ九』
仙臺叢書刊行会 1923「仙臺古城記」『仙台叢書』第 4 巻
千葉正康 1993「狐塚遺跡」『狐塚遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 157 集
辻秀人 2015「山元町の復興調査成果から古代東北の歴史を考える」『古代国家形成期の地域社会−山元町の調査から−』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
東北古代土器研究会編 2005『研究報告 2　東北古代土器集成−古墳後期〜奈良・集落編−〈宮城〉』
東北古代土器研究会編 2008『研究報告 3　東北古代土器集成−須恵器・窯跡編−〈陸奥〉』
東北中世考古学会編 2001『東北中世考古学叢書 2　掘立と竪穴　中世遺構論の課題』高志書院
長島榮一 2005『郡山遺跡発掘調査報告書　総括編（1）』仙台市文化財調査報告書第 283 集
中富洋 1995『下飯田遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書代 191 集
丹羽茂 1981「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第 77 集
丹羽茂 1983「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第 93 集
初鹿野博之ほか 2012『西石山原遺跡ほか−常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅰ−』宮城県文化財調査報告書第 230 集
初鹿野博之 2013「宮城県山元町内手遺跡・上宮前北遺跡」『第 39 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2014「宮城県山元町熊の作遺跡」『第 40 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015a「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
初鹿野博之 2015b「熊の作遺跡と亘理郡南部の遺跡群」『古代国家形成期の地域社会−山元町の調査から−』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
初鹿野博之ほか 2015『涌沢遺跡ほか−常磐自動車道建設関連遺跡調査報告書Ⅱ−』宮城県文化財調査報告書第 239 集
初鹿野博之ほか 2016『熊の作遺跡ほか−常磐線復旧関連遺跡調査報告書−』宮城県文化財調査報告書第 243 集
引地弘行 2002「館の内遺跡」『名生館遺跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第 188 集
福島考古学会中近世部会編 2000『福島県考古学会中近世部会平成 12 年度研究セミナー　東北地方南部における中近世集落の諸問題』
藤田至則・加納博・滝沢文教・八島隆一 1988『角田地域の地質』地域地質研究報告　地質研究
藤沼邦彦・千葉孝弥 1992「宮城県の中世窯」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
藤沼邦彦 2010「水沼窯・伊豆沼窯・三本木窯・白石窯」『古陶の譜　中世のやきもの―六古窯とその周辺―』
藤本展子・松本秀明　2012「阿武隈川付近における浜堤列の分類とその形成時期に関する再検討」『人間情報学研究』第 17 巻
古川一明ほか 1991「舘南囲遺跡」『舘南囲遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第 144 集
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き−集落遺跡発掘編−』
文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査の手引き−整理・報告書編−』
本間宏 2008「南境式・綱取式土器」『総覧縄文土器』
松本秀明 1984「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』57
森幸彦 2008「大木 9・10 式土器」『総覧縄文土器』
宮城県教育委員会 2014『平成 24 年度東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第 233 集
宮城県教育委員会 2015『平成 25 年度東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第 236 集
宮城県教育委員会 2016『平成 28 年度東日本大震災復興事業関連遺跡調査報告Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第 240 集
宮城県考古学会編 2010『平成 22 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2011『平成 23 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2012『平成 24 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2013『平成 25 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2014『平成 26 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2015『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県考古学会編 2016『平成 27 年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』
宮城県企画部土地対策課編 1988『土地分類基本調査　角田』
宮城県史編さん委員会 1970「仙台領古城書立之覚」『宮城県史』32　資料編 9
村田晃一 1992「多賀城周辺における奈良・平安時代の須恵器生産」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』
村田晃一 1994「土器からみた官衙の終末」『古代官衙の終末をめぐる諸問題』

村田晃一 1995「宮城郡における 10 世紀前後の土器」『福島考古』第 36 号
村田晃一 2007「宮城県中部から南部」『古代東北・北海道におけるモノ・ヒト・文化交流の研究』平成 15-18 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書
柳澤和明 1994「東北地方の施釉陶器」『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東３　施釉陶器－』
山田隆博 2008『企画展図録　亘理郡の古墳時代』山元町歴史民俗資料館
山田隆博・村上裕次・山口淳 2010『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 4 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2013『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 5 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2014『的場遺跡』山元町文化財調査報告書第 6 集
山田隆博・藤田祐 2014『石垣遺跡』山元町文化財調査報告書第 7 集
山田隆博・丹野修太 2014『日向北遺跡』山元町文化財調査報告書第 8 集
山田隆博・藤田祐 2015『日向遺跡』山元町文化財調査報告書第 9 集
山田隆博・藤田祐・佐伯奈弓 2015『中筋遺跡』山元町文化財調査報告書第 10 集
山田隆博 2015a「山元町中筋遺跡の津波痕跡」『宮城考古学』第 17 号
山田隆博 2015b「山元町の復興調査と合戦原遺跡の横穴墓群」『古代国家形成期の地域社会-山元町の調査から-』平成 27 年度宮城県考古学会総会・研究発表会資料
山田隆博 2015c『小平館跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第 11 集
山田隆博 2016『谷原遺跡Ⅰ』山元町文化財調査報告書第 12 集
山田隆博・藤田祐 2016『谷原遺跡Ⅱ』山元町文化財調査報告書第 13 集
山田隆博・川口陽子 2017『北経塚遺跡』山元町文化財調査報告書第 14 集
山元町誌編纂委員会編 1971『山元町誌』
山元町誌編纂委員会編 1986「中島貝塚」『山元町誌 二巻』
吉野武 2015「熊の作遺跡出土の木簡と墨書土器」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
渡邊義顯 1917『亘理郡史』
亘理町教育委員会 2007『堀の内遺跡』亘理町文化財調査報告書第 7 集
亘理町教育委員会 2015「三十三間官衙遺跡と周辺の遺跡群」『第 41 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひゅうがいせき
書名	日向遺跡 第2次発掘調査
副書名	土砂採取事業に係る発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	山元町文化財調査報告書
シリーズ番号	第15集
編著者名	山田隆博・星野惠美
編集機関	山元町教育委員会
所在地	〒989-2203　宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1　電話0223-37-5116
発行年月日	平成29（2017）年6月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		位置		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
ひゅうが 日向遺跡	みやぎけん 宮城県 わたりぐん 亘理郡 やまもとちょう 山元町 やまでらあざ 山寺字 ひゅうが 日向	043621	14068	37度 58分 12秒	140度 52分 08秒	2016.04.01 ～2016.06.30	3,820㎡	土砂採取工事に伴う本発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日向遺跡	集落	縄文時代	土坑	縄文土器・石器	土坑4基 縄文時代後期初頭～前葉
	散布地	弥生時代	―	弥生土器	弥生中期（枡形囲式・十三塚式）
	散布地	古墳時代	遺物包含層	土師器・須恵器	7世紀後半～8世紀前半
	集落・生産	奈良・平安時代	竪穴住居跡 土坑（木炭焼成土坑） 遺物包含層	土師器・須恵器	竪穴住居跡9軒（8世紀後半：6軒/9世紀後半～10世紀前半：3軒）、土坑12基、遺物包含層
	屋敷跡	中世	柱穴列跡、溝跡、土坑、ピット	中世陶器	柱穴列跡1条、溝跡10条 土坑3基、ピット多数
	墓域	近現代	土坑（墓跡）	陶器・磁器・瓦質土器・硝子製品・金属製品（煙管・銅銭・鉄釘）	土坑7基

要約

日向遺跡は、亘理郡山元町山寺字日向に所在し、山元町役場の北北西約1.1kmに位置する。遺跡は、阿武隈山地から東に延びる標高16～40mの丘陵南緩斜面及び急斜面に立地する。遺跡の範囲は、東西200m、南北110mほどで現況は、道路、宅地、山林、畑地、荒地である。

今回の調査（2次調査）で検出した遺構は、竪穴住居跡9棟、柱穴列跡1条、溝跡10条、土坑78基、ピット152個（柱穴列跡を構成する柱穴を含む）、遺物包含層である。これらの遺構や遺物包含層・遺構外からは、縄文土器、弥生土器、土師器（非ロクロ成形・ロクロ成形）、須恵器、中世陶器、陶器、瓦質土器、磁器、石器、金属製品（煙管・鉄釘・銅銭）、硝子製品、鉄滓が出土した。

縄文時代の遺構には土坑4基（SK25・57・60・74）がある。これらの遺構は、調査区中央部の急斜面上に立地し、その形状からフラスコ状土坑と考えられる。その年代は、SK25土坑出土土器の特徴から概ね縄文時代後期初頭前後のものとみられる。

奈良・平安時代の遺構には、竪穴住居跡9軒（SI9～17）、木炭焼成土坑12基（SK19～22・24・33・38・41・42・53・56・94）、遺物包含層がある。竪穴住居跡は丘陵南側裾部、木炭焼成土坑は丘陵頂部、遺物包含層は丘陵斜面に谷部2箇所に分布する。出土遺物の特徴等から、竪穴住居跡は大きく8世紀後半頃のもの（SI10～12・15～17）と9世紀後半～10世紀前半代頃のもの（SI9・13・14）に分けられ、木炭焼成土坑についても概ね住居と同時期のものと考えられる。

中世の遺構には、柱穴列跡1条（SA1）、溝跡10条（SD1～10）、土坑3基（SK66・67・93）、ピット多数がある。その年代は、周辺から出土した中世陶器の特徴、A区（日向遺跡1次調査）の調査事例等から、13世紀後半以降と考えられる。

近現代の遺構には、土坑7基（SK26～32）がある。これらの土坑は、掘方の形状や出土遺物の特徴から墓跡と考えられる。

この他、時期不明の遺構が多数残されているが、これらの多くは縄文時代、奈良・平安時代、中世のいずれかの時期に属する可能性が考えられる。また、今回の調査区では、弥生時代中期及び7世紀後半～8世紀前半頃の遺物も出土しており、この時期の遺構も周辺に存在する可能性がある。

山元町文化財調査報告書第15集

日　向　遺　跡

第2次発掘調査

ー土砂採取事業に係る発掘調査報告書ー

平成29年6月30日発行

発　行　山元町教育委員会
宮城県亘理郡山元町浅生原字日向12-1
TEL0223-37-5116／FAX0223-37-0119

印　刷　株式会社　東北プリント
宮城県仙台市青葉区立町24-24